

【完結】 幕間の物語 『贗作者と魔法少女／夢幻虚構結界：冬木』

逢咲シュウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

カルデア内にある噂が広まり始める。

それは、マスターが念願叶って魔法少女を召喚したという他愛ないもの。しかし少女の名前を聞いたとある一人の英霊にとっては、とても見過ごせる話ではなかった。

——その英霊の名は、エミヤ。

一目見た瞬間にその少女、イリヤが自らが知るイリヤとは異なる存在である事を看破したエミヤだったが、彼は密かに彼女達を守る事を誓う。

まるで生前は守り抜く事が出来なかった、たった一人の大切な姉に贖罪するかのよう。

そんな中事件は起きた。

マスター不在の突発的レイシフト。

巻き込まれたのはエミヤ、イリヤ、美遊、クロエ。

何故自分達がこの特異点にレイシフトしたのか。

何故こんな特異点が生まれてしまったのか。

贖作者と魔法少女達は交流を深めながら、この世界の謎を解くために奔走する。

これは本筋から分かれた『幕間の物語』。

微塵も歴史には残らず、いずれ埋没する運命にあるだろう。

しかしこれが物語である以上。

紡ぎ続け、走り続ける者達が居るのだ。

—— さあ、『夢』を回し続けよう。

喜べ少年。君の願いはようやく叶う。

これは後に、『夢幻虚構結界・冬木』と呼ばれる極小の特異点で起こる運命の物語である。

目次

序節『交錯』	1
第一節『黄昏の泪』	23
第二節『記憶の澱』	46
第三節『ヒナタの夢』	70
第四節『曖昧な距離感』	92
第五節『揺籃の銀雪』※前書き要参照	117
第六節『対峙』	183
第七節『人の身に余る奇跡を手にしたが故にこの世全ての絶望を背負ったモノ』	202
第八節『贗作者』	226
第九節『焰下の誓い』	250
第十節『最後の休息』	280
第十一節『鶴翼重奏』	296
第十二節『離別の剣』	322
終局『ローレライ』	383
エピローグ	447
番外編	
第?節『冬n?残r?b?』	464

## 序節『交錯』

Prologue / truth

——この世に『地獄』があるとするとするのなら、まさにこの場所がその名を冠するのに相応しいだろう。

空の光を遮る天蓋。それを支えるようにぐるりと広がる、光沢のある奇妙な色の岩肌。鍾乳洞と呼ばれる、自然が長い時をかけて造りあげた巨大な洞窟が、視界いっぱい展開される。

その規模たるや凄まじく、直径3キロは下るまい。

洞窟というよりも、荒涼とした大地そのものだった。

あまりにも巨大な円蓋型ドームの大空洞は、無機質でありながらも『生』の色で溢れている。

——まるで、生物の胎内。

龍洞の名を冠する通り、ここは生暖かい生氣に満ちた龍の臓はらわたその物だった。

人の願いも、生命も、苦悩も、死も、何もかもが泥のように溶け合い絡み合う地獄の釜。それが、形作られ定められた、この場所の在り方である。

——その『地獄』の最奥に佇む者が、一人。

——その者は原初からして夢幻の如く。

いつからこうして存在しているのか。

どうしてここに存在しているのか。

自分は、どこの誰なのか。

分からない。分からない。分からない。

分かるのは、ただ止めてはならないという強迫観念にも似た衝動だけ。

分からないから吸い続ける。

分からないから求め続ける。

分からないから悩み続ける。

分からない事は怖いから、自分の存在を確立するために自身の骨子を明確にしていく。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

覚めてしまうのが怖い。

この『夢』を、『世界』を回し続けなければならない。

消えてしまえばそれで終わり。

既に筋道から外れ、変化してしまった『世界』だ。泡沫うたかたの如く消えるのは道理だろう。

「ああ、けどそれでも——」

拒絶する。拒絶する。拒絶する。

その滅びを、剪定を、摂理を、『俺』は拒絶する。

それを自己中心的だと蔑むか？

構わない。元より、ここはただ一人の『男』の祈りから生まれてしま

まった『世界』だ。

故に、終焉さいごまでこの夢セカイを回し続けるとしよう。

——そして、『俺』は蒐集の果てに思い出した。

「——い、りや」

守りたかった。

守れなかった、大切な彼女の名を。

内側に緩く湾曲しながら続く廊下は、その中を歩く『俺』に無限に続くのではないかという錯覚を与えた。

ここは人理継続保障機関フィニス・カルデア。  
そして俺はカルデアが確立させた召喚システムによって喚びだされた一人の英霊、という事になっている。

なっている、とどこか控えめな表現なのは己が英霊だという意識が低いためだ。

俺はただのしがないサーヴァント。英霊なんて呼ばれるほど立派なものでは無く、俺を召喚したマスターの指示に従い、戦うだけの機械である。

——もつとも、俺を喚びだしたマスターはサーヴァントをサーヴァントらしく扱わない事に定評があるためそんな意識はこちらが持つだけ無駄なのだが。

——さて、前置きはここまでにしよう。

今の俺の心を端的に表現するのなら、雷鳴轟く嵐の海とでも言おうか。つまり自分の今の現状を説明する事が億劫に感じるぐらいに、気持ちに余裕が無いのである。

冷たい廊下に靴底が床を叩く音だけが残響する。

その音が徐々に強く、速くなっている事を意識しながら歩を進める事数分。俺はマスターの部屋の前に辿り着いた。

「入るぞ、マスター」

短く、形だけの断りを入れてマスターの部屋に踏み込む。

何の特徴もない、必要最低限の機能性だけを備えたシンプルな部屋だった。

白いベッドと無機質なモニター、申し訳程度に置かれた緑の葉を付ける観葉植物。

置かれている物はそれだけであり、非常に殺風景な部屋であるが、別段俺は気にしない。むしろ好ましく思う。

——しかし、そんな無色透明な部屋に目が痛くなるような色彩を落とす存在が3つ。

「お、ちようどいい所に来たね！紹介するよ、新しくカルデアに召喚された魔法少女3人組だ！」

嬉々として胡乱な紹介をするマスターの声は、残念ながら俺の耳に入ってこなかった。

——如何なる運命の悪戯か。

部屋の中央には随分と奇抜な格好（常識に当てはめれば自分の格好も充分奇抜だが）をした3人の少女が佇んでいた。

その3人のうち、真ん中に立つ少女に目を奪われる。

銀そのものを梳ったかのような繊細な髪。

ルビーを思わせる大きな瞳。

処女雪を思わせるような、抜けるように白い肌。

華奢な身体を魔法少女っぽい桃色の衣装に包んだその少女は、私の知っているとおある人物に良く——

「お、おい？どうしたんだい、そんなお化けでも目の当たりにしたような顔して。はっ、まさか本物の魔法少女を見て感動のあまり固まってるとか。」

「君と一緒にしないでくれマスター。マシユから聞き及んだぞ。この子供達を召喚するために随分と聖晶石を犠牲にしたと。」

「あはは。クロはちよつとだけここに来た経緯が違うんだけどね。俺の勘が言ってたんだよ。どうしてもこの3人をこのカルデアに召喚しなきゃ、と！」

力強くそう言い放つマスターであったが、俺は今それどころじゃない。先程のマスターへの軽口だって、動揺しないよう細心の注意をはらった物だ。心構えはしていた。

話に聞いた時、暮らしていた世界が異なるのだから、もしかしたらそういう事もありうるのでは無いかと。

しかし——実際に目の前に現れると、どう反応していいのか分からなくなる。

その少女が、俺の知っている『彼女』では無いのだと、頭では理解出来ている。しかし、そんな認識は意味をなさなかった。

「は、初めまして！そ、そのイリヤって、いいます。お恥ずかしながら魔法少女をやっている者です。」

彼女は確かに、自らの名をイリヤと名乗った。

俺の知っているものよりも、少しだけ高い声で。

紅の瞳に宿すのは期待と不安、高揚だろうか。

そんな純粋な感情表現が、目の前の少女をどこか幼く見せている。

《恥ずかしがっちゃダメですよ、イリヤさん。魔法少女たるもの、いつも笑顔を絶やさず堂々とした態度を心がけてくださいな。まあ、世の中には3話あたりで頭をパクツと食べられて本当の意味で笑顔を絶やされる魔法少女も居るようですケド》

「そんな殺伐とした魔法少女はわたしの知ってる魔法少女じゃない魔法少女なんだから切った張ったの表現はもうちよこつとやんわりした感じにして！」

「殺伐度合いで言えば、わたし達もそれなりだと思おう」

《美遊様の仰る通りです。弱体化しているとはいえ、英霊の残滓や封印指定の執行者との戦いを踏まえるとしても穏やかとは言えないかと》

「あー確かに。現実の魔法少女ってマンガやアニメみたいにほのぼのできらきらとは程遠いもののかなあ」

しんみりと言うイリヤ。

とても楽しそうだ。

くるくると変わる様々な表情は見ていてとても微笑ましく、きつと彼女の振り撒く笑顔に誰もが頬を緩ませる事だろう。

イリヤにも友達が出来て、あんなふう益体もない話で笑い合える世界もある。

そう思うと、少しは救われる気がした。

無言でそのやり取りを見詰めていると、

不意に、視線を感じる。視線を辿ると、イリヤにそっくりの女の子が俺をじっと見ている事に気が付いた。

いや、そっくりなんてレベルじゃない。

赤いバトルクロスに浅黒い肌、イリヤのものと比べてより銀に近い色を持った髪と赤色より金色に近い瞳。

差異と言えればこれぐらい。身長から顔の造形まで、何もかもがイリヤそのものだ。

視線が交錯する。しかし、ふいっとその視線を逸らされてしまった。何かしたんだらうかと模索する俺に、イリヤが申し訳無さそうに頭を下げた。

「あつ、ごめんなさい、私達だけで勝手に盛り上がっちゃって」

「ん、ああ、別に構わないよ。聞いていて、中々愉快的話だったのでね」

「うんうん。魔法少女の日常会はどんな財宝よりも貴重な物だから気にしなくていいよ。世界中の財を蒐集したギルガメッシュの蔵の中にも無い、唯一無二の財宝だ」

うんうん、とマスターは少しズレた調子で俺に同調する。

それを聞き安心したのか、先程まで帯びていた緊張が少し解れたようだった。

「さて、目的は済んだ。俺はそろそろ厨房に戻るとしよう」

無論、目的とはイリヤという名前を持つ魔法少女がカルデアに召喚されたという噂の真偽を確かめる事である。

「あ、ちよつと待って。例のアレ、お願いしても良い？」

「む」——了解した。腕によりをかけて作るとしよう」

なるほど。厨房の中に妙に材料が多く貯蔵されているなど思ったらそういう意図だったようだ。

俺は一人納得しつつ、マスターのマイルームから出て行く。無機質な自動ドアを通過し、廊下へ出た。

「」

マイルームから出て、一人廊下で立ち尽くす。

——かつて、聖杯戦争と呼ばれる戦いがあった。

万能の願望器である聖杯を巡り、七人のマスターとそのサーヴァントが覇を競い合う殺し合い。

その中で、『少年』はその『少女』と出会ったのだ。

遙か昔。もう、詳しく思い出せないぐらい置き去りにしてしまった、記憶の中で。

戦いの最中、『少年』はその『少女』を死なせてしまった。自分の力不足で、守る事が出来なかった。

守ってやるって、一緒に暮らそうって、誓ったのに。

果たせなかった約束は未だ己の中に。

果たされないまま、埋まっている。

「戦う理由が、一つ増えたな」

ポツリと呟いて、来た道を引き返す。

廊下に響いた足音はいつもより大きくて、不思議と厨房までの道を急がせた。

「さっきの人、どことなくクロに似てたような」

赤い外套を着た男の人が立ち去った後、イリヤ達も直ぐにそれぞれ自分達の部屋に案内してもらった。

部屋はなるべく近くの方が良いという要望を聞いてもらい、部屋の並びは美遊、イリヤ、クロとなっている。

各々の部屋で一度落ち着いた後、3人はカルデアに召喚される前みたくこうしてイリヤの部屋に集まっていた。

上がる話題は、先程会った『妙に親近感の沸く赤い外套を着た男性サーヴァント』である。

「ミュもそう思った？ 服装とかちよつと似てたよね。名前聞きそびれちゃったけど、また会えるかな？」

マイルームに設置されたベッドにだらしなく寝転びながら、イリヤは美遊の言葉に同意する。

「そりゃあ似てるでしょうよ、わたしの『元』になった英霊なんだから」

「ん、何か言った？」

「べつ々に。マスターがあの人と話してた例のアレって何なのかなって思っただけよ」

ふーん、と興味なさげにイリヤは生返事をする。

クロは『アーチャー』のクラスカードを核として受肉した存在だ。クラスカードは、英霊の座にアクセスする機能を持っている。故にクラスカードを核とするクロはカードがアクセスしている座の英霊の力——つまり、アーチャーの力を行使出来るのだ。しかし長らく、その英霊の正体・『真名』を掴む事が出来なかった。

セイバー——アーサー王

ランサー——クー・フリーン

キャスター——メデア

ライダー——メドゥーサ

アサシン——ハサン

バーサーカー——ヘラクレス

アーチャー以外のクラスの真名はその特徴から直ぐに割れたものの、アーチャーに関しては本人たるクロですら分からない。剣を投影し、それを弓に番えて射る弓兵など、どんな歴史にも居やしないからだ。

——しかし、まさかというかやはりというか。

（流石、英霊達が集うカルデアよね。こんな形で会う事になるなんて、思いもよらなかつた）

クロは一目見た瞬間に理解した。あの赤い外套を纏った英霊こそ、自身の内に内包したクラスカードに宿る英霊の力、その持ち主である。と。流石に真名までは分からないけれど、そんなのは本人が居るのだから直接聞けば良い事だろう。

《もしかしたら、イリヤさん達が使っているクラスカードに宿る英霊御本人様も居るかもしれませんよ?》

「う。勝手に英霊達の力を使ってる事、謝った方が良いのかな」

英霊達が生前に培ってきた技術等を勝手に引き出して使っているのだ。申し訳なさそうにするイリヤの気持ちは当然と言えば当然なのだろう。そんな時だった。マイルームのインターホンから、無機質な電子音が発せられたのである。

「誰か来たみたいよ?」

「そうみたい……ここはわたしの部屋なんだし、私が出た方が良い、よね？」

イリヤはそう言っ、僅かに緊張した面持ちのまま自動ドアまで向かっていった。

備え付けられたボタンを押すと、極めて静かな駆動音と共にドアが横へスライドする。

——立っていたのは、金髪の綺麗な女性だった。

歳は恐らく20に届かないぐらい。金を梳ったかのような髪と蒼玉の如き双眸は、まるでそれそのものが魔力を持っているかのように意識が吸い寄せられる。

そして特筆すべきはその雰囲気だ。

オーラとも言い換えられるかもしれない。

物静かで柔らかかそうな表情にも関わらず、その女性が視界に映った瞬間に自身が圧倒される。

突然の訪問者に三人が石化の魔眼でもくらったかのように固まっていると、それを知ってか知らずか。

「初めまして。私は貴方達と同じようにこの人カルデアに召喚された者です。名を、ジャンヌ・ダルクと申します。以後、お見知り置きを」  
ほんわかとした笑みを浮かべながら、フランスの超有名な聖女サマは何の変哲もない魔法少女3人に、ぺこりという音が似合いそうなお辞儀をするのだった。

「わあ」

「これは、凄い」

「ええ、本当に凄いわねコレ」

異口同音の感想を漏らす2人と、呆れたように嘆息する一人。クロの言葉通り、かのジャンヌ・ダルクによつて案内されたカルデアの食堂はまさに仮装パーティーの有様であった。

デパートのフードコートに勝るとも劣らない面積を誇る食堂は、カルデアに召喚されたと思わしき英霊達でひしめき合っていたのだ。

鎧を纏う騎士、ドレスを纏う王女様、はてまたとても人とは思えない見た目の巨人 e t c . . .

クロが仮装パーティーにじみていると感じたのも無理も無いだろう。もつとも、彼ら彼女らにとってみれば正装なのだろうから仮装という言葉の方は当てはまらないのかもしれないが。

「どうやら、マスターは貴方達を召喚出来たことを本当に喜んでいるようです」

会場である食堂の様子を見たジャンヌが、柔らかい笑顔を浮かべながら呑気な感想を漏らす。

それからジャンヌはポカンとするイリヤ達にどこがイリヤ達の座席なのかだけを告げると、「自分も少し手伝ってきます」と言って場を後にした。

「ねえイリヤ。アレ——」

美遊が壁に取り付けられていたモニターを指差す。

「えーと、『イリヤ、美遊、クロ。我らがカルデアにようこそ!! byカルデア職員&サーヴァント一同』だって」

《ははーん。あのマスター、中々に粋な事をしますねえ》

《美遊様達の歓迎会、という事でしようか。》

しかしそれにしても——

「うん。派手だね。新しい人が入ってくるといつもこんな規格外。豪勢なパーティーしてるのかな？」

「——いえ、先輩は魔法少女が好きらしいので今回だけが特別なんです。確かに歓迎会っぽいものはしますが、流石にこんなお祭りテンションではやりません」

「あ、マシユさん——」

「こんばんわ、イリヤさん。それに美遊さんもクロさんも。あの世界ではお互い大変でしたね」

ピンク色と紫色を合わせたような髪を揺らして、両手に料理の皿を乗せたマシユが近付いてきた。

マシユとは召喚された直後に少し話ただけで、マシユはその後直ぐに「する事があるから」と言ってマイルームから退出していった。

今思えば、この準備のためなのだろう。

「ほんとよね。もう二度とあんな目にあいたくない。……って言っても、ここに身を置く以上は起きちゃいそうね。マスターとマシユがあの世界に来ちゃったのも、随分と突発的な転移だったんでしょ？」

「はい。今回の原因はファースト・レディさんからの干渉でしたが、割と頻繁に突発的なレイシフトが起きたりするので、皆さんも気を付けてください。ちなみに、先輩はサーヴァントが見た夢に引きずられてしまう事もあるそうです」

「ゆ、夢に!？」

《これはイリヤさんにとってはヤバいですよおー。夢の中でシロウさんとナニしてるか分かりませんからねえ》

「ぶふっ！わ、わたしをえっちな夢を見る変態さんみたいに言わないで!!」

《へ？ルビーちゃんはただ、イリヤさんは夢の中でシロウさんと何をするのかなあと思っただけですよ？というか、シロウさんの夢を見る事自体は否定しない所を見ると、はーん、イリヤさんってばもしかしてえ?》

「ほ、ほらみんな早く座ろ？ルビーの下らない話なんか放っておいてさあ早く!!」

イリヤはこれ以上話は聞きたくないと言わんばかりに美遊とクロの背中をぐいぐい押し、自分達の席に行こうとする。

イリヤ達の席は真ん中の、一際装飾が激しい席だった。

どうやらマシユはイリヤ達と相席らしく、イリヤ達の向かい側に腰を下ろす。

もう一つ空いている席は、恐らくマスターのものだろう。

「ここに居る全員が、英霊。」

最初はその光景に目を奪われたものだが、しばらくして慣れ始めてくるとその事実には驚かされるというものだ。

イリヤ達はあくまで一般人。

過去の英雄達に四方八方を囲まれているという状況には、些か気が落ち着かない。

マシユはそんな様子を感じ取ったのか、

「皆さんは黒化した英霊——カルデア風に言うのならシャドウサーヴァントしか見た事が無かったんですね？」

「うん……だから英霊っていうとちよつと怖いというか、近寄り難いというか。」

「でも——『あの人』は、何か違った」

「あの人、ですか？」

美遊の言葉に、マシユが可愛らしく首を傾げる。

「はい。赤い外套を纏ってて、髪が白くて、クロの男性版みたいな人なんですけど。」

「クロさんの男性版。」

一瞬だけ考え込むような素振りを見せたマシユだったが、3秒ほどで答えに行き着いたようで、直ぐに顔を上げた。

しかしマシユが口を開こうとする前に、突如食堂内の電気が落ちる。突然の停電に驚くイリヤ達だったが、それと時を待たずして緩やかなピアノの音色が場に流れ始めた事によつてこれが演出なのだと気付いた。暗闇の中で踊る旋律は高く低く、流れるように鼓膜を響かせる。

その美しさに、思わず息を呑んだ。それもそのはず、演奏しているのはかのモーツァルトである。

音楽の叡智が込められたその十指が奏でる音色は、人を虜にして離さない。音楽の事なんてロクに知らないイリヤ達も、まるで魔術がかけられたかのようにじつとその演奏を聞いている。しばらくして、演奏が終わった。

演奏の余韻で静まり返る会場に、一条のスポットライトが下りる。特別に作ったと思わしきステージに照らし出されたのは、マスターだった。

「素晴らしい演奏をありがとう、モーツァルト。さて、あまりにも突然の事だったからビックリした人も居るよね。なのに俺の勝手にこんなにも素晴らしい会場を作ってくれてありがとう」

マスターの目は真剣そのものだ。

どこか抜けている所もあるいつものマスターとは違う、敵と相対する時の真剣な眼差し。

「今日、こんな急に集まって貰ったのは他でもない。紹介しよう、今日このカルデアに召喚された魔法少女3人組です!!!」

スポットライトの光がこちらに移動する。

その瞬間、「うおおおおお!!!」という鬨の声にも似た音の爆発が湧き上がった。

特に、海賊っぽい格好をした黒い髭のオジサンは凄まじく、「本物の魔法少女おおおおお!!!」と瞳から血の涙を流しながら叫んでいる。

「な、なんか恥ずかしいね」

「うん」

「ま、それだけマスターに愛されてるって事なんじゃない？流石にこれはやり過ぎだと思っけど」

100人近い人数から注目され、イリヤと美遊は僅かに萎縮する。しかし嫌という訳ではない。

むしろここまで自分達が歓迎されているんだな、と嬉しく思う。

「さ、今日は無礼講だ!!日頃の疲れを癒すべく好きなだけ騒ぐぞ皆!!!  
ビバ・魔法少女!!!」

——まあ、それにしてもあのテンションには流石にちよつと引かざるをえないのだが。

「お疲れ様です、先輩」

「うん、マシユもお疲れ様。急にごめんね」

「いえ、大丈夫です!そ、その。イリヤさん達の召喚を祝いたい気持ち  
は私も同じですから」

本人達を前にして言うのが恥ずかしいのか、マシユは微かに頬を赤らめる。既に周りは宴会モードだ。

あれだけあった食事が、溶けるように無くなっていく。

「さ、俺達も早く食べよう。今日は厨房担当の皆が頑張ってくれたからね。イリヤ達も、新しく入ったばかりだからつて遠慮とか無用だぞ？」

「うん、ありがとうマスターさん！それじゃあ、頂きます！」

イリヤは丁寧に置かれたフォークを手にとって、近くにあった唐揚げを口に運んだ。

「あれ？」

——その味に、イリヤは不思議そうに首を傾げる。

不味い訳じゃない。むしろとても美味しい。

噛んだ瞬間口の中に溢れ出す肉の旨みとカリッと揚げられた衣が絶妙なバランスで組み上げられた逸品だ。

しかし、何かがおかしい。

脳の奥で、火花が散るような感覚。

「」

次は卵焼き。皿に規則正しく盛られたそれにフォークを突き立てて、恐る恐る口に運ぶ。

——再び、頭の中で火花が散った。

ふわりと広がる出汁の味と、舌に乗せた瞬間とろける卵の半熟具合が、えも言われぬ幸福感を演出する。

ゆつくりと味わって、こくりと嚙下した。

不鮮明だった感覚が、鮮明に浮かび上がる。

「お兄ちゃんの味と、同じ——」

いや、正確に言えばイリヤ達の兄である『衛宮士郎』の作る物よりも美味しい。

しかしその差はあくまで延長線上。

この味は兄の作る料理の味をより洗練させたら、恐らくこの料理の味に限りなく近くなるだろう。

クロもそれに気が付いたのか、並べられた料理を無言でじっと見詰めていた。

「どうしたの？三人とも。そんなに料理を見詰めて。何かおかしな所あった？」

「う、うん。おかしな所は無いよ。凄く美味しいし。けど、そのんだか食べ慣れた味がするなと思って」

「食べ慣れた味、ですか？」

「どれどれ」

マスターがフォークを手に取り、イリヤも食べた卵焼きの皿に嬉々として手を伸ばす。そして、

「——ん、これはエミヤが作った卵焼きだね。うん、美味しい！

このとろける感じが堪らない！」

何気なく放たれた言葉。

——しかしそれは、イリヤ達の身体を固まらせるのに充分事足りた。

兄と同じ味の料理と、同じ苗字。

味が似ているのでは無い。前述の通り、あの味は兄の味の延長線上にある領域だ。

今まで幾度となく兄の料理を口にしてきた自分が、それを間違えるはずが無い。

「ね、ねえマシユ。そのエミヤって人がどこに居るか知らない？」

クロが、僅かに声を上ずらせながらマシユに向かい、身を乗り出すようにして問を投げる。

マシユは会場をぐるりと見渡し、

「会場には居ないようです。エミヤ先輩の事ですから、会場に居ないとなると厨房でしょうか」

「うん、きつと厨房になら居ると思う。何か用事があるのなら呼んでこようか？」

「——ええ、お願い」

クロは僅かに躊躇う素振りを見せたが、その躊躇いを跳ね除けるようにしてマスターにそう言った。

よし、と立ち上がったマスターが厨房の方へと消えていくのを確認したところで、美遊が重い表情のまま口を開いた。

「お兄・士郎さんが、本当にここに？」

「分からない、けど、あの味は絶対お兄ちゃんのものだった。それだけは、絶対に間違いじゃないよ」

イリヤのその言葉を最後に、3人は無言でその時を待ち続けた。急に流れ始めた重い空気にマッシュが動揺している。

周りは変わらずお祭り騒ぎ状態なのに、祝われてる当事者達がこんなに張り詰めているのは少々申し訳なかった。

そして、永遠に続くかと思われた数分が終わる。

「ほらほら、こつちだよエミヤ」

「一体なんの用なんだ、マスター。あそこ一帯に陣取る金色の王様達が次々と料理を食い潰していくので追加の品を急ぎ作らなければならぬのだが——」

何かを言いかけた口がピタリと止まる。

漆黒の瞳がイリヤ達に向けられた。

——その瞳に鏡のように映るイリヤ達は、きつと今間抜けな表情でその人を見上げているに違いない。

その人は、召喚された直後にマスターのマイルームで出会った、赤い外套を纏う男性サーヴァントだった。

イリヤ達がどこか親近感が湧くと話していた人であり、これは現在クロしか知りえない事だが、クロの内に秘めたるクラスカードと繋がっている英霊である。

しかし驚いたのはそこではない。

——その英霊は、先程まで逆立つように撫で付けていた髪の毛を下ろしていた。

その髪を下ろした時の顔を見た瞬間に、イリヤは地面がぐらりと足元から崩れる感覚を味わった。

その表情はイリヤ達の知るどの表情よりも大人びていて、声も身長も体つきも違う。

多くの悲劇を見てきたであろう漆黒の瞳は昏く、静か。

鍛えられた肉体と、多くの物を失い、その反面多くの物を背負って『理想』を追いかけ続けたその背中は視えない傷でいっぱい、とても

寂しかった。

——その姿はイリヤ達の知る『彼』とは何もかもが違うというのに、理解わかってしまっかた。

「おにい、ちゃん」

震える声で、無意識にイリヤは呼んだ。

否、イリヤだけじゃない。

クロも美遊も。自覚が無いままに、声を震わせる。

マスターとマシユがギョツとしてイリヤ達と『彼』の間に視線を彷徨わせるが、それを意識する程の余裕は無かった。まるで徐々に水の中へと沈んでいくかのように、周囲の喧騒が遠ざかっていく。

何か言わなきゃと、空白で空っぽな頭を回転させる。

しかし出かかった言葉は喉奥でつかえて、声になる事は無かった。

「——まったく、やはりマスターには口止めしておくべきだったか。少々抜かったな。こうなる事など、容易に予想出来たというのに」

静寂を破ったのは『彼』だった。

彼は自嘲気味に笑ってから、イリヤ達を真っ直ぐ見据える。

「——知ってしまったのなら、隠す必要も無い。もう聞いただろう、私の真名を。だが、そうだからと言って案ずる事は無い。私は君達を知る存在とは別の存在だ。そのカレイドステツキならば私がそちら側から見た場合、どんな存在にあたるかは理解出来るだろう。人格はさて置き、仮にもかの宝石爺が第二魔法を応用させて作った代物だ。理解出来ない、等とは言えない?」

鷹のような鋭い瞳が、イリヤの傍で浮いていたルビーと、同じく美

遊の傍で浮いていたサファイアに向けられる。

《理解出来るか否かと問われたら、当然答えはイエスです。仰る通りですとも。わたくしとサファイアちゃんはキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグが産んだ至高の魔術礼装。並行世界の運営である第二魔法が用いられてる以上、その言葉の意味は嫌という程理解出来てまゝです☆》

ルビーは、いつものふざけた調子で『彼』の言葉を肯定する。しかしその態度にも眉一つ上げず、

「なら良い。もう私の事を気にする必要も無くなった。私は『君達』の事を知らないし、私も君達の知る者では無いのだから」

『彼』はあくまで冷徹にイリヤ達を突き放そうとする。

そこには、明確な拒絶の意思が含まれていた。

目を背けたくなった。その拒絶に、じゃない。

だって、その瞳は――

「え、エミヤ！そんな言い方は――」

「口出しは無用だ、マスター。これは彼女達と私の話だろう。とは言え、もう話は終わった。そういう訳で悪いが、ここで失礼させてもらう。これ以上の話し合いは、誰の益にもなる事は無い」

突き離すように『彼』はそれだけをイリヤ達に告げて、厨房へと消えていった。

だって、その瞳は――計り知れない懊悩と、悔恨に濡れていたから。

だからイリヤは目を背けたくなったのだ。

その言葉は鋭くイリヤの心を抉る。

しかしそれ以上に言葉を発する『彼』が傷付いている事をその瞳を見て分かってしまったから。

痛ましくて、見ていられない。

「」

その在り方は、まるで一本の『剣』のようだった。  
真つ直ぐで。

鋭くて。

冷たくて。

寂しくて。

あまりにも儂い、理想の果て――

その後どう時間が進んだのか、イリヤは良く覚えていない。気付けば重い身体を引きずるように自分の部屋へ向かっている、クロと美遊と軽い挨拶を交わし、倒れるようにベッドに沈み込んでいたのだ。

慣れない環境だったからだろう。

あまり眠く無いのに、目を閉じればうつすらと覆うような睡魔が脳に浸透していく。

「やっぱり、あの人は違う」

霧がかった頭で呟いた。

――そう、初めから分かっていた。

彼はイリヤの知る『衛宮士郎』じゃない。

だから彼の言う通り、イリヤ達が彼を気にかける必要なんてどこにもありはしない。

「だけど、あんな顔、され、たら――」

あんな辛そうな顔をされたら。

――放ってなんか、置けないもん。

意識が完全に落ちる直前。

知らず、そんな眩きが零れていた。

――サーヴァントは夢を見ない。

もし見たというのならそれは、その英霊の持つ『記憶』、つまり過去にあった出来事でしかない。

呼応する心象風景。

視界に広がるのはいつも通りの荒廃した大地。

墓標の如く乱立する鈍色の剣。

上空では、錆び付いた歯車が回っている。

また一つ。丘の上に剣を突き立てた。

ここに剣を突き立てるのは何度目だろう。

そんな当たり前の事を数えた事は無いけれど、きつと途方もない数

字になるに違いない。

果たせなかった剣<sup>ユメ</sup>達はこうして風化していく。

果たせなかった『誓い』は忘却に散る。

散ったモノの在処なぞ分かるまい。

きつと誰に知られる事もなく、誰に理解される事もなく。

—— 果たされなかった想いは、消えてしまうのだろう。

引きずり込まれる。

—— この場に

取り込まれる。

—— この夢に

呑み込まれる。

—— この澱に

喰い尽くされる。

—— この檻に

それは散らばった残滓を全て集め、やがて一つの巨大な想念にならんとするための蒐集だった。

それは例外なくそれに関するものを喰らい尽くす。

果たされなかった願いを、誓いを、果たすために。

—— 喜べ少年。君の願いは、ようやく叶う。

◇  
「ん」

瞼越しに柔らかな陽の光を感じる。

当然の事だが、カルデアに陽の光なんぞ存在しない。

しかしこれはどういう事だろう。

瞼をゆつくりと開けると、そこには青く澄んだ大空が視界いっぱい広がっていた。

寝惚けているのだろうかと思っただが、あまりにも感覚が鮮明でそれは無いと切り捨てる。

だとしたら、これは一体――？

「ようやく起きたわね、お寝坊さん」

どこか不機嫌そうな声が横合いから聞こえてきた。

視線をそちらに向けると、むすつとした顔のクロがこちらの顔をチラチラと覗いていた。

どうして俺の部屋にクロが――と考えた瞬間、俺は自分が砂の上で寝ていた事に気が付いた。

「――済まない、状況を手短かに話してくれると助かる」

話しかけると、クロはツン、とそっぽを向いてしまった。

どうやら、俺は随分と嫌われてしまったらしい。

当然と言えば当然だ。

俺は彼女たちにあんな事を言ったのだから。

しかし状況を掴めないのは困る。

取り敢えず立ち上がって、周りを見渡してみた。

「公園、だど？」

そこは紛う事なき公園だった。

カラフルな遊具と一面に敷き詰められた砂があるだけの、至って普通の公園である。

何故公園に、と疑問を覚える寸前。

気になるものが視界を掠めた。

公園の名前やら、ルールが書かれた看板だった。

気になったのは1番上。

公園の名称である。そこには、こう書いてあった。

冬木市深山町第3公園、と。

「

思わず、押し黙る。

何が起きてるのか理解出来ない。

いや、理解はしている。

恐らくそれを俺自身が認めたくないだけなのだろう。

「イリヤと美遊は周囲を散策してるわ。じき戻るでしょう。まった

く、いつこんな事がまた起きるか分からないって確かに言ったけど、

まさかその翌日にこんな事になるなんてサイアクだわ」

「——これは、つまり」

クロは一瞬こちらを一瞥して、

「ぞ。カルデアで良くあるとかいう突然のレイシフトよ。それもマス

ター不在、連絡手段皆無の絶望的な状態。で、場所はほんとうに不思

議な事に——そこに書いてある通り、冬木市だってさ」

極めて投げやりな様子で、今の大変危機的状况を説明してくれたのであった。

## 第一節『黄昏の泪』

現状が判明してから十数分が経過した。

——おかしな事に巻き込まれてしまったものだ、と俺は手近にあったジャングルジムに背中を預けて、溜め息を洩らしながら独りごちる。

こんな状況なのだ。誰だって溜め息の一つや二つぐらいつきたくなるといふものだろう。

しかし、だ。原因も黒幕も何もかも分からない現状ではあるが、ここに留まり嘆息しているだけでは何も状況が動いてくれない。それだけは間違いない。間違いないので、『向こう』から話題を振って来ない以上、こちらから出向く必要があるだろう。こんな状況なのだ。私的な感傷に左右されている場合では無い。

「どうやら、お互い運がなかったと見える。君達は昨日召喚されたばかりでロクに強化されていない。対して私はとづくに置き去りにしたと思っていた地へ、再びこうして舞い戻ってきた訳だ。夢ならばさっさと覚めてほしい所だが、現実はその甘くないらしい」

——放たれた自身の言葉に嫌気が差す。

私的な感傷に左右されている場合じゃないというのに、出てきたのは私的な感傷に引きずられたような、皮肉が込められた言葉だった。びくん、とイリヤと美遊の肩が跳ねる。

上げられた顔は不安に翳っていた。

「——ふうん。ここが貴方の、ね。」

私達との『繋がり』は否定してもそれは否定しないのね」

しかし、この少女だけは違った。

確か名を、クロエ・フォン・アインツベルン。

イリヤと瓜二つな少女は、敵意すら孕んだ瞳で俺の事を睨み付けていた。

「無論だ。君達は私の真名を既に知ってしまった。故に出生は隠す必要が無くなった訳だが、繋がりに関しては真実存在しないのだから認める訳にはいかない」

「ッ、気付いてないとは言わせないわ。わたしと貴方の間には確固たる繋がりが存在する、それは否定出来ない事実でしょう？」

「——確かに、それに関してでは否定するつもりは無いさ。マスターから聞いたよ。君達の世界ではクラスカードと呼ばれる、英霊の座へのアクセスを可能としたカード型の礼装があるとか。君はそれを使い私の座にアクセスした。いや、順序が逆か。私の座にアクセスし、今の君が形作られた、といった所だろう」

「……………見ただけでそこまで分かるだなんて、流石ね」

「しかし、それは重要視するような事柄ではあるまい。私と君の繋がりは繋がりと呼ぶには極めて希薄かつ機械的な物だ。私の力を、君が使っているだけに過ぎないのだからな」

俺はクロエに向かい冷たく切り返す。

俺は君の知っている『奴』とは関係ない。だから必要以上に踏み込んでくるな、と言外に告げるように。

「ッ、貴方は。」

今の言葉が癩に触ったのか、クロエがブランコから勢い良く立ち上がってこちらを睨み付ける。

——当たり前だ。認める訳にはいかない。

恐らく、イリヤ達の知る『衛宮士郎』は魔術世界を何も知らない一般人として育てられたのだろう。

正義の味方を志す事もない。

誰かを守る事が出来ず絶望に暮れる事もない。

そんな自分と己を重ねられるものか。

俺は既に穢れている。イリヤ達の知る『奴』とは違い、この手は既に血に濡れている。

無数の戦場を駆け抜けた。

無数の人間を正義の名の下に殺した。

其の成れの果てが俺という存在だ。

誰も守れず、何かを成すこともない。

ただ血に濡れる事だけが、俺の存在意義だ。

——ああ、認められないとも。

「イリヤ達に、こんな『兄』の姿を見せる訳にはいかない。だから俺は否定する。」

「その繋がりだけは、否定しなくてはならないのだ。」

「落ちて着いて、クロ。今はまずこれからどうすべきか考えるのが先決。」

「」

「美遊の言葉にクロエは何も返す事なく、もう一度ブランコへと乱暴に腰を下ろした。」

「俺もその件についてこれ以上は口は出す気はないので、さっさと本題に移る事にした。」

「君達は一度、この街の様子を見に行つたのだろうか？何か掴んだ事はないか？」

「俺の問いに答えたのは声に隠しきれない緊張を滲ませたイリヤだった。」

「う、うん。わ、わたしの知っている冬木市とは少し違う所もあるけど……やっぱり、ここは冬木で間違いないと思う」

「人の往来もありました。見た限りでは、特に異状らしきものは無かつたように思えます」

「イリヤの言葉を引き継ぐようにして、美遊はそう続けた。どうやら話聞く炎上汚染都市のように壊滅状態という訳では無く、普通の街として機能しているらしい。となれば拠点となるべき場所が一つや二つ見つかつてもおかしくないだろう。」

「先ずはしっかりと腰を据えられる場所を探すべきだろうな。——」

「さて、私はそろそろ行動を開始するつもりだが君達はどうするつもりだ？」

「ジャングルジムから身体を離して視線を向ける。」

「言葉に詰まった様子の子の3人だったが、カレイドステッキの片割れであるルビーがビシビシとイリヤの肩を叩いて、その言葉を促そうとする。」

「え、えつと……もし良かったら付いて行きたいなあ、なんて思ったり思わなかったり……」  
《ああもう、なんでそんなに萎縮してるんですか！そういうのはもつとズバツと言わなきゃダメですよ！》

「む、無茶言わないでよ〜!!」

イリヤは涙目になりながらルビーに抗議するも、そんな抗議はどこ吹く風といった様子でルビーは《ほらほら〜》とイリヤを後押しする。

「——はあ、好きにしたまえ」

見ていられず、嘆息しながらそう告げる。

すると俺の答えが意外だったのか、イリヤが目を丸くしてこちらを見ていた。

「え、い……良いんですか？」

「良いも何も、カルデアへ帰還するという目的は同じなのだから別段断る理由もあるまい。それに、君達を置いて行くとマスターにとやかく言われてしまいそうなのでね。まったく、我ながら面倒なマスターに召喚されてしまったものだ」

俺の言葉に3人は顔を見合わせる。

そして——おかしそうに笑った。

俺の言葉に何もおかしい所は無かったはずだが、一体イリヤ達はどうして笑っているのだろう。

怪訝に思いこそしたが、考えても栓無き事だと判断して先を続けた。

「ふん、まあいい。私に付いて来るのなら好きにしたまえ。だがその前に……その格好だけは何とかしてくれ。流石に、それで人の往来に行く訳にはいかないからな」

それだけ言い残して、俺は公園の出口へと歩いて向かう。しかし俺はふと立ち止まり、後ろを振り返った。

思い出したのだ。どこか懐かしいと感じさせるこの公園は確か、生前イリヤと共に商店街で買ったたい焼きを食べた場所だったのだと。

何も特別な事じゃない。風化し摩耗しきった記憶は穴だらけで、そ

の時交わした言葉なんて一つも思い出す事が出来ない。だというのに——そこに、有り得ない筈の暖かな幻想を見た。

何の変哲もないベンチ。そこに、まるで本当の兄妹のように仲睦まじく座っている二人の光景を。

きつと、この場所に訪れたから見たのではない。

——俺は今までずっと、夢に見ていたのだ。

既に失われて、亡くしてしまったその願いを。

「.....」

刹那の後には、もう既にその幻想は消えていた。

視界に映るのはポツンと独り取り残されたかのように鎮座しているベンチのみ。

それを確認してから踵を返す。

頬を撫でる冬の風が、妙に冷たく感じた。

《いやー素直じゃありませんねえ、あの人も》

からかうような口調のルビーの言葉は、残念ながらイリヤの耳には届いていなかった。

場所は先程と変わり、商店街。

商店街はイリヤの知る物と細部は異なっているものの、その雰囲気は酷似している。

時折鼻孔を掠める食べ物の良い匂いや、魚屋と八百屋の威勢の良い客引きの声がどこか懐かしい。

そう感じるの昔、『兄』とよく商店街へ出掛けた事があったからだろう。

兄が高校に上がってからは、あまり兄と出掛ける機会が無かった。高校生は小学生とは比べものにならないぐらい忙しいと話に聞いていたし、実際に休日も部活や勉強などでそういう時間が無かったからだ。

——だからこそ、『今』を懐かしいと感じるのだろう。

視線を前に向ければ『彼』の姿がある。

先程の装いとは変わり、赤い外套とライトアーマーを脱ぎ、黒色の長袖シャツと同色のズボンを着ていた。

イリヤ達と一線を引くように五メートル程の距離を取って前を行く『彼』は、『兄』のように手を繋いで歩く事も、笑顔を見せる事も無い。

だけど時折イリヤ達がしつかりと付いてきているか心配するよう  
に、振り返って確認してくれる。

そんな些細で不器用な優しさが、イリヤにはとても嬉しかった。

「エミヤさん、か……………」

その他人行儀な呼び方が、イリヤの胸を締め付ける。イリヤの知る兄とは異なる存在なのだから、その呼び方が正しいのだと理解はしている。

「……」

「っ——くしゅんっ」

突然吹いてきた冷たい風に、思わずくしゃみが飛び出した。今のイリヤの格好をカルデア風に表すと、『第一再臨』である。

小学校指定の夏服は夏なら快適なのだが、冬の寒さを前にしては紙にも等しい。

そう、この冬木は季節が冬だった。

それも1月から2月にかけての、一番寒さを感じる時期。その中を半袖の制服で歩くイリヤと美遊は何だか少し浮いていて、心なしか道行く人々に注目されている気がした。

ちなみに『彼』はどこから引つ張り出してきたのか、至って普通の黒のシャツとズボンを着用している。

「……………寒い」

「うん……………寒いね」

「ふ、これぐらいの寒さで音を上げるようじゃ、イリヤも美遊もまだまだお子様ね」

「……………ちよつと待って。クロが着てるその暖かそ

うなコートはなに?」

半袖で寒さに耐えるイリヤと美遊とは違い、クロは暖かそうなコートに身を包んでいた。

「何って、ちよちよいと投影したもののだけど」

「そ、そんな裏技が!?ず、ズルい!!」

「ズルいなんて、人間きが悪いわね。イリヤも、『憐れなワタクシめに何卒クロエ様の慈悲をお願い致します』って心の底からわたしに頭を下げるなら用意してあげても良いわよ?ビキニとか」

「余計防御力が下がってない!?!」

「それに周りの視線が……」

「じろじろ見られる事による羞恥で暖かくなりそうじゃない?特に顔とか」

「そんな方法で暖を取り始めたら人として大切な物を色々失う気がするよ……」

《ふふふ、転身すれば寒さなんてあつという間に吹き飛ばせますよ?防寒機能はバッチリ完備してますから☆》

《姉さん。それでは結局周囲の視線を集めてしまうわ》

どうやら防寒事情は何ともならないらしい。

クロの投影品に頼るのが手っ取り早いですが、クロの魔力が無いと直ぐに消えてしまう。

クロが魔力を注ぎ続ければ問題ないが、イリヤと美遊のコートの維持にまで魔力を割けばその魔力消費はかなりの物になるだろう。

そうでなくても、クロは生きるために常に魔力を消費しているのだ。

何が起こるか分からない以上、出来るだけ魔力の消費は抑えた方が良い。

恐らく先程のも、クロはあまり自分の弱味を見せたがらないから敢えて冗談めかした言葉で濁したのだろう。それをイリヤも美遊も分かっていたから、これ以上は何も言わなかった。

寒さは拠点となりそうな場所さえ見付けられれば直ぐに解消出来る問題だ……と自分を励ましながら歩いていると、

「わぶっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「きゃ・・・・・・・・・・・・・・・・」

唐突に、何かがいりやと美遊の顔に覆い被さってきて、視界が黒く塗り潰される。何事かと慌てて覆い被さっていた物を顔から引き剥がそうとして、イリヤは動きを止めた。

「これ・・・・・・・・・・・・・・・・コート？」

被さっていたのは紫色のコートだった。

余程良い生地を使っているのか、表面にそつと触れてみると指が生地の上を滑らかに滑った。

裏面には余す事無く柔らかい羽毛が裏打ちされていて、いかにも暖かそうだ。

誰がこんな物を、なんてもう分かりきっている。

何事も無かったかのように前に行く背中を、イリヤはただ見詰める事しか出来なかった。

すると呆れた様子のおルビーが近付いてきて、

《やれやれ、あの方本当に素直じゃありませんねえ》

「ルビー？」

《おや、イリヤさん気付きましたか？あの方、随分と前からイリヤさんと美遊さんの分と思わしきコートをこちら側から見えないように持ってたんですよ？イリヤさん達に渡すタイミングをはかったんでしようが、全くひねくれているとかツンデレとか・・・・・・・・・・・》

「.....」

無言で、受け取ったコートを身に纏う。

突き刺すような寒さが遠ざかり、毛布にくるまれているような暖かさをお身が包んだ。

本当に、暖かい。

変わらず、彼は一定の距離を保ちながら歩いている。

けれどイリヤには、その距離が少しだけ近くなったように感じた。

その後街の人達から情報を集めながら商店街を抜けて、今は閑静な住宅街へと差し掛かっていた。

あまり意識していなかったのだが、俺達がこの世界に来たのは午後のかかなり遅い時間だったらしい。

太陽は沈み始め、色は微かに紅へと変じていた。あと3時間もすれば、街は完全に夜の闇に沈む事だろう。

商店街とは打って変わって、住宅街は無人数のではと感じさせる程静寂に包まれていた。

当然、無人という事は無い。

家からは物音を始めたとした生活音や談笑する声が聞こえてくるし、時折通行人も見える。

だというのに、今見ている景色はどこか作り物じみっていて、絵みたいに薄っぺらかった。

(.....やはりこの特異点はどこかおかしい、何かが頭の中で引つ掛かっている)

正体不明の違和感が胸に蟠っている。

この特異点は何から何まで謎に包まれている。

どうして俺達は突然こんな場所にレイシフトしてしまったのか。そして何より——マスター不在の中、どうやって現界を保っているのか。

マスターから魔力が供給されている様子は見られない。本来ならとつくに現界出来なくなってもおかしく無いのだが

「ば。ってばーちよつと、聞いているの!?!」

「む」

呼ばれて、振り返る。

そこには俺の事を睨み付けるクロの姿があった。

どうやら思案に耽っていた為呼ばれた事に気が付かなかったらしい。

「すまない、少し考え事をしていてね。それで何かな、お嬢さん」

「はあ、今どこに向かっているのか気になったのよ。見当もなくここま

で適当に歩いてきたっていう訳じゃないでしょ？」

「そうだな……記憶が正しければ、そろそろ到着する頃合いだろう」

「少しだけ、運ぶ足が重い。」

今から行く場所は、俺にとって鬼門と言える。

何故ならば——どこかに置き忘れてきた過去を、捨て去ったと思っていた己を自ら拾いに行くのだから。

「ここだ」

そして、その場所の目の前で足を止めた。

「ここは……まさか」

美遊が驚愕に目を見開き息を呑む。

それを不思議に思いはしたが、特に詮索はしなかった。恐らく俺の知らない、特別な交錯があったのだろう。

一方でイリヤとクロは、美遊とは違ったベクトルの驚きの声を上げていた。

「す、凄いお屋敷……！」

「武家屋敷つてやつかしら。ふーん、なかなか良い場所じゃない。けど、拠点になりそうな場所を探してたんでしょ？ここじゃ人が住んでるんじゃない？」

クロの言う通りだ。普通ならば人が住んでいる場所を拠点にする訳にはいかない。

そう——本当に人が住んでいれば、だが。

「その点に関しては大丈夫だ。なんせ——ここに人間は住んでいないのだからな」

先程、商店街で情報収集をしていた時の事だった。

ふと気になり、イリヤ達と離れた頃合いを見計らって背の高いマンシヨンの上へと登った。

そこから見た光景から、俺はこの武家屋敷に人間は誰も住んでいないと判断したのだ。

当然ながら、俺の答えにイリヤ達は疑問符を浮かべている。

「中に入って見た方が早い」と言いたい所だが、生憎そんなに事態は単純じゃなくてね。君達はそこで見ていたまえ」

短く告げて、俺は門扉に手をかける。

——この感触が懐かしい。

力を込める。かつて当たり前のように開けていた門は、随分と重くなっているように感じた。

もちろん、そんなのは錯覚だ。

物理的な重量は変わらない。

変わっているのは

「私自身、という訳か」

ふ、と自嘲するような笑みを刻んでから、手をかけていた門に力を込めて、一息に開け放った。

ぎい、と軋むような音と共に門が開く。

視界に飛び込んできたのは古めかしい武家屋敷だ。

古めかしいとはいってしまうものの、しかし朽ち果てているという様子は全く見られない。

まるで、大河ドラマから飛び出してきたかのよう。

一般家庭には広過ぎる程の面積の土地に堂々と鎮座する武家屋敷は、俺の記憶にある通りの威容を誇っていた。

ただ一つの、例外を除いて。

「」

敷地内に足を踏み入れた瞬間——まるで来訪者の訪れを待っていたかのように、庭の中央が歪んだ。

その歪みから、泥のような粘液質の深い闇が溢れ出す。

それは徐々に形を成していき、やがて人のような姿へと変貌を遂げた。

突如として現れたソイツは靱やかかつ美しい肢体を露出の高い、ピッタリとした衣装で身を包んでいた。

長い髪がザア、と地面に拡がっている。

特筆すべきは、双眸を覆い隠すバイザーにも似た眼帯。

何かの動物の革と思わしき素材で造られた眼帯越しに、滴る血のよ  
うに禍々しい視線が突き付けられる。

「あれは」

「黒化英霊 いえ、シャドウサーヴァントね」

《クラスはライダー あの姿からメドゥーサと推測出来ます！気を付  
けてくださいイリヤさん！》

《美遊様もお気を付けてください。かつて戦ったライダーと比べ、かな  
り強力な個体と思われれます》

ルビーとサファイアの注意に、イリヤと美遊が頷く。

そのまま轉身しようとするイリヤ達を、

「待て、君達はその目で見ていろうと言っただろう。さっきも言ったが君  
達の力は未だ充分育っていないんだ。そこで大人しく見ていたまえ」  
後方へ声を投げて、俺はもう1歩足を進めた。

それを見たシャドウサーヴァント、メドゥーサは地面を這うような  
前傾姿勢で俺の事を迎え撃たんとする。

——まるで獲物を前にした蜘蛛、或いは蛇だ。

「ちよつと待ちなさ」

「トレース 投影、オン 開始」

クロの抗議の声は、俺の手に突如として出現した二振りの夫婦剣を  
見た瞬間に止まった。

装いを黒いシャツから赤い外套へと変じさせ、俺は両手に頼もしい  
感触を感じながら悠然と歩を進める。

瞬間——シャドウサーヴァントとなり、理性を失ったライダー  
が地を蹴った。

ライダーの姿が一瞬で掻き消える。

俺に向かつて瞬時に接近したライダーは間髪入れる事無く、柄の先  
端に鎖が付けられた短剣を俺の心臓に向かつて一息に突き出した。

「ふん、贋作にしては速いな」

交差させた夫婦剣で、ライダーの短剣を受け止める。

甲高い金属音と、緋色の閃光が弾けた。

「だが——軽い。外見だけを取り繕っただけの中身の無い伽藍

堂では、贗作にすら届きはしない。貴様の刃が、私に届かないようにな

交差させた夫婦剣を一息に跳ね上げる。体勢を崩したライダーに向かい、右手の莫耶を袈裟に振り下ろした。

斜め一文字に刻まれる純白の軌跡。

それを、ライダーは後方へ跳躍する事によって躲した。

同時に俺も踏み込む。溶けるように流れる景色の中で、俺の瞳は目の前の敵の動きを完全に捉えた。

逆袈裟に迸った左手の干将は避けようとしたライダーの左腕を切断し、切断された腕がくるくると宙を舞う。

傷口から黒い、墨のような血が噴き出す。

痛覚という人間——いや、生物らしい機能は備わっていないのか、ライダーはサイドステップで距離を取る。

今なお経に溢れる黒い鮮血が、地面にぼたぼたと零れ落ちて染みを作っていく。

「■■■■■■■■——ツツツツ!!!」

吠える。その裂帛は爬虫類じみた、不快な音だった。

ライダーが鎖付きの短剣を閃かせる。

真つ直ぐ俺に飛翔する短剣を、俺は干将・莫耶の二振りを投擲して応じた。一對の翼のように放たれた干将・莫耶。

わざわざ干将・莫耶を投擲したのは奴の鎖に捕まらないようにするためである。

狙い通り莫耶が短剣を弾き、干将がライダーの首筋へと向かっていく。だが敵ももさるもので、くるりと踊るような挙動で干将を回避。そのままライダーは後方へ大きく距離を取り、武家屋敷の屋根まで跳躍した。

避けられた干将は遥か彼方へ飛んでいく。

そして、再び前傾姿勢を取ったライダーの眼前に、湖面のように揺らぐ赤い、血を彷彿とさせる魔法陣が浮かび上がった。

「————— 宝具、か」

短剣を弾いた莫耶を拾い上げながら呟く。

宝具発動まであと幾ばくもない。

弓にしろ接近しての剣戟にせよ、迎撃は間に合わない。

それに気付いたのか、後方のイリヤ達が慌てふためいたように敷地内へ雪崩込んできた。

「る、ルビー障壁!!!」

《いやーこれは障壁張っても防げるかどうか》

「じゃあミュのとわたしの熾天覆う七つの円環

も合わせましょう。それなら未だ」

「サファイア、お願い」

《お任せ下さい美遊様》

「何やら盛り上がっているようだが。まあいい。念の為という事もある。一応その障壁とやらも張っておいてくれ」

「それだけ告げて、俺は漆黒の洋弓を投影する。」

「左手に莫耶を持ったまま、しかし番える事はしない。」

「ちよつと貴方宝具が飛んでくるつてのに何して」

その言葉は、直ぐに途切れる事となった。

トン、というあまりにも軽い音がした。

そこまで大きかった訳じゃないのにも関わらず、その音はやけに鮮明に聞こえた。

音の発生源であるライダーに視線が集まる。

その、右胸辺りから黒い何かが生えていた。

いや——生えているのではない。

あれは後ろからライダーを貫いた、干将の刃だ。

完成しようとしていた魔法陣が薄れていく。

ぐらり、とライダーの上半体が揺れた。

「——干将・莫耶はお互いに引き付け合うという特性を持っていてね。倒すには未だ足りないが、宝具発動を中断させるのには事足りる」

言いながら、螺旋剣を投影して弓に番えた。

引き絞った弦を解き放つ。

ライダーが気付いた時にはもう既に遅い。

放たれた矢は黄金の軌跡を描きライダーの身体を穿つ。

即死だった。動かなくなったライダーはそのまま痕跡も残さず消滅した。

「さて、ここを陣取っていた輩は撃破した。多少強引なやり方だったが、無事拠点を確保出来たな」

「む、何か問題があったか？」

「いや、元々ここって誰か住んでたんでしよう？ならその人は——」

「既に死んでいるだろうな。『一般人』にあのシャドウサーヴァントを倒せるとでも？——あまり気分は良くないだろうが、君達にも一度落ち着ける場所が必要だろう」

《ルビーちゃんは賛成ですよ？魔法少女にも休息は必要です》

《私も賛成です。皆様、御自分ではお気付きになられていないようですよ。身体的にも、精神的にも》  
冷静沈着なサファイアの意見によつて、イリヤとクロは納得したようだ。

「サファイアが言うなら、まあ」

「うん、サファイアが言うなら。ここに住んでた人には申し訳ないけど、少しだけお邪魔させてもらおう」

《あれ、ルビーちゃんも賛成したんですけど》

「どうやらイリヤ達の間でも方針が固まったらしい。」

しかし——1人、美遊だけは賛成する事もなく、顔を俯かせていた。

「どうかした、ミュ？」

「それに気付いたイリヤが、ミュを心配するように声をかける。」

「ううん。なんでも、ない」

それが嘘だという事はきつとこの場の誰もが気付いただろう。しかし、これ以上は詮索しなかった。

「主の居なくなつた伽藍の武家屋敷。」

それは、かつて捨て去つた『己』を、否応無く励起さ

せた。

「うわ、まるで旅館だね。」

「ほんとね。うん、新鮮な感じで気に入ったわ!」

そう言っていてクロは畳の上に飛び込み、大の字になって転がった。よっぽど疲れが溜まっていたのだろう。大の字になって少し転がった後は、何もせず瞳を閉じていた。

イリヤもどこか疲れた様子で腰を下ろしている。

そして美遊は——部屋の入口で立ち尽くしていた。

この武家屋敷が『彼』の過去を励起させたのと同じく、この屋敷は少女の過去も励起させていたのだ。

『兄!』と過ごした思い出が蘇る。

暖かくて、当たり前前で、ささやかな幸せ。

ここはあの家じゃない。だって、『居ない』。

その動かぬ事実が、美遊にとってあまりにも辛い現実となって襲いかかってきた。

「っ」

駆け出した。逃げ出すように、部屋から飛び出した。

ここに居ると、おかしくなる。

だってここは——

「はあ、はあ、はあ、あ、っ」

幸か不幸か、家の構造は熟知している。

玄関まで行くのに、そう時間はかからなかった。

走る。走る。走る。走る。

家の間取りや庭の面積は全く変わらない。美遊の思い出をトレースしたかのように、屋敷は悠然と佇んでいる。

けど——兄が居ない家は広くて、寂しくて、寒かった。

《み、美遊様!? 一体どうなされたのですか!?!》

いきなり飛び出した美遊を追ってきたようだ。

サファイアが美遊の事を呼び止める。  
しかし、美遊が止まる事は無かった。

そのまま走り続け、外に出る。

どんな辛い事だつて耐えてみせると誓った。

美遊の事を命懸けで救ってくれた兄のため。

どんな事にも耐えて、いつか兄とこの家に帰るのだ、と。

だからここに帰ってくるのは、兄と一緒にじゃないとダメなのだ。

それが、どうして――

「きゃ」

角に差し掛かり、右に曲がろうとした瞬間。

ドン、と誰かにぶつかった。

その勢いがあまりにも強かったためか、美遊は弾かれたように後ろへ倒れ――

「――あまり、道路で走るもんじゃない。陽が落ちているからな。見通しも悪く、今みたいに誰かにぶつかるぞ」

――頼もしい誰かの腕に、支えられた。

あの時と、同じ。逆立っていた髪を下ろした『彼』が買い物袋を左手に持ち、右手だけで美遊の背中を支えている。

《美遊様を受け止めて下さりありがとうございます、エミヤ様》

「別に構わんさ。怪我でもされていたら、こっちが困るのでね。行動に支障が出る。――立てるか？」

「あ」

真っ直ぐ瞳を見つめられて、息が詰まった。

――本当に、似ている。

髪の毛の色も、肌の色も、背丈も、瞳の色も違う。

なのに、その穏やかな表情は――  
「ッ」

気付けば、その胸に飛び込んでいた。

――あの家と同じだ。

彼は自分の知る兄とは違う。

「そのはず、なのに  
美遊？」

彼は驚いている。当然だ、いきなり抱き着かれたら誰だって驚くに決まっている。

イリヤの『兄』だつて、同じような反応をしたのだから。

「何か、あつたのか？」

美遊は答えない。ただ、彼の胸の中で静かに泣いている。

彼は——何もしない。

時折躊躇いがちに手が動くのだが、何もしない。

まるで自分にはそんな権利が無いとでも言うかのように、彼はただ美遊の涙を胸に受け続けている。

——そんな2人を夕陽が照らす。

黄昏の中で、2人はまるで時が止まったかのように交わっていた。

——シンと静まり返った食卓に、食器の音だけがうるさく響いている。

相変わらず彼の料理は『兄』の味に似ていて、その事が静寂に拍車をかけているのかもしれない。

何というか、居心地が悪い。

さつきは思わず抱き着いてしまったが、ひよつとしたら自分はトンデモナイ事をしてしまったのではという羞恥と、後悔が後からひしひしと湧いてくる。

一足先に食べ終わったらしい『彼』は、無言で席を立ち台所作業へと戻っていく。

そこまでの所作が、まるでこの家に慣れているみたいに淀みなかった。

「ごちそうさまとさせて、これからどうするの？」

しかしクロだけは特に物怖じせず、『彼』に話しかけていた。食べ終わった食器を彼の元へ運び、短い会話をしている。

「今日は特に何かをするつもりは無い。各自、明日に向けて身体を休めておくといい。拠点を確保した今、やるべき事はこの特異点の調査だ。この特異点、レイシフトには不可解な点が多いからな。カルデアへと帰還する手口になるかもしれない以上、調査は必要だろう」

「了解。さて、じゃあお風呂に——あ、良かったら一緒に入る？お背中お流ししましょうか？ご主人様♡」

「折角だが遠慮しておこう。あと、君みたいな幼い少女がそういう事を安易に口走ってはいけない。というかその声でそのセリフはあの狐系キャスターを彷彿とさせるのでやめてもらおうか」

「ハイハイ。もう、少しぐらいは照れなさいよね」

「ブツブツと文句を言いながら、クロが居間から出ていく。」

「——こういう時、クロの直球さというかブレなさは本当に羨ましいと思う。」

「全く。彼女はいつもこういうのか？」

「あー。はい。結構家の中でもあんな感じでお兄ちゃんを誑かしてます。本当に、困った事に」

「そうか。ではその兄とやらはさぞかし大変な思いをしているだろう。こればかりは同情するよ」

「あーいや、それがその。案外まんざらでもなさげな表情でして。それだけじゃなくてルヴィアさんや凜さんやナナキのお姉さんや弓道部の後輩の人ともなんか、そういう、トラブルを起こしているらしく目下冷戦中です、はい」

「そうか。よし、殺そう」

「ま、待って!?!せめて去勢するとかそこぐらいに留めて貰えと」  
「君は君でかなりえげつない事を考えるのだな。潜在的にSだと良く言われないか？」

《良くお分かりになりましたねエミヤさん!そう、イリヤさんは潜在的にSなのです!しかし基本的には受けに回りがちなのでSとM、どちらともお楽しみになられますよ?》

「何の話!?!ねえルビー何の話をしているの!?!」

《さあ?ナニに関するお話なのかはご想像にお任せします》

何だかんだ言つて、イリヤも打ち解け（？）始めている。

——話しかける事が出来ないのは、美遊だけだった。

夕食後、各々自由時間となりイリヤは部屋に戻った。

イリヤ達は、もしも敵が襲つてきた場合危険だという理由で3人で一部屋を使っている。

「ちよつとした修学旅行気分だね、と落ち込んでいた美遊に対して笑いかけていたイリヤの気遣いを思い出しながら、夜闇に沈んだ板張りの廊下を歩く。

「綺麗」

「ガラス張りの雨戸によって仕切られた縁側。

しかし、今は長い間締め切つていたという武家屋敷の空気を入れ替えるために雨戸は開放していた。

剥き出しになった縁側に腰を下ろす。

——良く、ここでは無いこの家で、『兄』と隣合つて座り夜空を見上げた。

今は独り、隣には誰もいない。

冬の冷たい風が、美遊の艶やかな髪を攫つていく。

吸い込まれるような夜空だった。

今日は星が少ない。暗く、海のように深い夜空が視界いっぱい広がっている。

その中にただ独り、孤独な月だけが浮かんでいた。

淡く、濡れたような玲瓏の月。

その月がまるで自分みたいだと、いつに無くロマンチックで幻想的な思考に沈んだ。

いつまでそうしていただろうか。

——不意にギシリ、と廊下の床が大きく軋むような音が聞こえて、肩をビクリと震わせる。

「——済まない。驚かせるつもりじゃなかったのだが」

申し訳なさそうに視線を逸らす『彼』。

——その表情も、凄く兄に似ていた。

「あ、その。謝る必要なんて、無いです。」

わたしもさつき、貴方を困らせてしまったし」

掠れて、震えた声。まるでイリヤ達と知り合う前に戻ったかのように、言葉が上手く出てこない。

「そうか」

「は、はい」

そのまま彼は立ち去るかと思いきや、近くの柱へ背中を預けて、立ったまま深海じみた夜空を見上げていた。

隣に座って一緒に空を見上げる事はしない。

違う場所。違う瞳で、共に同じ空を見上げている。

「君も・この場所に縁があるのか？」

不意に、そんな質問が飛んできた。

「はい。義父と義兄と一緒に、ここじゃないこの家に住んでいました」

この答えだけは、まるで事前に用意していたかのようにすんなりと口から出てきた。

「君にも、イリヤスフィールと同じ様に兄が居たのか」

「はい。——今はルヴィアさんの家でお世話になっていて、美遊・エーデルフェルトと名乗っています」

「エーデルフェルト、か。魔術師の間では地上で最も優美なハイエナと畏怖される名門貴族だな」

「ご存知なんですか？」

「生前、多少の交流があった程度さ。親しかったとのかと問われると返答に迷うがね」

他愛のない話をポツポツと小雨のように続ける。

知らず緊張が解れて、少しずつ色々な事を話せるようになっていった。一通り話し終わって、再び無言になる。

先程のような、張り詰めた静寂じゃない。

穏やかで静謐な、心地よい静寂に身を委ねる。

その静寂を——

「——本当の名は衛宮美遊。いや、君個人に関しては朔月美遊の方が正しいか」

そんな、イリヤ達でさえ知り得ない事実を告げる言葉が打ち破った。今度こそ声は出なかった。

どうしてそれを——と、問い詰める気さえ起きない。

脳は、麻酔されたかのように働いてくれなかった。

「なん、で」

驚愕に張り付いた喉が、何とかその疑問を絞り出す。

しかし、——彼が何かを答える前に、ガランガラン、という鐘のような音が屋敷中に響き渡った。

侵入者用の結界だと瞬時に悟った美遊は立ち上がるが、彼の方が一足早かった。雨戸から瞬時に飛び出し、庭を抜けて門まで疾駆する。

門まで急ぎ迫り着いた俺は目の前に広がる光景に、ただ絶句する他無かった。なんせ——

「——貴方は、アーチャーのサーヴァントね。」

長らく姿を見せなかったと思えばいきなり黒化したライダーを倒すなんて、なかなか戦況を引つ掻き回してくれるじゃない」

「リン、あまり前に出てはいけない。今まで隠れていた分、アーチャーに関する情報はかなり少ないのですから気を付けてください」

「あら、この距離なら貴方の剣の方が早く届くでしょう？頼りにしてるわ、セイバー」

赤いコートにどこかの学校の物らしき学生服。

傍に銀色の甲冑を纏った騎士を侍らせ、門の前に立ったまま勝気そうな瞳をこちらに向ける1人の少女は、不敵に笑いながら己の名を名

乗る。

「——セイバーのマスター、遠坂凛よ。いきなりで悪いんだけど、貴方を従えてるマスターを今すぐ出して貰えるかしら？」

## 第二節 『記憶の澱』

／ a l t e r n a t i v e

「ずぎん、という鋭い痛みと共に1つの令呪が薄れ、数秒も経たないうちに消えてしまった。」

「確かこの令呪はライダーのものだったか。」

「それが消えてしまったという事は、あの武家屋敷周辺に設置していたライダーが撃破されたのだろう。」

「無感動に、かつて令呪があつた場所を見詰める。」

「しかし直ぐに視線を外した。ライダーには初めから大した成果を期待していない。」

「本命はこちらにあるのだから。」

「しかし——『彼』は一つ、疑問を抱えていた。」

「何故、アーチャーのクラスが召喚されなかったのか。」

「それが、自分にとって最も不可解な事だった。」

「——構わんさ。駒はまだ残っている」

「戦いは始まったばかり。」

「幾ら剣の英霊が最優とはいえ、この軍勢を前に勝ち残れる道理はない。そう。目に見えている事柄だけで判断するならば何の問題もありはしない。勝利は既に揺るがぬものとなっている。」

「——だというのに、何かが引つかかる。」

「いるか、アサシン」

「」

「お前は『彼女』の搜索を。まだ手出しはしなくて良い。そしてその後ライダーが消滅した場所へと向かい何があつたのかを確認してから、俺の元へ情報を送ってくれ」

「音もなく現れた漆黒の影に命を飛ばす。」

「意識はあらかた削ぎ落としてあるものの、簡易的な命令の遂行ぐらいは可能だった。」

命令を受けたアサシンが先程の巻き戻しのように姿を消すのを確認し、『彼』は再び『作業』へ戻っていった。

「もうすぐだ——あと少しで、お前を救う事が出来る。待っててくれ、■■■■」

そう、うわ言のように呟きながら。

——虚ろな瞳で、『夢』を回し続けている。

——◇?——

俺は居間にかげられた時計を一瞥した。

時刻は午前0時。このおかしな特異点に迷い込んでから、早くも12時間程経過した事になる。

本来ならば明日に備えて休眠を取りたい所なのだが、生憎それはもう少し後の事となってしまうそうだ。

疲れの籠った溜息を漏らし、視線を前方へ向ける。

——視線の先には赤いコートを纏った少女と、銀色の甲冑を着込んだ小柄な少女が座っていた。

「——ねえ、これどんな状況？」

「そんなものこつちが聞きたい」

クロの疑問に、にべもない返答をする。

——事の次第を話すには、今から5分程時間を遡らなければなるまい。

突如として鳴り響いた侵入者用の警報を聞きつけて、俺は門の前へと急ぎ駆け付けた。

しかし俺は侵入者の姿を目にした瞬間、驚愕のあまり数秒間程絶句し、石化の魔眼でもくらったかのように固まった。

その侵入者——いや、来訪者があまりにも見覚えのありすぎる

人物だったからである。

『セイバーのマスター、遠坂凜よ。いきなりで悪いんだけど、貴方を従えているマスターを今すぐ出して貰えるかしら?』  
そんなお願いなのか命令なのか分かりやしない言葉を突き付けられた時は、思わず頭を抱えたものだ。

「な、何でリンさんがここに?」

「落ち着いてイリヤ。多分、この凜さんは私達の知ってる凜さんじゃないと思う」

美遊の言う通りだ。無論、俺の知る遠坂でも無い。

いや、『アレ』はそもそも

「貴方達、私の事知ってるの。もしかして、どこかで会ったかしら?」

そんなやり取りが気になったのだろう。

遠坂は怪訝そうな表情でこちらを見ていた。

「いや、気にしなくていい。君にそっくりな御仁と知り合いでね。とても似ているな、と思っただけだ」

「ふうん。ま、いいわ。それより、早く本題に入りましょう」

「本題・マスターを呼べという話かね?」

「そうよ。あ、もしかしてそこに居る女の子達のうちの誰かが貴方のマスターだったりするのかしら?」

然もありませんと遠坂は頷き、見当違いな問いを投げる。

——未だ現状は掴めていないが、それでもあちら側の言動から分かる事は幾つかあった。

俺は遠坂の横に正座するセイバーを一瞥する。

間違いない。目の前に座しているのは本物の英霊だ。

つまり、この街で、かの『儀式』が行われているのだという解釈で恐らくは間違いあるまい。

しかし

「残念ながら、私にマスターは存在しない」

「何ですって?」

遠坂の双眸が僅かに細められた。

明らかに信じていない。細められた双眸から放たれた絶対零度の視線が、容赦なく俺へと浴びせられる。

瞬時に場の空気が凍り付き、張り詰めたものになる。

真実を包み隠さず口にしていく訳では無いが、嘘を言っている訳では無い。実際にマスターは不在である。

伏せているのは、無論カルデアの事だ。

「——待つてください。貴方がサーヴァントであるならば、それを召喚したマスターの気配を少しは探知出来るはずでしょう」

今まで押し黙っていたセイバーが、張り詰めている空気を裂くように割り込んだ。

——セイバーの姿が少し、懐かしい。

カルデアのセイバー。アルトリアは俺の知るセイバーより雰囲気  
が少し柔らかく、最近ではすっかり腹ペコキングとしてカルデアを席  
巻する程であるが、目前に座しているセイバーは、俺が初めて見た時  
の雰囲気そのものだ。

セイバーの問いに俺が返答する前に、

「ちよ、ちよつと待って！いきなり話が進み過ぎて良く分からない  
だけど——この世界ではじゃなくて、この街では『聖杯戦  
争』が、本当におこなわれているの!？」

イリヤが半ば身を乗り出しながら、遠坂に問いかける。

その問いかけは、俺に少なからずの衝撃を与えた。

マスターから、イリヤは魔術世界と何も関わりのない普通の小学生  
として育てられたと聞いていたので、その存在すら知らないと思っ  
ていたからである。

「はあ？今更何を言っ。もしかして貴方達、私を馬鹿にしてるの？  
聖杯戦争が行われているから、セイバーもアーチャーも召喚されてい  
るんじゃない」

心底呆れたとでも言いたげに、遠坂は嘆息する。

——これで確証は得た。

「この世界では、どうやら本当に聖杯戦争が行われているらしい。  
脱線してしまっただが、話を戻そう。先程のセイバーの問いに対す

る答えだが——そもそも私には誰かの手によつてこの世界へと召喚された、などという認識はない。気付いたらこの世界に居たというだけだからな。聖杯なんて代物に興味は無いし、聖杯戦争とやらに参加する気もさらさらない。今は、他に調査しなくてはならない事柄が幾つもあるのね」

「気付いたらここに居たって」

遠坂は呆れたように嘆息した。

無理もないだろうと思う。俺も聖杯戦争に参加する側だったならば、そんな話一笑に付す所だ。

しかし本当の事なのでそう言うしかないのだった。

「——リン。私にはアーチャーが嘘を付いているようには見えない。事の真実はともかく、アーチャーの言葉は信用して良いでしょう」

「うそ。じゃあ本当にコイツにはマスターが居ないっていうの？そんなの」

「ええ、本来ならば有り得ないでしょう」

ですが——この聖杯戦争はどこがおかしい。

そんな事態が引き起こされる可能性も、捨てきれはしないでしよう」

どこかやるせない様子のセイバーの言葉を聞き、遠坂は考え込むような素振りを見せて押し黙る。やがて大きく頷き、

「まあ、いいわ。理性を失っていないサーヴァントと出会うのは初めてだったから協力出来る事が何かあるなら協力し合おうみたいな感じに思ってたんだけど、そういう事なら仕方ないわね。お邪魔したわね」

そう言つて、遠坂は立ち上がった。

だがその前に、問うておかなければならない事がある。

「待ちたまえ。一体君は——誰だ？」

俺の問いに、目の前に座る女が不思議そうな顔をする。  
女はさも当たり前のように、

「さつきも自己紹介したでしょう？ 私の名前は遠坂凜よ。それじゃあね、はぐれサーヴァントさん」

そう言っ、トオサカリンは居間を後にした。

最後に、自身のマスターへ付いて行こうと立ち上がったセイバーが、俺に向かって意味ありげな視線を向けた。

何か用でもあるのかと思っただがそれ以上は追及せず、俺はただ黙って、正門から出ていくマスターとサーヴァントを見詰めていた。

嵐が過ぎ去った後、というのはこういう静けさを言うのだろう。風のように現れ風のように去っていった来訪者が居なくなった居間は痛い程の静寂に包まれていた。

一瞬だけ、イリヤ達に向かって視線を投げた。

そろそろ休息を取らせるべきだろう。

擬似サーヴァントとして元の肉体より頑強な靈基からだを得ているとは言え、精神は小学生のそれだ。

いきなりのレイシフト(?)に見えない疲れが溜まっているだろう。現にイリヤはこくり、こくり、と座りながら器用に船を漕いでいる。

——もしかして、俺に遠慮しているのかもしれない。ここは、先に俺が切り出すべきだろう。

「私はもう休む。君達も明日に備えて休みたまえ。あの女の言葉が正しいのなら、既に聖杯戦争は始まっているらしいからな。参加する気も意味もないが、巻き込まれる可能性だつて無きにしも非ずだ。いざという時になって足でまといになれば困るのは私の方で——」

「——」  
《あらあら、素直じゃありませんねえ。素直にイリヤさん達の身を案じていると仰ればよろしいですね》

「今更よ、ルビー。ほら起きなさいイリヤ。寝るなら部屋の方に行つてからにしなさいよ」

「うみゆ・セラ、未だ外暗いよお」

「はあ、仕方ないなあ」

寝惚けているらしきイリヤを背負つて、クロは居間から出ていく。カレイドステッキが吐いた台詞について議論したい事があつたが、ムキになるのも馬鹿らしいと思ひ流しておく事にする。

《美遊様も部屋に戻りましょう。寝不足はお肌にも影響を与えます》  
「うん」

心做しか浮かない顔をして、美遊は居間を出ていこうとする。しかし、

「——ごめん、サファイア。直ぐに行くから先に戻つて」

《美遊様——？》

障子に手をかけながら、美遊はこちらを振り返る。

自分に聞かせたくない話だと判断したのか、

サファイアは《それでは、あまり遅くなりませんようお気を付けください》とだけ告げて退室した。

必然的に、残されたのは俺と美遊だけとなる。

「わざわざ寝る時間を遅らせてまで私に何か用かな」と聞くのは、流石に意地が悪いか。良いだろう、何か聞きたい事があるのなら聞く。最も、君の御期待に添えるような答えが出せる保証は無いがね」  
真つ直ぐ美遊を見詰めて、言葉を促した。

美遊は一瞬言葉に詰まったように俺から視線を外す。

しかし直ぐに俺の瞳を真つ直ぐ見据えて、震える唇から言葉を紡ぎ始めた。

「——さつき貴方は、イリヤ達も知らないはずの、私の本当の名前を口にしました。どうして、その名前を知っていたんですか？」

微かに足が震えている。毅然とした態度だが、それが仮面である事は明白だった。

美遊は先程、イリヤ達も知らないはずの、と口にした。

恐らく美遊は自分の出生を隠し続けてきたのだろう。

だから、震えている。今まで隠し続けてきた己の内面を見せる事に、恐怖を感じているのだ。

「——かつて、とある男が奇怪なカード型の魔術礼装を用いて私の英霊の座にアクセスしてきた事があった。無論、無意識的にだがね。私はその男の記憶を断片的にだが読み取り、力を求める理由に多少の共感を抱き、一時的に力を貸していた。普段ならそんな記憶はアジャストしているはずなのだが、さつき君に抱きつかれた時に呼び起こされたようですね。全く、我ながら厄介な記憶を押し付けられたものだよ」

「そ、それって——」

『奴』から読み取った記憶はほんの一部分だった。

だがそんな記憶の断片でさえ、君を守り抜き幸せにする事で頭がいつぱいと来た。全く、君の兄は、よほど妹想いだったと見える」

「っ」

込み上げた感情を押し殺すように、美遊は俯いて唇を噛み締めていた。——俺は一体何をしているのか。

こんな事をして、何になる。

俺の言葉は気休めに過ぎないだろう。本当に美遊が望んでいる言葉は、俺から与えられるものではないからだ。

美遊と『奴』が再会する可能性など限りなく低い。

俺は美遊に叶わない希望を押し付ける事になるだろう。

——しかし、これだけは。

「君は今——幸せか？」

「え」

——これだけは、問うておかねばなるまい。

大切な人のためならば、自分は悪で良い。

その生き方が正しいのか否かには興味が無い。

俺は既に選択を終えている。

終わった選択に未練など無い。

——ただ、知りたくなつたのだ。一人の愚かな男が歩んだ道の果てに残つたものが、何だったのかを。

美遊は難しい顔をして思案に耽っている。

やがて迷うように、しかし真つ直ぐこちらを見据えて美遊は答えを口にした。

「私にとつての幸せというものがどんなものかは、あまり良く分かりません。けどイリヤが居て、クロが居て、学校の友達が居て、凛さんが居て、ルヴィアさんが居て。そんな日々は、すごく――」

――暖かくて、優しかった。

浮かべた笑顔は綻んだ花のよう。

囁くような声には胸中に渦巻いているであろう様々な感情が込められていて、双眸からは微かに涙を滲ませている。

「なるほど、これが貴様の――」

守りたかったものなのか、と。

そう感じた時、俺は知らず口元を綻ばせていた。

――見届けられる事は無かった。

その笑顔を最も望んでいた男はそれを見届ける事無く、願いだけを託して少女を見送った。

しかし――託された願いは消える事無く、世界すら越えて、その未来を描き続けている。

いや、男の願いだけじゃない。

少女が。そして少女の傍に寄り添い、共に歩む者達が、自らの手で不確定の未来を斬り開いていくだろう。

――それを叶える強さが、今の少女にはあるのだから。  
「今日はもう休むといい。さつきも言ったと思うが、足でまといになられるのは困るのでね」

「はい、そうします」

「む、何を笑っているのだね？」

「い、いえ、その、ルビーの言ってた事もたまには当たってるというか

美遊が何を言わんとしているか、良く分からない。

本人は追及する間も無く「お、おやすみなさい！」と慌てて出て行ってしまった。

「さて」

こちらもそろそろ自室へ戻るとしよう。

電気を消して、俺は居間を後にした。部屋に戻ってからは早かった。畳に布団を敷き、その上に体を横たえた。

——明日からは本格的に調査を進める。

この街で行われているという聖杯戦争とは極力関わらない方向で事を進めたいが。

「果たして、問屋がそう許してくれるかな」

これはあくまで予感に過ぎないが、全く関わらずに事を済ますのは不可能かもしれない。

そんな気がしてならなかった。

気苦労が絶えないな、と苦笑してから瞳を閉じる。

きつと、俺も疲れていたんだろう。

直ぐに意識は、暖かくて深い眠りに落ちていった。

サーヴァントは夢を見ない。

だからこれは——夢などではなく、もう遙か遠くに置き去りにした、誰かの記憶なのだろう。

視界は目障りなブロックノイズで覆われている。

そのノイズが、自分とそうでない者の境界線を曖昧なものに変えていく。映し出された光景に胸が痛くなる。

『正義の味方』を志した少年は嬉々として、『少女』に自分の願いを口にする。

『この戦いが終わったらさ。この家で、一緒に暮らさないか？俺は今の生活が、■■■と一緒に居られる時間がとても大切なものに思える

んだ。だから——』

叶わない願い。分不相応な希望。歪な欲望。

『どうして……何だよ。一緒に暮らそうって、言っただじじゃないか。なのに……何で、こんな』

暗転する舞台。汚泥の澱。絶望の囀り。

『我——聖杯に願う』

行き着いた果て。奇跡による救済。崩壊の誘い。

——その末に、少年は全てを失った。  
友達も家族も、そして世界すらも。

杯から溢れた黒い泥が、全てを灰燼に帰していく。

——そうして全てが消失した世界で、少年は『夢』を見続ける事しか出来なかった。

そうする事では、もう自分を保てなかったのである。

月下の誓いはとうに失われた。

あるのは、歪な願いだけ。

その先に待つのは破滅以外有り得ない。

いや、もう既に破滅している。

破滅してむなお、少年にはその終わりを認める事が出来ないのだ。

『待っていてくれ、■■■。俺が必ず、お前を——』

——そうして、歪な救済が始まった。

「あれ——？」

気付けば、イリヤは何処とも知れない不思議な場所に立っていた。さつきまで割り当てられた部屋で寝ていたはずなのだが、これは一体どういう事だろう。

周りに視線を巡らせる。そこには、墨で塗り潰されたかのような、見渡す限りの深い闇が広がっていた。

「ルビー？」

いつも傍に居る陽気な魔術礼装の名を呼ぶ。

返事は無い。寝ているのだろうかとも思ったが、そもそもルビーの姿など何処にも無かった。

隣で寝ていたはずのクロも、ミュも、サファイアも。

広大な武家屋敷——否、そこに街があつたという痕跡すら残らずに消えてしまっている。

「クロ・ミュ。」

不安で声が掠れているのを自覚する。

心臓の鼓動が痛く、速い。

イリヤは無意識のうちに走り出していた。

何か思い当たった訳では無い。

その不安から抜け出したくて、逃げ出したくて、振り返る事もなく必死に走り続けた。

「はあ、はっ、は——!!」

痛々しいほど乱れた呼吸。

時折ダレカのナマエを呼ぶけれど、虚ろな闇に吸い込まれるかのように音が途切れてしまっている。

——まるで、回し車の中のハムスター。

永遠に続く、終わらない悪夢に苛まれている。

「あっ。」

バランスを崩して転んだ。

強く膝を打ち付けてしまったようだ。膝に視線を落とすと、醜い傷が顔を覗かせていた。

しかし——不思議と痛みは無い。

血は流れ続けているけれど、まるで膝の傷が悪趣味なボディーペイ

ントだとも言うかのように痛みがない。

——それも当然だ。

この場所、この空間、この世界の中では痛みを感じようとした事などあまりにも人間らしい。

——ふと、視界を過ぎるものがあつた。

赤くて丸い・アレは頭、だろうか。

赤みがかつた髪の毛をした少年が前方を歩いている。あまりにも見覚えのある姿に、イリヤは歓喜した。

「待って、待って——お兄ちゃん!!!」

イリヤの叫び声が聞こえなかったのだろうか。

前方の人影は何の反応も示さずにただ虚ろに歩いている。

直ぐに立ち上がって、後を追う。

しかし——その差は縮まらない。

向こうはただ歩いているだけなのに、走っているはずのイリヤは全く追いつく事が出来ない。

チェーンが外れた自転車を漕いでいるかのようにだった。

「——そこから先は、地獄だよ」

「——っ!!?」

後ろから唐突に聞こえてきた声に、イリヤは慌てて足を止めて身構える。——子供、だった。

イリヤよりもかなり小さい6、7歳ぐらいの男の子。

その男の子を見た瞬間、イリヤは自分の心臓が止まるかと思うぐらい驚愕した。

赤みがかつた髪の毛と琥珀色の瞳を持つその少年は、あまりにも自分の兄の幼い頃の姿に似ていたのだ。

「か、可愛い・ってそうじゃなくて!!お、お兄ちゃん!?何でそんなに小さくなってるの!?!」

おっと、危ない危ない。思わず抱き着いてしまう所だった。ルビーから良く《イリヤさんはスイッチが入るとかなり『アレ』ですねえ》

と言われるが、それを否定できなくなってしまいそうだった。

「」

「え、えーと」

少年は口を閉ざしたまま、上目遣いにこちらを見詰めている。その瞳は悲しげで、妙に胸が締め付けられた。

ずっと続くのではないと思わせる停滞。静寂を破つたのは、少年だった。

少年はイリヤに向かって駆け出したかと思うと、急に胸に飛び込んできたのだ。そのままイリヤの腰あたりに腕を回され、抱き着かれています。そのような体勢になる。

「ふえ、ええええええええええ!!」

驚愕のあまり、今度こそ叫び声を上げた。

急な出来事にあたふたと慌てるイリヤだったが、その少年の様子に尋常ならぬものを感じ落ち着きを取り戻す。

少年は、ただ一言。

。

。

「ごめんね」

それだけ言って、少年はイリヤの腰に回していた腕を解く。ワケが分からず、少年に近付こうとしたその瞬間だった。

何処からとも無く降り注いだきた無数の刃がイリヤの華奢な身体を斬り裂き、穿つ。

「あ、あ、あ」

幸いにして痛みは無い。

ただ、千切れた四肢から溢れ出した鮮血が目には痛い。身体は、恐ろしく軽いのに、ピクリとも動かなかった。間違いない致命傷、助かる道理などありはしない。

揺らぐ視界。薄れゆく意識の中で、イリヤはその声を聞いた。

「ごめんな、■■■■。守るって、誓ったのに■■■■一緒に暮らそうって、約束したのに」

誘われるように瞳を開く。

そこには涙を流してダレカに謝る兄の姿と。

まるで墓標のように無数の剣が乱立する、荒涼とした丘が広がっていた。

「こんな悲劇は、もう繰り返させない。俺はこの戦いを終わらせて必ず、正義の味方になる」

ガゴン、と歯車が軋んだ。

そこで、意識が途絶えた。

断絶した意識は徐々に落下していき、このおかしな出来事は全て夢の中の話だったのだと、今更ながらに、気付かされた。

「朝か」

覚醒一番の声には重い溜息が混じっていた。

視界に飛び込んできたのはいつものマイルームでは無い。

畳と障子で仕切られた武家屋敷であり、その光景が昨日の出来事が夢ではない事を物語っていた。

「目が覚めたら元通り——なんて、流石に都合が良すぎる頼みだったかな」

再び重い嘆息を漏らす。果たしてそれは現在置かれている状況にか、それともそんな都合の良すぎる解決を望んだ自分に対してか。どちらにせよ、ここで呆けていた所で何かが変わる訳では無い事だけは

確かである。

「さて」

障子一枚を隔てた隣の部屋で寝ているだろうイリヤ達を起こさないよう居間に行こう。こんな状況ではあるが、朝の支度というのはいつも通りに行わねば気が済まない。

布団を畳み、自室を後にする。

場所も世界も違うのに起床時刻はいつもの通り6時30分を少し過ぎた頃、というのがどこか滑稽だった。全く、習慣というものは侮れない。

そんな事を考えながら居間に入ると、

「お、おはよう、ごいいます」

僅かに緊張を滲ませた声が出た。声の主は美遊であり、居間の真ん中でここを旅館か何かと勘違いしてしまう程の素晴らしい合手札を見せていた。

流れるような一連の動作には淀みがない。

余程作法が行き届いていると見える。

「あ、ああ」

不鮮明な返事をして、台所に立つ。

それにしても早起きだ。昨日の就寝時間を考えると、睡眠が充分に取れているのか心配である。

いや、何を考えているのだ俺は。

別に彼女達が何時に寝て何時に寝ようが知った事じゃない。別段気にかける必要など何も無いし、何より要らぬ心配は煙たがれるだけだ。

そんな事を考えていると——ぎこちない挙動で、美遊が台所に立つ俺の隣にやってきた。

「む、どうかしたのかね？朝食ならもう少しかかる予定だが」

美遊はそわそわと、何やら落ち着かない様子だ。

やがて意を決したように顔を上げて、

「朝ご飯作り、お手伝いさせてください。昨日は全部任せちゃったから」

「予想外の申し出に目を丸くする。もしや——」

「まさか、それをするために早起きをしたとでも?」

「あ、いい、いえそんな事は——」

「君は隠し事が苦手だな。昨日も言ったが君達の判断ミス、失敗は私の負担となる。睡眠不足というのはそれらを引き起こす要因として最たるものだろう」

「ごめん、なさい」

「それだけじゃない。子供にとって睡眠とは成長を促す上でかなりの重要性を孕んでいる。骨端線付近に存在する骨芽細胞の働きを促す成長ホルモンは、睡眠時に一番分泌されると言われているんだ」

「成長において睡眠が占める重要性の割合は高く、睡眠を甘く見ていると成長に障害が——」

「そこで言葉を切った。最初は申し訳なさそうにしていた美遊だったのだが、後半辺りから笑いを堪えるような、奇妙な表情をし始めている事に気が付いたからである。」

「とにかくだ。君はもう少し休んでいたまえ。人間よりも頑丈な靈基を得たとはいえ、君達自身の身体である事には変わらないのだからな」

「心配、してくれてるんですね」

「どうしてそうなるんだ」

「でも、大丈夫です。お兄ちゃん、兄と暮らしていた頃は、こうして一緒に朝食を作っていましたから。早起きするのは慣れてるんです」

「美遊はそう言うのと、本当に調理に取り掛かった。」

「こうなってしまうえば今更止められまい。」

「もういい、好きにしたまえ。主菜と副菜は私がやる。君は——」

「ご飯と味噌汁、ですよ。材料がこれとこれなら、玉ねぎとジャガイモのお味噌汁が作れそう、かな」

少し、驚いた。美遊が口にした味噌汁は、生前俺が朝食で頻繁に作っていたものだからだ。

「何を作るかは君に任せるさ。——折角の機会だ。お手並み拝見  
とこう」

「はい！」

穏やかな朝日が差す台所。

美遊にとっては懐かしくも、贋作の光景だ。

味噌汁の用意をしながらちらり、と横目に彼を見る。

戦闘時以外は髪を下ろす事になっているらしい。

台所に立つ彼は、やはり『兄』と重なって見える。

彼の事を兄の代わりだと思っている訳ではない。

——兄の代わりなんて、誰も務まらないのだから。

それを置いても、美遊は彼の人となりが好きだった。

今こうしている間もそれを感じる。

ここが偽物だとか、その人は本当は兄じゃないとか、そんな事は関係ない。一人の人間として親愛を抱き信頼出来るのなら、そんな事は関係ないのだ。

そんな当たり前の事実にも、自然と笑みが零れる。

胸を満たすのは恋愛感情とも違う不思議な感情。

その感情の名前が何か分からないけれど、別に今すぐに明確な答えを出さなくても良いと思う。

——大切なのはきっと。傍に居てこの人の力になりたいと思える事だから。

断絶／暗転。

惨憺／崩壊

絶望／濃霧

希望／歪曲

願望／汚泥

投影／開幕

落下。意識は何処までも何処までも永遠に落ちていく。  
足掻いても足掻いても手に引つかかるのは空虚な闇。

真つ黒で真つ黒で何も無い。

落ちていくという感覚は、やがて溶けているという感覚に変わって  
いった。身体がではなく意識が、である。

もはや出口は見えず、また終わりも見えない。

照らされ続けるスポットライト。

幕引きは未だ遠く——夢の中で、朽ちていく。

「さくら」

懐かしい声がある。ずっと聞きたかった。ずっと待ち望んでいた  
声がある。

「起き————いってば————から」

もう永遠に聞けないのかと思っていた。

深く暗い海の中で、ずっと。

————引き上げられる。

目が覚める喜びを知る。

永遠に戻れない、悪夢から——

「起きなさいってばイリヤ!!!」

「ひゃいっ!?!」

耳元で発せられた音の爆弾に脳を揺さぶられる。

意識が浮上する、なんて生易しいものじゃない。

まるで、一本釣りから船の甲板に叩きつけられたような感覚だった。

「クロ」

「やっと起きた。もう朝ご飯出来てるらしいわよ。昨日遅かったのは分かるけど、もうちよつとシヤンとしなさいよね」

「うんごめんね。あと、ありがとう」

「い、いつになく素直ね。まあ、とにかくそういう事だから！さつさと居間に来なさいよ」

言つて、クロは立ち去つていく。

自分でも良く分からないけれど、何だかクロの声を聞いて安心したのだ。まるで——何十年も、何千年も、何万年もその声を聞く事が出来なかつたとしても言うかのように。

そんなはずは無い。つい6、7時間前までクロと何かしらの言葉を交わしていたのだから。

——おかしな夢を見ていた気がする。

もう思い出せないけれど、怖くて、冷たくて、暗い夢。

《どうかしましたか？イリヤさん。顔色が優れないようですけど》

「あ——ううん。ちよつと未だ眠いみたい」

《昨日は寝たのがかなり遅かったですからねえ。全く、この世界のリンさんにも困ったものです。あんな時間に人の家を訪ねてくるなんて非常識過ぎますよ！》

「あはは。元々私達の家じゃないんだけどね」

苦笑いを浮かべながら、イリヤは立ち上がつて廊下に出る。空は快晴で、澄み切った空には何も無い。

冬らしい冷たい空気に身を縮こませながら廊下を進み、居間へと入る。

「お、おはようございまーす」

「イリヤ、おはよう」

「おはよーミユ。つてその格好は？」

「うん、割烹着 エミヤさんに投影<sup>つうく</sup>て貰ったの」

ほう。いつものメイド服も良いけど、割烹着というのもまた悪くない。良いセンスだ。

《何でしょう、この感じ。割烹着を見ているとこう、不思議なシンパシーを感じるというか。アレですかね？魂に刻み付けられた運命的な。ハッ！これはもしやルビーちゃんの擬人化フラグ・魔法のステッキからご主人様を癒す割烹着メイドヘジヨブチェンジする伏線!?》

何やらブツブツとおかしな事を言い始めたルビーは放っておこう。あと、仮にルビーが擬人化したとしても絶対に癒し系にはならない。あれやこれやと奸計を張り巡らせて主から家主の権利やら財産等を略奪し、全てを乗っ取る最悪にして最凶のドクター系ラスボスとかなら相応しいかもしれないが。

「わ、凄い本格的な朝食」

テーブルに並べられた料理の数々を見て感嘆の声を零す。

「ああ、勢いで作ってしまったね。もし朝にはあまり食べられない体質なら遠慮なく言ってくれ」

台所から顔を出した彼は、イリヤの感想にそんな反応を返してきた。

「ううん、大丈夫。それよりその、起きるの遅くなっちゃってごめんなさい」

この世界に来てからお世話になりっぱなしだ。

せめてこういう所で何か手伝わなければならないというのに、初っ端から大失態である。

「君が謝る必要は無いのだが————良く眠れたか？」

「う、うん。そりゃあもうぐっすり」と

「ならば別段問題などあるまい。かえって、よく眠れたのならそれに越したことはないからな」

微かに笑みを浮かべてそう言った彼の表情に、しばし心を奪われる。見ていて安心するような笑顔だった。

「む、何やら顔が赤いようだが。もしかして熱でもあるのか？」

「い、いえ!!何でもありません!!」

慌てるイリヤを、彼は不思議そうに見詰めている。

そんな光景を見たクロが、

「―――朴念仁な所は成長しなかったのね」

呆れたように、そんな呟きを零していた。

「あの……どうですか?」

「あ、美味い。正直驚いている。君の歳でここまでの品が作れるものなのだな」

「ほ、本当に?良かった」

俺の感想に美遊はほう、と安堵の息を吐く。

―――美遊の作った味噌汁は本当に美味なものだった。

たかが味噌汁と侮る事なかれ。

料理とは、基本や初心者向けとされる料理ほど奥が深いものなのだ。

「むー、なんかミュとお兄さん昨日よりずっと仲良くなってない?」  
クロが拗ねたように口を尖らせて、そんな事を口にした。

「―――君はアレかね。毎度毎度、そっちの方向にしか話題を捉えられないのかね?私はただ料理の感想を述べたまでだ。君の思っているようなやり取りじゃない。下衆の勘繰りはやめてもらう。あと、その呼び方もだ。お兄さんはやめてくれと何度言えば分かるんだ」

窘めるような言葉は、「ハイハイ」と簡単に流されてしまった。しかしながら、美遊の料理は本当に美味い。

―――才能があったのか、あるいは『師』の教え方が良かったのか。

朝食を食べ終わり一段落ついたところで、俺は本題に入る事にした。

「君達はこの世界について、どんな認識を持っている?」

急に投げられた問いに、イリヤ達が僅かに首を傾げる。

「え？そんなの。冬木市って事ぐらいしか」

イリヤと美遊もクロの言葉に頷く。

確かにここは冬木市だ。

しかし、ここに來てからずっと気になっていることがある。至って普通の街中で感じた、謎の違和感。

今からそれを確かめに行くとしよう。

「見た方が早い————と言つても君達に分かるかどうかは分からないが」

「随分と遠回しな言い方ね」

「ああ、何せ私も未だ半信半疑だからな。出来ればその予測が外れて欲しいところだが、これだけは君達に認識しておいて貰いたい。済まないが、出かける準備をしてくれ」

特に反論も無く3人は頷く。

30分程経つた後、武家屋敷を出た。

「私の目は物の構造理解に長けていてね。そのものが贋作か否か見極める事は容易だ。それは君も同じだろう？」

クロエ・フォン・アインツベルン」

「そりゃあ、アナタから力を借りてるわけだし。でもそれがどうかしたの？」

「元よりこの街に來た時からある種の違和感を感じていた。その違和感は何なのかは、自分自身で見た方が早い。説明した所でイメージしにくいだろうからな。ただ一つ確実に言えるのは、この街の中心がある。武家屋敷という事だけだ」

「中心、ですか？」

「位置としてではなく存在としての中心だよ。あの武家屋敷はあまりにも『精巧』過ぎるからな」

「それってどういう？」

「————待て」

疑問符を浮かべる三人に制止を呼びかける。

立ち止まったのは深山の商店街より東に進んだ住宅街。

これより先に進めば、冬木大橋という巨大な橋と海浜公園があるはずだ。

俺は、何の変哲もない住宅の壁に触れる。

——そして、

「やはり、か」

予測が真実へと昇華する。

間違いない。これは——

「何かあったの？」

「ああ、これでもう確定だ。——この世界においてこの街は、本来ならば存在しないか、或いは存在したものの何らかの原因によって滅びたものだろう」

その言葉に、三人が顔を見合わせる。

そんな馬鹿など言いたげな表情だった。

「まあ、イメージしろと言うのは酷だな。だがこれは紛れもない事実だよ。この街は過去はどうあれ、現在は間違いなく存在しない。存在するのなら、こんな『贋作』を作る必要は無いのだからな」

そうして俺は、核心を告げる。

「この街は偽物だよ。」

建物も何もかも、全て『投影魔術』によって作られた、『贋作』だ」

### 第三節『ヒナタの夢』

魔を紡ぐ者ならば、その事実を認識した瞬間に目を剥いて倒れて然るべしだろう。驚天動地なんて生温い。

『投影魔術』で地方都市を形成するなんて、あまりにも馬鹿げた夢物語だ。

——誰もが、きつとそう口にするだろう。

無論、俺とてその例に漏れなかった。

それどころか、なまじ投影魔術に深く触れている事もあつてその驚愕は並の魔術師を上回る。

その差は明確にイメージ出来るか出来ないかだろう。

——有り得ないわ」

第一声はそれだった。クロエ・フォン・アインツベルン。

彼女もまた、投影魔術に触れる者である。

「ああ、私とて信じられん。しかし事実である以上受け入れねばなるまい」

「えっと、つまりどういう？」

「この街が全て、魔術オンリーで作られた偽物かもしれないって事!! そんなの出来る訳ないわ! そんなの貴方が一番分かっているでしょう!」

「無論だ。ここまでのものを作るには途方も無い魔力、時間、何より強固なイメージが必要だからな。しかも作つて終わりじゃない。投影したものを維持するための魔力も必要で。」

——そう、消えない投影なんて代物じゃない限り普通の魔術師ではこんな芸当は不可能だ。

「そんな事が出来るのは。」

「いや、有り得ない」

「脳裏に浮かんだ予測を首を横に振る事で否定する。」

——思えば、己にそう言い聞かせていただけに過ぎなかったのだが。

「ここで可能かなど議論しても仕方あるまい。現にこうして目

の前に広がっている以上、受け止めるしか無いのだからな。重要なのは仕組みじゃない。どうすればこの世界から抜け出せるかという事だ。私達はこの世界を作った者を探すだけで良い」

そう、俺達の最終的な目的はカルデアへの帰還だ。この世界の仕組みなんてもの、解明する必要がない。

—— 明るみにする必要なんて無い。

その『事実』を改めて認識したところで、こちらに利は無いのだから。

《少し、宜しいですか》

平坦な声はサファイアのものだ。

「何かな、カレイドステッキ」

《その呼び方だと姉さんと被ってしまったのでサファイアとお呼びください。—— もし、もしもこの街が投影魔術によって成されたのだとしたら街に居る人達はどのようにして何の違和感も感じずに生活しているのですか？》

あ、という眩きがイリヤとクロの口から零れた。美遊は既にその疑問に行き着いていたのか、考え込むように瞳を伏せている。

「ふむ、鋭い指摘だな。だがなカレイドステッキ。いや、サファイア。それはこの街に闊歩する人間が人間である場合の話だろうか？」

《それは、どういう——？》

「なに、単純な話さ。この街の人間は人間じゃない。定められた役割と仮の人格のみを与えられた、憐れな贗作だよ」

商店街の雑踏の中をわたしは歩いていた。

こうして実際に歩いていると、この街が投影によって編まれた偽物だというのが嘘みたいに感じられた。

信じられない、というよりは実感が湧かない。

建物も、人も、匂いも、空気も。

わたしには偽物だとは思えない。

思いたく、ない。

「私が遠坂凜の去り際に、君は『誰』なのかと問いかけたのは覚えているかね？」

「はい。あの時少し不思議に思っていたんです。凜さんの事を知っているような接し方だったからどうして今更そんな事を聞くのかなって」

「ミュウが、躊躇いがちにそう口にした。

躊躇いがちに、というのは彼に話しかける事がじゃない。

踏み込んだ話をする事に対してだ。

視線を合わせる事すら恐れていたように見えた昨日とは大違いである。

「知り合いだと言った覚えは無いのだが、どうしてそう思ったんだ？」

「あ、ごめんなさい」

「いや、謝る必要はないよ。どうして分かったのか不思議に思っただけだ。ここを否定すると私の言葉に信憑性を持たせられなくなるからな、認めざるをえない」

「つまり、アナタには思えなかったって事？」

昨日訪ねてきたリングが、本物の遠坂凜だって。

でもそれって世界が違うんだから仕方なく無い？私はあまり気にならなかったけど。」

「——そうだな、私も最初はそう思っていた。何か根拠を示した所だが、生憎と私の感覚でしか無い。それも曖昧で、言葉には表し難い感覚だね。こればかりはそちらの判断に任せるよ。信じるか否かは君達の自由だ。半信半疑で聞いておくと良い」

そう言って、彼は踵を返していく。

——その背中が、とても似ていた。

『夢』の中で見た、あの背中に。

「——信じるよ」

気付けば、そう声に出していた。彼は意外そうに目を丸くした後、

「ほう、君は疑わないのだな。根拠が無い以上は半信半疑で聞いておくべきだと思うがね。どうして私の言葉を信じられるのか、その理由を参考までに聞かせてもらっても良いかな？ イリヤスフィール」

彼は口元を引き締めて、責めるような口調でそう言った。

——イリヤでは無く、イリヤスフィール。

その他人行儀な呼び方に、開こうとしていた口が自然と閉じた。壁のような隔たりが、喉奥を塞ぐ。

言葉に詰まっている私を彼は冷たく見下ろしてから、

「まあいい。信じようが信じまいが君達の自由だ、と言ったのは私だからな」

どこか、突き放すような態度だった。

その声に込められていたのは怒り。

しかしそれはわたしに向けられたものではなく、彼が彼自身に向けられた行き場のない怒りだった。

何か——私に負い目を感じている？

私には、そんなものを抱かせるような出来事があった記憶は無い。未だ知り合って数日なのだ。

忘れていくという線は無いだろう。

いや、そもそも彼とわたしでは存在している世界が違うのだったか。詳しい事は難しくくて分からないけれど、過ぎた世界、経験が違うのだから自分達の知る衛宮士郎とは完全に別の存在だと彼は言うていた。

——つまり彼が負い目を感じているのは私イリヤじゃなくて、彼の世界に居る『イリヤ』だという事だ。

「もう怒った」

「はっ」

うん。自分は今、凄く怒ってる。

彼は言った。わたし達が彼を衛宮士郎として見ようとした時に、自分分はイリヤ達の知る衛宮士郎じゃないと言って突き放した。なのに

彼は今、私の知らないイリヤを私と重ねている。……  
「貴方に何かあったのかとかそんなの分からないし、きつと聞いても教えてくれないと思う」

「お、おい。急にどうし——」  
「けど、私は私だもん!!そんな誰とも知らない人と私を重ねて、勝手に避けないで!!」

「っ——」

きつと、彼も無意識のうちにそういう態度を取っていたのだろう。浮かべていた表情はこれ以上無いぐらいの驚愕だった。無意識のうちに自分を責めてしまうぐらい、彼は追い詰められている。わたしとイリヤを重ねて、負い目を感じてしまっている。だからこそ言おう。

——そんなもの、知った事か。

私は私だ。他の誰でもない唯一無二の『わたし』だ。

それは彼も例外じゃない。確かに、彼の事を衛宮士郎<sup>お兄ちゃん</sup>として見ていた事もあったかもしれない。

けど、今は違う。彼ならば信じられると思ったから、そう思ったままで<sup>で?</sup>過ぎなかつたのだ。

——奇しくもそれは、今朝ミュが抱いた想いと似たものだった事に、誰が気付いただろう。

「……そうか、私は未だ——」

「え……」

彼は小さく呟きを零した。毒気の抜けたような声。

——今まで感じていた疑問が氷解したかのような、そんな響き<sup>き</sup>だつた。

「いや、何でもない。濟まなかつたな、イリヤスフィール。どうやら押し付けていたのは君ではなく、私の方だったらしい」

自嘲するような笑みだつた。

——何だろう、何故か分からないけれど。

「今の発言は忘れてくれ。信じてくれるというのなら有難くその信頼を受け取るさ。その方がやりやすくはあるからな」

——不安が、臓腑の内から湧き上がって来る。

正体不明のソレは泥のように私の心に絡み付いてきて、知らず心臓が鼓動を速めていた。

何か触れてはいけない箱に触れてしまった。そんな予感がどうしようも無く付き纏う。

——今まで、イリヤの言葉は確かに誰かの心を揺さぶり、正しい方向へと進ませてきた。

しかし、その言葉がいつだって正しい方向へ働くとは限らない。気付かなければ良かった事実を気付かせる、或いは気付かないようにしていた事実を気付かせてしまう事も往々にしてあるのだ。

『そうか。私は未だ——』

未だ、に続く言葉は何だったのか。それを知る術は、残されていない。

『そうか、私は未だ——イリヤの死を、本当の意味で受け止められていなかったのか』

遠い、昔話だと思っていた。

彼女の『最期』を見届けて、受け止めて、もうこれ以上の不幸は繰り返させないと心に誓った。

——だがそれは誤りだった。

俺は受け止められなかったからこそ、正義の味方なんてものを振りかざしてきたのだ。

イリヤの指摘で、それに気付かされた。

いや、元から気付いていたのだろう。

ただ認めたくなくて、ここまで我武者羅に走り続けてきたのだ。

「は」

全く、自分の愚かさに呆れるを通り越して笑えてくる。

何がお前と私は関係ない、だ。何よりも、誰よりもその関係を意識

していたのは、俺の方だった――

「いかなな、今は私情に流されている場合ではないというのに」

屋敷に戻ってきてから彼女とは一度も話せていなかった。

穏やかな昼下がりに。冬の寒さも、この穏やかな日差しの前には少しばかり緩和されているような気がした。

昨日、美遊と話した場所である。

こうして柱に背を預けて日差しを受けていると、どうしても眠気を誘発されてしまう。

「む」

欠伸が漏れそうになった。

気を抜くと直ぐに瞼が落ちそうになる。

そういえば、昔もこんな事があった。

気候が良い日にここで寝るのが気持ち良くて、今と同じ場所で良く昼寝をしていたのだ。

「」

気が付くと過去にばかり意識がいつてしまう。

縁側から見える庭は、閑散としていて何も無い。

――その中で、幻想を見た。

雪の降る庭で、銀色の髪をもった『少女』が屈託の無い笑顔を浮かべながらくるくると楽しそうに走り回っている。

そんな光景を『少年』は縁側に立ち、穏やかに微笑みながら見守っていた。

その少女は少年の姿に気付くとそちらに走り寄ってきて、少年の手を取って再び庭に出る。

『おいおい■■■、寒くないのか?』

『ふふーん、これぐらいの寒さなら平気だよ!』

あのね。雪国はね、もっと寒いんだよ?冷たくて、暗くて、誰も居なくて、寂しい場所』

『そう、なんだ』

『うん。でもね、今は凄く暖かいの』

『冬木市は気候が暖かいからな。■■■の住んでた雪国よりはかなり

暖かいと思うよ』

『むう、そうじゃなくて——』

少し不機嫌そうに頬を膨らませると、■■■は立ち止まる。こちらの手を離すとバフツ！と勢い良く抱き着いてきた。

■■■が居るからだよ。魔術師としてはダメダメで、マスターとしての技量も全然無いけど。

うん。凄く、暖かい』

夢を見ているような口調で少女は言った。

恥ずかしがっている顔を見られたくないのか、少年の胸あたりに顔を埋めている。

『甘えん坊だな、■■■は。ああ、俺も■■■と居れて嬉しいよ。ここに住ませる事にセイバーと遠坂からは文句を言われっぱなしだけど、安心しろ。何とか説得してみせるからさ』

『そんな事、■■■に出来るの?』

『も、もちろん！人間、成せばなるっていうだろ？幾らセイバーが鬼で遠坂が赤い悪魔だとしても絶対に成し遂げてみせるっていう気概があればなんとか——』

『ふーん、■■■ってば私の事をそんなふうにしてたんだ』

『な、遠坂!?!』

『ねえセイバー、今の聞いた?■■■ってばセイバーの事を鬼だって——』

『ほう。それは聞き捨てなりませんね』

『ひ、ひいつ!!セイバーまで!?!』

■■■、今すぐ道場へ。本当の鬼がどんなものか、剣をもってお教えしましょう』

『あ、その次は私の部屋ね。本当の悪魔がどんなものか、遠坂流のスパルタ教育で教えてあげるわ』

『』

『あはははははははは！頑張ってね、お兄ちゃん!』

2人の少女に引きずられていく少年を見て、銀髪の少女は可笑しそ

うに笑い転げている。

その笑顔が楽しそうで、嬉しそうで、幸せそうだったから。

——守りたいと、思ったのだ。

「ううう。幾らなんでも言い過ぎたよね、アレ」

「言ってる事は間違つて無かつたと思うけどね。良いんじゃない、ちよつとあのお兄ちゃんうじうじし過ぎだし。まるでイリヤを見るみたいだったわ」

枕に顔を埋めながら発した言葉に、クロが辛辣な感想を返してきた。

「何があつたのかは知らないけど、貴方も随分と嫌われたものよね。わたしやミュはそんな事無かつたけど」

「き、嫌われてなんか、ない、よね？」

あれは嫌われているんじゃない、彼がイリヤに何らかの負い目を感じていて、避けられていただけだと思う。

——だからわたしは怒つたのだし、それが事実だったから彼もあんな反応をしたのだらう。

「うん、そんな事は無いと思う」

「なら——イリヤが言った事はあながち間違いじゃないかもね。何があつたのかは知らないけど、あれは相当な何かを抱えているに違いないわね」

神妙な顔付きで、クロがそんな事を口にした。

「何かってそりゃあ——」

クロに疑問を投げてみる。するとどうした事だろう。何故か言葉に詰まらせ、頬を僅かに赤く染めてしまった。

「た、例えばの話しよ。イリヤとあの人イリヤが、その——  
無論、この場合のイリヤとは私の事では無い。」

いつもハキハキしているクロにしては珍しく言葉に詰まっていて、最後は消え入りそうな声だった。

やがて意を決したように気合を入れると、

「こ、恋人だったとするじゃない」

「ぶふっ!!」

「な——!?!」

あまりにも予想外過ぎる方向性の言葉に、わたしは思わず吹き出した。——今までお兄ちゃんですという妄想をした事なんて無い、と言えば嘘になってしまうだろう。

というか大抵してる気がする。

もし、もしもだ。そんな未来があり得るとするのならわたしにもお兄ちゃんと結ばれる可能性が——!?!

「ぶ、ふーん。きよ、きよきよ兄妹なんだからこ、恋人とか有り得ないと思うけど腐つても男の子と女の子なんだしそんな禁断の恋的な展開が起る未来も有り得なくはないというかむしろいつでも受け入れ状態オールグリーンというか。」

「で、彼が浮気したとするじゃない」

「——潰すわ。ペンはどこ?」

「い、イリヤ!?何を潰す気なの!?!」

浮気・ダメ・絶対。そんな男は再起不能にしてから人形にでも意識を移してずつと手元に置いておくに限る。

イリヤが潜在的にDSだと言われているのはたまにこういった言動をするからであった。

「そんな出来事がもしあったなら、彼の不器用な態度も領けるでしょ?」  
「それにほら、わたし達のお兄ちゃんです考えてみて。浮気とか十分有り得そうじゃない?」

「た、確かに。」

「お兄・士郎さんなら、有り得るかも」

ミュウからも賛同されるとは流石お兄ちゃん。

もの凄い信頼度(?)である。しかし、だ。

「けど——本当にそんな事なのかな?」

「男女間のいざこざは大抵が恋愛関係なんだからスズカが言ってたわよ。」

何とも不安にさせる情報ソースだった。

しかし、引つかかる。あの時浮かべた彼の表情は、そんな単純なものじゃ無かったような気がするのだが――

「うーん、やっぱりじつくり来ないや」

「ま、現実的に考えてみればそうよね。適当に言ってみただけで無駄に長いくだりだったわ」

「適当に言ってたの」

ミユの疑問に当たり前でしょ、とクロが答えた。

適当に言ってた割に本人は結構乗り気だった事は触れないでおこう。

「はあ、ここで考えでも仕方ないよね。ちよつと気分転換に外出してくる」

緩慢な所作で立ち上がって障子を開ける。

肌を刺す冬の空気が今は心地良かった。

縁側には陽の光が射していて、その安穩とした気候に自然と欠伸を誘発された。

――実の所、今朝見だおかしな夢のせいであまり眠れていなかったのだ。

《おや、あれは》

「ふわあ どうしたの、ルビー」

《あの柱を見てみてください、イリヤさん》

「柱」

ルビーの言葉に促されて視線を向ける。

――そこには、柱に背を預けて安らかな寝息をたてている『彼』の姿があった。

「」

吸い寄せられるように、近付いた。

意識しての行動ではない。彼の姿は誘蛾灯のようで、それに無意識に引き寄せられる虫がわたしだった。

彼がこちらの接近に気が付いた様子は無い。

かなり不安定で寝ずらそうな体勢なのに、静かで規則正しい寝息を

立っている。

——もつと、近付きたい。知らず、わたしの心はそう訴えかけていた。

《あの・イリヤさん?》

「ッ!？」

無意識のうちに伸ばしていた手を慌てて引っ込める。

あ、危ない危ない。ルビーの声がなければ、褐色の頬に触れてしまっただろう。

「あ、危ない。何かイケナイスイッチが入っちゃいそうだったよ」

《気を付けて下さいよ? 頬に触れたら流石に起きてしまいますからね》

「う、うん。気を付ける」

未だ心臓の動悸が止まらなかった。しばし深呼吸を繰り返してから、もう一度視線を向けた。

——子供みたいで、あどけない寝顔だった。

ここに来てから見る彼の表情は、どちらかというの不機嫌そうというか、いつも眉間に皺が寄っていた気がした。

しかし、今わたしの目の前で眠る彼の表情はそんな重しから解き放たれたようで、見ていて安心する寝顔だった。

《あは、こうして見ると本当にシロウさんですねえ》

「うん」

髪を下ろしている彼は、本当にお兄ちゃんそっくりだ。

特にこうして眠っている時は、それが如実に現れている。

縁側に腰掛けて、わたしはしばらくその寝顔を見詰めていた。ゆつたりと穏やかな時間の流れはまるで揺籃ゆりかごのよう。時折頬を撫でる風と降り注ぐ陽射しが、心地良かった。

しかし幾ら陽射しのおかげで暖かいとはいえ、風に晒しておくのは宜しくない気がする。

「よし」

《おや、どちらに?》

「ちよつとね。直ぐ戻ってくるから待ってて」

わたしは一度部屋に戻り、自身が使っていた毛布を持って再び縁側へと向かった。

持ってきた毛布をそつと、彼の身体にかける。

彼は僅かに身じろぎしたものの、起きた様子は無かった。

「それにしても、気持ち良さそうに寝てるなあ」

幾らなんでも、無防備過ぎやしないだろうかと思う。

クロ辺りが見たらこつそりイタズラを仕掛けかねない。

——ここは姉として、妹の蛮行を阻止しなければ。

「そ、そう。これはクロから守るためなんだから。クロがこんな無防備な姿を見たら何をするか分からないし！」

《幾らクロさんでもそんな事は、おや、そう言うイリヤさんはどうして余った毛布の中に入ろうとしているのですかあ〜？》

「だ、だからクロから守るためだつて！た、他意なんてこれっぽっちも無いんだからね」

《ハイハイ、そういう事にしておきましょうか》

何やら含むような笑みを浮かべるルビーに恨めしげな一瞥をくれた後、今度は横目から彼の寝顔を見詰めた。

傍目から見れば、一枚の毛布に2人が寄り添っているように見えるだろう。それ程までに彼との距離は近かった。

「ふふふ、こうして見ると可愛いなあ」

守ってあげたくなるようなあどけない寝顔。

それは、兄というより、まるで弟を見ているようだった。

「ふわあ、わたしも、ねむい」

ふらふらと頭が揺れて、意識が曖昧になっていく。

脳内に染み込んでくる眠気に何とか堪えていたが、そろそろ限界が近かった。

「ちよつとだけなら、良いよね」

攪拌された意識が、そんな言葉を弾き出した。

もぞもぞと、毛布の中に頭を埋めるようにして身体を潜り込ませる。昨夜はおかしな夢のせいで眠れなかったからか、直ぐに視界が狭窄していき——

「っ——眠ってしまったか」

柱に背を預けたまま、覚醒直後の僅かな酩酊感をやり過ごす。近年稀に見る、随分と心地よい睡眠だった。

日の角度からして恐らく寝ていたのは2時間程、現在時刻は4時を過ぎた辺りと推測出来る。

少しだけ休憩するつもりだったが、随分と長い時間をここで過ごしてしまったものだ。

やれやれと自分に呆れつつ、立ち上がるために俺は身体にかかってきた毛布を持ち上げようと——

「待て、毛布だと」

「ここに来る前にそんな物を持ってきた覚えはない。

身体にかかっていた毛布を、怪訝な面持ちで持ち上げる。

「そこでようやく俺の膝の上に何か。否、誰かが乗っている事に気が付いた。」

その正体を確かめるためゆっくりと、慎重に毛布を捲る。

「」

——銀色の髪の毛が、サラリと俺の膝に流れる。

その様は山頂から清らかに流れる清水を彷彿とさせた。

誰かが、俺の膝を枕にして眠っていたのだ。

微かに聞こえる健やかな寝息と、その呼吸に合わせて上下する薄い胸。幼くあどけない寝顔を見せるその少女はあどけなさの中にも、雪のような儂さと美しさを備えていた。

《おや、お目覚めになりました？》

「カレイドステッキか」

直ぐ近くに、携帯モードとなったカレイドステッキ、ルビーがふよふよと浮いていた。

「口の機能は無いものの、その顔がニヤついているのは最早明らかだった。」

「この毛布は、イリヤスフィールが？」

「ええ、貴方が風邪を引かないようにとそれはそれは御心配をなさっていましたよ?」

「要らない心配だったな。サーヴァントがこの程度で風邪など引く訳が無いだろう。お前ならそんな事は分かり切っているはず——」

「いや待て。そうじゃないだろう。」

「これはイリヤが俺の身を案じた故の行動だったのだろう。それを無駄だと斬り捨てるのはあまりにも非情に過ぎる。」

「いや、済まない。コレに関しては礼を言おう。助かった」

「いえいえ、礼は私では無くイリヤさんに☆貴方から御礼をされればきつと喜びますよ?」

「考えておこう。毛布に関してはここで終わりだ。しかし、これはどういう事だ? どうしてイリヤスフィールがこんな所で寝ている」

「おや、こんな所と言われましても。貴方もここで寝ていた訳ですし、同じなのでは?」

「とぼけるな。私が聞きたいのは、どうしてイリヤスフィールが私の膝の上で寝ているのかという事だ」

「さあ? 私には何とも言えませぬえ、本人に直接聞いてみては?」

「はあ」

「全く、頭が痛くなりそうだ。いや、もう既になっている。さて、どうやって起こしたのか。」

「あ、寝かせておいてあげて下さいね。環境が変わったせいなのか、昨日はあまり眠れていなかったようなので」

「意外だな。お前は主人の容態なんか気にしないような奴だと思っ  
ていたが」

「な、なんて心外な! ご主人様の容態を気遣うのは愉快型魔術礼装の基本ですよ!」

「ふん! とルビーはわざとらしく怒り始める。」

「少なくとも俺の知るカレイドステッキにそんな信条は無かった筈」

だが、このルビーはそうでも無いらしい。

——ロクでもない、という一点だけは変わらないみたいだが。そのロクでもなさを見揮し、ルビーは《それではごゆっくり》と言つてどこかに消えてしまった。

「う、ん お兄ちゃん」

きゅ、とイリヤが俺の服の裾を掴んだ。

その顔は幸せそうで、本当に起こすのが躊躇われる。

ルビーの言葉が本当ならば、起きるまでこのまま寝かせておくのが適切か。既に陽射しは淡いものになっている。

毛布一枚で冬の寒さを凌ぐのは厳しいかもしれない。

俺は毛布をもう一枚投影して、イリヤの身体にかけた。

「私は君の兄ではない」

寝言に反応した所で返事が返ってくるはずも無い。

しばし、俺はその寝顔を見詰めていた。

髪が顔にかかってしまっているためか、時折寝ずらそうに身体をよじっている。

その髪の毛を梳こうとして、直ぐに手を止めた。

——俺に、そんな資格は無い。

俺からこの少女に触れる事が、どうして許されよう。

「だというのに君は、どうして、私に触れようとするんだ」

この少女は、きつとイリヤが歩むかもしれなかった平和で暖かい日常を歩んできたのだろう。

俺が夢見た幸せな日常を。

歩ませてあげたかった、今は遠き未来を。

もう彼女の手を取る事は出来ない。

この血と剣に彩られた手は、触ればきつと彼女を傷付けてしまうだろう。

——剣に出来るのは傷付ける事だけだから。

そんな存在は彼女に相応しくない異物だ。

「だからせめて——」

彼女の、平穏な生活を守ろう。

衛宮士郎では果たせなかつた日常を守ろう。

———  
そうする事でしか、俺は彼女に贖えない。

———  
いつまでそうしていたのか、気が付けば辺りはすっかり日が落ちていた。

揺籃の庭は既に夜の帳に包まれている。

暖かな陽射しも穏やかな風も消え去り、あるのは冬の厳しい冷たさだけだった。

空には朧な月とそれを囲むように散らばる砕けた星達。

夜空のスクリーンに映し出された光景はかつて見た光景そのもので、胸が痛かった。

「うにゅあ」

一際大きく俺の膝の上で寝ていたイリヤが身を振った。

小刻みに瞼を震わせ、やがてゆつくりと開く。

紅の瞳が俺の瞳と交差した。

「ようやく起きたか。済まないが、退いてくれると助かる。君が裾をずつと掴んでいたせいで私はここから動くどころか立ち上がる事すら出来な」

「えへへお兄ちゃんだあ」

「なに？」

甘える子猫のような声だった。

そのままイリヤは緩慢な所作で身体を起こすと困惑する俺の首に腕を回して、頬を擦り寄せてきた。

「ま、待たないか！私は君の兄ではないと何度言えば」

「おはようの、ちゅー」

「なっ いやそれは本当に待ってくれ!」

寝ぼけているのかイリヤの瞳はとろんと蕩けていて、制止の声は全く届いていないようだ。

誰かどうすれば良いのか教えてくれ。

逡巡している間にもイリヤの顔は段々と俺に近付いてくる。

厳密には、開きかけの蕾のような唇が。

「あ、いたいた。ミュが夕飯作ったから居間に——」

「あ」

声の主はクロだった。廊下の角から現れたクロから見たら俺とイリヤが抱き合って何やら良からぬ事をしようとしているように見えた筈だ。

「」

「違うぞ?」

クロは——聖女かと思うぐらい穏やかな笑顔を浮かべていた。その満面の笑顔が逆に怖い。

廊下が痛い程の静寂に包まれている。

触れれば砕ける、張り詰めた氷のような静寂だ。

「あ、あれ、ここ、どこ?お兄ちゃんは?」

腕の中のイリヤがようやく目を覚ましたようだ。

しばし辺りを見渡した後、イリヤが俺の顔を見る。

最初は不思議そうに首を傾げていたが、徐々に状況を理解したのか

その頬が赤くなっていき——

「ご、ごめんなさいっっっっっ!!!」

勢いよく俺から離れようとして——廊下に立つクロと目が

合ったのか、身体が固まった。

「ち、ちが、クロ、これは」

「どうかしたの、クロ?」

「ミュ!?」

「」

《これは、事案ですね、美遊様》

おたまを持った美遊が、こちらを虚ろな目で見ている。

持っているのはおたまなのに、どうしよう。

俺にはそれが鋭利な包丁に見える

「——弁解は後だ。取り敢えず、一度そこを退いてくれないかな

イリヤスフィール。退いてくれないと、ここから立ち上がる事

も出来ないのだが」

「は、はいっっ!!」

イリヤがびよん、と膝から飛び降りる。

それを見届けてから俺もゆっくりと立ちあがった。

長い間同じ姿勢で座っていたからか、すっかり身体全体が懲り固まっている。

——— 本当に随分と長い間をここで過ごしてしまったものだ。早くカルデアへと帰還すべきだというのに、俺は一体何をやっているのか。

「済まない、見苦しい所を見せたな。念の為に言っておくが、君達が思っているようなやましい事は何一つない。なので、早々にその反応に困る表情を収めてくれると助かる」

クロのからかうような、そして美遊の冷たい視線に耐え切れずそんな弁解を一つしておく。

「幸い信じてくれた」というか、最初から本気で疑っていた訳では無いのだろう。

「さっきも言おうとしたんだけど、ミュが夕飯作ってくれたから。早く居間に来てね」

「っ、そうか、夕飯の事をすっかり失念していた。済まない美遊、手を煩わせてしまったな」

「手を煩わせるなんてそんな」

「そうそう。ミュってば結構ソリソリで調理してたわよ? 『あの人に美味しい物を作ってあげるんだ』って張り切ってたし」

「く、クロ!!それは言わなくても」

「ミュママ、早くご飯」

「わたしは貴方の母親になった覚えはない」

逃げるクロを追いかけて、美遊が廊下を走っていく。  
必然的に、イリヤと二人きりになってしまった。  
再び、静寂が訪れる。

「あ、あのさっきは、ごめんなさい」

その静寂を破ったのはイリヤだった。申し訳なさそうに、イリヤが

頭を下げたのだ。

「別に構わないさ。ここで眠りこけて醜態を晒していたのは私の方だからな。君が謝る事でも無い」

「しゅ、醜態なんかじゃ、凄く可愛い寝顔でした！」

「それは、反応に困る切り返しだな」

寝顔を見られていたというのなら尚更醜態だ。

気が抜けているどころの話ではない。

しかし気が抜けているからこそ、気付く事もあるのかも  
しれない。

「ありがとう」

「え？」

突然の事に、イリヤはキョトンと目を丸くした。

俺から唐突に礼を言われたのだ。

そんな反応をしても何らおかしくはないだろう。

「この毛布、かけてくれてるのは君だろう。それに対しての礼だ。とはいえ、サーヴァントがこの程度の寒さで体調を崩す事はまず有り得ないがね」

「」

イリヤは、奇妙な表情をしていた。

まるで込み上げる笑いを堪えるかのような、そんな表情。

ふむ。そういう事ならこちらからも一つ、爆弾を投下してみよう。

「それともう一つ、君は私の寝顔を可愛いなどと評してくれたが、君の寝顔もなかなか可愛らしかったぞ。写真に収めたいぐらいにな」

「な———!?!」

ボン、と音がしそうなぐらいイリヤは赤面した。

固まるイリヤの横を通り越して居間へと向かう。

———全く腑抜けている。

早く帰還の手がかりを探し、カルデアへ帰る。

本来ならばそれだけを目的にし、そのために動く事が最良だろう。だというのに、こんな回り道をしている。

しかし、その無駄でしか無い回り道を悪くないと感じている自分がいた。

例え、直ぐに終わってしまふ幻想だったとしても。

こんな日々が続く未来があったのなら——それはさぞ、幸福に満ちたものだったのだろう。

団欒の終わりは唐突に訪れた。

告げるのは侵入者用に仕掛けられた結界の鐘のような音。

けたましく鳴り響いた警報の音が、引き裂くように屋敷の中を駆け回っている。

「トオサカリンではない。この気配はもつと、おぞましい何かだな」

「おぞましい何か」

「敵襲という事さ。向こうも我慢がきかなかつたと見える。——

——戦闘の準備をしておいてくれ。今回ばかりは君達も傍観という訳にはいかなさそうだ」

立ち上がり、イリヤ達に短くそう告げた。

黒いシャツから赤い外套へと外見を変じさせ、両手に投影した干将と莫耶を握りしめる。

玄関ではなく、雨戸から外に出た。

白く、白骨のような月が目痛い。

夜の帳に包まれた摇篮の中——そこに居たのは視界を穢す、汚泥の如きモノ。

朧な光の下に浮かび上がったのは漆黒のローブだった。

昏く、泥のように深い底無し闇。

手には三日月を模したかのような飾りが先端に付けられている錫杖が握られており、暗闇の中で鈍色に光っている。

——その姿には見覚えがあった。

「キャスト—メディアか」



## 第四節 『曖昧な距離感』

—— 剣戟、夜気を裂く。

空虚に響く慟哭は獣の断末魔。耳障りな響きは雨音のように重なり合い、重低音となつて醜く耳朶を犯した。

酷く醜悪な獣の達の大合唱は、神経を逆撫でる。

まるで、終わらない悪夢を見ているかのようにだった。

どこまでも続く獣の慟哭。それはまるで泥の中にいるかのように息苦しく、呼吸をする度に喉にへばりついてくる。

だが、この程度の戦場は未だ稚拙だ。

本物の地獄はこんなものじゃない。奴らはキャスターが異界から召喚した傀儡に過ぎない。

視界を染める赤も、噎せ返る程の鉄の臭いも、殺した人間の甲高い絶叫も何も無い。

意思を感じない空洞の瞳が俺を射抜いている。

スケルトンが振りかざした曲刀シミターを弾き飛ばし、返す刀でその首を断ち斬った。

間髪入れずに放たれる矢を最低限の動きだけで回避し、矢を放ったスケルトンに向かって莫耶を投擲する。

トン、という軽い音を立ててスケルトンの脊椎が断ち切られ、無惨に庭に転がった。

空から襲ってくるワイバーンは弓で撃ち落とし、その隙に地上から攻めてくる竜牙兵とスケルトンを斬り飛ばす。

その一連の流れを、既に10分程繰り返していた。

斬り捨て、射ったエネミーの数は既に200は下るまい。

キャスターは召喚に意識を割いているため、未だ直接仕掛けてくる事は無さそうだが——

「キリがないな、これは」

斬つても斬つても召喚されるのではキリがない。

しかも撃破する速度より召喚される速度の方が僅かに上回っているときた。幾ら余裕があるとはいえ俺も無限に戦える訳では無い。

消耗戦になれば先に尽きるのは自明の理だ。

「散弾!!!」

僅かに離れた場所で、幾条もの桃色の閃光が弾けた。

イリヤが上空から放った魔力砲だった。

散弾の如く拡散して放たれた魔力砲はエネミーの群れの中へと突っ込み、小爆発を起こす。<sup>?</sup>

《見事ですイリヤさん! いや、上空から敵の群れを容赦なく殲滅とか魔法少女らしくなってきましたねー!》

「こ、これ魔法少女らしいの。」

《勿論です! さあ、ドンドン間髪入れずにやっちゃいますよー!》

上空を飛行するイリヤまでではスケルトンや竜牙兵の攻撃は届かない。しかし――

《イリヤさん上です!! ワイバーンが来ましたよ!》

「ぎゃあー!」

空を飛ぶ特権は魔法少女だけのものでは無い。

空を駆る青色の翼竜は突如として空に現れた異物に対し、怒りの咆哮を上げた。

「ふお、砲撃!!!」

散弾とは打って変わった、一条の極大の魔力砲がワイバーンの体軀を撃ち抜く。撃ち落とされる翼竜。

しかし――上空を旋回するワイバーンの数は一体だけでは無い。猛りは三度。三対の巨大な尖爪がイリヤの華奢な身体に向かって、猛然と振るわれた。

「ふっ――!」

「や――!」

ワイバーンを撃ち落としたのは青色の魔力砲と、黒と白の夫婦剣だった。魔力砲が美遊、夫婦剣はクロのものだ。

「あまり前に出るなと忠告したはずなのだが」

「籠城してるだけじゃつまんなーい。わたしガッチガッチの近接タイプだし。それにアナタだけだと削りきれないでしょ? この数。ここは素直に手を借りておきなさいな」

「全く、呆れたものだ。仮にもアーチャーを名乗るなら遠距離からの狙撃等に努めた方がらしいのではないかね？」

「その言葉、そっくりアナタにお返しするわ!!」

軽口を叩きあいながら、波状となって襲い掛かってくるエネミーをクロと共に斬り飛ばしていく。

上空のワイバーンは空を飛べるイリヤと美遊が次々と撃ち落としているのが見える。

このままいけば後少しでキャスターへと辿り着けるだろう。気になる点があるとすれば――キャスターのあの禍々しい雰囲気だ。明らかに劣化版のシャドウサーヴァントではない。

そう、アレではまるで『狂化』だ。

理性を無くす代わりに基礎ステータスを底上げしている？

いや、何か引つかかる。そもそも俺はアレと似たようなものをどこかで見た覚えが――

「――いや、分析は後だ」

まずは、この邪魔な壁を破らなくてはなるまい。

「くっ、キリが無いわね」

「ああ、幾ら雑兵とはいえあれ程の規模となるとやはり細々と削るだけでは足りないな。ここは一つ、思いきってデカイのをぶつけてみるでしょう。君は一度下がっていたまえ。あまり近付かれると危険だ、爆風に巻き込んでしまうからな」

告げて、漆黒の洋弓とドリルのように螺旋を描く黄金の剣を投影する。

「――分かったわ」

それだけで何をするのか悟ったのか、クロは短く頷いてから数歩後ろへ下がった。

その間にも奴らは波状に距離を詰めてくる。

薄汚れた骨同士がぶつかり合って、ガチャガチャと五月蠅く耳障りな音を立てていた。

――その中心に瞳を絞る。

左手に洋弓、右手には螺旋剣。

右手に持った螺旋剣を、漆黒の洋弓に番える。

「I am the bone of my sword 体は剣で出来ている」

ライダーの時と同じである。違うのは、狙いを定める必要が無いという事。この距離ならば外す道理はない。

番えた『矢』を引き絞り、放つ。

しかし、ただ矢を当てるだけではこの壁は崩せない。

崩すには———もつと分かりやすい破壊力をもって、真正面

から砕ききる事が手っ取り早いだろう。

ブローケンファンタズム  
『壊れた幻想』。

簡単に言ってしまうえば魔力の詰まった宝具を爆弾として相手にぶつけるものだ。無論、普通の英霊は自分の武器を捨てるような真似はしないため使う事は極稀であるが———俺は己の特性上、その制限から解き放たれる。

放たれた矢は黄金の軌跡を刻みながら壁の中心へと突き進む。

「爆ぜろ」

瞬間、黄金の閃光が網膜を焼いた。

弾ける閃光に溶かされるかのように、奴らの姿が掻き消されていく。遅れて、轟音と爆風が身体を叩いた。

もちろん加減はしている。ここで加減無し『壊れた幻想』を使用してしまうえば屋敷にダメージを与えてしまうし、何よりこの距離では俺もタダでは済まない。

「ふ———」

エネミー達が消滅した今、道を塞ぐものは何も無い。

一直線にキャスターの元まで疾駆し、キャスターの身体の前で交差させるように干将と莫耶を振り下ろした。

キャスターの身体を深々と斬り裂いた確かな手応え。

しかし———

「ちっ、転移による変わり身か」

「っ、上よ!!」

クロの声に弾かれたように顔を上げる。

月を背負うようにして上空に佇むキャスター。

キャスターの用いる神代の魔術はその全てが現代の魔術師には到底扱ふ事の出来ない代物だ。

頭上を取られたのはかなり痛い。

——だが、キャスターの行動は俺の予想と反していた。展開される魔法陣。そこから再び傀儡が召喚され、降り注ぐ。

「なに」

不可解だ。頭上を取ったのならそのまま頭上からキャスター自身が魔力砲なりなんなりで攻撃すればいい。

なのにどうして、わざわざ傀儡を召喚した？

いや、今思えばどうして奴は俺達を直接攻撃せず、傀儡の召喚にずっと専念していたのだろう。

キャスターの技量ならば、ある程度の数の傀儡を召喚しながらの魔術行使ぐらいやってのけるはずだ。

それなのに、何故——

「何か他に目的があるのか？いや、しかし」

俺達を始末する事以上の目的なんてそうそう無い筈だ。

今は考えても仕方が無い。

キャスターが上空へ移動してくれたのならこつちにとつても好都合だ。地上でない以上、邪魔はワイバーンのみとなる。

「いざという時に囲まれたら厄介だ。君は地上のエネミーを出来る限り斬り捨ててくれ。私はキャスターを追撃する」

「分かったわ。けど、また随分な数ね。アイツの魔力は無尽蔵なのかしら」

「幾ら魔力があつた所であんな無駄な使い方をしていては脅威になり得ない。こちらとしては有難いが、やはり解せないな」

「解せないって、何が？」

「いや、何でもない。とにかく、君は降り注いでくる傀儡達を始末していけば良い。くれぐれも無駄だけはするなよ」

「分かってるつで。もう、お兄ちゃんは心配性だなあ。そんなに妹の事が大事？」

「もう兄云々には突つ込まないぞ。私はただ、君達に負傷でもされ

たら困るだけだ。不利益を被るのが私なら、釘を刺しておくのも当然の事だろう」

はいはい、と適当な調子で流すクロに嘆息しつつ、俺は上空を睥む。ローブを猛禽の翼のような形状に変えて飛翔するキャスターは、周囲にワイバーンを召喚して自分を守らせているようだ。その数、70は下るまい。

何体かのワイバーンが一直線にこちらへ向かってくる。

イリヤ達がステッキを構えようとしたが、片手でそれを制した。

「全く、手間をかけさせてくれる。」

先頭のワイバーンに向かって跳躍。

背中に飛び乗るとそのままワイバーンからワイバーンへ、八艘飛びの要領で上空へと跳んでいく。

上空にいる敵ならば弓で撃ち落とせば良い。

しかしキャスターには転移があるため、有効ではない。

だがそれは——転移がくると分かっていたら、何も問題ない事だ。

「トリース、投影、開始」

周囲に剣を20本程投影し、それを一斉に射出する。

狙いはキャスターではなくワイバーン。

ワイバーンが怯んだ事により空いた間隙に身を踊らせ、キャスターに向かって先程と同じように猛然と斬りかかる。

空虚な手応えを無視し、即座に地上を睥んだ。

居た。転移する事が分かればどこに現れるか察することとは難しい事ではない。

夫婦剣によつて断たれた抜け殻を蹴り飛ばし、俺は再び漆黒の洋弓と螺旋剣を投影する。

そしてキャスターに向けて射ろうとして、

「待て。奴は、何処を見ている？」

キャスターは今、この瞬間に自身の命を狙っている俺の事を見ていなかった。迎撃はおろか回避する素振りも見せず、俺の後方をローブに隠れた虚ろな眼差しで見据えている。

俺の後ろには確か——イリヤと美遊が居た筈、だ。

弾かれたように後方に振り返る。

夜空の下。魔法少女の装いに身を包んだイリヤと美遊の姿が視界に映り込む。

——異変はそのまた更に後方。

ただでさえ深く暗い闇が、禍々しく歪む。

『ソレ』は、影のように無音でイリヤへと近付いていった。

空気の揺らぎすらない完璧な奇襲。

イリヤや美遊、それどころかルビーとサファイアですらその『影』の接近に気付いていない。

「くっ——！！」

足元に大剣を投影し、それを足場にして脚が砕けんばかりに強く跳躍する。もはやそれは飛翔に近い速度だ。

イリヤと美遊は唐突に自分達に向かってくる俺に、目を見開いて固まっている。

——夜闇に白の髑髏が嗤う。

その『影』の正体はアサシンだった。

黒く薄汚れた装束から伸びる黒腕は恐ろしく華奢だが、程よく鍛えられている事が窺える。

その、少女の細首ぐらいなら簡単にへし折るであろう黒腕が、イリヤの白い首にあてがわれようとしていた。

「ッ——！！！！」

身体を支配していたのは焰。

身を焦がす熱が、全身の血管を駆け巡る。

俺が今感じている感情、それは間違いなく怒りだった。  
視界で火花が散る。強く噛み締めた歯がギリ、と軋んだ。  
溶けるように流れる視界を置き去りにして、アサシンの手が届くよりも早く疾駆する――

アサシンが猛然と疾駆する俺に反応を示した。

俺を視認した瞬間、イリヤに伸ばそうとしていた手を引っ込めてどこからともなく漆黒の投擲剣を取り出した。

閃く短剣。首元を狙って放たれたその一撃を、俺は最小限の動きだけで回避する。

頬を微かに短剣が掠ったのか、赤い飛沫が虚空に散った。

退避行動を取ろうと虚空を蹴るアサシン。だがそれよりも速く干将がアサシンの瘦身を斬り裂くだろう。

――しかしその寸前、直ぐ近くで何かが揺らいだ。

「あ」

今度はイリヤも気付いた。いや、気付かないはずがない。

なんせ転移したキャスターがイリヤの目の前に出現し、その冷たく白い手をイリヤに向かって伸ばしていたのだから。

「ッ、イリヤ

!!!

奴の狙いはイリヤだ。今度はアサシンを踏み台にして、俺はキャスターに向かって跳躍する。

――いや、キャスターとイリヤの前に割り込む事は既に間に合わない。

ここからならイリヤを先に「きゃっ!」

イリヤの口から小さく悲鳴が上がる。

キャスターの手が触れる直前に、俺がイリヤの身体を抱くようにして受け止めたからだ。

!!  
キヤスターが錫杖を構える。

そして人のものでは無い術式を口ずさみ——零距离から  
魔力砲が散弾の如く撃ち出された。

「っ、ぐ」

「ひゃ」

身体を捻って回避行動を取るが、全弾回避は不可能だ。

高密度の魔力砲が背中を叩く。

甲高い音が耳朶を打ち、身体が大きく軋んだ。

口の中に充満する鉄の味。

しかし、幸い致命傷ではない。

このまま戦闘を続行しても何も

——ヒュン。

空気を裂いて何かが飛翔する音がした。

咄嗟に俺はその音がした方向からイリヤを遠ざけ、代わりに自分の  
身体を滑り込ませる。

トン、という軽い音が立て続けに五度ほど発生した。

発生源は他でもない俺の身体だ。

視線を自身の身体に落とすと右脇腹を中心に、アサシンの投擲剣が  
刺さっているのが見えた。

じわり、じわりと広がっていく鮮烈の赤。

——曲芸は終わりだ、三流」

イリヤを抱いたまま、俺はアサシンに向かって刃を振り下ろす。短  
剣によるダメージは無視した。

虚空に純白の軌跡を描いた莫耶がアサシンの胴体を中心から断ち  
切る。数瞬遅れて、分かれた半身から血のようなドロ黒い液体が溢  
れ出した。

キヤスターが機械的な、冷酷さを孕ませた瞳で俺達の事を見下ろし  
ている。一瞬、俺を睨みつけたと思ったらその姿が蜃気楼に烟るかの

ように掻き消えてしまった。

—— 静寂が訪れる。

まるで、先程までの戦闘が嘘だったかのようだ。

「二人とも、無事!？」

慌てた様子でこちらへ走り寄ってくるクロと美遊。

2人は俺の姿を見た瞬間に息を呑んだ。

イリヤは何が起こったのか分からないという様子で、抱かれたまま呆然と俺の顔を見上げている。

しかし傷が目に入ったのか、

「その、傷」

イリヤの震えた声がすぐ間近で聞こえてきた。

その声に何か反応を返す前に、視界がぐにやりと鉛細工のように歪んだ。出血によるものでは無い。

これは—— 毒、か。

恐らく短剣の先にでも塗られていたのだろう。

睡魔にも似た意識の侵食に飲み込まれていく。

狭窄する視界は既に半分以上が闇の中にあつた。

「全く、迂闊だった、な」

情けない事に、これ以上は意識を保ってられない。

もはや、立っているのか倒れているのかすらも曖昧だ。

「!!!!」

意識を失う寸前、誰かが俺の名前を必死に叫んでいる声だけが聞こえていた。その声に応えることが出来ない事に忸怩たる思いを感じながら—— 泥の底に、沈んでいった。

「—— いつまでも落ち込んでるんじゃないわよ。言ったでしよ、英霊がこの程度の毒で死んじゃう事は無いって」

「武家屋敷のとある一室にイリヤ達は居た。」

「部屋の中心に敷かれた布団をぐるりと囲むようにイリヤ、美遊、ク口は座っている。」

「その布団に寝かされているのは——褐色の肌と白髪を持つ長身の男性だった。」

「髪をオールバックに撫で付けている戦闘時とは違い、今は髪を下ろして赤い外套も外している。」

「額には濡らしたタオルが乗っていて、毒による弊害かその寝顔は少し苦しそうだ。」

「ルビーが投与した解毒剤(?)のおかげで最初よりは顔色も良くなっているものの、未だ全快までは遠そうだ。」

「死なないから落ち込むな、なんて無理に決まってるじゃない。この人はわたしを庇って、こんな事になっちゃったんだよ?」

「だからこそ、でしょう。どうして彼が身を呈してまでアナタを必死に守ったか、分からない? ふん、自分が守った相手にそんな顔をされるぐらいなら彼はアナタの事を守るべきじゃなかったわね」

「ツ」

「ク口、そんな言い方」

「甘やかしてもしょうがないでしょ、ミュ。いい? またわたし達は彼に助けられたのよ。わたし達はアサシンの接近に気付く事が出来なかった。もし彼が助けに来なかったら後ろを取られていたイリヤとミュ。わたしだって、アサシンに殺されていたかもしれない。ここで甘やかす事は誰の得にもならないわ。今わたし達がすべき事は落ち込む事じゃない。彼が戦えない今、どうやってこの屋敷を守っていくか、よ」

「それは痛い程に分かっている。」

「今の自分達は完全に実力不足だった。」

「カルデアに来てから直ぐにこの世界に飛ばされたため、本来なら受けるはずの霊基再臨というものを一度しか受けていない故だ。もち

ろん経験も少ない。あんな混戦になったのは初めての経験だし、あの中を高ランクの気配遮断スキルを持つアサシンの接近に気付けなど無理な話だ。

「イリヤ様を責めるのはその辺に。元はと言えばアサシンの接近に気付かなかったステツキにも責任があります」

「サファイアちゃんの言う通りです。黒化英霊の時も飛んできた短剣にヒヤリとさせられました。今回は段違いでしたねえ。全く気が付きませんでした。今まで戦ってきた英霊が黒化したダウングレード版だつて事を思い知らされましたよ」とほほ」

「いつも通りふざけた口調だが、ルビーなりに事を深刻に受け止めているらしかった。」

「けど、クロさんの言う事ももちろん正解です。このままエミヤさんに頼つてばかりいてはダメですよ？いつどんな時でも彼が傍に居るといふ事はありませんし、何よりエミヤさん自身が壊れちゃいます」

「うん」

「クロの言葉もルビーの言葉もこれ以上無いぐらい正しい。だから——これ以上、彼が傷つく事が無いようイリヤ自身が、しっかりと戦わなくちゃ。」

「イリヤ」

「大丈夫だよ、ミュ。クロやルビーの言う通りだよ。わたしもしっかりしなきゃ。——けど、もう少しだけここに居たいの。この人はわたしを守って傷を負ったんだから、目覚めるまで傍に居るのは当然でしょ？」

「ま、良いんじゃない。タオルの交換係も必要なんだし」

「そう言つて、クロは欠伸を洩らす。」

「時刻は深夜の1時を回ろうとしていて、イリヤも気を抜けば瞼が落ちそうなくらい眠たかった。」

「——つて何してるの、クロ？」

「何って、眠いから寝るんじゃない。それじゃ、タオルの交換係しつかりやんなさいよね、おやすみ♡」

「何でちやつかりお兄・じゃなかつた、エミヤさんの布団に入ろうと

.....  
してるの退きなさい!!」

「ええー良いじゃないの別に。減るもんじやないんだし。というか、さつきアナタも一緒に寝てたじやない。しかも膝枕で」

「う。」

ボン、と音が鳴りそうなぐらい赤面する。

あの出来事は嬉しかったけど恥ずかしくて、あまり思い出したくはなかつたりする。

「クロ、そこまで。あまり騒いでいるとエミヤさんが起きちゃう。念のためルビーが解毒用の薬を投与したけど、安静にしておくに越した事はない」

「はいはい。ミュはお固いなあ、もう」

ちえー、と不満そうに唇を尖らせたクロがもぞもぞと布団の中から這い出して来る。

事実、少しでも彼の表情が苦しそうだったからだろう。

幾らルビーの薬を投与したとはいえ、あれだけ強力な毒を貰ってしまえば苦しそうにしているのも仕方がない。

「それじゃあわたしは部屋に戻るけど、ミュはどうするの?」

「わたしも、ここに居る。アサシンの接近を許してしまったのはわたしの責任でもあるから」

「ミュ。」

「ま、好きにきなさいな。あんまり人が居ても迷惑だろうし、わたしは自分の部屋で大人しくしてますよっ、と」

そう言いながら、クロは部屋の外へと出ていこうとする。

クロは出ていく直前に一瞬だけ彼に視線を向けると、

「.....」  
「全く、寝てる時は素直なのにね」

微笑を浮かべて、そんな言葉を残していった。

やる事は極めて単純だった。時折、額に乗せられた濡れタオルを交換したりタオルで汗を拭き取ったり。

症状はルビー曰く、凄く辛い熱のようなものらしい。  
苦しげな吐息が漏れている。

その声を聞いている度、胸が張り裂けそうだった。

そんな心を落ち着かせるように、わたしは濡れたタオルでそつと汗を拭った。

「サファイア、容態はどう？」

《今が毒のピークと言ったところでしょうか。ここを乗り切つてしまえば問題ないかと》

《マスターがいれば魔術礼装での解毒が可能なんですけどねえ。ま、そこは無理ものねだり。イリヤさん、今出来る事はやりましたし、お休みになられては？》

「ううん。今が一番辛い時なら、尚更傍に居ないと」

イリヤはそう言つて、頬を伝う汗をそつと拭う。

「ミュもその気でいるのか、無言で額のタオルを取り替えていた。」

「少し、落ち着いてきた？」

あれから2時間は経過しただろうか。

苦しげだった表情が僅かに緩和されている。

戦闘から約4時間・流星は英霊、といった所だろう。彼がくらつた毒を考えれば、普通の人間ならこんな短時間での解毒なんて不可能だ。

「良かった」

ミュが心の底から安堵の息を漏らす。

「ミュがここまで自分の気持ちを出すのは珍しい気がする。」

「そういえば、ミュは自分の兄が衛宮士郎お兄ちゃんに良く似ていると言っていた。」

「ひよつとすると、ミュもわたしと同じように自身の兄と彼を重ねているのかもしれない。」

そんな事を考えていると、コテン、と唐突にミュの身体が倒れた。

《おや、流星に限界だったみたいですねえ》

《はい。ゆっくり寝かせておいてあげましょう。イリヤ様はお休みになられなくともよろしいのですか？じき夜明けです。これ以上はお

身体に触るかと》

「うん」

《イリヤさん？心配なのは分かりますけど、それでイリヤさんが倒れてしまつては逆効果も良いところですよ。今日はもうお休みに》

「そう、だね。じゃあ最後にタオルだけ取り替えてから」

「いり、や。？」

彼が、わたしの名前を呼んだ。

わたしは弾かれたように意識は変わらず深く落ちたまま。恐らく、無意識の内に洩れた囁きなのだろう。

伸ばされた彼の手はここに居ない『誰か』を探すかのように畳の上を這っている。

まるで今までそうしてきたとでも言うかのように、わたしと同じ名の少女の事を、探し続けている。

——見て、いられなかった。

張り裂けそうな心が訴える。

放つてなんかおけない。

この人を——救いたい、と。

「ここに、いるよ」

けれど今は、気を紛らせる事しか出来ない。

伸ばされた彼の手に、そつと自分の手を重ねた。

——たくさんの見えない傷を負った手。

傷付いて、傷付いて、傷付いて。

それでも剣を握る事を止めなかった彼の人生。

その果てに得たものが、この手だったとしたら。

「」

それは、なんて——悲しい事なんだろう。

「つぐ」

泥の底から浮上する。覚醒直後、真つ先に感じたのは鉛のように重い倦怠感だった。

ずきん、と軋むこめかみ。どくん、どくん、どくんと心臓の鼓動が五月蠅く響く。

全身を伝つていく汗が気持ち悪い。

魔力の循環にも不純が見られ、明らかに異常だった。

靄がかつた頭で何があつたのか、記憶を反芻する。

「つ、そうか。そうだったな。私はアサシンの短剣をくらって、そのまま――」

そう、倒れたのだ。イリヤを庇つて通常の人間ならば充分致死量足り得る毒が塗られた短剣を受けた俺はそのまま地面に倒れた。その後の記憶は混濁していて確かではないが、どうやら悪運強く生き残つたらしい。

布団に身体を横たえたまま自身の身体の容態を観察する。

「つ、これは。完全に毒が抜けきるまで少々かかりそうだな。何か投与されたのか。解毒の速度自体はかなり早いが、アサシンの毒がそれ程強力だったという事か。全く、去り際だというのに余計な真似をしてくれたな」

「何をとぼけた事を。イリヤを庇うという余計な真似をしたのは、俺自身だというのに。」

「彼女達は、無事なのか？」

「重い上体を無理に起こし、立ち上がろうとする。」

「すると、何か白いものがパタリと布団に落ちた。」

「拾い上げてみると、それは微かに湿ったタオルだった。」

「どうやら俺の額に乗っていたものらしい。」

「何だこれは？と不思議に思っていると――」

「今度は君もか、美遊」

「狭い畳み張りの室内で、2人の少女が寝息を立てていた。」

「イリヤと美遊。イリヤは俺の直ぐ真横で。美遊は僅かに離れた畳」

の上で眠っていた。

「その近くには玩具みたいなステッキが無造作に転がっている。どうやらステッキも眠っているらしい。」

「ステッキの機能に睡眠まで組み込まれているとは、流石はキシユアのご老体が作った魔術礼装と言ったところか。」

「時刻は10時か。完全に寝坊だな」

「——一本ですら致死量を余裕に超える毒を五本もくらつて、その程度で済む方がおかしいってば。おはよ、お兄ちゃん。起きたら妹が三人も周りに侍っているという妹ハーレムものの感想はいかがかしら？」

「いつの間に部屋へ入ってきていたのだろう。」

クスリ、と歳不相応の妖艶な笑みを浮かべたクロは、寝間着のままこちらへと近付いてきた。

「ふむ、それではお言葉に甘えてレビュを述べさせて貰おう。私からは一つだけ。こうなる前に止めてくれると助かる、とカスタマーセンターに伝えておいてくれ」

「む、意外とノリが良い反応。『私は君の兄ではない(キリツ)』みたいな感じで素っ気なく否定するかと思っただのに」

「君にそれを言っても無駄だというぐらい、いい加減にこちらも学習するさ」

「あら残念。アナタの困った顔、結構好きなんだけどなあ。ふふ、それじゃあアナタが困りそうな事、してみる？」

「ちろり、と小さく赤い舌が唇を舐める。」

「蠱惑的なセリフと共にクロは四つん這いで部屋を縦断すると、クロは上体を起こしていた俺を押し倒した。」

「とす、と背中から布団に落ちる。」

「クロは俺の腹辺りにまたがり、布団に両手を着くと嗜虐的な笑みを浮かべてそのまま顔を近付けてきた。」

「唾液で湿った赤い唇が艶かしく光る。」

「トロン、と蕩けた瞳が妖しく揺らいで俺を見ていた。」

「はだけた寝間着から覗く褐色の肌に目を奪われる。」

鎖骨から胸元にかけてのラインは芸術として賛美されてもおかしくないぐらい美しく、服を内側から極僅かに押し上げる2つの膨らみが悩ましい。

熱っぽく甘い吐息が首筋にかかる。

甘い香りが鼻腔を漂っている。

無抵抗の俺に気を良くしたのか、クロは髪の毛を耳にかけると、半開きになった蕾を思わせる唇を近付けてきた。

その仕草の艶めかしさが、彼女の本来の年齢を霞ませる。

普通の男性ならば、そういった趣味が無くとも籠絡されてしまいそうな危うさと艶めかしさ。

——— 全く、こんな手練手管をどこで身に付けたのかは知ら

ないが

「あつ」

クロが短く悲鳴を上げる。

それもそのはずだ。先程まで組み敷いていたはずの俺に逆に押し倒されれば驚くのも無理はない。

「大人をからかうのも良いが、少々やり過ぎだったな、クロエ。いつまでも私が我慢しているとでも思ったか？」

「な、なな、何をするつもり!?!」

「今更何を言う。君から誘ってきたのだろう？」

私を困らせる、か。なるほど、確かに君は狙い通りに私を困らせた訳だ。では、潔くその責任を取って貰うとしよう」

「ふえ・ひゃ!?!」

クロの寝間着に手をかける。

ぴくん、と身体を反らせ、俺の手から逃れようとするクロ。しかし残念ながら逃げ場は無い。

「や、やめ・んっ!」

クロの寝間着のボタンを一つ外す。先程は微かに覗いていただけの美しい鎖骨が顕になる。切羽詰まったような様子のクロは、余裕のない表情で俺の事を睨みつけた。

「ちよ、ちよっと待って、さっきのは冗談で———」

！  
そんな言葉なんてお構い無しに、俺はクロへと顔を近付けていく。  
咄嗟にクロは目を瞑った。

内股に閉じた足は生まれたての子鹿のように震えていて、これから行われるであろう行為に対しての恐怖が窺える。

その表情を見た俺は満足そうに頷き、クロの顎に手を添えた。

「っ」

クロが、いつそう身体を固まらせた。

閉じていた瞼によりいつそう力を込める。

抵抗が無いことをこれ幸いと、俺はクロの身体に自身の身体を重ね

デコピンというやつである。バチン、と思いつきり額を指で弾いた。いわゆる、

「いったあ!?!」

いきなりの暴挙にクロが目を剥いた。

赤くなっている額を手で押さえて見悶えるクロを憮然と見下ろし、

「少しは落ち着いたかね?これに懲りたら二度と異性に対してこうい

う手は使わない事だ。仮に誘惑した相手が本気にしてしまった場合、

実は冗談でした、では済まされぬぞ。もつと自分の身を大事にした

まえ」

「まえ」

憮然とした態度でそう告げる。

—— 実際、あの妖艶さでクロに迫られた男性は例えそつち

の気がなくても引き込まれてしまうだろう。

「ここはクロエの為にもビシッと躡が必要だ。

「うう、まさかこんな乱暴に押し倒されるなんて—— もうお

嫁に行けない」

「先に仕掛けてきたのは君だろう。とにかく、そういつたハニート

ラップはせめてもう少し成長してからにしたまえ。くれぐれも大人

をからかい過ぎないよう、注意しておくんだな」

「ふぬぬ」

悔しそうに唸りながら、クロが部屋から出て行くこうとする。

去り際に、

「けどああやって責められるのも、悪くはなかったかも。って何

言ってるのわたしっ!!」

俺には聞こえないぐらい小さな声で、クロはそんな事を口にしていて。ピシヤリ!!と勢いよく障子が閉まる。

「んみゅ あれ」

「ん、ここは」

障子を閉める音で目を覚ましてしまったのか、イリヤと美遊が上体を起こして不思議そうに辺りを見渡していた。

しかししばらくして昨日の記憶が蘇ってきたのか、僅かに頬を朱に染めてお互い顔を見合わせていた。

「済まない、起こしてしまっただな」

「い、いえ!大丈夫です!お兄・エミヤ、さんの部屋で寝ちゃってたのはわたし達だから」

あたふたと慌てふためきながらイリヤはそう言った。

実際に起こしたのはクロなのだが、それを話すとややこしくなるのでここは割愛しておこう。

「あの・怪我の方は、大丈夫ですか?」

美遊が心配そうに問いかける。

イリヤの表情が明らかに強ばった。

嘘についても仕方あるまい。ここは素直に今の現状を伝えておくべきだろう。

「そうだな。元より怪我は大した事ないのだが、毒の効果は未だかなり残っている。歩いたり多少なら走る事も出来るだろうが、少なくとも今日一日は戦闘はかなり厳しそうだ。魔術回路に少々ダメージが発生しているからな。投影魔術の質も行使速度も遅くなっていて上に身体も満足に動かせないとあつては、劣化した英霊と俺の手には負えまい」

イリヤと美遊が沈黙する。容態としてはそこまで酷い訳では無い。ただ一日戦闘が難しくなるだけだ。そこまで表情を暗くする必要なんてないのだが――

「その、ごめんさい。わたしがアサシンに狙われていた事に気が付かなかったから、お兄・エミヤさんはそんな怪我を負っちゃったんだ

「よね」

「わたしも同じです。イリヤのすぐ傍にいなながら、アサシンの接近に気が付くことが出来なかったから」

「なるほど。イリヤと美遊が先程から気まずそうにしていたのはそういう理由か。」

「しかし——」

「このタイミングでこんな事を言ってもただの慰めに聞こえるかもしれないが、君達に落ち度は無いよ。」

アサシンの気配遮断は完璧だった。しかも初めは霊体化していたして君達の背後に回っていたみたいだからな。どうあっても気付く事など出来なかったさ。私はキャスターの視線が後方に向いていたから気が付けたが、それでもなければ気付く事など出来なかった。——

長くなってしまったが、要約すると君達が気負う必要などない、という事さ。これは単にアサシンの短剣を弾けなかった私のミスだよ」

「で、でも貴方はわたしを庇って……それで——」

「……?」

あの時の事は……じつはあまり覚えていない。

イリヤに危険が迫っている。その事だけが頭を巡って、気付いたら身体が動いていたのだ。

「——でも、少しだけ嬉しかったです」

「む、嬉しかった」

イリヤは妙な事を言う。あの状況でイリヤが喜ぶような何かがあったのだろうか？

心当たりがない故、俺は疑問符を浮かべる。

するとイリヤははにかむように笑いながら、

「名前……イリヤって、呼んでくれたから」

「……な」

そんな事——言つてない、よな？

予想外の言葉に俺は分かり易く狼狽する。

きつと今の俺はさぞかし間抜けな面を浮かべているに違いない。

いつも気になってたんだ。みんなイリヤって呼んでくれるのにお兄

エミヤさんだけイリヤスフィールって他人行儀な呼び方なんでも

ん。

イリヤは拗ねたように頬を膨らませ、そんな事を口にした。

「た、他人行儀も何も無いだろう。君をそんなふうと呼べる程我々は

気安い関係ではあるまい。いや、そもそもれっきとした他人なのだから

この呼び方が一番——」

「むー」

「なんだ、その不満げな表情は——」

「イリヤはイリヤスフィールって呼ばれるのが嫌、なの？」

美遊の問いに、イリヤは少し言葉を詰まらせた。

所在なさそうに頬を掻き、

「い、嫌つて訳じゃないけど、でも、やつぱりなんか落ち着かないって

いうか、こう、胸の辺りがモヤモヤする感じがするの」

「だから君の名をそう呼べど？悪いがそれは聞けない相談だな。大人

しくイリヤスフィールと呼ばれているがいい」

「むう」

「膨れっ面をしても無駄だ」

つつけんどんな態度で言い返す。

すると寝ていたと思っていたルビーがガバツ!!と勢いよく起き上

がり、

《イリヤさんイリヤさん》

「うわっ！な、なにルビー」

《ちよおっとお耳をお貸し下さいな♪》

怪しい笑顔を浮かべている（顔が見えないため雰囲気なのだが）ル

ビーに訝しげな表情を浮かべるものの、イリヤは素直に耳を差し出し

た。

「え、う、うん。恥ずかしいけど、やってみる！」

イリヤが真剣な面持ちで歩み寄ってきた。  
ぽす、と俺のすぐ傍に正座し、顔を俯かせる。

耳と頬が微かに朱に染まっている。

美遊と視線が合い、共に首を傾げた。

ルビーが何を吹き込んだのかは知らないが、多分ロクな事にはならないだろう。

止めるべきか、そのままにしておくべきか。悩んでいると不意にイリヤが顔を上げて、

「お兄ちゃん、わたしじゃ、ダメかな？」

「ぶっ!!」

上目遣い＋潤んだ瞳＋羞恥に赤く染まった頬、だと!?

なんて破壊力だ。バスターアップ50%なんてレベルじゃない。

これはきつと、どこぞの花の魔術師が「王の話はみんな聞き飽きただろう?よし、それじゃあ妹の話をしよう」みたいな感じでバスター性能が底上げされているに違いない。

物理で殴るだけが戦いじゃない、とは孔明の言だったか。

見れば美遊もその『お願い』にくらり、と来ているようだった。

「そ、そんな風にお願ひされたとしてもダメなものはダメだ」

「あ、あんなに恥ずかしい事したのにダメだったじゃないルビー!!」

《もう一押し!もう一押しですよイリヤさん!あと少して攻略完了です!》

流石にこれ以上はころつとOKを出してしまいそうなので制止を促す。暫くの間拗ねたように頬を膨らませていたイリヤだったが不意に、

「じゃあ、わたしが呼び方を変えたい」

「君が、だと」

予想外の申し出に眉根をひそめる。

「イリヤが俺の呼び方を変えるといふ事なのだろうが、そんな事をして何の意味があるのだろう。」

これまでの彼女は確か美遊と同じでエミヤさん、ときこち無い様子

ながら呼んでいたか。

「念のため先に釘を刺しておくが、クロエみたいな呼び方は無しの方  
向で頼むぞ。彼女は前回訂正を促しても聞きやしないからもう放っ  
ておいているが、そもそもどうして呼び名を変える必要が？」

「その、エミヤさんって呼ぶの凄いな変な感じがして、落ち着かないから  
」

「イリヤはもじもじと言わずらそうに口ごもらせた。」

「どうやらその呼び方だとイリヤにとって何か不都合があるらしい。  
イリヤは暫くそうして自身の心と葛藤していた。中々その一步を踏  
み出せないイリヤを美遊が不安そうに見詰めている。そして、

「だから——お兄さんって、呼んでも良いかな？」

「」

「お兄ちゃん、とあまり変わらない響き。」

「しかし、不思議とそう呼ばれる事に抵抗はなかった。」

「それどころかすんなりと胸の辺りに落ちて、妙に納得出来る呼び方  
だった。」

「——もしかしたら俺もイリヤと同じで、エミヤさん、なん  
ていう他人行儀な呼ばれ方が気に食わなかったのかもしれない。」

「ダメ、ですか？」

「今度は懇願するような声だった。」

「恐る恐るといった様子で俺の返事を待っている。」

「——はあ、もう良い。好きにしたまえ」

「我ながら、あまりにも中途半端で矛盾だらけだと思う。」

「彼女をイリヤと呼ぶ事に抵抗があつて、

「イリヤにお兄ちゃんと呼ばれる事にも抵抗があつて、エミヤさんな  
どという他人行儀な呼び方にも抵抗がある。」

「だというのに意味合いも響きも似通ったその言葉は、すんなりと受  
け入れてしまった。」

「こうなつてしまえば、彼女にどう接して欲しいのか、自分でも良く

分からない。

——ただ、その曖昧さがまた俺達らしい。

平行世界という壁に隔てられた兄妹。

それは、他人だからと言って簡単に切り捨てられるほど単純なものじゃない。

屈折してて、複雑で、曖昧な糸。しかし、その呼び方を受け入れてしまった理由だけはあまりにも単純だった。

他人でもなく兄妹でもない、曖昧な関係——お兄さん、という呼び方がそれを如実に表していたのだ。

「うん！よろしくね、お兄さん！」

こんな些末な事に、イリヤは本当に嬉しそうに花のような笑顔を綻ばせていた。

穏やかな午後を奏でる暖かな陽射し。

その優しい光が——俺には眩しくて、目に痛かった。

あれから3日が経過した。特に何の成果も無い3日間だったが、別段不満は無かったと思う。しかし——

「——こんばんは、シロウ」

銀色の少女は、突如俺をその名で呼んだ。

思えば、それが本当の意味での始まり。

俺が向き合うべきだった『闇』との対峙だった。

——さあ、昔話を始めよう。

第五次聖杯戦争。今の俺を形作るきつかけ足り得た、運命の戦いについての昔話を。

## 第五節 『揺籃の銀雪』 ※前書き要参照

漣のような喧騒に包まれる。人々が奏でるざわめきをBGMに、俺達4人は夕飯の買い出しに赴いていた。

何故4人なのかは理由があり、この前のような大軍で襲われる危険性を考慮しての事だった。

ここが何者かによって作られた街だというのなら、敵もなりふり構わず襲いかかってくる可能性も捨てきれない。

——と、ここまではただの理由付け。

単に俺の買い物にイリヤ達が付いて行きたいと言って聞かなかつただけなのだった。

とはいえ、その理由付けに過ぎない警戒もあながち杞憂とは言えないものだ。

何故なら敵の『目的』は

「むむむ お兄さん、これとこれどっちが良いかな？」

イリヤの声で、思考が寸断される。

イリヤが差し出してきたのは玉ねぎだった。

右手と左手に寄せられたそれのうち、どっちを買えばいいのか判別してくれという事らしい。

「左、だな。そっちの方が身が締まっていそうだ」

「はーい。ってそういうえば今までお会計とかどうしてたの？カルデアからお金なんて持ってきてなかったよね？」

「む。そういうえば言っていなかったな。少々非合法的なやり方ではあるのだが。——トレイス 投影、オン 開始」

右手に現れたのは燦然たる某フクザワ。

俗に1万円と呼ばれる日本の紙幣の1つである。

——本来なら御法度だがこの際仕方あるまい。

現状、資金稼ぎを地道に行える程の余裕は無いのだから。

「お兄さん。それって普通に犯罪だよな？」

「ごほん。さあ、さっさと買い物を買って済ませてしまおう。店主には後で

これまた投影した良く切れる包丁を送り付けておくからそれで  
「もう」

イリヤは俺の困り顔を見て呆れたように、しかしどこか嬉しそうにする。あの日から3日経つ。

随分と彼女との距離感も変わったものだ。

イリヤはお兄さん、という呼び方に変えてから枷が外れたように気負う事無く俺に接するようになった。

今までのようにどこか緊張した面持ちではなく、屈託のない笑顔を俺に向けている。

——そんな関係の変化を、悪くないと思っている自分がいた。それが良い事なのか悪い事なのか、未だに曖昧で、分からない。「お兄さん、こっちの買い物は済ませておきました。あと買う物って何かありますか?」

美遊の声に顔を上げた。美遊は精肉店のものと思わしき大きな買い物袋を2つ、手に下げている。

「いや、大丈夫だ。これだけあればしばらくはもつだろう。手間を取らせて済まなかったな」

そう言っただけで袋を受け取ろうとしたのだが、

「このくらいなら、平気です。お兄さんは日頃働き過ぎなんですからこういう時ぐらいいは任せてください」

「む・しかし」

「好きにしてあげたら? こうなるとこの子、意外とガンコよ」

右手にたい焼きを持ったクロが口をもぐもぐと動かしながらそう言った。少々早いおやつという事だろう。

「仕方ない。そういう事なら任せよう」

「はい」

向日葵を思わせる笑顔だった。感情の起伏に乏しいと思っていた美遊だが、そんな印象は完全に払拭されている。

少し感情表現が不器用だけど、笑顔が素敵な普通の子だ。

「じゃあそっちはわたしが持つ!」

俺が持っていたスーパールの袋をイリヤがかっさらう。

美遊にも持つて貰っている訳だし断る理由はない。

「それは良いが、結構重いぞ。持てるか？」

「もう、お兄さん心配し過ぎー。これぐらい大丈夫だつて！」

何が嬉しいのか、イリヤは花がほころぶような笑顔を見せる。イリヤも美遊も足取りは跳ぶように軽く、楽しげだ。

そんな様子見て、嘆息混じりに俺は歩きだす。

——とは言え。その嘆息にさえ笑みのようなものが浮かんでいたのだから、俺も人の事は言えないのだが。

屋敷までの道程を行く。

緩やかな下り坂を下りながら、ふと遠くを見詰めた。

今日は僅かに曇り空で、雲間からヴェールのような薄く、淡い陽射しが街に降り注いでいる。

この光景だけはいつも変わらない。

ここが何者かの手によって投影されたものだと言われても、信じられないぐらいに。

「お兄さん、また難しそうな顔してる」

そう言つて、イリヤが心配そうに顔を覗き込んできた。

相変わらずそういうことには鋭い少女だ。

「ああ、少し考え事をしていた」

「考え事？」

「カルデアから離れて5日だからな。そろそろ帰還の手がかりを何か掴まなければ、とね。満身に戦闘が出来るまで回復するのにかかりかかってしまったのが痛かったか」

「そっか。カルデアに帰らなきゃいけないんだつたよね、わたし達」

「イリヤの言い回しは妙だった。まるで、カルデアに帰るとい第一の目標を忘れてるかのような」

「その疑問を汲み取ったのはクロだった」

「はあ、相変わらずイリヤったら能天気ね。それ、一番の優先事項でしよ？」

「あーうん。それは分かっているんだけど」

イリヤはどこか躊躇いがちに、

「今がすつごく楽しくて、同時に怖いんだ。理由とか根拠とかは無いんだけど——カルデアに戻ったら、今みたいな生活が終わっちゃう気がしたから」

「カルデアに戻ればこの生活が終わる。」

それは——少なからず全員が感じていた事だろう。

この生活が決して叶うはずの無かった『夢』だ、この場に居る全員が知っている。

夢が夢ならば醒めるのもまた道理だ。

それがどんな形であれ終わりは来てしまう。

だから、イリヤの言葉になんと応えていいか分からなかった。安易に大丈夫だ、なんて言えるはずもない。

「あはは、変だよ。カルデアに戻ってもミュウクロ、そしてお兄さん達がすぐ傍に居るのにこんな事考えちゃうなんて」

冗談めかした笑いは、しかし空元気なものだと分かってしまう。遅かれ早かれ、それは避けようが無いものだ。

「ああ、確かにカルデアに帰ればこんな時間は取れなくなるだろうな。しかし、君も言っただろう。別に誰かが消える訳では無い。そうだな、私のマイルームに来たら茶の1つぐらいは馳走してやるさ」

その場凌ぎにしか聞こえない言葉。それでもイリヤは嬉しそうに、

「うん、楽しみにしてるね！」

花のような笑顔で、そう口にした。

そして、異変はその日の夜に起こった。

夜の帳が降りた廊下に行く。

頭上には病的なまでに白い月。

不吉な輝きは、どこことなく人間の白骨に似ていた。

湯で火照った体に、頬や首筋を撫でる風が心地よい。

虫の声1つしない、静かな夜だった。

こんな夜には思い出してしまう。

あの夜。白く淡い月の光の下で、俺は誓った。

1つ目の誓いは1人の男に。

正義の味方を目指すと志した、運命の夜。

そして、もう1つは――

「む」

ふと、足を止めた。廊下に美遊とクロが居たのだ。

それだけなら未だ気になる程ではないのだが、浮かべているその表情が穏やかじゃない。

しきりに居間を覗き込んで、難しそうに首を傾げている。

「何かあったのか、二人とも」

「お兄さん遅い!!大変なのよ、イリヤが」

「た、大変なんですお兄さん。イリヤが」

2人は随分と慌てた様子だった。

どうやらイリヤに関する事らしいが居間で何か起こったのだからか。

「一体何が――」

障子に手をかけてガラガラと開け放つ。

瞬間、視界に映り込んだのはイリヤだった。

そう、何の変哲もないイリヤ。

俺が投影したパジャマに身を包んだ彼女は、いつもと同じように、笑顔と共にこちらへ向き直り――

「――こんばんわ、シロウ」

雪のような淡い笑顔と共に、イリヤはそう言った。

呼吸が止まる。今の俺は、大層間拔けな表情で固まっているに違い

ない。目の前に座する人物は確かにイリヤだ。

しかし目の前の人物がいつさつきまで接していたイリヤとは根本的に異なる存在である、と俺の中の何かが告げていた。

言葉にするのなら纏う雰囲気だろうか。

それが決定的にイリヤのそれと異なる。

——そしてもう一つ。目の前の少女は俺の事をシロウ、と呼んだ。それが意味するところは

「君は、一体——」

「あれ、未だ分からない？それとも分からないふりをしているのかしら？」

クスクスと、目の前の少女は笑う。

楽しそうに。しかしどこか冷たい声で。

その笑顔を知っている。その声を知っている。だが、それは絶対に有り得ない事だ。

「姿形だけならイリヤスフィールそのものだな。似ているんじゃない。そのものだ。イリヤスフィールの身体に憑依していると見たが、目的は何だ？」

「ふふ、本当はわたしが誰なのか分かっているのに動揺しちゃって、シロウったら可愛いなあ」

「眼光に力を込める。それぐらいじゃ動じないだろうが、さつきと先を促させるには効果的だろう。」

「思惑通り、イリヤはからかうような笑みを消して冷たく、しかし同時にほんの少しだけ寂しそうな表情に戻る。」

「ま、今のアナタをからかっても面白くないわね。目的が何かだったわね。良いわ、答えてあげる。けどその前に」

「イリヤに憑依している何者かは廊下で俺達のやり取りを不安そうに見ていたクロと美遊に笑みを向ける。」

「アナタ達も入ってきなさい。——アナタ達にも関係の無い話じゃないもの」

その申し出にクロと美遊は顔を見合わせる。

しかし関係の無い話じゃない、と言われて決心がついたのか居間へと入って来た。

少女は満足そうに顔を綻ばせると、食事の時にイリヤがいつも座っている場所に腰を下ろした。

俺達もそれに倣って、いつもの席へと移動した。

「さて、まずは自己紹介からさせて貰うね。」

「わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。聖杯戦争の『器』として産み出され、そのように育てられた、憐れな人形よ」

「」

水を打ったような静寂が居間を支配する。

クロと美遊はその少女の言葉に啞然としていた。

「……?」

「目の前の少女は間違いなく、イリヤなのだ。」

「だが、そんな事が有り得る訳が無い。」

「だってイリヤは」

「い、りや」

「そうよ、クロエ。アナタなら分かるでしょう? イリヤという少女が本来歩むはずだった未来がどんなものか」

「聖杯の器、じゃあアナタは、パパとママがアインツベルンから出奔する事が無かった世界のイリヤという事?」

クロの言葉を肯定するようにイリヤは淡く微笑んだ。

それを見たクロは僅かに視線を俯かせる。

「聖杯の器として育てられたイリヤがどんな人生を送る事になるのか、分かっていたからだろう。」

「自己紹介はこれで終わり。わたしの事なんて知ってもあまり意味は

無いもの。重要なのはアナタよ、シロウ」

「私が君の目的とやらに重要なピースだとしても？残念ながらそんな大層な役目を任される記憶は無い。何せ私は君の目的が何かすら知らないのですね」

「もうひねくれてるんだから。まあ、良いわ。回りくどいのはわたしもあまり好きじゃないし、本題に入りましょう。だけどその前に――」

少女は立ち上がり、俺へ小さく華奢な手を伸ばす。

警戒にその手を跳ね除けようとしたが、出来なかった。

少女が何かをしたんじゃない。

ただその手を、拒む事が出来なかっただけの事。

少女は俺の額に軽く手を触れさせてから、

「己の過去と対峙しなさい。」

アナタが『彼』を止めるといふのなら、その覚悟をわたしに示して」

ぐにやり、と世界が飴細工のように歪む。

畳の感覚が消えて、辺りは漆黒に包まれる。

それは落下の感覚に似ていた。

身体が、精神が、時間が、どこまでも落ちていく。

例えるなら、織られたリボンを徐々に1本の糸へと解いていく作業だろうか。

きつと、自己への埋没とはそういうものなのだろう。ど

ぷん、と粘液質な何かに包まれる。

漆黒だった世界に誘蛾灯のような炎が灯った。

ジジと微かに雑音が混じる。

時代錯誤な映写機を回しているかのようなその音は徐々に大きくなって――

——12月24日。俺は彼女に出会った。

今年はホワイトクリスマスになる、という何処ぞのテレビ番組の報道通りにここ冬木市は近年稀に見るほど多くの雪が降っていた。

元々温暖な気候が特徴なので、雪が降っても積もらない事が多いのだがどうやら今年は別らしい。

今日はクリスマス・イブ。恋人達にとっては特別な日、子供達にとつてはクリスマスプレゼントが楽しみな日、人によつては恨めしい日。と様々な捉え方が出来る日な訳だが、俺——衛宮士郎はどうなのかと言ふとぶつちやけ、ただいつもよりちよつと豪華なものを食べてからケーキを食べる日、だった。

何とも現金で即物的な考え方だが仕方あるまい。

とは言え、今年は少しばかり賑やかな事になりそうだった。

いつもご飯を作りに来てくれる桜がクリスマスパーティーに参加するため、俺と藤ねえを加えた3人だけが2人よりは賑やかなものになると思う。

だから今年は例年以上に腕によりをかけてクリスマスディナーを作ろうと思っていたのだが

「まさか、二人とも急に来れなくなるなんてなあ。」

藤ねえは生徒の問題行動で警察署に、桜は例によつて慎二に呼び出しをくらってしまったらしい。

「はあ。日持ちさせるのは難しいしこの量をどうやって処理したもんか。」

全部作り終える前に連絡が来たため当初の予定よりは量が少ないのだが大の大人2人分ぐらいはある。

当然ながら俺1人で処理出来る量ではなく——

「一成でも呼ぶか。いや待て。イエスの生誕祭に寺の息子が行くのつて大丈夫なのかな?」

昨今の日本ではその意味合いが失われているものの、寺の息子である一成がそれを雑に扱う事はしないだろう。

断る事に気を遣わせては悪いので一成は泣く泣く除外だ。

となると、後残っているのは――

「む・ダメだ、思い浮かばない」

クリスマスに呼べるような知り合いはもう居ない気がする。

さて、どうしたものか――

「ん？」

ピンポン、というどこか間の抜けたインターホンの音が聞こえてきた。誰か来たのだろうか？しかしクリスマスかつこの雪の中、誰がこの屋敷に訪れるというのだろう。

「もしかして、桜かな。藤ねえだとインターホン押さずに入ってくるだろうし。いや、けど桜には合鍵渡してるんだし普通にやってくるよな」

首を傾げていると、もう一度インターホンが鳴った。

間違いない。これは藤ねえでも桜でも無さそうだ。

兎にも角にも客が来ているのだから出るとしよう。

扉の前まで移動し、硝子張りのそれをガラガラと開ける。

「っ」

雪が混じった冷たい風が身体を叩く。

思わず俺は目を細めると――

「あ、ようやく出てきた。もう、レディをこんな雪の中で待たせるなんてダメなんだからね」

聞いた事のない、女の子の声がした。

驚きに、細めていた双眸を開く。

――雪の妖精。

俺が真っ先に抱いた印象がそれだった。

処女雪を彷彿とさせる白い肌。

肩口から流れる銀色の髪は自ら発光しているかの如く煌びやか、だが同時に最高峰の銀そのものを梳ったかのように繊細優美であり、幼

げな少女の華奢な体軀は儂げで、今にも折れてしまいそうぐらい華奢だった。

呼吸すら忘れて固まる俺の瞳と、見知らぬ少女のルビーの輝きを彷彿とさせる瞳が交錯する。

ぞくり、と。

背筋が泡立つような感覚が走った。

浮かべる笑みは無邪気な少女そのものなのに、その奥に潜むものは氷の如き冷たさ。

可憐さと残酷さが隣合っている様は酷く危い何かを感じさせた。

「え、と。君は？」

たつぷり5秒ほど放心してから、月並みの問いを投げた。

少女はクスリ、と今度は妖艶な笑みを浮かべ、スカートの手端を掴み踊るような優雅さで一礼する。

「それじゃあ。改めて。

こんばんわ、お兄ちゃん。わたしはイリヤ。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

それが、彼女との初めての邂逅。

雪が降る夜。まるでその雪に、魅入られたかのように。

「お、お兄ちゃん？」

優美な自己紹介の末、出たのは大変陳腐な疑問だった。

長い名前だなーとか育ちが良さそうだなーとかもつと思う事はありそうなもののだが、お兄ちゃんという一言があまりにも印象的で、思わず口を突いて出たのだった。

「うん、お兄ちゃん」

「その、何でお兄ちゃん？」

質問の意味が分からなかったのかキョトン、と可愛らしく首を傾げる少女に「いや、何でもなし」と首を振る。

「それでえっと、イリヤスフィール、だっけ？何か用事でもあるのかな？」

ハロウィンと違ってクリスマスは他人の家にお菓子を貰いに行くという習わしは無かったはずだが、この少女はこんな所まで何をしに来たんだろうか。

「ううん、今日は挨拶しに来ただけ。本当はあと1ヶ月と少しは我慢しなきゃいけないんだけど、まだお兄ちゃんはマスターになってないんだし、挨拶ぐらいなら良いでしょ？」

「挨拶しに来ただけって、こんな雪の中をか？」

マスターがどうか言っていたがあんまり気にはならず、俺は目の前の少女の身だけを案じていた。

こんなに幼い子供がこの雪の中を歩いてここまで来たというのだから当然の事だろう。

「わたしの国の雪に比べたら、このぐらい何ともないわ。」

この国——とりわけこの街は暖かいもの」

ふむ。確かにこの街は温暖な気候が特徴だ。

しかしそんな街も今日に限っては色彩を変えている。

例年稀に見る豪雪が生み出したのはホワイトクリスマスなんていうロマンチックなものだけではなく、尋常ではない寒気なのだから。

それに——

「親はどうしたんだ？クリスマス夜なんか外を散歩させるなんて

「親は、居ないわ。とつくの昔に死んじゃったもの」

どこか寂しそうに、少女はそんな言葉を口にした。

——その言葉で、この少女をこのままにしてはおけない、と。そう思った。

自分と重ねていた訳では無い、と思う。

ただその寂しそうな笑顔が、胸に痛かったのだ。

「よし」

だから自然と、その言葉が出た。

「なあ、イリヤスフィール。君が良かったらなんだが、ここで夕飯でも食べていけないか？」

「え？」

少女は俺の申し出に目を丸くする。

当然の反応だと思う。

今日会ったばかりの男に家で飯食ってくか？と聞かれてノータイムでOKするような子だったら色々心配だ。

「もちろん自分の用事とかもあるだろうし、無理だったら遠慮なく断って良いぞ」

「え、いや？ そうじゃなくて、なんで？」

「えっと、ここまで挨拶しに来てくれた御礼みたいなもんかな。イリヤスフィールに差し支えがないのなら、是非ご馳走になってくれ。それに――」

「それに――」

「今日、ちよつと色々あつて俺ひとりぼっちだからさ。」

「クリスマスディナーなんて、1人で食べてもつまらないだろ？」

「――」

彼女は、視線を彷徨わせて逡巡する。

やがて顔を上げると――

「うん。じゃあ、お邪魔させてもらう、ね？」

寒さのせいなのか、少しばかり顔を赤らめてそう答えた。

● 食事の準備自体はあまり時間はかからなかった。

殆ど作り終えていた料理達を熱過ぎない程度に加熱し、それを皿に盛り付けて完成だ。

昔ながらの日本家屋を興味深そうに観察するイリヤを微笑ましく思いながら、俺は料理をテーブルへと運んだ。

茶色の簡素なテーブルにクリスマスの雰囲気合わせた、色彩豊かな料理達が並んでいる。

我ながら、中々の自信作だ。

「わあ」

「結構美味そうだろう？あんまり藤ねえが楽しみにするもんだから腕によりをかけて作ったんだ。」

——まあ、そのせいで作り過ぎちまったし結果として藤ねえは食べれずじまいなだけだよ。

とにかく、じゃんじゃん食べちゃってくれて良いぞ。どう足掻いても俺一人じゃ食べ切れない」

「うん。お兄ちゃんはお料理上手なんだねっ」

嬉しそうにぴよんぴよん跳びはねるイリヤに口元を緩ませながら、俺は畳の上に腰を下ろした。

「あはは、周りの大人がそういう事に関しては頼りなかったからな。自分で何とかするしかなかったんだ。よし、これで準備は完成だ。冷める前に食べちまおう」

エプロンを外して傍らに置き、テーブルに着く。

あまり座敷に慣れていないのか、僅かに窮屈そうにしながらもイリヤは畳の上に正座で座っていた。

「それじゃあ———頂きます」

「い、頂きます」

イリヤは、緊張した様子でフォークを握る。

チラチラと、許可を求めるように俺の方を見る彼女に、俺はにこやかな笑顔をもって返す。

緊張した面持ちで料理に手を伸ばし———

「美味しい」

ポツリ、と呟くようにそんな感想を漏らした。

「良かった。口に合ったようで何よりだよ。」

実は口に合うか不安だったんだ。何というかほら、イリヤは育ちが良さそうだからな」

「ん。確かにセラの作る料理の方が上品で洗練されてはいるけど———

でも暖かくて、凄く美味しい」

少女の笑顔にしばしの間、目を奪われた。

魂が抜けてしまったかのように呆然とする。

「ねえ、お兄ちゃん」

「つ、な、なんだ？」

目を奪われていた後ろめたさからか、俺が上げた声は少々震えていて、上ずった声だった。

しかし少女は気にする様子もなく、

「お兄ちゃんさつき、ひとりぼっちで食べるのがつまらないって言うてたけど、どうして？」

「え？どうしてってそりゃあ」

そんなの、決まってる。

俺は藤ねえが置いていったシャンメリーを動揺を落ち着かせるために一口飲んでから、その答えを口にした。

「そりゃあ、決まってるじゃないか。一人で食うより、こうして誰かと一緒に向かい合って、その笑顔を見ながら食べた方が楽しいだろ？」

少女は俺の答えに、驚いたように目を見開いた。

「——— つい、考えてしまうのだ。」

親父が死んで、その時から俺はこの家で1人になった。

1人で暮らす事に不安は無かったと思う。

ただ寂しいだろうな、と。

年相応の頭で、そんな事を考えた。

しかし実際は1人なんかではなく、藤ねえや藤村組の皆が俺の事を支えてくれたのだ。

多分あれが無かったら、もう少しひねくれた人格に育っていたに違いない。

少女は黙って視線を落とす。

しかしやがて顔を上げて

「そっか、だからこの料理は———」

こんなにも暖かくて美味しいんだ、と。  
屈託のない笑顔を浮かべながら、囁くようにそう言った。

その笑顔があまりにも美しく、俺は息を呑んだ。  
トクン、と心臓が高鳴り始める。

顔全体が熱く、思わずその笑顔から視線を外した。  
幸いイリヤは気付いていないようだ。

全く、今日の俺はどうかしている。こんな小さな子供の笑顔にドキ  
りとさせられるなんて――

それから暫く、俺と少女は2人だけのささやかな、しかし笑顔に満  
ち溢れたクリスマスディナーを楽しんだ。

食後にはケーキと紅茶。ケーキは自作だが紅茶に関してはティー  
パックで淹れるタイプで、彼女に出す事が少しばかり躊躇われたのだ  
が、彼女は嬉しそうに、文句一つ言わず口にしてくれた。

そして――

「そろそろ、行くね」

「ん、もうこんな時間だったのか。よし、もう遅いし送ってくよ」

しかし俺の申し出に彼女は首を横に振った。

「どうして？」と問いかけると彼女は立ち上がり俺の近くまで来ると、  
上目遣いに俺を見て、

「ね、お兄ちゃん。名前、教えて？」

淡い微笑をたたえて、彼女は俺の名前を聞いてきた。

「そういえば、言ってなかったっけ。」

正体も目的も不明で謎が多い少女だが、この子の笑顔を見ていれ  
ば誰にだって分かる。

この少女は悪い子なんかじゃない。

だから俺は躊躇うことなく自分の名を口にした。

「し、そろそろ？」

「ぶ、あはは！少し発音が違うかな。それじゃあ屍蟻になっちゃう」  
俺が思わず吹き出したからだろうか。

彼女が顔を真っ赤にして泣きそうな顔をするので慌てながらも正しい発音を繰り返して教えていく。

結果、彼女の発音は徐々に正しい発音になっていった。

「しろ、う・しろう・シロウ！」

「うん。衛宮士郎。それが、俺の名前だよ」

大事そうに、彼女は名前を繰り返す。

シロウ。シロウ。シロウ。シロウ。

そんなふうに自分の名前を呼ばれるのは、ちよつとだけ恥ずかしくなかったけど。しかし俺の名前を繰り返す彼女はどこか嬉しそうで、その笑顔を見たら止める気なんてたちまち失せてしまった。

そして一頻り繰り返した後、

「じゃあまたね、シロウ。今度会う時はお互い敵同士だから次に会った時は、出来るだけ苦しめないよう一瞬で殺してあげる」

「え——？」

彼女の手が俺の額に触れる。

雪のように冷たくて、柔らかくて、小さい手。

瞬間——くわん、と視界が揺れた。

「あ、れ——？」

「今度会う時は、イリヤで良いよ。イリヤスフィールって呼ばれるの、堅苦しいもの」

歪んでいく視界の中で、そんな声を聞いた気がした。

気が付けば俺は倒れていて、あれから3時間近く時間が経過していた。身体を起こし、部屋を見渡す。

——部屋に少女の姿は見えなかった。

全部夢だったのだろうか。そう思って、テーブルの上へと視線を投

げる。

さつきまでそのままだった皿が無くなっていた。

ピチヨン、ピチヨン、と水滴が落ちる音。

その音に釣られて立ち上がり、台所へと移動した。

そこには——料理が乗っていた皿が、洗われた状態で積み上げられていた。

何枚か割れていたり、洗い残しがあったり、お世辞にも綺麗とは言えない仕上がりだったけれど。

彼女との出会いが夢じゃなかった事が、何より嬉しかった。

「もしかしたら本当に、妖精だったのかもな」

自分でもどうかと思う想像に、俺は笑みを零す。

——もう一度彼女に会えたら、お礼を言おう。

あの雪の妖精を思わせる、儚くて美しい少女に。

「——う、ふ」

喉奥からせり上がってきた血塊をぶちまけた。

ビチャリというおぞましい水音が冷たい廊下に反響する。

こひゅー、こひゅーという喘鳴ぜんめいの呼吸だけが、自分の喉から漏れる音だった。

胸には赤黒い穴が穿たれている。

そこからゴポリ、ゴポリと溢れ出した鮮血が水溜まりのように広がって波紋を作っていた。

全身の熱が徐々に奪われていく感覚。

身体から流れ出しているのは血だけじゃない。

命が、意識が、記憶が、夢が、理想が。自分を構築している全てが、紅い鮮血と共に溢れだしている。

身体感覚は既に無く、頭蓋から脳味噌までぶちまけたかのように思考が定まらない。

知覚出来るのは周囲を覆う闇と冷たい『死』の感覚だけ。

このままでは、死ぬ。空っぽになつて、死ぬ。  
当たり前だ。心臓を穿たれて生きている道理はない。  
今なおこうして死の淵で足掻いている事が異常なのだ。  
苦しい。ラクになりたい。寒い。死にたい。何も望まないから、こ  
のまま楽になりたい。

無限に引き伸ばされる死の感覚は地獄そのものだ。

俺を殺した奴も、どうせ殺すなら心臓を穿つんじゃないやなくて首を斬  
り飛ばしてくれりや良かったのに。

苦しみから逃れたくてそんな事を考える。

もう何も望まないから、さっさと俺を――

「あ――」

不意に、あの少女の事を思い出した。

雪の妖精を思わせる幼い少女。

あの子に――イリヤに未だ、お礼を言っていなかったんだっ  
け。

無念があるとすればそれだ。

もう叶える事の出来ない願い。

あの子の、雪解けのような儂い笑顔をもう一度――

遂に何も考えられなくなった。あの地獄のような苦しきも既に無  
く、後はこうして――

「またねって、言ったのに」

カツン、カツン、カツン。誰かが近付いてきた。

「死んじゃったら、殺す事も出来ないじゃない」

誰か来たのだろうか。もう何も見えないから、誰が来たのかも分か  
りやしない。

「シロウ……？」

名前を呼ばれた気がした。

「シロウ・シロウ」

誰かに身体を揺さぶられている、気がした。

「ちゃんと名前、言えるようになったんだよ。もうお兄ちゃんに笑われないように、毎日毎日、頑張って練習したんだから」

何か言っている。聞こえないから、反応のしようがない。

「あの時は上手く出来なかったから、皿洗いも出来るように練習したんだから。何枚も割っちゃったりしてセラを困らせちゃったけどもう皿、割らないように、なったんだよ？」

凄く眠たい。瞼を閉じてしまえば、それで終われる。

「イリヤ、頑張ったんだよ。お兄ちゃんに褒めてもらえるように、頑張ったん、だから」

ポタ、と何か暖かいものが落ちた。

暖かくて透明な雫が、キラキラと輝いている。

「起きて、お兄ちゃん」

切なげに震える声。頭を撫でてやりたいのに、それが出来ない己の身体が妬ましい。

「起きてよ、シロウ」

うん。そうしたいのは俺も同じだけど、ごめんな、もう身体が動きそうにないんだ。

もう届かない声で、泣いている少女に謝った。

「ひとりぼっちは寂しいってわたしに教えてくれのは、シロウなんだよ？なのにシロウはわたしを、キリツグみたいにひとりぼっちにするの？」

「そんなのやだ、やだよ」

泣いている。どうして、泣いているんだろう。

彼女の笑顔が好きだった。叶う事ならもう一度見たいと思うぐら

い、彼女の笑顔が好きだった。

だから——泣いて欲しくなんか、ない。

「っ、生き、てる？」

ピクリ、と。ほんの少しだけ指が動いてくれた。

俺が生きていると分かった瞬間、イリヤは涙を拭き、真剣な眼差しで俺の身体を検分する。

「失われた臓器の修復——わたしじゃ難しいけど、令呪を使えば。」

眩い光に包まれる。

先程まで感じていた冷たさは既に無い。

——暖かくて、気持ち良い。

その暖かさに身を委ねるように、今度こそ、俺の意識は完全に途絶えた。

「——こんばんわ、お兄ちゃん」

そして、その少女は俺の目の前に姿を現した。

場所は言峰教会。学校でランサーに襲われ、『誰か』によって命を救われた俺だったが屋敷に戻った瞬間に再びランサーに命を狙われた。

偶然セイバーを召喚し、自分もマスターだという遠坂と共にここ言峰教会を訪れた俺達が概要を聞き終わって門から出ようとする、少  
し行った先はずっと会いたかった少女——イリヤが立っていたのだ。

「下がっていきください、シロウ」

傍らにいたセイバーが俺を下がらせる。

しかし、俺にセイバーの忠告は届いていなかった。

視界に入るのはただ一人。その銀髪の少女のみが暗闇の中で浮き



なものにしていた。

唯一、爛と光る双眸を除いて。

「な」

その手には石を削って作られたと思わしき斧剣。

柄らしき部分にボロ布を巻いただけのそれは無骨ながらもその威力を如実に物語っている。

一言で表すのなら、鍔の巨人。

「っ」

!?

ようやく気付かされる。

目の前の巨人はセイバーと同じサーヴァント。

つまり、目の前の少女は

「マスター、だったのか」

俺の声に応えるかのように、バーサーカーと呼ばれた巨人が地を蹴った。炎のような婆娑羅髪が逆立つ。

その速度は、巨軀に似合わずあまりにも速過ぎた。

目で追う事すら許されない。

それは最早、暴風だった。気付いた時にはもう遅く、バーサーカーが斧剣を振り下ろす。

その寸前、

「はあ——!!!」

セイバーが俺とバーサーカーの間に割り込んだ。

バーサーカーが全てを破壊する漆黒の暴風ならば、セイバーは全てを斬り裂く銀色の疾風だった。

そして、遂に暴風と疾風がぶつかり合う。

緋色の閃光が蟠る闇を照らすかの如く大気に散った。

その閃光に僅かに一瞬だけ遅れて、耳を劈く轟音と余波による旋風が周囲を蹂躪した。

「が——!？」

その余波に思わず尻もちを着く。しかし両者の激突は終わる事無く、凄まじい速度で己の武器を振るい続けていた。

「」

その剣戟に、俺は全く意識を向ける事が出来なかった。

俺を守るために身を呈して戦っているセイバーには悪いと思うけれど、俺の意識は全てあの少女に向けられていた。

セイバーとバーサーカーの戦いを無表情で見守る少女を、俺はずっと見詰めている。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

覚えている。ああ、覚えているとも。

彼女は、ランサーの槍よつて心臓を貫かれ、殺されかけた俺の命を救ってくれたんだ。

少女の流した涙を、覚えている。

少女の隠された想いを、努力を、覚えている。

そして何より少女の笑顔を、覚えている。

「ッー」  
ならば躊躇う必要なんて無い。

まだ言えてなかった言葉、伝えてなかった想いがあるのなら、躊躇ってなんかいられるものか。

目測で、少女までの距離は20mと少し。

少女の下まで行くのなら、視界に捉える事すら出来ない無数の攻防を繰り返すセイバーとバーサーカーの脇を突破していかねばなるまい。

それがどれ程危険な事なのか、理解していた。

だが、それがどうした。これ以上少女を泣かせたくない、ひとりぼっちになんてさせないと思ったのなら。

「うぐーけ」  
今、この瞬間だけは。何がどうなろうと俺は少女の下まで辿り着かなければならない

「う、ぐぐぐけええええええええええ!!!」

足よ、砕けんとばかりに石畳を蹴った。

後ろから遠坂の制止の声が聞こえる。

だが構う必要なんてない。俺は俺の成すべき事をしなくちやいけないんだから。

ずつと待たせてしまった。彼女の事を。ずつとひとりぼっちにさせてしまった。

何故俺がそんな風に思うのか分からないけど、もう彼女を泣かせたくない。それだけは、変わらない想いだから。

「っ!？」

少女が驚愕に身を固まらせる。

彼女の下まで、後もう少し。後少しで、手が――

「シロウ、避けて!!!」

セイバーの鋭い声が、俺の意識を遮った。

見ればセイバーはボロボロだ。俺のために、あんなにも傷付きながら戦ってくれているのか。

そんな事を思った瞬間――視界が黒く覆われる。

それが俺に向かって振り下ろされたバーサーカーの斧剣だと気付いた時にはもう遅かった。

――下から上へ、バーサーカーの斧剣が弧を描いて俺の身体を跳ね飛ばした。

「だめ、バーサーカー――!!!」

制止の声はあまりにも遅かった。

彼女まであと5mという所で、地上から10m程の高度まで無惨に跳ね上げられる。

――ああ、遠い。

彼女との距離が開いてしまった。

「まだ、だ」

しかし、未だ残っている。進もうという意志が、彼女に伝えなきやという意志が、まだ――!

「あ」

彼女は、ぐしやりという音を立てて自らの足下に落下してきた俺を呆然と見下ろしていた。

!?!?  
自分の身体がどうなっているのか、見なくても分かる。  
それより今は、伝えなきや、いけない事があった。

「久しぶりだな、イリヤ」

「っ」

すぐ近くに彼女の顔があった。

本来ならかなり身長差があるはずだけど、今の俺は膝立ちの状態のまま立ち上がる事が出来なかった。

「どうして、なんで、そんな」

「当たり前だ、ばか。あんなふうに泣かれたら、放っておける訳がないだろ?」

そう言つて俺は強く、少女の華奢な身体を抱きしめた。

今にも折れてしまいそうな心細い感触。

だけど、そこに居た。ずっと会いたかった少女の感触が、そこに在ったのだ。

「シロウ?」

「本当に名前、言えるようになったん、だな」

左手を彼女の髪へと伸ばし、優しく梳る。すぐ間近にあった彼女の口からくすぐったそうな吐息が漏れた。

ややあつて、彼女が恐る恐る俺の身体に腕を回してきた。

腕は震えていて、俺に触れる事を恐れているかのよう。

いや、真実そうなのかもしれない。

この少女がどんな人生を送ってきたのかは知らない。

けど言葉の端々から伝わってきたのは、深い孤独だった。

あの独白は聞いていて胸が苦しくて、だからこの少女を守りたい、と。そう思つたのだ。

「うん——もうお兄ちゃんに笑われないように、わたし頑張つ

たんだから」

「ああ、知ってる。全部、聞いてたから。」

「——本当に、よく頑張ったな」

「っ、うん」

彼女は照れくさそうに。少しだけ泣きそうな表情で笑った。

その笑顔が愛おしくて、いつそう強く抱きしめたくなった。  
視界が揺れている。血を流し過ぎたのかもしれない。  
——けど、もう1つ。  
もう1つ言わなくちゃならない事が、俺には残っている。  
「ありがとな、イリヤ。俺の事、助けてくれて。本当に。」  
そこで、限界が訪れた。  
あの時と同じように意識が途切れていく。  
——暖かい。全ての感覚が途切れても、少女の暖がさが俺の腕の中に残っている。その事が無性に嬉しくて、俺は最後までその腕を解くことはなかった。

「ん」

泥の中からの浮上を経て、臍に意識が覚醒する。  
こめかみの奥でずぎんと頭蓋が軋んだ。  
その痛みにしぼしの間耐え、収まったのと同時に枕元に無造作に置いてあった時計で時刻を確認する。

——驚いた。もう午後の2時である。

「道理で頭が痛いはずだ」

今日が休日で助かった、と安堵した。

学生的身であるが故、長期休みでも無い限り平日には学校に行かねばなるまい。

午後2時なんて時間は、遅刻という範疇を超えている。

やれやれと自分自身に呆れながら身体を起こし——

「ん?」

ささやかな重みが腕に加わっている。

——どうやら布団の中に誰かいるらしい。

誰だ、と、訝しみながら恐る恐る布団をめくる。

「んう」

美しい銀髪の少女が、まるで子猫のように丸まって穏やかな寝息を立てていた。布団をめぐってしまっただからか、少し不満そうに喉を鳴らし、寝返りを打っている。

あどけない寝顔は安心しきっていて、まるでここが特等席だとも言わんばかりだ。

それが微笑ましくて、俺はイリヤの頭をそっと撫でた。

起こしてしまうのが躊躇われるぐらい、イリヤは気持ちよさそうに眠っている。

——そんな寝顔をニヤニヤと見詰めている俺は、傍目から見たら相当キモチワルイ人に映ったに違いない。

それから15分程経っただろうか、銀糸のような睫毛が切なげに揺れて、ゆつくりとイリヤの瞼が開いた。

寝顔を覗き見るとい、拝見しているうちにかなりイリヤの顔に近づいていたらしい。

俺とイリヤの顔の間隔は10cmもなく、それに気付いた瞬間、俺はガバツ!!と起き上がって寝ぼけ眼のイリヤから距離を取った。

「お、おはよう、イリヤ」

「イリヤは俯いて何も言わなかった。まずい。もしかしなくても相怒らせてしまったか——？」

「ダラダラと嫌な汗を流し弁解の言葉を考えるため頭をフル回転させる俺だったが、」

「——どうして、あんな事したの？」

「開口一番イリヤはそんな事を聞いてきた。あんな事、というのが今の狼藉を指す言葉ではない事ぐらい幾ら俺でも察せられた。」

イリヤの紅い瞳に見つめられる。表情は真剣そのもので、だからこそ俺は、偽りのない本心をイリヤに伝えた。

「——イリヤの笑顔が、好きだから」

「え？」

「予想外の言葉だったのか、イリヤは呆然と俺を見ていた。

うん。自分でも相当に恥ずかしいセリフだった。

「そんなセリフ、今時メロドラマですら見かけない。

全体的に身体が熱い。頬が赤くなっている自信がある。

「ただそれでも——好きなものは好きだ。

そんな事、幼稚園児にだって分かる理屈だろう。」

「クリスマスの日に見た笑顔があんまりにもその、可愛かったからな。

だからあの夜。イリヤの泣き顔を見た時は、胸が苦しくて、痛かった。

槍で心臓を貫かれるよりも、痛かったんだ」

だから俺は——もうイリヤにあんな顔をさせたくない、

と。そう思ったのだ。

「死にゆく自分よりも、イリヤが泣いている事が俺には我慢出来な

かった。だからその時、思ったんだよ。もし俺に指一本でも動く力が

残されているのなら、イリヤの笑顔を守りたいって」

それだけだよ、と言う俺をイリヤは信じられないものを見たような

目で見つめてくる。

「そんな事のために、シロウは——」

「む、そんな事ってなんだよ。俺から言わせて貰えばな。

聖杯なんかを求めて殺し合いをするよりも、誰かの笑顔を守るため

に命をかけて戦う方が絶対に良いに決まってる。聖杯なんて回りく

どいもの、必要ない。その時願ったものがイリヤの笑顔だったんだか

ら、イリヤのために戦うのは当然だろ」

少し怒った口調になるのも仕方がないと思う。

そんな事、なんかじゃない。イリヤの笑顔がどれ程魅力的なものな

のか、本人は気付いていないのだ。

「わたしはね、シロウ」

痛みに堪えるような表情で、イリヤは話し始めた。

イリヤは親父——衛宮切嗣の实の娘である事。

そして小さい頃に自分を捨てた衛宮切嗣を殺すために、この国まで

やって来た事。

自分が聖杯戦争のための器として作られた人形である事。  
ずっとひとりぼっちだった事。

そのどれもが彼女にとって辛い出来事だという事はイリヤの様子を見れば分かる。だが、慰める事は出来ない。

俺にそんな資格はない。

俺が切嗣の息子である以上？——俺自身が、イリヤを悲しませる要因なのだから。

「わたしは、キリツグとシロウを殺すために来たんだよ？そんなわたしのために、シロウは戦うの……」  
けど、

「……ああ、当然だろ。イリヤは今まで頑張ったんだ。だからイリヤが未来を幸せに暮らせるように、俺は戦う」

頑張った奴が報われないなんて、そんなのはおかしい。

だから俺はイリヤにこれからを、未来を幸せに生きて欲しいのだ。イリヤが屈託なく笑えるような、そんな未来を。

「……俺の事、許せなくてもいい。だけど……イリヤのために戦う事だけ、許してくれるか？」

俺を見つめるイリヤの紅の瞳は揺れていた。そこにどんな感情が込められていたのかは分からない。  
……やがて、

「——シロウの、ばか」

イリヤは、はにかむように笑い俺の胸に飛び込んできた。

羽毛のように重さを感じさせない身体。

しかしその暖かさは本物で、あんまりにも気持ちよさそうに喉を鳴らすものだから、もつと強く抱きしめたくなくなってしまふ。その気持ちを抑えるため、俺はイリヤの銀色の髪を愛おしげに梳った。

「……なあにしてるのかなあ？えーみーやーくうん？」

それは唐突な出来事だった。

漂う甘い空気をぶち壊すかのように、赤い悪魔が降臨したのである。遠坂の後ろにはセイバーも居て、恐ろしい笑顔を浮かべていた。

「衛宮くん、そういう趣味だったんだ？ふーん」

「そ、そういう趣味って遠坂」

「シロウ、そこに正座してください。貴方には少し躰が必要なようです」

「う、うわ！どこから引つ張り出して来たんだその竹刀!？」

「道場の方からですが、何か。それよりもシロウ。イリヤスフィールはバーサーカーのマスター。すなわち敵なのです。貴方はその所をちやんと」

セイバーに怒られている俺を見て、イリヤはくすくすと楽しげな笑い声を漏らしている。

それに釣られ、俺も自然と笑みが溢れた。

2人一緒に、屈託のない笑い声を上げる。

その楽しそうな声が伝播したのか、イリヤに対して警戒心を抱いていたセイバーと遠坂も呆れた様子で苦笑を溢す。

それは、これから訪れるであろう幸福な未来を信じて疑わなかった、揺籃の陽射しだった。

聖杯戦争が始まって暫くが経過した。

俺は今、イリヤを『聖杯』という呪いから解放するために遠坂と同盟を組み、日々を戦っていた。

イリヤから聖杯戦争の『真実』を聞いた遠坂は「薄々、そんな気がしてたわ」と言い、聖杯を壊すという利害のもと俺と協力する事となった。

アーチャーは如何にも不安といった風ではあつたが、何故かイリヤと俺を方をちらりと一瞥した後渋々了承した。

セイバーも不服そうではあつたものの、王の選定をやり直す事は王として生きた自身の人生をも否定する事となる。と理解し、今は聖杯の破壊を目的に戦つてくれている。

そしてイリヤはというと——何も言わず、俺達の戦いを見守っていた。

「残るはランサー、キャスター、アサシンか。まだまだ道は長いな」廊下を歩きながらそんな事を考える。

脱落したのは慎二のライダーだけ。

「1週間が経過して1騎だけ」というのが早いペースなのか遅いペースなのかは良く分からない。

ただ遠坂が言うには、他の陣営は以前よりも消極的に行動するようになったらしい。当然といえば当然だろう。

こちらの陣営にはサーヴァントが3騎。

バーサーカーに関しては並のサーヴァントが二人がかりで挑んでも倒せるかどうか。

そんな状況では、慎重にならない方がどうかしてるというものだろう。

「ん」

ふと見慣れた背中が視界に映り、思考が寸断された。

——イリヤだ。イリヤは縁側に腰掛けて、足をパタパタしながら夜空を見上げている。

「今日は星が綺麗だな」

同じように上空を仰ぎながらイリヤに声をかけた。

「うん。わたしが居たドイツのお城は基本的にずっと雪雲に覆われてたから、こうして星を見るなんて出来なかった。だからこの国に来て、驚いたわ。夜空に瞬く星がこんなにも綺麗だなんて、知らなかったんだもの。まるで散りばめられた宝石みたい」

「宝石、か。まるで遠坂みたいな例えだな」

「リンは拜金主義だから、そんな財布の足しにもならないものが宝石

なわけ無い！って言いそうだけどね」

「幾ら遠坂でも流石にそこまでは言わない、と思うぞ。多分。恐らく。きつと」

うん。ここまで保険を掛けておかないと否定出来ないのだから遠坂の拝金主義っぷりは半端ない。

本人に聞かれたら今でも充分スパルタな教育がもつとスパルタになりそうな感想だった。

「よいしょ、とイリヤの右隣に腰掛ける。」

顔を上げると、視界いっぱい夜空が展開される。

イリヤの言った通り、まるで宝石を散りばめたかのような星々が漆黒のスクリーンに映し出されていた。

その中央には丸く、濡れたように淡く光る月がある。

漆黒を断つ純白は画用紙に穿たれた孔あなのようだ。

庭を照らす静謐な月明かりは朧に揺れていて不安定。

真つ白で面白みのない輝きではあるが、こうして夜空を見上げるのは嫌いじゃなかった。

「こんな日はどうしようもなく思い出す。」

親父・衛宮切嗣から正義の味方という理想を受け継いだ『誓い』の場所がこの縁側だったのだ。

考えてみると今の状況に良く似ている。

「親父も、この景色が好きだった」

「俺の言葉にイリヤは答えない。」

イリヤはただ無言で、かつて切嗣が見た景色を見ている。

その横顔は朧な光に照らされて、綺麗だった。

母親譲りだという美しい銀髪が朧な月光を反射して、濡れたように発光している。

「ここからじゃ表情は掴めない。」

「無遠慮に顔を覗き込むのは躊躇われた。」

「不意に、ささやかな重みが肩に加わる。イリヤが俺へ」

身体を傾け、肩に頭を寄りかからせているのだ。

穏やかな風が髪の毛を攫っていく。

不意に、イリヤは夜空に向かって手を伸ばした。

決して届かない、頭上の星々を掴もうとするかのように。

「キリツグと、どんな話をしたの？」

風に乗って、そんな言葉が流れた。

少しだけ悲しそうな声。俺はイリヤの頭を撫でながら、その問いに答えた。

「話らしい話は多分しなかったと思う。したとしても綺麗だな、とかそんな感じの事しか。」

「けど親父と最期に月を見た時には、大切なものを俺は親父から受け継いだよ」

「大切な、もの。」

「うん。切嗣の理想——正義の味方という、夢を」

今でもその理想は捨てていない。

切嗣の理想を継ぐ。それは俺がやらなくちゃいけない事だ。

「けどそれよりも、俺は——」

「正義の、味方。シロウは、後悔しないの？正義の味方っていうのは字面通りの意味じゃないわ。きつとその夢は貴方の未来を破綻させる」

「後悔はしない。それがどんな未来であれ、俺が歩むと

決めた道だから。切嗣の夢を受け継いだ以上、後悔だけはしちやいけないんだ」

「そう、なんだ」

イリヤの瞳は不安に揺れている。

俺の身を案じてくれている、のだろうか。

「そりゃあそうか。兄貴の夢が正義の味方なんていう子供じみたものなのだから不安になるに決まってる。」

正義の味方は、確かに俺がやらなくちゃならない事だ。

しかし——今の俺はそれよりも、

「なあ、イリヤ」

「なあに、シロウ？」

甘える子猫のような声だった。

——兼ねてから言おうと思っていた。もつと以前、イリヤの出生を知った時から俺は言おうと思っていたのだ。

それを今まで黙っていたのは、多分罪悪感から。

その事を口にする資格が俺にあるのか、と。

ずっとそう思っていた。

けどやっぱ俺は——イリヤと一緒に暮らしたい。

イリヤと一緒に、この家で。

「——ねえ、シロウ」

「だが言葉を発する前に、イリヤは穏やかな表情で俺に呼びかけた。まるで、俺が言おうとしている言葉の内容を分かっているかのよう

に。」  
「わたしね。今の生活がとても楽しいの。変だよ、本来ならリンもセイバーも。そしてシロウも、殺さなくちゃいけない敵なのに」

「そんな事ない。少なくとも今は、そんな事に縛られる必要は無いんだ」

「だが、イリヤは首を横に振る。

「穏やかな表情を浮かべたままで、イリヤは続けた。

「——うん、シロウならそう言うと思ってた。」

「けどね、わたしがそのために造られた人形だという事実は揺るがない。そのために、わたしは寿命を犠牲に生まれた瞬間から身体を弄られた。分かる？わたしは普通の人間よりも短命なんだよ？」

「それは、遠坂から聞いた。だからあまり肩入れしない方がいいって。」

「ふふっ、リンらしい言葉ね。うん、でもその通りだわ。シロウはわたしが死んじやったら悲しむでしょ？」

「っ、そんなの——!!!」

「当たり前だ。けどそれ以上に、その言葉は聞きたくなかった。そんな事実は、知りたくなかった。」

「……ならば、ダメだよ。わたしはシロウの事が好きだもん。好きな子を悲しませるなんて、出来ないよ」

「そんなの、当たり前でしょ？」

「イリヤは俺の目を真っ直ぐ見て、そう言った。」

「泣きそうな瞳で、そう言ったのだ。」

「」

「俺は何も言えなかった。」

「それは返す言葉が無かったからでは無く——」

「そう、か。そうだったんだ。」

「全く、我ながら馬鹿みたいだ。こんな簡単な事にも気付かないなんてどうかしている。」

「好きだから悲しませたくない」とイリヤは言った。

「確かに、それは当たり前的事だ。」

「好きな人を悲しませる事なんて、出来ない。」

「けど、」

「——イリヤ」

「もう一度、その名を呼んだ。イリヤは先程より少し悲しそうな表情

をして、俺の方を見る。」

「」

「俺は、イリヤが、好きだ。家族としてじゃない。女の子として、俺はイリヤが好きだ」

「」

「え……？」

「困惑するイリヤを、俺は強く抱きしめた。」

「ああ、くそ。何で今まで俺は気が付かなかったんだろう。」

「イリヤの心の底からの笑顔を初めて見た、あの日。」

「俺はあの時から——イリヤに、参っちゃってたんだ。」

「し、シロウ」

「好きだ、イリヤ」

「ん」

「耳元で囁いて、イリヤへ回した腕にいつそう力を込める。」

—— 心臓の鼓動が重なり合っている。

俺もイリヤも心音がバクバクとうるさい。

けど今は、そんな感覚がどうしようもなく愛おしかった。

「イリヤは好きな人を悲しませたくないって言ったけどさ。それだけじゃ、ダメなんだ。前にも言っただろ。」

俺はイリヤを幸せにしたい。悲しませないだけじゃなくて、お前を幸せにしたいんだ。イリヤが好きだから、このまま寿命まで立ち止まってるだけの人生なんて、俺は許せない」

「好きだから、幸せにしたい。何とも自分勝手な言葉だ。」

「けど、きつと恋とはそういうものだろう。」

「勝手にイリヤを好きになって、守りたい、笑顔が見たい、幸せにしてやりたいと願ったのだから。」

「—— 好きな人を幸せにしたいと思うのは、当たり前だろ？」

「わたしじゃ、ダメだよ。」

「シロウが幸せに、なれない」

「途切れ途切れの泣きそうな、切ない声だった。」

「実際、泣いていたのかもしれない。」

「俺の首筋に暖かい何かがつう、と伝っていたからだ。」

「—— 今更何言ってるんだ、ばか。俺はイリヤと一緒に暮らせれば、それで幸せだよ」

イリヤの涙を指でそっと拭う。

抱き寄せたイリヤの身体は震えていた。

いずれ訪れるであろう終わりに恐怖するように。

—— イリヤの言葉に偽りはない。

その道を歩むのなら、終わりはすぐに訪れるだろう。

それが何年後かは分からない。

遠坂の話が本当ならば、10年は保たないという。

けど、そんなのは関係ない。

いつ終わるかとか、そんな事はどうでもいい。

—— 俺はイリヤが好きだ。

その気持ちだけは、いつまでも変わらず俺の心の中に在り続ける。

「わたしも、好き。」

シロウの事が、大好き。こんな気持ちになるのは初めてで、良く、分らないけど」

イリヤの華奢な腕が回される。

涙を流しながら、それでも気持ちいを伝えようと必死に嗚咽混じりの言葉を紡ぎ続ける。

「シロウと一緒に、居たい。シロウと一緒に、暮らしたい。でも、ダメ。それをしたら、わたし、わたしは——」

イリヤの言葉が止む。

俺が、イリヤの唇に自身の唇を重ねたからだ。

「んっ あっ」

切なげな吐息がイリヤの唇から漏れた。柔らかく、微かに濡れた唇の感触があまりにも鮮明に伝わる。

ただの口付けだったはずのそれは、俺の身体に電撃じみた快感を刻み付けた。

意識が蕩ける。

永遠とも一瞬とも感じられる交錯が終わり、俺はイリヤの唇から自身の唇を離す。

ふらり、とイリヤの身体が揺れて俺の胸へと倒れ込んだ。

「はあ はあ あ、はあ」

息を切らすイリヤを優しく抱きとめる。

表情は見えないが、耳が真っ赤なのできつと頬も紅潮しているに違いない。かく言う俺も、恥ずかしさと気持ち良さとで頭がどうにかかなりそうだったのだが。

「俺と一緒に居たいって、本当か？」

背中を宥めながら、俺はイリヤに問いかける。

返答には10秒程を要した。

「うん。それは——本当、だよ？」

でも、それをしたらシロウは——」

「言つただろ。俺は——ずっとイリヤの傍に居たい。」

それにな、イリヤ。好きな女の子の隣に寄り添って、その笑顔を守れるんだぞ。男として、これ以上の幸せなんかあるもんか」

「ッ。ばか。ばか。っ！」

イリヤは俺の胸に顔を押し付けて、泣いた。

泣きじやくるイリヤの頭を優しく撫でる。

——ああ、ダメな事なんて無い。

こうしている瞬間が、俺にとって一番幸せなのだから。

「だから、誓う。何があっても——イリヤを守るって」

玲瓏な月光の下、俺は2つ目の月下の誓いを立てた。

——イリヤは今まで頑張ってきた。

だからその分、報われないといけない。

イリヤは俺の答えに少しだけ逡巡した後、俺の大好きな、あの屈託のない笑顔で笑った。

縁側に座る俺とイリヤ。

それは奇しくも——あの誓いの夜、俺に理想を託した切嗣と受け取った俺の姿に、重なった。

——その夜、俺はイリヤと一緒に布団に入った。

まるで今までの渴きを潤すかのように甘えてくるイリヤを抱きしめて、再び軽い口付けを交わした。

今度はイリヤからだった。

明らかにいつもと様子が違う。

どこか上気した頬と瞳がそう思わせた。

「は、つつ。い、いきなりは卑怯だぞイリヤ！」

「シロウだっていきなりだったじゃない。やられっぱなしじゃ堪らないわ。それに——わたしにされるの、気持ちよかったでしょ？」

イリヤは俺を押し倒して馬乗りになると、自身の唇を舐めながら、ゾクリとする程妖艶な笑みを浮かべた。

幼さと妖艶さの同居はそれだけで男を惑わす色香となる。

「っ——」

その言葉は、俺を限界へと誘うのに充分事足りた。

先程の口付けと相まって、媚薬にでも漬けられたかのように俺の身体は我慢の限界を迎えていたのだ。

張り詰めた雄の象徴がイリヤの臀部に限界だ、と訴える。

イリヤも自分の臀部に当たる硬い何かに気が付いたのか、先程の妖艶さが別人みたいに頬を紅潮させていた。

お互い顔を逸らす。しかしイリヤは——

「シロウ。わたし——欲しい」

「ほ、欲しいって何を」

「シロウの愛が欲しいの。言葉だけじゃ、満足できない」  
消え入りそうな切ない声で、イリヤはそんな事を口にした。

——おかしい。なぜ、イリヤはそんな事を？

誘われているという興奮よりも、『疑問』の方が上回った。

イリヤの真意が分からない。

どうしてこんなにも急に、俺を求めるのだろう。

恋人同士が愛を確かめ合うのは当然の事だ。

だが、イリヤは明らかにあせっているように見えた。

怯えていると言い換えても良い。

ならば何に焦り、何に対して怯えているのだろう。

疑問は尽きなかった。

しかし、そんな疑問もイリヤの性に濡れた『瞳』に見つめられた瞬間にワカラなくなってしまう。

——上体を起こして、俺はイリヤと立場を逆転させた。簡潔に言うなら、イリヤに押し倒されていた状態から逆に俺がイリヤを押し倒したのである。

「は、あ、んっ、や、あ、っ！」

深い、貪るような舌を絡める口付け。

理性が溶かされていく感覚が気持ちいい。イリヤの唇から漏れる吐息は興奮と快感の色を孕み、もつと深い快感を求めるように、俺の舌に自身の舌を絡めてきた。

深い交錯は5分に渡って続けられた。

舌を離すと、2人の間に銀色のアーチがかかる。

お互い余裕のない表情で息を切らしていた。

俺ももう自分を抑えきれず、イリヤも俺に対して口付けよりももっと深い何かを求めている。

とろけた表情で薄い胸を上下させるイリヤはそれだけで艶めかしく、理性が打ち砕かれそうだった。

「っいり、や」

けど、本当に良いのか。

イリヤを守ると決めたのは俺だ。

なのに、こんな事を――

「――大丈夫だよ、シロウ」

俺の葛藤を察したのか、イリヤは俺に押し倒されたまま、俺の頭を抱くようにして自分の胸に引き寄せた。

良い香りがする。それは間違いなく、1人の女の香り。

「シロウはわたしを守るだけじゃなくて、幸せにしてくれるんでしょう？なら問題ないわ。今この瞬間にシロウに愛して貰えている事こそが、わたしの幸せなんだから。」

だから――我慢しないで、ね？」

耳元の甘い囁きが、俺の全てを瓦解させた。

壊れて崩れた理性はイリヤの全てを求めている。

それを抑えるため、俺はその無垢な身体に愛撫を始めた。

服を脱がし、その肢体に口付けをする。

首筋、脇腹、胸、太もも。

自身の身体を舌が這う度に、イリヤは甘く、そして切羽詰まった吐息を漏らしていた。

「やあ、くっ ああ つつ!!」

イリヤの小さな身体が、まるで電撃でも浴びたかのように痙攣する。ピクツ、ピクツ、と絶頂の余波によって小刻みに痙攣しているようだった。

その余波がある程度収まってから、

「イリヤ」

「うん」

コクリ、とイリヤは小さく頷いた。

浅く呼吸を繰り返し、強ばっていた身体を弛緩させる。

それはつまり——俺に、全てを委ねたという事だ。

この少女の純潔を俺が穢してしまう事に、未だに抵抗を感じている自分がいる。

当たり前だ。幾らお互いに愛し合っているといえども俺とイリヤの関係は『兄』と『妹』。

血が繋がっていないくとも、そこだけはきつと、いつまでも変わる事は無い関係だろう。

「シロウ」

イリヤは、そっと俺の頭を撫でてきた。

まるで『姉』が『弟』に、そうするみたいに。

けどその声だけは——俺を求める、『女』のものだった。

「ッ、——!?!」

——貫いた。

痛みによるものだろう。声にならない悲鳴をあげるイリヤの頭を、俺は優しく撫でた。

しばらくは動く事をせず、それでも容赦なく脳を犯してくる快感に堪えながらその時を待つ。

想像を絶するであろう痛みにもイリヤは涙を流していた。  
ずぎん、と胸が痛む。

しかし苦痛に顔を歪めていながら、イリヤは俺に向かって淡い笑顔を浮かべていた。

「ふふふ」

俺の頭を優しく撫でながら、イリヤは切羽詰まった声音で俺にそう言った。

「ああ」  
短く応えて、俺は動き始めた。

——布団の上で乱れるその姿は兄妹でも姉弟でもなく、1人の男と1人の女でしかない。

曖昧な境界線に立っていた俺達は、今宵、その境界線を容赦なく踏み越えたのだ。

「ッ、く」

——気付けば、俺も泣いていた。

どうして涙を流しているのか分からない。

イリヤを愛している。その全てを、愛している。

だと言うのに何故、こんなにも悲しい気持ちになるのだろう。イリヤを穢したからじゃない。

それが理由ならば穢す前に止めている。

これはもつと抽象的で、曖昧な感覚、だった。

「ぐっ——!!」

「あ、あああ——っ!!!」

押し寄せた快感の波が電撃のように俺を打ち据えた。

あまりの快感に脱力し、バランスを崩した俺はイリヤの身体にのしかかるようにして倒れ込んだ。

はあ、はあ、はあ、ハア、ハア、ハア、ハア——

獣のような荒い呼吸が重なり合っている。

知らず、俺とイリヤの指は絡み合い、俗に言う恋人手繋ぎのような状態だった。

至近距離で見つめ合った俺達は、恥ずかしくてすぐに視線を逸らす。しかし逸らした先が剥き出しにされたイリヤの肢体だったからか、その、再び元氣を取り戻したようだった。

「あ、んっ」

ビクン、とイリヤの身体が跳ねた。

そういえば、まだイリヤと繋がったままだったっけ。

「足りないの？」

「うっ」

「はあ、仕方ないなあ」

「っ、仕方ないって、イリヤ？」

「何って、決まってるじゃない。もう一回、しよ？」

それが遠回しなイリヤのおねだりなのだ気付いて、俺は小さく笑みをこぼした。

それが不服だったのか。

むっ、とイリヤは小さく頬を膨らませる。

その仕草が妙に子供っぽくて、可愛らしかった。

それがあまりに愛おしくて、イリヤの身体を抱きしめる。

愛おしくて、あまりに悲しい。

俺は悲しくて悲しくて、涙が止まらなかった。

何故かは分からない。涙の意味も理由も。

分からないのに、ただ悲しいという感情だけが涙となって、瞳から堰を切って溢れ出す。

イリヤを愛している。これ以上無いぐらい、愛している。

「ッ——!!!」

「や、あああああ——っ——」

その愛と悲しみをイリヤの身体にぶつけた。

先程のものとは違う、ただ互いの快樂のみを求める結合。

どろどろとした何かで脳が犯されていく。

それは、ある意味で自慰行為だ。

俺は胸に蟠る悲しみを、イリヤの嬌声と肉体によって沸き立つ性的興奮によって塗り潰そうとしている。

何度も何度も。俺はイリヤの中でその想いをぶちまけた。

全てが終わった後、残ったのは凄まじい程の疲労感と虚無感だった。

「ありがとう、シロウ」

ダメ、だ。もう眠くて何も考えられない。

視界は既に半分以上が塗り潰されていて、その中で鮮明に浮かび上がっているイリヤの穏やかな表情が、俺を安堵させた。

「それと、ごめんね。本当はこんな形でシロウから愛を貰うべきじゃなかった。それをわたしの都合で、魔術まで用いてシロウをその気にさせちゃったから」

イリヤが何か、言っている。

でも何を言っているのかは分からなかった。

なのに、再び、空っぽな心に悲しさが注がれる。

零れ落ちた涙を、イリヤの白く華奢な指が拭っていく。

そして泣いている俺を慰めるように、イリヤは俺の頭をそつと撫でてきた。

その手はあまりにも気持ち良くて、俺の意識が落ちていく速度が加速度的に上がった。

そんな俺の様子を見た彼女はクスリと笑って、

「大好きだよ、シロウ」

イリヤの唇が俺のおでこに優しく触れる。

そこで、俺の意識は完全に断絶した。

どうしてイリヤがこうした形で愛を求めてきたのか、その理由を俺は大して考えようとしなかった。

いや、考えたくなかったのだろう。

イリヤは分かっていたのだ。

この生活はすぐに終わってしまう、と。

それは聖杯の器として生まれた彼女の第六感的な感覚によるもの

なのか、それは定かではないけれど。

——そして、その『予感』は当たってしまった。

終焉は唐突に訪れる。

それはイリヤと初めて会った日と同じように、白く白く、真っ白な銀雪が冬木市に舞い降りた日の事だった。

「——敵は柳洞寺にあり、よ」

「む、明智光秀？」

「それは本能寺でしょ。朝っぱらから馬鹿みたいな事言わないでよね」

何気なく放った一言に、遠坂が冷たい一瞥と共にそんなつれないセリフを返してくる。

「今日の士郎、なんかおかしいわよ？なんかおかしなものでも食べた？」

「おかしいってなにがさ」

「いえ、リンの言う通りです。今日のシロウは何やら弛んでいいようですから。昨夜、何かあったのですか？」

「昨夜って……う」

思い出して、赤面した。

昨日のイリヤとの夜は思い出すと途轍も無く恥ずかしい。

俺もイリヤも昨日は乱れに乱れ過ぎた。

だがその恥ずかしさより、嬉しさの方が勝っているのはもはや言うまでも無いだろう。

うん。確かに今日は朝から浮かれていたかもしれない。

「そういうえば、イリヤ起きてくるの遅いわね」

「む、もう昼ですか。どうしますかマスター？イリヤスフィールを起こしに行くというのなら私が起こしに出向きますが」

「あ、ああ、そうだな。俺が起こしに行つてくるよ。今日の昼飯は遠坂だし、セイバーは遠坂がうっかりで皿を割らないよう見張つてくれ」

「随分な言い様じゃない、士郎」

「アーチャーの奴が言つてたんだよ。『凛はああ見えて重要な場面で事を仕損じる事が多々あるからな。貴様もうつか凛には気を付ける』と良い』って」

「士郎はアーチャーのモノマネの上手さに免じて今の失言は許してあげるけどアーチャー、貴方は別よ。士郎に変な事を吹き込んだ罰として、戦闘ではきつちり働いて貰うんだからね！」

「霊体化してこの屋敷を守護しているはずのアーチャーに向かつて、遠坂が大声で叫んだ。」

「やれやれ、手間のかかるマスターだな。」なんていうアーチャーのため息が聞こえてきた気がした。

何はともあれ、イリヤを起こしに行くとしよう。

もう昼の12時近く。昨日の情事が終わってそのまま眠つてしまったのが確か夜中の2時辺りだったため、あれから10時間ほど経過している事になる。

廊下に出て、イリヤに割り当てられた部屋ではなく自分の部屋を指して歩きはじめた。

イリヤは未だ俺の部屋で寝ているのである。

部屋に入ると、案の定イリヤが布団にくるまって眠っていた。

「おーい、イリヤ？」

呼びかけてみても反応がない。

仕方ないので布団を捲ると――

「あ。」

そこには、一糸まとわぬ姿となったイリヤが。

それもそのはず、昨日はお互いに着替えてから寝ようなんていう思考は持ち合わせていなかった。

かく言う俺も覚醒直後は何も着ていなかったのである。

「……………」

「まずい。見ているとまた変な気持ちになりそうだ。」

「しかしその美しさからか、自然と視線が吸い寄せられていつてしま  
う。」

「ん、ん」

「布団を捲った事による寒さからか、イリヤが僅かに身をよじった。  
その声でようやく正気に戻る。」

「昨日の事でイリヤはかなり消耗しているはずだ。」

「こんな真昼間からなんて、許されるはずがない。」

「イリヤ、もう昼だぞー」

「肩の辺りに手を置いてイリヤの身体を揺する。」

「起伏の乏しい胸や下腹部辺りからは視線を逸らした。」

「んうー。シロウ。」

「ようやくイリヤは起きてくれたようだ。」

「未だ覚束無い寝ぼけ眼で、ぼーっと俺の顔を見つめている。」

「おはよう、イリヤ」

「うん。おはよ、お兄ちゃん」

「イリヤは自分の身体を隠すように布団を口元まで引き上げて、俺か  
ら視線を逸らした。」

「耳が赤い事から、どうやら恥ずかしがっているらしい。」

「イリヤのそんな反応を見て俺も赤面する、という悪循環。」

「お互い何も話さないまま5分ほど経過した時だった。」

「着替え」

「え？」

「ポツリ、とイリヤが聞き取れるか聞き取れないか曖昧な声量で小さ  
く呟いた。」

「その、昨日激しすぎたからだと思うけど、立てなくて。着替え、手  
伝ってくれる？」

「物凄く恥ずかしそうに、イリヤはそう言った。」

「布団に顔を埋めてモジモジする様はなんとも可愛らしく、ついいじ  
めたくなっちゃいそうだが、イリヤが実は隠れDSだという事は分

かっているので何とか自制する。

「——ああ、もちろん。早く着替えて居間に行こう。遠坂達が飯を作ってくれてるからさ」

言って、イリヤの頭を撫でる。イリヤは気持ちよさそうに目を細めた後、満面の笑顔で大きく頷いた。

「柳洞寺にいるサーヴァントは2騎。キャスターとアサシンみたいね。キャスターのマスターは未だ不明だけど、アサシンのマスターだけはハッキリしてるわ。——キャスターよ。つまるどころサーヴァントがサーヴァントを召喚した、という訳ね」

「サーヴァントがサーヴァントを召喚、か。穏やかじゃない話だな」  
「そうね。けどイレギュラーには変わりないんだから色々制限は付くはずよ。それが何かは分からないけどね。ともかく、目的は柳洞寺に住まうキャスターとアサシン。作戦らしい作戦が無いのが癪だけど、情報が少ない以上仕方ないわ。とにかく突入するしかないわね。何か異論はある？」

遠坂の問いに全員が首を横に振る。

情報が無いのなら取り敢えずは進むしかない。

戦況の有利がこちらにあるとはいえ、停滞するだけではいずれ何かしらの対策を立てられるというものだ。

「柳洞寺に赴くのは——」

「私は降りさせて貰うわ」

遠坂の言葉を遮って、イリヤがそう口にした。

「イリヤは出来れば連れて行きたかったけど.....戦力で固めれば良いというものでもないんだし、分かったわ。イリヤはバーサーカーと一緒にこの屋敷を守ってて」

「ええ、そうさせて貰うわ」

イリヤの申し出は俺にとっても有難かった。

もう、イリヤには戦いに参加して欲しくない。

今度は聖杯戦争のために生きるんじゃない、一人の女の子として生

きて欲しいからだ。こんな世界の事は早く忘れて、イリヤと一緒に平穏な日々を暮らしたい。

—— 例え、その未来に破滅が待っているのだとしても。

最期にイリヤが、自分の人生は幸せだったと自信をもって誇れるようになったと感じてくれたのなら。

俺はそれで良い。それで、良いのだ。

「ッ」

ダメだ、今は集中しないと。今夜、柳洞寺に仕掛けるのだ。こんな調子じゃ何かへまをしてしまうかもしれない。

だから、集中しよう。今は未来じゃなく、目の前の敵を倒す事だけに集中するのだ。

準備をするために自室へ戻る。

とは言え、特別な準備は何も無い。

取り敢えずは時間までゆっくりしていよう。

「シロウ、いる？」

ひよこつと部屋に顔を出したのはイリヤだった。

「ん、いるぞ。何かあったのか？」

「ううん、何か特別な事がある訳じゃ無いんだけど」

そう言つて、イリヤは部屋に足を踏み入れて俺の元まで歩いてくる。俺の目の前で立ち止まったと思つたら、くると身体を反転させて俺の足の間にすっぽりと収まった。

愛おしげに、イリヤの身体を後ろから抱きしめる。

ふわりと漂ってきたいい匂いが、鼻腔をくすぐった。

その匂いに釣られるように、俺はイリヤの首筋に顔を埋める。

「ん」

くすぐったそうにするイリヤだったが、抵抗はなかった。

いつまでもこうしていたい。

イリヤと触れ合っている時間が何よりも尊い。

何でも願いが叶う聖杯。そんなものでも叶えられない願いがある  
とすれば、きつとこの瞬間だろう。

「汗の匂いとかしない」

「しないよ。凄くいい匂いだ」

「そう、かな。自分じや分らないから心配になっちゃった」

「ん、それは勿体ないな。凄くいい匂いなのに」

「自分の身体だもの。でも——」

イリヤは俺の足に収まったまま身体を反転させると、ぼふ、と俺の胸に飛び込んできた。

「シロウが居るから、いいの」

「——俺、あんまりいい匂いはしないとと思うぞ」

イリヤの身体に手を回す。すると今度はそれに応えるようにイリヤも俺の身体に華奢な腕を回してきた。

「そんな事ないもん。わたし、シロウの匂いが好き。」

おひさまみたいに暖かくて、柔らかいもの」

イリヤが胸に頬を擦り寄せてきた。

甘えん坊な子猫に、俺は僅かに笑みをこぼす。

「甘えん坊だな、イリヤは。まるで猫みたいだ」

「えーわたし猫は嫌い」

「あはは、そういえばそうだったな。けどイリヤを動物に例えるならきつと猫だと思うぞ」

「どこが似てるの？」

「甘えん坊な所と、気分屋な所。あと頭を撫でてあげると気持ち良さそうに喉を鳴らす所とかかな」

「わたし、そんなに甘えん坊さんじゃないもん」

イリヤは不満そうに頬を膨らませる。

俺の心の中で少しだけイタズラ心が鎌首を擡げた。

「でも頭は撫でて欲しいんだろ？」

「知らないっ！シロウのばか！」

それでも離れようとしないのでから、イリヤはやっぱり相当な甘えん坊さんなのであった。

仕方ないなあ、と苦笑しながら俺はイリヤの頭をゆつくりと撫でてやる。俺の手を受け入れるイリヤは、言葉通りに目を細めて気持ちよ

さそうに喉を鳴らした。

そんなイリヤを見ていたら、ついつい口角が緩んでしまうのも仕方がないというものだろう。

「シロウのくせに生意気。そうやってからかってばかりいると、いつか仕返しが来るんだからね」

「う・イリヤの仕返しは怖そうだな。ちなみに聞くけど、何をするつもりなんだ？」

するとイリヤはクスリ、と妖艶な笑みを浮かべた。

聞いたらずかたまったかもと今更ながらに自分の行動に後悔をしていると、

「シロウがわたしに夢中になるようなイタズラ、とか？」

そう言つて、イリヤは悪戯っぽく笑った。

俺を惑わせようとする言動はしかし――

「そんなのもう、手遅れだ」

――俺は既に、イリヤに夢中なんだから。

どちらからともなく、キスを交わした。

最初は確かめるように優しく。

後はお互いを求める合図に深く。

絡まり合う舌が蕩けるほど気持ち良い。甘美に痺れた脳はただ、目の前の愛を貪る事しか考えられない。

その愛に際限は無く、堕ちていけば戻れない。

「ふっあ」

イリヤの身体がびくん、びくん、と小刻みに跳ねた。

甘い鳴き声にぞくぞくと背中が泡立つ。

――少し、身体が重い。

魔力が少しだけ吸われているようだ。

しかしそれが分かったところで今更止められなかった。

「はあっ、はあっ、はあっ――」

しばらくして、舌を離す。

イリヤの口元にはうつつすらと銀色の唾液が垂れていて、恍惚とした表情も相まって妙に扇情的だった。

「ッ」  
だが、今回は堪えた。これから柳洞寺に赴くのだから、そんな事をしている場合ではない。

「ぎ、きて、そろそろ時間だな」

「うん」

明らかに物足りないという表情。

しかしイリヤも事情を理解しているため、これ以上は何も求めてこなかった。

竹刀は机に置いてあるため、一度イリヤから離れて後ろへと振り返る。そして、竹刀を手に取った時だった。

「いり、や？」  
後ろから、イリヤに抱きつかれたのは。

「っ、う、あ」

小さな嗚咽が聞こえた。

泣いている。イリヤが、泣いていた。

俺の背中に顔を押し付けて、溢れ出した涙を隠すように。

「イリヤ」

振り返る。何かに怯えるように、イリヤは泣いていた。

拭っても拭っても、イリヤの紅い瞳からは涙が止まらない。

涙の理由は聞けなかった。

「聞いてしまったらもう戻れないと、何かが警鐘を鳴らしていたのだ。」

「ごめんね」

しばらくして、イリヤは泣き止んだ。

俺は何も出来ず、ただイリヤを抱きしめる事しか出来なかった自分の無力さに歯噛みした。

「大丈夫だ。すぐに終わらせてくる。俺は絶対に、イリヤの元まで帰ってくるから。イリヤと暮らす、この家に」

俺に出来たのは、約束だけだった。

すぐにこんな戦いを終わらせて、この家でイリヤと暮らす。

だからそのためにも必ず帰らなくてはならない。

「……そうだ。どこか、行きたい所はあるか？」

「どこかって、どこ？」

顔を上げて、イリヤは不思議そうに俺の事を見上げてきた。

「どこにでも。イリヤが思っている以上にこの世界は広いんだぞ。この街じゃなくても良い。他の街でも、他の国でも、どこでも良いんだ。」

イリヤの望む所なら、どこにでも連れて行ってやる」

「」

イリヤは考え込むように顔を俯かせてから、

「デートが、したいな」

遠慮がちに、イリヤは小さな願いを口にした。

「恋人同士二人つきりでどこかに遊びに行く事をね、その、デートって言うんだって。」

わ、わたしとシロウは恋人同士だから、デートがしたい。お店で買い物をして、美味しいご飯を食べて、そして——他愛のない話をしながら、シロウと一緒にこの家に帰ってくるの」

—— どう、かな？

イリヤは俺に許可を求めるように、紅い瞳を向けた。

息が詰まる。イリヤはそんな当たり前の事を、恥ずかしそうに、幸せそうに、口にした。

込み上げてきた感情に涙が溢れそうになる。

しかし、ここで泣く訳にはいかなかった。

—— 笑顔でここに帰ってくるために、俺はここで泣く訳にはいかなかったのだ。

その代わり、イリヤの身体を抱きしめた。

強く。強く。もう絶対に離さないと誓いながら。

「行つてらっしゃい、シロウ」

「行つてくるよ、イリヤ」

抱擁を解く。部屋を出れば、もう戦場に向かうのみ。

イリヤのぬくもりとは暫しの別れだ。

——その事が、少しだけ寂しい。

けれど、何の問題もない。

またここに帰ってくる。イリヤと交わした約束を果たすために、またこの家へと帰ってくるのだから。

「それじゃ、準備は良い？ 士郎」

「ああ、行こう」

遠坂の言葉に短く応える。

気付かないうちに雪が降り出していたらしい。

庭へ出ると雪が積もっていて、靴底が僅かに沈んだ。

——もう、屋敷には振り返らなかつた。

ただ柳洞寺のみを見据えて、足を動かす。

静かに、埋葬されるように雪に沈む街並み。

それはいつか見た、銀雪の夜に似ていた——

「来なさい、バーサーカー」

雪が降る庭に出た。その中で、銀色の少女はいつも己を守ってくれていた巨人の名を呼ぶ。

音もなく現れた漆黒の巨軀は主に雪が当たらぬよう、僅かに身を落としました。

「わたしはね、バーサーカー。この家での生活が大好き」

「巨人は何も応えない。冷たい雪を一身に受けて、ただ静かに少女の

声を聞いている。

「最初は許せなかった。」

「わたしを捨てたキリツグも、そんなキリツグの愛を受けて育ったシロウも、そんな2人が暮らしていたこの家も」

「でも、それは違ったの。キリツグはわたしを捨ててなんかいなかった。シロウがね、教えてくれたの。キリツグは身体が動かなくなるまで、1年の間に何度も外国に行ってたんだって。」

「まるで、大切な誰かに会いに行くみたいだ」

少女の声は雪に吸い込まれて、消えていく。

少女はこの家で多くの事を知った。

本当の笑顔を。

独りきりの寂しさを。

誰かと触れ合う暖かさを。

誰かと離れる冷たさを。

誰かを愛するという気持ち。

誰かに愛されるという気持ち。

「わたしはこの家が好き。シロウが、大好き」

だから守るんだ。この家は壊させない。

愛する者に危険が迫っているのなら、己が力を全て用いて跳ね除けてみせる。

「威勢が良いな、人形風情が」

吐き捨てるような声は頭上からだった。

誰かが塀の上に立っている。纏う衣装は一般人のそれに相違ない。

しかし、その在り方だけが常軌を逸していた。

「どうやら私の来訪を事前に察知していたようだが、どうやってそれ

を見抜いた？」

「大した事ではないわ、王の中の王。」

——大切な人を守ると決めた女の子の想いは、  
貴方の千里眼すら上回る。たったそれだけの事だもの」

それが虚をついた言葉だったのか、黄金の青年は下卑た笑いを収めて少女の事を見据える。

「ふん、人形風情が言ってくれる。だが面白い。

空の器に人の意志を植え付けられただけの愚物がどこまで己が運命に抗えるのか見物だな。平伏し感謝するがいい。主従共々、我が至高の財をもつてその命の幕を引いてやるとしよう！」

青年の背後に、幾つもの黄金の波紋が広がる。

それが、開戦の合図だった。

少女は息を呑む。あの歪みに内包されているものが全て宝具なのだとしたら——

「お願い、バーサーカーっつ!!」

だが、恐れる事はない。

——今宵、少女は初めて愛する誰かのために戦う。

大好きな人と、その居場所を守るために。

「ッ————これ、は」

柳洞寺は既に壊滅的な状態となっていた。

あちこちに巨大なクレーターが形成され、本堂の方も至る所が崩壊

している。

何があつたのかは一目瞭然。強大な力が吹き荒れ、ここを襲つたのである。

「一体誰がこんな事を……って、士郎!？」

「どこに行くのですか、シロウ!？」

遠坂とセイバーが俺の事を呼んでいたけれど、その声を振り切つて構わず雪を蹴つて走り続ける。

——脳裏に浮かぶのは愛する少女の事だけだった。

心臓が嫌に軋む。叫びだしそうな心を押し留めて、足がちぎれんばかりに走った。

!!!!

ピタリ、と足を止める。衛宮邸が見えてきたのだ。

——衛宮邸からは、幾条もの黒煙が伸びていた。

何があつたのかなんて愚問だろう。

柳洞寺と同じく、襲撃されたのだ。

「くっ」

再び、走り出す。

衛宮邸の門を目指して、ひたすら足を動かした。

近くまで来ると何か燃えたかのような、焦げ臭い匂いが鼻腔を突いた。門は半壊していて、歪んでいた。

手をかけるが、開かない。

俺は開かない門を蹴り破つて、ごろごろと勢い余つて転がるように庭へと押し入った。

「」

絶句、とはこの事だろうか。

庭は柳洞寺のようにクレーターで埋め尽くされていて、見る影もない。しかし、屋敷だけは無傷で残っていた。

衛宮の屋敷は在るべき姿で、主たる俺を迎え入れている。

「イリヤ?」

名前を呼んだ。愛する少女の名前を。

「イリヤ イリヤ」

うわ言のように呟いた。だが何の反応もなく、無人の屋敷だけがポツンと鎮座している。

虚ろな心で中庭へと移動した。

そして、俺は見付けてしまった。

赤い。絵の具をぶちまけたかのように、赤い雪を。

「あ」

世界から音が消えた。

世界から色が消えた。

世界から、意味が消えた。

色が消失した世界。

その中で、目に痛い赤色だけが鮮明に映っている。

のろのろと緩慢な動きで歩んでいくと、

赤い雪の上に、少女は横たわっていた。

下半身は無惨に消失しており、上半身ですら左腕が肘ひじより上がないという有様で、眠るように目を閉じていた。

下半身があった場所からはぬらりと光る臓器がこぼれ落ちていて、噎せ返る程の鉄の匂いを放っている。

左胸には拳大の大きな穴が開いており、そこから胸骨と思わしき白い骨や形容し難い色の血管が覗いていた。

「あ、あ あ ああああ」

自分のものとは思えない声が漏れている。



を生きてきて、これからだったのに、どうしてイリヤなんだ？

「なか、ないで」

声が出た。か細く、今にも消えてしまいそうな声だ。

「いりや」

「うん、わたしだよ。おかえりシロウ。」

約束通りこの家に帰ってきて、くれたんだね」

いつもの笑顔で、イリヤは俺の帰りを喜んだ。

俺が大好きだと言った屈託のない笑顔で、いつもの様に。

「ああ」

言葉なんて出なかった。

胸中に渦巻くのは後悔と慚愧でしかない。

「ほろ。泣いちゃダメ、だよ。シロウはわたしを甘えん坊さんだって

言っただけど、シロウは泣き虫さんだね」

「ばか。もう、良いんだ。これ以上喋ったら、本当に」

「ううん。もう、わたしは死んじゃったの。」

わたしが未だこうして存在しているのは、昨日と今日シロウがわたしにくれた魔力のおかげなんだから」

「もう、助からない。他ならぬイリヤに現実を突きつけられて、俺は再度の絶望に襲われた。」

「でも、シロウが間に合ってくれて、本当に良かった。これで、最期のお別れが言えるんだもの」

「ごめん、おれっ」

震えた声が、涙と共に吐き出される。

「イリヤを、幸せにできな、かったっ」

嗚咽混じりの声で謝り続けた。

「それしか、俺に出来る事は何も無かったのだ。」

「イリヤを守れず、救えず、最期まで俺は何も出来ない。」

「そんな己の無力さを呪った。」

「不意に、柔らかい何かが頬に触れる。」

「それは、イリヤの右手だった。幼子を慰めるように、イリヤは俺の頬を優しく撫でていた。」

「あはは、手が届かなくて、頭を撫でる事が出来ないや」

「なに、を」

「わたしはね、シロウ。幸せじゃなかったなんて思っていないよ」

「そんな事があるはずない。未だ、やり残した事が沢山あったはずだ。なのにイリヤは嘘のない笑顔で続けた。」

「シロウが好き。シロウの事を考えているだけで心が暖かくなって、走り出したくなっちゃうぐらいシロウの事が好き。シロウに会うまで、わたしの心は凍ったままだった。だけどシロウが凍った心を優しく溶かして、止まった時間を動かしてくれたから——わたしは、愛情を知る事が出来たんだよ？」

「そんな、なの」

「むしろ、わたしが謝らなくちゃ。昨日の夜、シロウをその気にさせたのは魔術による作用だもの。」

「どうしてかは分からないけど、わたしは自分がすぐに死んじゃうんだって分かった。だからシロウに全てを捧げて、わたしもシロウの愛が欲しかった」

「」

「黙って、その独白を聞いていた。」

「イリヤと繋がっている時、俺はどうして悲しくなって涙を流していたのか。その理由がようやく解けた。」

「きっと、俺は分かっていたんだ。」

「イリヤと繋がっていたから俺もその別れを無意識のうちに悟り、悲しんだのだ。」

「約束、守れなくてごめんね？シロウは無事で帰ってきてくれたけれ

ど、わたしがダメだったみたい」

約束。ここを発つ前に約束した、デートの事だ。

「ツ・なに、言ってるんだ。デートならいつでも出来る。そんな当たり前な事、いつでも——」

聞き分けのない子供のような俺の言葉を、イリヤは嫌な顔一つせず聞いてくれた。

「デートだけじゃない。人間なんだ。やろうと思えば、なんだって出来る。ああ、出来るんだよ」

「だから、だから」

「行かないでくれ」と。

決して叶わない願い事を口にした。

それを聞いたイリヤは優しく微笑んで、

「ごめんね。こんな腕じゃもう、泣いてるシロウを抱きしめる事も、出来ないや」

イリヤは、肘から上が失われた左腕を伸ばしてくる。

既に出血は無い。血なんて、既に出し尽くしているのだから当たり前だ。彼女を動かしているのは昨日の夜と先程の口付けで俺が注いだ魔力によるもの。

「!!もう、きづと長くはない。」

「俺は何も出来なかった」

「シロウは、わたしに愛をくれたよ?」

「俺は、何も救えなかった」

「少なくともわたしはシロウに救われた」

「俺はイリヤを」

「わたしはシロウからたくさんの幸せを貰った。」

「だからもう、泣く必要なんてないの」

「そんなの、うそだ。まだあるんだ!!たくさんあったんだ!!イリヤとやりたい事が、まだ」

イリヤは幸せだ、と言ってくれた。

けど俺はそれを認めるわけにはいかない。

「だって、それを認めてしまったら。」

「イリヤはどこかへ、行ってしまおう……!!」  
「だからそんな事は無い。まだ、やり残した事があると叫ぶ。まだ終わらせない。」

「始まったばかりなのだから、まだ——」  
「うん。わたしも、まだシロウとしたい事いっぱいある。どこかへ出かけたリ、美味しいものを食べたり、キス、したり色んなこと、したい」

「だったら——」

「イリヤは首を横に振った。」

「その先は、言ってはダメだと言うように。」

「わたし、バーサーカーをお願いしたの。」

「わたしの命よりも、この家に攻撃が当たらない事を優先してって。ふふ、どうかな？わたし立派に、この家を守れたよ？」

「イリヤはそう言って、誇らしげに笑った。」

「ああ、イリヤは凄いな。本当に、凄い」

「震えた腕で、イリヤの頭を撫でた。」

「嬉しそうなイリヤの笑顔を俺は見つめている。」

「涙が止まらない。」

「身体の水分を全部出し尽くすまで、きつと止まらない。」

「最期に、キスがしたいな」

「掠れた声。もう終わりが近いというのに、イリヤは笑顔を絶やさず、そんな当たり前の願いを口にした。」

「イリヤの唇に、そつと俺の唇を重ねる。」

「最期のキスは、血の味がした。」

「暖かいね」

「ああ、暖かいな」

「もう身体の感覚なんて残っちゃいないだろうに。」

「イリヤは満足そうに、吐息混じりの声でそう言った。」

「シロウには多くのものをもらっちゃったね」

「そう、かな。俺はまだ、あげ足りない」

「ふふ、もう満足だよ。あんまり貰っちゃうと贅沢になっちゃう」

「ほか、贅沢なぐらいでちょうど良いんだ。イリヤは今まで頑張ってきたんだから、報われないと——」

その先は、声が震えて出なかった。

俺の瞳から落ちた涙がイリヤの頬を伝い落ちていく。

「あれ、シロウ？どこに行ったの？」

「う」

イリヤは俺を真っ直ぐ見つめている。

なのに、もう俺を見る事は出来なかった。

彷徨うように伸ばされる手。

その手を——俺はしっかりと握りしめた。

「ここに、いるよ」

「傍に、いてくれる？」

「ああ、いつだってイリヤの傍に寄り添ってたいからな」

「わたしも、離れたくないや」

「当たり前だ。離してなんか、やらないぞ」

「そっか」

イリヤは俺に手を伸ばす。

それはまるで、決して届かない星々に手を伸ばすように。

「最期に、これだけは伝えないと」

「ああ、どんな？」

イリヤがいつもと同じ調子で話すものだから、俺も湧き上がる感情を抑えていつもと同じ声で、イリヤの答えを待った。

「シロウ、大好き。今までシロウと一緒にいられて、本当に、幸せだった。だからシロウも」

「幸せに、なるんだよ。」

幸福に満ちた、花のような笑顔でイリヤは綻んだ。

それで満足したと言うように。

ふっ、とイリヤの手から力が抜けた。

雪のように冷たい手は、もう俺に暖かさをくれる事は無い。

「ああ、俺も大好きだ。これまでもこれから、イリヤの事が、大好きだよ」

その言葉はもう、イリヤには届かない。

俺の答えを待たずしてイリヤは行ってしまったから。

出会った時と同じだ。

雪のように現れて、雪のように行ってしまおう。

——そういえばイリヤと出会ったあの夜も、今みたいな銀色の雪が降っていたんだっけ。

「うっ、あああ」

イリヤの身体を抱きしめて、俺は泣いた。

脳が空っぽになるほど泣いて、泣いて、泣いて。

数日後、衛宮士郎は虚ろな心で聖杯戦争の勝者となった。

これが、俺が経験した第五次聖杯戦争の記憶。

残ったのは虚無感と自己嫌悪。

——愛する少女を失った俺は、文字通りの機械となったのだ。

## 第六節『対峙』

遠ざかっていた世界が引き戻される。  
引き伸ばされていた時間の流れは均一に。  
過去から現在。夢より現<sup>うつ</sup>。落下していた意識が闇の中から浮上する。

耳鳴りのようなノイズがクリアになると同時に、闇の中で揺蕩っていた誘蛾灯の如き光が徐々にその照度を上げていく。

閃光に目を焼かれ、我慢出来ずに目を閉じた。

光が収束した、と瞼越しに感じた瞬間に目を開ける。

すると、そこは見慣れた衛宮邸の居間だった。

あの夢の中じゃない。確かな現実の感触がそこにあった。

目の前にはイリヤの姿がある。

正しくは、イリヤの身体に憑依した何者か、だが。

「いま、の。」

静寂を破った第一声は、呆然とした様子のクロの声だった。今見たものは、どうやらこの場にいる全員が見たものらしい。

「趣味が良いとは言えないな。人の過去を掘り返しそれを他人に見せるとは」

「拗ねないの。言ったでしょ、これは貴方達にとっても大切な事だったの。生半可な気持ちで『彼』と挑めば、貴方達は『彼』の在り方の前に敗北するでしょうね。これは実力以前の問題なの。シロウ、貴方が過去と対峙しない限り『彼』に勝ち目は無いと思いなさい。半端な想いは、より強固な想いの前に打ち砕かれる。それは当然の摂理でしよ？」

「『彼』、だと？」

「本当は『黒幕』が誰か分かっているはずよ。ただそうする理由と、不可能を可能にする術が思い当たらないだけ。

「そう、不可能。いくら自然に消えないとはいえ、投影によって一つの街を形成するなんて絶対に出来ない。」

それは、貴方自身が一番理解しているんじゃないかしら？」  
決して自然には消えない投影。

そんな芸当が出来る者など、1人しかいない。

しかし、彼女の言う通りそれが出来た所でこの規模の街を形成する事は不可能だ。無論、する理由もない。

「1つ、聞かせてもらおう」

どうぞ、と彼女は視線で先を促してきた。

「君は私の知るイリヤなのか？」

先程見せられた記憶は間違いなく衛宮士郎オのもの。

その記憶は見せられる前から俺にも多少は残っていた。

何故か、なんて問うのは悪趣味だ。

そんなのは決まっている。ただ、忘れるにはあまりにも凄絶な話だったというだけの事。

幾度の戦場を越えて摩耗した己の記憶ではあるが、覚えている事だつてある。

だからこそ、問わねばなるまい。

君は、俺が守れなかったイリヤなのか、と。

「結論から言えば違うかな。」

でも数奇な事にわたしも『彼』も、今見せた貴方の『過去』と同じ『過去』を辿っているわ。イリヤスファイルという1人の少女を愛し、そして失った」

「完全に同じ道を辿った平行世界という事か？」

俺の疑問に、彼女は僅かに寂しげな表情を浮かべた。

「ううん。わたしを失って、聖杯戦争に勝利する所までは一緒だけどそこから分岐してる。」

『彼』はある意味、貴方とは対極な選択をしたのよ」

「対極、だと？」

「それは本人に聞きなさい。」

「だけど——そうね。少しだけ、ヒントをあげる」  
彼女は悪戯っぽく笑うと、

「人が絶望と対峙し、そしてもう絶望に抗う手段が無いと悟った時、与えられる選択は凡そ2つよ。」

「1つは、諦める事。もう尽くせる手が無いのなら諦めてしまえば良い。逃げると言い換えても良いかしらね。殆どの人間が手詰まりになった時はこの選択を選ぶでしょう。それは当然と言えば当然じゃないかしら。もう手を尽くせないのなら、その現実を覆す手立てが無いのなら、もう諦めるしかない。その現実を、受け止めるしかないんだもの」

「覆せない絶望。」

「例えば、『死』。」

「死んだ人間を生き返らせるなど不可能だ。」

「だからその死を受け入れ、諦めるしかない。」

「絶望を拒んだ所で、その人が生き返る訳では無いのだから。」

「そして2つ目は——」

「彼女は僅かに躊躇った素振りを見せた。」

「だがそれも一瞬で、」

「奇跡に追いつがる事。」

「絶望すら覆す事が可能な、人の身に余る奇跡を」

「まさか、それは」

「彼女は、憂いの感情を宿した瞳で俺を見ている。」

「仮に奴がアレを使ったとして、失われた命まで取り戻す事は不可能だ。いや、それ以前に奴がそんな方法で——」

「ヒントはこれで終わり。後は貴方達に任せても良いかしら？わたしの言葉は、もう彼には届かないもの」

「承知した。私達の目的と重ならない訳でもないからな。どちらにせよ、事の黒幕には用がある」

「俺の答えに彼女は淡い笑みを浮かべた。」

「すると次の瞬間、イリヤの身体がビクン、と一度だけ大きく震えて、」

畳の上に倒れ込んだ。

慌てて駆け寄ろうとしたが、その前にイリヤは緩慢な動作で起き上がった。

「何か、身体に異常はないか？」

イリヤは無言で小さく頷いた。

顔は深く俯いていて、表情を拝む事は叶わない。

美遊やクロでさえあの『記憶』を見てしまったのだ。

「この様子だと、イリヤも衛宮士郎オレの記憶を覗いてしまったに違いない。」

「全く、本当に悪趣味だ。何もイリヤ達に見せる必要など皆無だというのに。」

「君達には、見苦しいものを見せてしまったな。すまない」

「あれ、本当にあつた事なの？」

「どこかやるせない表情を浮かべたクロが、掠れた声で聞いてきた。」

—— 事実、あれは起きた事だ。

「実際に体験したのはどこかの世界の衛宮士郎オレな訳だが、英霊エミヤの『座』に刻まれている以上、それは俺の身に起きたと言つても過言ではあるまい。」

「真実、その記憶は今の俺にも思い出せる。」

その記憶があまりにも、衛宮士郎という人間にとって忘れる事の出来ないものだったためだろう。

「—— 事実だ、残念ながら」

「クロの、そんな表情を見るのは初めてだ。」

「あんな話を聞かされれば無理もないかもしれない。」

「対峙するにも未だ幼い3人には土台無理な話だろう。」

「全く、本当に趣味が悪い。己と対峙するだけなら、俺一人に見せるだけで充分だろうに。」

「しかし、彼女のおかげで私が立てていた仮説が証明された。——」

「イリヤスフィール。奴らが狙っているのは、間違いない君だろ」

「う」  
「え」

イリヤの俯いていた顔が上がる。

驚愕というよりは、ワケが分からないと言いたげな表情を浮かべていた。

クロも美遊も同様の反応を見せ、首を傾げる。

「まず、私とその仮説を立てるに至った経緯から話すべきかな。怪訝に感じたのは数日前、キャスターとアサシンがここに攻めてきた時だ。イリヤスフィール、そして美遊の背後にアサシンが突如として現れた事を覚えているかね？」

イリヤと美遊が、僅かに表情を曇らせてうなずく。

あれほど気にする必要などない、と言ったのだが完全に忘れろというのは無理な注文だったのかもしれない。

「覚えているけど、それが何だっというのよ？」

「あの時、アサシンはイリヤスフィールを殺そうと思えばすぐに殺せる距離だった。だが奴は私の接近に気が付いた瞬間にイリヤスフィールの首に伸ばそうとした手を引っ込めてわざわざ投擲剣を取り出し、こちらを迎撃しようとしたのだ。いくらアサシンのクラスとはいえ、奴ならば少女の細首ぐらい簡単にへし折る事が可能だろう。なのに、奴はわざわざ俺を迎え撃った。さっさとイリヤスフィールを始末して離脱するぐらいの猶予はあっただろう」

判断を見誤った、とは思えなかった。黒化した英霊は黒化しているが故に、その判断は機械的で無駄がない。

殺せなくてはならぬのに殺さなかった。

——それはつまり、殺す事以外に何かしらの目的があった、という事になるのではないか。

「キャスターに関しては何れも初めからおかしかった。魑魅魍魎の類を召喚し、私達の動きを止めてから本番の攻撃を叩き込むのなら未だ分かる。しかし、奴は召喚だけに専念し自分からは一切手を出さないというあまりにも回りくどいやり方をしていた。ようやく奴自身が動いたのは俺がイリヤスフィールを受け止めた瞬間。」

「えっと、つまり。」

「向こうには、初めから私達を殺す気は無かったという事だ。そして、

奴等はイリヤスフィールにしか狙いを定めていない。私に直接攻撃を仕掛けてきたのはイリヤスフィールを確保してからだからな。奴等は最初からイリヤスフィールだけを目的に攻め込んできたという事だ。それも殺す事ではなく、捕らえる事を目的としている」  
「イリヤだけを。」

美遊が不可解そうな顔をする。

当然と言えば当然か。敵の目的が分からない以上、イリヤだけが狙われていると言われても腑に落ちないだろう。

——そう、敵の目的が分からないのなら。

彼女のヒントが役に立った。

あんなの、殆ど答えみたいなものだ。

同じ境遇に立たされた俺だから、同じ選択肢を与えられていた俺だからこそ、それが分かってしまう？

「なに、それ」

ポツリ、と。イリヤは堪えきれないとばかりにそんな呟きを漏らしていた。

「どうしてわたしが狙われてるの。」

分からない。分からないよ、そんなの。」

きゅつと、不安に怯えるように両拳を握るイリヤの肩は震えていた。無理もない。

あんな『記憶』を見た後に己が素性も知れぬ輩に狙われていると聞かされるでは、不安になるのも当然だろう。

「今日のところはもう休むといい」

それだけ告げて、俺は居間を後にした。

安易な言葉はその場しのぎにしかならないだろう。

こればかりは本人に受け止めてもらうしかあるまい。

そんな事を思いながら、庭に出る。

一気に跳躍して、屋根の上へと飛び乗った。

ここならば異変が起こった時にすぐ対処出来る。

これぐらいしかしてやれる事はない。

だからせめて、この役割だけは全うするでしょう——

「」

全てが寝静まった深夜。

イリヤは身体を起こして、部屋の中を見渡した。

未だ夜明け前には程遠いようで、深い夜の闇が部屋に降りている。微かに聞こえてくる寝息はミュとクロのものだろう。どうやら、眠れないのは自分だけらしい。布団に入ってからずっとこんな感じだ。

目をつむって寝ようと努力してみるけど、しばらくしたらまた目が覚めてしまう。

寝苦しい、という訳ではない。

ただ——脳裏に、浮かんてしまう。

今日、わたしの身体に乗り移ってきたという誰かが見せてきたあの人の記憶。

意識こそ無かったものの、わたしにはしっかりとその記憶が脳に刻み付けられていた。

——あの人が最初にわたし達を避けていた理由が、何となく分かった気がする。

今のわたしは、あの人にどう接すれば良いのかが分からなかった。そんなわたしの心情に気付いていたのか、クロは『あの記憶は貴方のものってワケじゃないんだから、いつも通りに接しなさい』と布団に入る直前に言われたのだが、そのいつも通りとやらが今の自分には難しかった。

《おや、どうされました？イリヤさん》

「ルビー」

《む、元気がありませんねえ。ダメですよ、イリヤさん。魔法少女たるもの、いつも太陽の如き笑顔を浮かべていなくちゃ！ホラホラ、スマイルスマイル！》

「ちよわ、分かったから鼻つまんでぐりぐりするのやめてえ!!」「ルビーに蹂躪された鼻を押さえ、不満の声を上げる。

このステツキの突拍子のない行動には慣れてきたつもりだったが、甘かつたらしい。

「もう、いきなり何するの？」

《イリヤさんに元気が無いからです！》

「そ、それはだつて。」

《大方、あの人の距離感が、という理由なのでしようが、そんなの今更つてもんですよ。イリヤさんはこれまであの人の懐にズカズカと土足で上がり込んでいたようなものなのですから堂々としてりや良いんです、堂々と！》

ルビーは珍しく怒つたような口調をしていた。

「けど、気にするな、なんていうのは無理だ。」

あの記憶は、痛かった。

破裂しそうなぐらい胸が締め付けられて、痛かつたから。

「っ」

それは、彼がわたしに抱いてたであろう感情と似たものだつたのだろう。

彼を救いたい。彼の傍に寄り添いたい。出来る事ならば傷付き渴き、摩耗した心を癒してあげたい。

しかしそれは、わたしには、出来ない。

資格があるかどうかの話ではない。

あの記憶を見たら誰だつて分かる。

わたしでは、彼の傷を癒す事が出来ないのだと。

「わたしだつて、あの人と一緒に居たいよ。でも、あんな記憶を見せられたら、分からなくなる。」

「わたしと話している時のお兄さん、笑つてたけど、でもどこか辛そうな顔してたから」

それは恐らく、彼自身でさえ気が付いていない翳り。

『彼女』を守れなかった事に対しての罪悪感と、自身に対する無力感。無論、それをわたしに向けるのはお門違いの感傷というものだ。しかし——あの記憶を見てからだ、見方も変わってくる。

「そりゃあ、あの時はあまりにもわたしを避けるから思わず踏み込ん

じやったけど、わたしはお兄さんを苦しませたいわけじゃないもん」  
《けど、距離を置きたいわけではないのでは?》

「うん。だから困ってるの。どうすればいいか分からなくて」  
起こしていた身体をもう一度布団に預ける。

わたしは、あの人にとって『剣』そのものだ。

触れれば傷付けてしまう、鋭利な剣。

そんなわたしに、あの人と話す資格などあるのだろうか。

——それを考えると、怖かった。

「はあ、ちよつと夜風に当たってくる」

このままじゃ寝れそうにない。

わたしはルビーに一言そう告げると、布団から這い出して板張りの廊下へ出た。

冬の夜風は冷たくて、ホットパンツから惜しげも無く晒された生脚を撫でていく。ぶるりと身震いがした。

今着ている物は彼が投影してくれたものであり、クロの物と違って不思議と自然に消滅する事はないらしい。

何と使い勝手の良い便利な魔術だろう、というのがイリヤの感想だった。縁側の足元に揃えて置いてあったつかげに足を突っ込み、庭へと出る。

ほう、と口から細く軽やかな息を吐き出した。

白い熱を帯びた吐息が夜を霞ませる。

それは夜空へ上らんとするように立ち上ったが、やがて夜に溶けるかの如く薄れて霧散していった。

その行方を追うように上空を仰ぐ。

寶石を散りばめたような星々といつまでも変わる事のない満月が玲瓏たる白貌を覗かせていて——

「あれ」

はて、と首を傾げる。当然の事ながら、月というのは一定の時間が経つと見え方が変わるものだ。

新月、織月、三日月、上弦の月、十日夜の月、といったように、月の見え方は一定の時間で変遷を迎える。

満月が満月として夜空に顕現するのは確か1日程度が限界だったはず。だとしたら、計算が合わない。

——だって、これまでの夜は今までずっと、欠損の無い満月だったのだから。

「——こんな所で何をしている？」

「ひゃあああっ?!」

突如、後ろから聞こえてきた声に驚いてビクンと身体が跳ね上がる。絶叫が残響の尾を引いて、静寂の夜に響き渡った。

「はあっ はあっ」

尻もちを着いたまま、赤い外套に身を包んだ彼を見上げる。腰が抜けてしまったのか、必死になって立ち上がろうとしても上手く立ち上がる事が出来なかった。

——そんなわたしに、差し伸べられる手が一つ。

誰の手なのか、なんて決まり切っている。

恐る恐る顔を上げると、僅かに膝を曲げてわたしに手を伸ばす彼の姿があった。

「あ」

「わたしは、きつと驚いたんだと思う。」

彼の表情は少しだけ固く、躊躇いがちに伸ばされた手が迷っているかのように揺れている。

——彼からわたしに触れようとしてきたのは、初めての事だった。立てないわたしを引き上げるためとはいえ、その事実が胸の鼓動を高鳴らせ、蟠りを遠ざけていく。

「恐る恐る、わたしはその手を取る。」

彼は無理に引っ張らず、わたしが立ち上がるタイミングを見計らっ

てわたしに負荷をかけず引き上げてくれた。

「すまない。驚かせるつもりは無かったのだが」

「う、ううん。大丈夫。ちよつとビックリしちゃっただけだから」

わたしは僅かに顔を逸らしながら、彼ときこちない言葉を交わす。そんなわたしの様子を良くない方向に捉えたのか、

「何をしていたかは深く聞かないが、もう夜も遅いからな。君も早く自分の部屋で休むといい」

わたしを気遣うようにそう言つて、彼は足早に去っていく。屋敷の方ではなく、何故か屋根の上へと跳躍する。

待つて、と呼び止める暇も無かつた。

「」

わたしは言われた通り屋敷の中へと踵を返す。

通つてきた廊下を渡り、自室へと戻る。

そして自分の布団の枕元で眠りこけているルビーを引つ掴み、再び庭へと出た。

《ふわあ。どうしたんですかあゝイリヤさん？》

自分が外に連れ出されていると気付いたのか、ルビーは欠伸混じりの声でわたしに疑問を投げた。

「うん、ちよつと屋根の上まで飛びたいから手伝つて」

《そのためにわざわざ私を起こしたんですか、イリヤさん》

ルビーの恨めしそうな視線(?)を華麗にスルーして、わたしはいつもの魔法少女服へと転身する。

ふわり、と馴れた様子で自身の身体を浮かばせる。

上空から武家屋敷を見下ろすと、案の定、屋根の上に彼が静かに佇んでいるのが見えた。

近付いてみると、彼は片足を立てて目を瞑り、まるで眠っているかのように座っていた。

「今日は随分と夜更かしなんだな、君は」

彼は目を瞑つたまま、わたしに声を投げかける。

その声に僅かな呆れの色が混じっていたのは恐らく勘違いではあるまい。つい先程、もう休んだ方が良いと言われたばかりだからであ

る。

「お、お兄さんこそこんな所で何してるの？」

「私のは、単なる見張りだ。城の見張りは雑兵の役目なのでね。弓兵は弓兵らしく、こうして高台から周りを警戒しているというわけだ。最も、高台と言つてもそう呼べる程の高さはないが」

彼は僅かな沈黙の後、そう答えた。

確かに、彼は普段着ではなく赤い外套を纏っていた。

髪も下ろした姿ではなくオールバックにしている。

鷹のような鋭い目は健在で、わたしと話している時も辺りの警戒を解いてはいなかった。

「次はそちらの番だ。君はこんな時間に一体何を？先程は流したが、何か際立った理由があるわけでもないようだからな。理由がないのに起きている理由を聞かせてもらおう」

こちらには視線を合わせず、彼はわたしに問いを投げる。

「わたしのは、大した理由じゃないよ。ただ、ちよつと眠れなくて夜風に当たりたかつただけだ」

「そうか」

彼は短く応えると、それつきり会話が止んだ。

彼は恐らく、わたしが眠れない理由を分かっている。

分かっている、わたしに遠慮しているから必要以上に踏み込んでくる事をしないのだ。

——静寂は互いに遠慮した結果。

また以前のような距離感に戻ってしまったみたいで、その事が嫌だった。

ここで立ち去るわけにはいかない。

そう思ったわたしは彼の傍に腰を下ろした。

「——つしゅんー！」

冷たい風が一吹きし、わたしは小さくくしゃみを零した。

魔法少女の衣装は先程のホットパンツと同じくかなり足の露出度が高いため、冬の夜風は天敵となる。

その寒さに足を擦り合わせていると、何かがわたしの身体に頭から覆い被さってきて、視界が黒く塗りつぶされた。

覆い被さってきたものを自身の身体から引き剥がしてみると、それは厚手の毛布だった。

誰がこんなものを、なんて疑問はナンセンスというものだ。

「あ、ありがとう。」

感謝の声には応えず、彼はこちらを一瞬だけ一瞥してから再び視線を前に戻した。

受け取った毛布で身体を包む。

暖かい。暖かくて柔らかいその感覚は、身体を優しく暖めるだけではなく、心までも解していく。

「———そういえば、前にも似たような事があったね」

その感覚があまりにも暖かくて、優しかったからだろう。

まるで先程の張り詰めた緊張感を忘れてしまったかのように、気付けばそんな事を口にしていた。

前、というのはこの世界に来てからすぐの事。

半袖しか無く、寒さに震えていたわたしとミュに彼が投影したコートを同じように渡してくれたのだ。

「どうだったかな、私の記憶にはないが」

「あ、あったよー絶対に覚えてるでしょ、お兄さん」

分かりやすくとぼける彼に唇を尖らせる。

ルビー曰く照れてるだけらしいが、彼はそれをおくびも表情に出さないのも真意は不明だ。

———それからしばらく、2人で他愛のない話をした。

昨日までと違って、少しぎこちのない会話。

わたしから話しかけ、それに彼が淡々と応えるだけのやり取りだったがわたしにとっては嬉しかった。

———けど、彼にとってはどうなのだろう。

やはり、内心では痛みを抱えているのだろうか。

そう思うと怖くて、会話を止めなきゃならないという考えが頻りに脳裏を掠める。

しかし、会話が止まってしまつたら何か大切なものが途切れてしまふかもしれない。

それがもつと怖くて、会話を止めてはならないという強迫観念じみた考えに突き動かされる。

相反する2つの思考は摩擦する。

流れているのは中身のない、空っぽな会話。

彼はその伽藍がらんとした会話を、嫌な顔一つせずに受け止めてくれた。

だが、そんなものが長続きするはずがない。

1時間も経たないうちに会話は途切れてしまった。

恐怖が臍腑から染み込んでくる。

どうすれば良いのかと麻痺した頭で考える。

「……すまない」

「え」

わたしは耳を疑った。

すまない、と。彼はわたしに謝つたのだから。

「少し優柔不断が過ぎたようだ。全く、君には心配をかけてばかりで我ながら呆れるよ」

「そ、そんな事」

そんな事、無い。優柔不断なのはわたしの方だ。

どちらの選択肢も選択出来ず、どっちつかずの空っぽな答えを出しているだけ。

彼が謝る必要なんてどこにも無い。

「……私はな、イリヤスフィール。」

きつと未だ、イリヤの死を受け入れていないのだろう」

「っ」

「君と話していると、どうにも落ち着かない。胸を締め付けられているような痛みが走る。君に言われたばかりだということにな。自分と他人を勝手に重ねるな、と」

彼の独白は続く。わたしはそれを、黙って聞いていた。

……むしろ、わたしの方が謝らなくてはならない。

『わたしはわたしだもん!!そんな誰とも知らない人と私を重ねて、勝手に避けないで!!』

確かにわたしは、彼に向かってそう言い放った。

今思えば、あれ程までに無神経な言葉もそうあるまい。

彼の過去を知っていれば、そんな事は口が裂けても絶対に言えなかっただろう。

重ねるな、なんて無理に決まってる。

——だって、わたしだって重ねてしまった。

あの記憶の中に居たイリヤと私を、

わたしは自分自身で重ねてしまっていたのだから。

——今更ながらに痛感する。

わたしはあの時。彼に悔やんでも悔やみきれない程の酷い事を言ってしまったのだ、と。

その事実にはわたしは泣きそうになった。

泣く資格なんて、泣く権利なんてわたしには無いのに、瞼から涙が零れそうになる。

「——だが、私は思うのだ。そもそも人の死というものは受け入れるものではない、とね」

「え、それって、どういう？」

急いで涙を拭い、わたしは彼の横顔を見た。

——その顔に、憂いなんて一抹もなかった。

「人の死を受け入れる。それは確かに、これから生きていく上では大切な事かもしれない。」

——ならば問うとしよう。

人の死を、大切な人を失った悲しみと喪失感を受け入れるとはどういう事なのか、と」

「どういう事って——」

「受け入れる、と。言葉にすればそれは簡単だ。」

辛い事も憎い事も、何もかもを受け入れてしまえば、もう何も傷付く事はないのだからな」

彼の声が僅かに感情の韻を踏んだものになる。

突如として吹き抜けた夜風が彼の髪を攫っていく。  
ざあ、と風に揺れた木々が漣さざなみを奏でた。

「だが、私には到底無理だ。」

私はどうしても、イリヤの死を受け入れる事が出来ない。

ああ、受け入れてなんかやるものか。

もつと触れていたかった。もつと幸せにしてやりたかった。もつと一緒に居たかった。そして何より、俺はイリヤにもつと生きていて欲しかった——」

声は重く深く、夜の冷たい空気に染み込んでいく。

蒼い月光が、その悔恨を鏡のように映していた。

誰かの死を受け入れるとはどういう事なのだろう。

その死を仕方がなかったのだと許す事か。

運が無かったのだと嘆く事か。

「死とは受け入れるものじゃない。

その悲しみを、蟠る悔恨を、遺した想いを、全て余さず胸に抱いて乗り越えるものだ」

—— 死を受け入れる。

それは即ち、その死を許してしまう事だと彼は言う。

大切な人を失った痛みと悲しみも悔恨も、全てを脇に置いて仕方なかつたと自分に言い聞かせる行為である、と。

仕方が無かつた、なんて簡単な言葉で片付けられる死なんてこの世には存在しない。

だからこそ、彼は受け入れられないのだろう。

現実から目を背けているのでは決して無い。

彼のそれは間違いなく、大切な人の死と向き合った末の『対峙』である。

彼は死を嘆くのではなく、死を背負う事を選んだのだ。

「これが、俺の得た答えだ。もう、どうしたら受け入れる事が出来るの

かを探索する必要は無い。

俺はイリヤが遺したものの全てを背負い、乗り越えて進んでいくのだと、そう、決めたからな」

そう言つて、彼はわたしの頭に手を置いた。

大きくて暖かい感触が手のひらを通じて伝わってくる。

彼は今まで、頑なにわたしに触れようとしてこなかった。いつだつてどこか触れる事を躊躇っていて、一線を引いた接し方をしていた。

そんな彼と今こうして触れ合っているという事が心臓の鼓動を跳ね上げる。

「——ありがとう、イリヤ。君には今まで大きな心配と気苦労をかけてしまったな。だが、もう迷いはしない。だからもう、私に対してどう接すれば良いかなんて迷う必要も無い。いつも通りの君の笑顔を、見せて欲しい」

見覚えのある、柔らかい笑顔。

わたしの懊悩はやはり見抜かれていたらしい。

その言葉に、もう翳りは無かった。

吹っ切れたとは言い難いかもしれない。しかし文字通り、彼は悠久に続いた問答への答えを得たのだ。

「あ、っ、」

涙。瞳から零れた透明な雫が頬を伝い落ちる。

涙腺の決壊はそれだけで終わらず、堰を切ったように溢れ出した涙はすぐに頬を濡らす。

月の輝きを映した涙は淡く光を放ち、キラキラと水晶の如く輝いて見えた。きっとそれは、今まで抱えていた不安に対する涙だったのだろう。

——そっと、彼の指がわたしの涙を拭う。

顔を上げると、少し苦笑気味な笑顔を浮かべた彼が居た。

頭に置かれた手はそのままに、優しく幼子を宥めるかのような手つ

きでわたしの頭を撫でている。  
わたしは我慢できずに、顔を押し付けるようにして彼の胸へと飛び込んだ。

「っ、怖かった、怖かった、よ。」

「———そうか。不安にさせて、悪かった」

彼の穏やかな声が耳朶に響く。

震える身体に、彼の逞しい腕が回される。

それだけで寒さと震えが遠ざかって、胸が暖かくなった。

「落ち着いたか？」

「う、うん。その、ごめんなさい」

「謝るのはこちらの方だよ。最初に君に言われたように、私は君をイリヤと重ね合わせてしまっていた。君からすれば、それは呪いにも等しいものだっただろう。そんなものを関わりのない君に背負わせていた事は、本当にすまないと思っている」

「でも、そんな事。」

「———だから、これからはしっかりと『君』を見据えることにしよう。他の誰でもない、君という唯一無二の存在を、な」

「———それは、ある種の決別だったのかもしれない。」

もう彼の瞳には、彼が愛した銀雪の少女は映らない。

乗り越えるとは恐らく、そういう事なのだと思う。

胸に押し付けていた顔を上げた。

わたしは瞳だけで訴える。本当にそれで良いのか、と。

「良いも何も、本来その形が一番正しいだろう。」

この運命を君に背負わせるには、あまりにも酷だ。

それに君を巻き込む事は出来ない。私に成すべき事があるように、君には帰る場所がある。故に、君を巻き込むような真似は出来ない。だから大人しく、私にイリヤと呼ばれてやってくれ」

どこか悪戯っぽく笑う彼に、胸が締め付けられた。

しかし同時に胸がきゅん、と甘い疼きを発する。

——嬉しかった。

ようやく『わたし』を本当の意味で見てくれた事が、何よりも嬉しかった。

暖かい幸福に包まれている。

彼の身体は暖かくて、とても落ち着いた。

だからだろう。ゆっくりと、徐々に瞼が落ちていく。

弛緩した身体が眠気を訴えている。

何とか抗ってみるけれど、どうやら勝てそうになかった。

「——おやすみ、イリヤ。遅くなり過ぎてしまったが、ゆっくり眠るといい」

その言葉を最後に、暖かい眠りに落ちていく。

これはきつと、夢も見ないほど深い眠りに違いない。

——おやすみ、お兄さん。

わたしはその言葉を最後に、暖かい眠りの中へと完全に意識を断絶させた。

遠くの空には、夜明けを告げる黄金が差している。

淡い金色のヴェールがまるで見守るように、柔らかく二人を包み込んでいた。

第七節『人の身に余る奇跡を手にしたが故にこの世全ての絶望を背負ったモノ』

—— 嗚呼、この瞬間をどれだけ待ちわびた事か。

つい先刻、闖入者によつて斬り捨てられたアサシンが死の間際に残してくれた映像を見た『彼』は分かっていたとはいえ、雷の如き衝撃に打ちひしがれた。

映っていたのはまだ幼さの残る、銀髪の美しい少女。

服装こそ奇妙であるが、それは『彼』が追い求めてきた少女の姿に相違無かつた。

「ク、ハ——」

彼の者は地の底で独り、乾いた雄叫びを上げた。

白く白濁した瞳からは滂沱の涙を流し、終いには奇妙な小躍りをする始末。その者は歪んだ歓喜に溺れていた。

光の届かない闇の世界に哄笑が響き渡る。

心臓の鼓動は際限なく加速し、とにかく騒ぎ立てなければ気が済みそうに無かつた。

身体がこれ以上無いぐらい昂っている。

熱り勃つ男性器。

下手をすれば射精して果ててしまいそうなぐらい、その怒張は異様な熱に犯されていた。

酩酊する。

酩酊する。

酩酊する。

酩酊する。

頭の中に直接麻薬を打ったとしても、こんなに気持ち良く狂う事は出来ないだろう。

興奮と崩壊が鬨ぎ合う。

快樂を孕みながら、泥の中に墜ちていく。

しかし、悲しいかな。

——彼の者にとってそれは、久しく忘れていた人間らしい感情だったのだから。

その狂笑は文字通り、三日三晩に渡って続いた。

涙はとうに止まり、代わりに赤い鮮血が死んだ瞳から滲み出ている。乾いた鮮血が瞳や頬に張り付いている。

軽く声を出してみると、粘液質な血反吐が吐き出された。

三日に渡って狂ったかの如く叫び続けた弊害だろう。

ズギン、と喉を走る鋭い疼きも今は歓喜のスパイスにしかならず、再び歪んだドス黒い狂笑を上げる。

「ああ、けど、邪魔する虫がいるな」

笑みを鎮めた『彼』は、再びアサシンが残してくれた映像を反芻する。瞼の裏に映るのは赤い外套を纏った騎士。

あと少しで『彼女』が手中に収まる所であつたというのに、それを阻んだ憎き邪魔者だ。

「どうして邪魔をする。どうして阻もうとする。どうして拒絶する。どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして——!!」

蹲って、狂ったように声を吐き出した。

紡がれた言葉はもはや呪詛に近く、見開かれた瞳は憎悪と執念に犯されている。

人として終わった身でありながら、その感情だけがその者を人たらしめ、願いへと駆り立てる行動原理だった。

否、もはやそれは願望では無い。!

歪んで穢れきつた、『妄執』の成れの果てである。

「邪魔をする者は殺す。

殺してやる。殺してやる。殺してやる。

オレの願いを邪魔する者は、全て」

怨嗟の声が地の底で反響する。

渦巻いているのは黒い瞋恚の炎。

それは、幾度となく紡がれた怨嗟だ。もう『彼女』を取り戻せない  
と知り、この場所で絶望の日々に明け暮れた。

.....  
——だが、その絶望もじきに終焉を迎える。

『彼女』をこの世界に引きずり込んだ時点で目的の半分以上が達成されたも同然だ。

後は『彼女』を手中に収めて、邪魔する愚か者どもを殺し潰すのみ。しかし、こちらから出向く事は残念ながら叶いそうに無かった。精々、動ける範囲は柳洞寺がある円蔵山までといったところである。

「いや。」

まるで先程の怨嗟が嘘であったかのように燻っていた灼熱を鎮め、別段自ら攻め込む必要は無かつたと思ひ直す。

■ 奴等の目的を考えれば、この場所に来るのは必然。

■ ならばここで構えていいだけの事だ。

■ わざわざ赴く必要などない。

.....  
——そう。待つだけで全ては終わる。

■ 今まで過ごした時間に比べれば刹那に過ぎないその時間が、今は永遠に引き伸ばされたかの如く長く感じた。

■ まだかまだかと、まるでクリスマスを待つ幼子のようにその時を待ち続ける。

「.....」

——まるで、星々に祈りを捧ぐように。

■ 彼は無言で、空を覆い隠す天蓋を見詰めていた。

.....  
——実に二日ぶりとなる睡眠から目を覚ました。

■ 空は快晴。雲一つない、とまではいかないが、抜けるような青空が果てしなく広がっている。

■ 冬にしては暖かい陽射しが降り注ぎ、心なしか外の植物たちも彩づいているように見えた。

■ 文句一つ浮かばない、澄みきった朝の光景が眼前に惜しげもなく広

がっていた。

「——まったく、あの子達にも困ったものだ」

苦笑を浮かべながら、居間に続く廊下を歩く。

二日ぶりの睡眠となったのは言うまでもなくいつ敵方が襲ってきても良いように見張りをするためであった。

本来ならばそれを継続するつもりだったのだが、それをイリヤに見られてしまった事を発端として美遊に伝わってしまい、『今日はしっかりと寝てください』とかなり厳しく厳命されてしまったのだ。

意外と、美遊は頑固な性格をしているのかもしれない。

居間に近付くにつれ、味噌汁らしきいい匂いが漂ってきた。朝餉の準備も美遊が受け持つと言って聞かなかったので不承不承任せたが、味の方に関しては心配していない。

心配しているのは労力だ。4人分を1人で用意するのは大変だろうし出来れば手伝いたかったのだが、結局すげなく断られてしまった。

「おはよおーお兄さん」

居間に入る直前で、洗顔後と思わしきクロと出くわした。

欠伸混じりの挨拶が、弛緩した穏やかな空気を象徴づけている。

「ああ、おはよう………パジャマの前ぐらいしつかりと止めてくれ。目に余る」

「あら、朝から刺激が強かった？でもそれなら、目のやり場に困るって言う所じゃない？フツー」

ちろり、と小さく舌を出して年不相応な妖艶の微笑みを浮かべるク口に俺は嘆息する。

「寝ぼけているのならもう一度顔を洗ってくる事を勧めておこう。まったく、君はいつもそうだが少しは節度を持ったらどうなんだ？あまり他人にそういう態度をとっていると、いつか本当に痛い目に遭うぞ」

「あら、その辺は大丈夫よ。お兄さんみたいな信用の出来る優しい人にしかやらないもの」

「いや、そういう事じゃなく……」

俺が言いたかったのは大人をからかうのはやめてくれ、という事だったのだが。

言葉が続けようとする俺をクロは「はいはい」と適当にあしらひ、再び欠伸を漏らしながら居間へと入っていく。

俺は頭痛に堪えるようにこめかみ辺りに手をやった後、クロに続いて居間へと足を踏み入れた。

途端、先程も感じた朝餉の匂いが鼻腔をくすぐる。

匂いの元は台所からだ。台所には鍋をおたまで掻き混ぜているらしき美遊と——何故か、イリヤの姿があった。

どうやら美遊と共に料理をしているらしく、時折、ダン！という些か平穩さに欠ける音が聞こえてくる。

包丁で大根を切っているらしいのだが、包丁使いに慣れていないためか、力が入りすぎているように見えた。

「イリヤ、そんなに力を入れなくてもいい。力で切るんじゃない、動かして切るような感じで——」

「う、うん。やってみる」

イリヤはぎこちない動きで包丁を動かしている。

その表情は真剣そのもので、俺が入ってきた事にも気が付いていないみたいだった。

「……」  
幾ら何でも、ここでしゃしゃり出る事はしない。

大人しく朝食の準備を待つ事にしよう。

「そんなに心配しなくとも、隣にはミュが付いてるんだし大丈夫よ」  
ぐでんとテーブルに伏せていたクロが、唐突にそんな事を口にした。

「む、心配しているように見えたか？」

「そりゃもう。まるで、初めて料理に挑戦する我が子を見るような表情だったわ。変な所で顔に出やすいわよね、お兄さん」

呆れたように嘆息するクロ。

そんなに顔に出てたのか、と軽く頭を抱えていると、台所の音が止

んだ。

「あ、おはようお兄さん！」

「おはようございます」

イリヤが屈託のない笑顔を浮かべ、美遊はぺこりと礼儀正しいお辞儀をする。対極とも言える二人の挨拶に苦笑しながら、俺もおはようと恒例の挨拶を交わした。

それから俺は、どうしてイリヤが料理をしていたのか聞いてみる事にした。

「イリヤ、どうして君が料理を？」

何気なく放った問いに、イリヤは目を泳がせる。

「そ、そのお兄ちゃんに食べて欲しいなあって。ほ、ほら！人理を守るお仕事が終わったからお兄ちゃんに会えるでしょ？そうなった時に少しでも成長したわたしを見て欲しいなあって」

イリヤは恥ずかしそうに、そう口にした。

お兄ちゃん、という事はイリヤの本当の兄の事だろう。

何とも微笑ましい話である。食べさせる相手が何処その朴念仁でなければ俺も素直に喜ぶ所だ。

「なるほど。そういう事ならカルデアに戻った際に私も微力ながら力になろう」

「え」

イリヤがこちらを見て驚いている。

そこまで驚く事でも無いだろうに、と苦笑した。

イリヤの気持ちを知れば、料理が出来るか否かは置いておいて誰も力が力になりたいと思うに違いない。

これは単純に、俺もその1人だったというだけの話しだ。

「無論、君が良ければの話だが」

「っ、う、うん！教えて欲しい！約束だからね！」

イリヤは満面の笑顔を浮かべて喜びを表す。

びよんびよんと嬉しそうに跳ね回る姿は、見ている微笑ましかった。するとそんなやり取りを見ていた美遊が、

「わ、わたしも教えて欲しいです。おに、お世話になった人達に、お礼

がしたいから」

最後の部分は消え入りそうな声だった。

お世話になった人にお礼がしたい。それもイリヤのものと同じく、応援したくなるような動機だ。

拒む理由などありはしない。

「ま、わたしは別に料理がしたいわけじゃないけど、将来お兄ちゃんと結ばれた時のために出来た方が良いわね。うん、決定。そのお料理教室、わたしも参加するわ！」

少々不純な理由で、クロも参加を決めたようだ。

だがその理由に異を唱える者が1人。

「だ、ダメー！クロの理由不純過ぎー！」

「アナタだって似たようなものじゃない。お兄ちゃんに褒めて欲しいからなんですよ？」

「そうだけど、うぐぐ、何も言い返せない」

「クロの理由が不純なのは否めないけど、大丈夫。わたしがイリヤを一流の料理人にしてみせるから、安心して」

「ミュはミュでおかしなスイッチが入っちゃってるし、普通の料理だけで良いからね!？」

がやがやと騒がしくなる朝の食卓。

微笑ましくはあるものの、折角イリヤと美遊が作ってくれた料理が冷めてしまうのも忍ばれる。

「まあ、理由はどうあれ料理が出来ることは良い事だ。及ばずながら、基本的な調理法ぐらいは教授しよう」

そう言うのと、イリヤ達はぱあっと表情を花開かせた。

「うんっ！約束だからね！」

その言葉に、俺は苦笑した。約束、とはまた大仰だと思う。料理なんて、カルデアにさえ帰る事が出来なのならばいつでも教えられるのだから。

ややあって、俺達はようやく朝食にありついた。

所々野菜の切り方が甘かったり硬かったりするけども、暖かくて、食べる人への想いが伝わる料理だった。

だから、俺は密かに願ったのだ。

あの『約束』が、イリヤ達に料理を教えるという約束が、きちんと果たされますように、と。

そんな当たり前の日常を、何よりも願った。

穏やかな朝の団欒を終え、俺達は外へと出た。

目的は買い出しではない。俺達が向かっているのは『遠坂邸』。

セイバーのマスター、遠坂凛の潜伏場所である。

何故そのような場所に向かわんとしているのか。

それを説明するには、約1時間ほど前まで遡る事となる。

「あまり気は進まないのだが、そろそろ現状の打開策を考えなければならぬ頃合いだ」

それは朝食と後片付けを済ませ、一同がゆつくりと団欒を楽しんでいる場だった。俺から切り出したその話は、そんな朝の穏やかな時間を引き裂くのに充分事足りる話題である。

「現状って？」

「バカね、イリヤ。そんなの、敵の手のひらで泳がされてる危機的状況に決まってるじゃない」

「キャスターとアサシンの襲撃からもう5日も経ってる。そんなに経っててあれきり全く襲撃がないのはおかしい。お兄さんの推測通り敵の目的がイリヤだというのなら、それこそ途切れる事なく襲撃があってもおかしくない」

「ああ、美遊の言う通りだ。あまりにも前回の襲撃から期間が開き過ぎていて。考えられる要因は2つと言ったところか。

単純に攻めあぐねているか——或いは、こちらから打って出てくるのを待っているのか。前者なら有難いのだがね」

無論、後者である確率の方が高いのが現状だ。

「わたし達が打って出てくるのを待ってるって事は、やっぱり

「そういう事で良いのよね？」

「え、どういう事？」

クロが言わんとしている事を、イリヤは想像出来なかったようだ。次々と出てくる新情報に首を傾げて困惑するイリヤを見かねて、俺は口を開く。

「つまり、敵は確信しているのだろう。私達が、自ら敵の方へ仕掛けるという事を」

「そうでなければ説明がつかなかった。」

俺達の方から打って出てくるのを待つというのは、俺達に敵を攻め込む理由、目的が無ければ成立しないからだ。

しかし、今のところ俺達にそれ相応の目的、理由は無い。

ならば考えられる可能性は一つ。

——この世界に来てしまった原因。そしてカルデアに帰還するための『方法』を、敵が握っているのだとしたら。

それならば、敵があれきり襲撃してこないのも頷ける。

何せ、自ら攻め込まなくても向こうから来てくれるのだ。

自らが用意した場で戦えるのだから、敵からしてみればそれだけでかなり大きなアドバンテージとなるだろう。

しかし、だからと言ってこのまま停滞という訳にもいかない。

こちらから攻め込む気配が無いと判断されれば、敵はその全勢力をもって俺達を潰しにかかるだろう。

それは、一番避けたい事態だ。

全方位を囲まれてしまえば逃げ場もなくなってしまおう。

それと言うのも——

「一番のネックは、敵の戦力が未知数という事だ」

今までの戦いを頭の中で反芻する。

第一戦目、ライダー。

シャドウ・サーヴァントと同じような理性を失った劣化版だと思われる。まるでこの武家屋敷を守る番人だとも言えるかのようには、屋敷の敷地内へ足を踏み入れた俺達に向かって敵意を剥き出しにした。

俺の『偽・螺旋剣』によって消滅。

第二戦目、キャスター& a m p ;アサシン。

ライダーとは違い単なる劣化版というわけでは無い様子だったが、理性は失われていた。キャスターは何故か傀儡を召喚し俺達にしかけるだけ、という厄介ではあるものの回りくどい戦い方を取った。

戦いの最中、アサシンがイリヤを狙い、それを阻もうとした俺は毒が塗られた投擲剣によって負傷。

アサシンは消滅させたもののキャスターには逃亡を許す。

簡潔に纏めるとこんな感じだ。

共通点を上げるとするのなら、どのサーヴァントも理性が失われていたという事ぐらい。

だがその些末な共通点こそが、俺を惑わせている要因だった。

「ライダー、キャスター、アサシン。この三騎のサーヴァントがもしも一本の線で繋がっていたとしたら————他のサーヴァントとて、例外に漏れないかもしれない」

もしこの予測が正しければ、敵の戦力は俺達では打倒しえないものとなるだろう。だからこそその遠坂凛である。

『————理性を失っていないサーヴァントと出会うのは初めてだったから、協力出来る事が何かあるなら協力し合おうみたいな感じに思ってたんだけど』

遠坂凛が衛宮の屋敷に訪れた際、彼女がそんな事を口にしていたのを俺は覚えていた。

互いに戦力が足りない今、両者の利害は一致している。

つまるところ、彼女とならば協力関係を結べるのではないか、と考えたわけだ。

十字路から坂へ上って、遠坂邸を目指す。

暫く歩くと、坂の上に屹立する立派な洋館が見えてきた。

間違いない。遠坂邸である。

「一応、この場所は敵の魔術師の工房という事になる。君達は後ろに下がっていたまえ」

イリヤ達を門から下がらせた後、門に手をかけて屋敷の敷地内に身

を踊らせる。外観はいつか見た遠坂邸と相違ない。

敵ながら、どこか冷たい邸宅。万人を近付けず、逆に踏み入れたら逃がさない。そんな印象を受ける屋敷だった。

「む・不在、か？」

遠坂邸には人の気配が無かった。

ノックしてみようか、と考えたがそれは必要あるまい。

もしも彼女達が居るのなら、敷地内に足を踏み入れた時点で侵入者対策の防衛術式等が襲いかかってくるはずだ。

魔術師の工房とは元来そういう場所である。

「間が悪い事にどうやら不在のようだ。これは、暫く時間を置く必要がありそうだな」

「そうなんですか。じゃあ、これからどうしますか？」

美遊が、これからの動向を聞いてくる。

さて、どうしたものか。俺としては特に何も無い。

まさかこのメンツだけで敵に挑む訳にもいかないし、いつも通り屋敷の中で大人しくしているべきだろう。その旨を伝えると、

「うーん、また屋敷の中で待機かあ。これが何のしがらみもない普通の日常生活だったら何の不満も無いんだけど、敵に追い詰められるかもしれないって考えると、どうしても素直にたのしめないわね」

「そう、だね。クロの言う通りかも」

クロの言葉に、イリヤは同調する。

それも当然の反応か。敵に囲まれていると言っても過言じゃないこの状況を楽しめと言われても無理な注文だ。

とはいえやる事が無い以上、屋敷に戻るしか無い。

俺達は踵を返して、屋敷への帰路へと着いた。

「なに、あれ」

傍らに居るクロが呆然と立ち尽くしている。

驚愕の表情を張り付かせる彼女の顔は険しく、未だ状況を呑み込め

ていないようだった。

イリヤと美遊も同じで、両者共に唾然と固まっている。一体、何が起きているのか。

俺はかつて、武家屋敷が存在していた場所に瞳を向ける。

そこには、武家屋敷なんて存在していなかった。

武家屋敷を、謎の球体が覆っていたのだ。

まるで汚泥。表面はぬらりとした奇妙な光沢を放ち、流れてくる腐臭が鼻腔を突く。

ずぎん、とこめかみが軋む。アレは存在してはいけないものだと、俺の中で何か警鐘を鳴らしている。

視界を圧迫する闇。網膜を犯す歪んだ色彩が目痛い。

「あ、あ、あ」

「っ、待てー！」

屋敷に向かって歩こうとするイリヤの腕を掴んで止める。

アレは触れてはいけないものだ。もし触れてしまえば、恐らく取り返しのつかない事になる。

「あの『泥』に触れるな。あれに触れてしまえば正気を保てなくなるぞ」

「でも、でも、屋敷が」

イリヤは泣きそうな表情で俺を見上げる。

クロと美遊の2人も、どこか悔しそうに口を引き結んでいた。

「結界のようなものか。屋敷をぐるりと囲むようにして円蓋が形成されている。キャスタの仕業なのだろうか」

それにしても、穢れすぎているくらいがある。

彼女がこんな醜悪な結界を作るだろうか。いや、人の生気を蒐集していた彼女も彼女だが。

兎に角、だ。この程度の結界ならば破戒すべき全ての符による無効化が可能はず。

そう思い、破戒すべき全ての符を投影しようとした瞬間——ズルリ、と。泥の中から何か這い出てきた。

「っ」

それは、俗にゾンビと呼ばれる屍に似ていた。!

「だらりと力なく垂らされた両腕。半ば溶け落ちている眼球。腐敗した身体は異臭を放つ汚泥を纏い、覚束無い足取りで歩を進める。それは一体だけではなく、アスファルトに広がった泥の中から次々と這い出てきた。その数に際限はない。泥の傀儡は恐るべき速度でその数を増殖させながら、俺達へと迫り来る。それはもはや壁の様相を呈していた。」

「な、なにこの数。」

「今いるだけでも軽く100は超えてる。お兄さん、どうしますか？」  
「無論、一度後退だ。限界が見えない以上、戦いは海の水をバケツで無くそうとするようなものだからな。囲まれる前に脱するぞ。イリヤ、美遊。君達は上空から安全な道を探してくれ。私とクロは後ろの亡者共を削りながら君達に着いていく。」

矢を後方へと放ち、前線を崩して指示を出す。

しかし――

「ううん。わたしは、逃げない。この結界を仕掛けた人に会いに行く。その人を倒せば、この結界も消えると思うから。」

それはイリヤらしくない、僅かな怒気を孕んだ言葉だった。

しかし結論から言えば、イリヤの言葉は正しい。

このまま逃げた所で終わりが無いのなら、それを引き起こしている『元凶』を叩いてしまえば良いのだから。

しかし、それはあまりにも――

「それに、あの人達。苦しんでる。」

イリヤは迫り来る亡者を見て悲痛な表情を見せた。

如何なる邪法かは分からないが、あれは恐らく、元はこの世界に居た者を傀儡として組み替えたものだ。

イリヤはそれに気付いた。

「魔術に関する知識を持たない彼女がどうやって気付いたかは分からないが、気付いてしまったからには見過ごせないだろう。彼女はそういう性格だ。苦しんでいる人を、放っておけない。」

「あんなに酷い事をする人を、わたしは見過ごせない」

手にしたステッキを強く握りしめ、イリヤは真つ直ぐ俺を見据える。深紅の瞳には、決して曲げる事の出来ない強い意志が込められていた。

「イリヤのくせに、なかなか良い決断じゃない。何度もやられっぱなしってのは癪だし、わたしは賛成よ。それにどうせ後々戦り合うんだし、早い方が良いでしょ？叩きのめすついでに、カルデアへ帰る方法も聞き出すとしましょう！」

「クロ、それが第一の目標。わたしも賛成です、お兄さん。どこまで逃げられるか分からない以上、それを引き起こしている者を間引いた方が確実ですから」

パシン、と威勢よく拳と手のひらを打ち鳴らすクロと対照的に感情の起伏に乏しい声音で怖い事を言う美遊。

調子こそ異なるものの考えは一緒だ。

元凶を叩く。

言葉にしてみるのとは簡単だが、前述した通りそれは難しい。

敵の戦力は未知数。その場の考えに任せ、安易に攻め込むのは下策では無いのかと俺は考える。

しかし、一方でイリヤ達の言葉を正しいと受け入れているが故に思考は相克する。

そう、分かっているのだ。状況を打開するには元凶を叩きに行くことが何よりの近道であると。

しかし、俺の中の『何か』が制動をかける。それは単に相手との戦力差についての懸念だけではなく――

「分かった。キャスターが陣取っているのは恐らく柳洞寺だろう。そこまで一気に突破するぞ。陣形は先程告げた通りだ。力を温存するため、極力戦闘は避ける」

俺の言葉に、3人は大きく頷き返す。

迷っている暇はない。例え危険だとしても、それが最善の道だと言うのなら進むしかないのだから。

「ルビー、転身！」

《久し振りの戦闘、燃えてきましたよー!》

「サファイアもお願い」

《了解です美遊様。あと姉さん、戦闘は極力避けて下さいね?》

イリヤと美遊。2人の魔法少女の転身を見届けた後、俺達は後ろから追隨してくる亡者共から距離を取るようにして地を蹴った。極力戦闘を避ける。これは単に消耗を避けるという意味合いだけではなく、むしろ俺は攻撃しない事を重きに置いていた。

——アレらが全て人間だったというのなら、イリヤ達に攻撃させるのはあまりにも酷だ。

「——賽は投げられた、か」

何が俺に柳洞寺へと向かう事を躊躇わせているのか。その答えは、その地へと赴けば自ずと分かる事だろう。

「ここね 柳洞寺」

ポツリ、と長い階段を仰ぎながらクロが呟く。場所は柳洞寺。キャスターの根城と推測されている場所である。

日本の中でも有数の霊地である冬木市。その中でも特に霊脈の質が高い場所がこの場所であった。

柳洞寺周辺には自然霊以外の霊的存在——すなわち、サーヴァントの侵入を阻む結界が張り巡らされている。

その効力たるや凄まじく、令呪で『近付くな』と命令されるのに等しい強制力がかかると言われている。

しかし、絶対不可侵という訳では無い。

唯一結界の効果が及んでいない正門——そこからならば、境内に押し入る事も可能だ。

無論、それは敵も理解しているだろう。

向こうは正門だけに警戒を割けば良い。

そう、真正面からのこのこと現れた俺達を迎え撃つだけで良いの

だ。圧倒的地形不利。無闇に突っ込めばそれだけで命取りとなるだろう。

「誰も居ないみたいだけど」

「けど、気配は感じるわ。確実にここでビンゴよ。けど、幸か不幸かと言えばだいたい微妙よね。こんな堅牢な場所に引きこもられちゃ太刀打ち出来ないし、どうするの？お兄さん」

「どうするも何も、一気呵成に突っ込むしかあるまい」

「う、やっぱり？」

「物理保護を全開にして一気に突破。出来る、かな？」

美遊が不安そうに首を傾げる。敵の攻撃の密度にもよるだろうが、確かにカレイドの障壁だけでは絶対とは言いきれない。

「よし、私が先行しよう。君達は私が境内に踏みこんでから、少し遅れて入ってきてくれ。くれぐれも固まるなよ。狙いが1つに絞られるほど危険度が増すからな」

俺を先に行かせる事にイリヤ達は難しそうな顔をする。

だが、道が一つしか無い以上こうなる事も仕方ない。

その旨を伝えるとイリヤ達も、俺を慮る不安げな瞳は変わらなかったが頷いてくれた。

ある程度意向が纏まった所で、俺達は境内まで伸びる長大な階段に足をかけた。

バラバラに響く4人の足音は硬い。登っていくごとに、己の足が重くなっているような錯覚を覚える。

まるで処刑台にでも向かっているかのような気分だ。

謎の緊張感に包まれる中、俺達は終始無言で足を動かす。

不安や恐怖とも違う、正体不明の圧迫感。

これは、そう――

「お兄さん？」

張り詰めた静寂を破ったのは美遊だった。

心配そうな表情を浮かべて、俺の顔を覗き込んでいる。

「どうかしたんですか」

「いや、大丈夫だ」

どうやら今の俺は余程深刻そうな顔をしているらしい。気持ちが悪く落ち着かない。心臓の鼓動が煩く耳朶を打つ。

——ああ、美遊に心配されても仕方がない。

今の俺は、有り体に言えば緊張していたのだ。

それも極度のもの。今すぐにここから逃げ出してしまいたいと思うぐらい、境内に向かう事を、俺の身体が『拒絶』していた。

「そう、ですか」

腑に落ちないという表情をしながらも、美遊はそれ以上踏み込んでくる事は無かった。

——覚悟を、決めなくてはならない。

全てを背負って進み続けると決めた時から、いずれ対峙しなくてはならなかった『壁』だ。

それが、僅かに早まっただけの事。

最後の階段を登る。寺の境内が視界いっぱい広がった。

敵が何かを仕掛けてくる様子はない。

誘い込まれている。そう考えるのが妥当か。

「行くぞ」

それは、半ば自分自身に向けた言葉だった。

一息に地を蹴る。5mも無いその距離が、あまりにも遠い。覆い被さる迷いを振り切るように、俺は最後の一步を踏み込んだ。

それと時と同じくをして。

「来たか」

地の底で、何かが動いた。

それは立ち上がると、ふらふらと酔っているかのような足取りで出口へと向かい始める。

——歪んだ笑みを浮かべながら、踊るように。

境内に足を踏み入れる。境内に人の気配は無く、ただ閑散とした光景が広がっていた。

未だキャスターからの迎撃はない。

1秒、2秒、3秒——10秒。

どれ程待っても、敵からの攻撃が来る事は無かった。

「もしかして、居ないとか?」

「——いや」

キャスターの気配はする。境内の奥。本堂の辺りからキャスターの噓せ返るほど濃密な魔力が漂っている。

しかし、それでも境内に踏み込んだ俺に対して攻撃を仕掛けてくる様子は無かった。

ひとまずは安全だと判断したのか。イリヤ達が辺りを警戒しつつ境内へと足を踏み入れる。

——途端。

山門に巨大な魔力が渦巻いた。

それは瞬時に形を変えて、薄いヴェールのような形状へと変化した。紫色のヴェールには頭が痛くなりそうなぐらい複雑な幾何学的模様が刻まれており、その術式の堅牢さを物語っている。

午後の陽光は途絶え、代わりに夜の帳が上空を支配する。

光の消えた境内。その中で紫色のヴェールだけが妖しく存在感を放っていた。

「閉じ込められたっ!?!」

「ふん。一度足を踏み入れたが最後、決して標的を逃しはしない、か。この陰湿な手口。キャスターのものに相違ない。最初に伝えた通りだ。奴に纏めて捕捉されないよう分散を——」

俺の言葉は最後まで続かなかった。

視界の端で突如、赤い雷が弾けたのだ。

正確に表すのならば、それは雷などでは無い。

雷と見まごう程鋭い槍の一閃。

狙いは心臓。余りにも正確なその一刺しは、必ずや俺の心臓を貫く事だろう。

心臓目掛けて落ちてくる雷光。

槍の穂先が左胸を穿たんとする直前——ギン、という甲高い金属音が境内に轟いた。

決して躲せなかった一撃。決して防ぐ事の出来なかった一撃。しかしそれは——その槍が、本物であった場合の話に限る。

——サーヴァント、ランサー。

獣を思わせる軀やかかつ屈曲な瘦身を青いタイトツのような衣装に身を包んだ生粋の武人。

朱の呪槍を携え、それを振るう姿はまさに荒ぶる獣。

洗練された技と獣の荒々しさが融合したその技は、天上の域にあると言つて良いだろう。

その技を、確かに目の前の『敵』は有している。

しかし、それだけだ。彼の槍術は彼が彼であるからこそ完成するもの。理性を失ったものが成せるものでは、決して有り得ないのだ。

それを表すように、朱槍の穂先を交差させた黒と白の夫婦剣が寸での所で受け止めていた。緋色の閃光を散らしながら拮抗する剣と槍。

俺は無理に力を込めず、逆に槍に込められた力をいなすように槍の柄に刀身を滑らせ——

「ふ——！」

ランサーの胸に、強烈な蹴りを叩き込んだ。ゴロゴロと小石を巻き込み砂塵を舞い上げながら10m以上も転がっていく青い瘦身。

「誇り高きケルトの戦士が、随分と墮ちぶれたものだなランサー。その志し、よもや本当に犬にでも食わせたか？」

干将の切っ先をランサーへと突き付ける。

理性を失った状態でその挑発めいた言葉が理解出来ていたかは分からないが、それを聞いたランサーの双眸が獣のように吊り上がった。どうやら向こうもやる気らしい。

「お兄さん、あれ！」

イリヤが俺を呼ぶ。イリヤの視線を追うと、遙か上空にキャスターの姿が見えた。漆黒のローブを猛禽類を思わせる翼へと変化させて飛行している。その背後には数多の魔法陣。その全てが俺へと向け



「っ、！」

キヤスターから魔力砲が飛んできて、一度後退する。全く、クロのおかげで余計な手間が増えてしまった。

「しかし！」

考えようによつては利用出来る。

そう思いながら、俺は上空に視線を向けた。

炸裂する桃色と蒼色の閃光。

さながら、夜空に咲き誇る花火と言った所か。

イリヤと美遊の魔力砲がキヤスターを攪乱し、クロが放った矢が夜気を裂いてキヤスターへと肉薄する。

3人の攻撃の対応に追われるばかり、キヤスターは何も出来ず格好の的となっていた。

「イリヤ達に対しては防御に徹し、俺にだけ攻撃を加える、か。『目的』のためなのか単に先に俺を始末する腹なのか。どちらにせよ厄介極まりない」

その言葉が聞こえていた訳では無いだろうが、キヤスターの魔力砲が再び俺へと肉薄する。そちらに視線を向けていたからだろう。隙ありとばかりにランサーの槍が迫る。その槍を闘牛士のようにいなし、俺はランサーと立ち位置を反転させた。

そして、炸裂。

キヤスターの魔力砲がランサーの背中中で炸裂する。

予想外からの攻撃に踏鞴たたらを踏むランサー。

俺はその隙を見逃さなかった。

「終わりだ！」

オーバーエッジさせた巨大な刃によつてランサーの瘦身を両断する。見事に分かれた上半身と下半身からは、赤い鮮血ではなくヘッド口のような奇怪な液体が噴き出していた。

「やっ、と」

残るはキヤスターのみ。そう思い、再び上空へと視線を向けようとした時だった。

グシヤリ。





——何より『それ』は、狂っていた。

考えてみれば分かる事。これまでの断片を全て集め、当てはめていくだけの簡単なパズル。

さあ、黒幕はだあれだ？

「——衛宮、士郎」

変わり果てたソイツの名を俺は口にする。これこそが、俺をこの地へ向かう事を躊躇させた理由だったのだ。

——さあ、ここからが本当の意味での対峙。

過去に捨てた選択を今一度否定しろ。

己が全てを背負うと誓ったのなら、全てを捨て去り『愛』を選んだ己を否定するがいい。

## 第八節 『贗作者』

—— かつて、一つの選択が行われた。

一人の男は愛する女性を失った失意の中、虚ろな心で聖杯戦争を勝ち残り、聖杯を手中に収めた。

手に入れた聖杯を壊すか、使うか。

それが、一人の少年に委ねられた選択だった。

結論から言おう。俺は、聖杯を破壊した。

セイバーの手も借りず、心の内に蔓延る迷いを断ち切るように、俺は俺自身の手で聖杯を破壊した。

しかし、思うのだ。もしもあの時、聖杯を使う事を選択していたら、どんな未来が訪れていたのだろうか、と。

—— その答えが、目の前にある。

衛宮士郎。俺がついぞ選ぶ事はなかった未来を選んだ、もう一人の『俺』。正義を捨てて、イリヤだけの正義の味方になると決めた男。そしてその果てに、『悪』を背負ったモノ。

果たして、どちらの選択が正しかったのだろうか。

共に、同じ一人の少女を愛した。

共に、その少女を失い絶望の底に堕ちた。

そして—— 俺は少女の命を諦め、『奴』は諦めなかった。

それだけが、俺と奴の違いだったのだろうか。

「つ」—— ああ、なんて酷い話だろう。

古い鏡を見せられているかのようだ。

その選択は、俺と対極である。

しかし対極にあるからこそ、ソレは俺と同じ存在であると言えた。すなわち、表と裏。光ある所に闇が生まれるように、対極にある遍く存在はその全てが影響し合っているのだ。

それが、ただ反転させただけの同一存在であるが故に。

—— 僅かに少年の面影を残した、その姿。声はどこか錆び

付いていて、口調はもはや別人のそれと化している。しかし、それでも分かってしまう。

幾ら人格や見た目が変わろうとも。

——その在り方は、変わらなかつたのだろう。

「ひ、がん、どういう、事？」

「そんなの、決まっているだろう？俺達のイリヤをこの手に取り戻すんだ。それが、俺達の悲願。悠久の時を経て成就する、奇跡なのだから」

男はさも当たり前のように口にする。

——話が噛み合っていない。

まるで、奴の悲願とやらがこの世全ての人間にとっての福音だとも言うかのような口振りだった。

異常。この一言に尽きる。衛宮士郎という男が元来持ち合わせていた異常性を反転させると、ここまでのモノが生まれるのか。

「え、と」

イリヤは混乱していた。兄と同じ姿を持つモノがいきなり目の前に現れ、意味の分からない事を言っているのだから無理もない。しかし、形容し難い恐怖だけは感じているのか。イリヤは奴から少しずつ後ずさり、距離を取ろうとしていた。奴はイリヤの反応に不思議そうな顔をする。

「どうしたんだ、イリヤ？」

「ッ——！」

その言葉に、イリヤは顔を恐怖に染め上げる。

悪意や殺意があつた訳では無い。

その逆だ。奴は至極真つ当な顔をして、得体の知れない言葉を発しているのである。

「どうして、怖がるんだ？」

色の抜け落ちた声でした。冷たいとはまた違う。

本当に、奴には分からないのだ。

どうしてイリヤが自分を見て恐怖を感じているのか、奴には理解する事が出来ない。

「早く、こっちに来るんだ。こっちに来れば、イリヤは救われる。救済を、遂げられるんだ。だから、早く。早く俺の傍に」  
奴が手を伸ばす。その手はイリヤに向けられていた。  
いや、手だけではない。瞳も、言葉も、何もかも。  
奴はイリヤにしか、意識を向けていなかった。  
同じく状況が読めないまま固まっているクロや美遊、そして俺の事は意にも介していない。

「否、本当の意味で言えばイリヤにだって興味を示していないかった。」

それが、イリヤが感じていた恐怖の正体。

奴はイリヤを見ながら、イリヤの事を見ていない。

奴に必要なのは、イリヤの器カラダだけなのだから。

「おにい、さん。」

前が出る。奴から庇うように、イリヤの前へ。

「下がっていたまえ。アレは、君が相対して良い相手ではない」

「で、でもあの人は」

「あの人は、苦しんでる。」

イリヤの心は恐怖と憂慮の中で揺れ動いていた。

苦しんでいる人を放っておけないその優しさは、イリヤの美德だと俺も思っている。

しかし、今の奴に必要なのはそんな優しさでは無い。

奴の言う『救済』がどんなものなのかを知る俺だからこそ、それを確信出来た。

イリヤの頭にポン、と手を置く。

大丈夫だ、と言外に告げる。

「悪いが、そういう訳だ。この子を貴様に渡す訳にはいかない。そう易々と渡しては、我がマスターに何を言われるか分かったものでは無いのでね」

両手には干将・莫耶。胸に固い決意を刻み、俺は自身の闇とでも言うべき存在と対峙した。

奴の瞳がようやくイリヤ以外のものに向けられる。

最も、それは明確な憎悪に歪んだ瞳であったが。

「離れる。今すぐにイリヤから離れる!!! 全てを投げ出した半端者の贗作者が、俺の邪魔をするなアツ!!!」

「ふん。耳が痛い話ではあるが、私とてこんな破綻した舞台に興味は無い。だが、私には彼女達を然るべき場所に帰さねばならない責任があるのですね。それは間違っても、貴様の膝元などでは無いぞ狂人」

奴の憤慨を一笑に付す。

有り得たかもしれない結末を、否定する。

イリヤを渡す訳にはいかない。

悲願。救済。そんな綺麗な言葉で取り繕ってはいるが、俺の推測が正しければ奴のやろうとしている事はそんな綺麗なものではないからだ。己の思惑が看破されている事に思う所があったのか、奴は激昂を微かに収める。

「アーチャー。俺はお前を召喚した覚えはない。なのにどうして、お前がここに居る。この世界にはもう抑止力は働かないはずだ。貴様が介入する隙間など無かったというのに、何故——」

「っ、待て。抑止力が働かないだと？」

抑止力に召喚されたという認識は確かに無かった。

しかし、抑止力が働かないとはどういう意味だろう。星を運営する上で抑止力の存在は不可欠のはずだが——

「ああ、そうだ。今更抑止力が介入するはずもない。

だというのに——何故、貴様がここに存在し俺の邪魔をする。その2人が引きずり込まれたのはまだ領ける。物理的な距離が近かったという事もあるのだろうが、聖杯という同じ性質を持つ同士だ。引かれ合うのは道理と言える。しかし、貴様に関しては理由がない。道理ではない。ここは俺の世界だ。俺の許しを得た者しかこの世界へ立ち入る事は叶わない。だからもう一度聞くぞ、アーチャー。どうして、貴様がここに存在する？」

その2人、というのはクロと美遊の事か。

確かに共通点があるならば引かれ合うのは道理だろう。

しかし、今思えば奴の言う通り俺が呼ばれた理由だけは謎のヴェールに包まれたままだった。

「一体、俺は何処の誰に召喚されたというのだろうか？」

「いや、今考えるべき事ではなかったな」

「一瞬揺らぎかけた思考を取り纏める。奴にさえ分からぬ事柄が存在したとて、俺のやる事は変わらない。」

「奴がイリヤを狙うというのなら、その思惑ごと叩き斬る。」

「それだけで、今は充分だ。」

「お兄ちゃん。聞く限り、そう気軽に呼べるような存在じゃなささうね。お兄さん、わたし達はどうすれば良い？」

「君達はイリヤの傍に。——私が、奴の相手をする」

「ト人で戦うつもり？その、上手く言葉には言い表せないんだけどあの人は、何か」

「クロが、言葉を彷徨わせる。」

「その認識は俺も間違っていないと思う。」

「敵の戦力が未知数、というのは以前にも話した通り。」

「そして俺達をこの場へ誘い込んだという事は、向こうには何かしらの策がある事に他ならない。」

「そんな俺達の思考を知ってか知らずか、奴はこれが最後だとも言うかのように、もう一度感情を消した声と表情で問いかける。」

「もう一度だけ、もう一度だけ聞く。」

「イリヤ、俺の隣に来るんだ。お前はそんな『半端者』と共に居るべきじゃない。俺だ。俺にしか、イリヤは救えない。ああ、そうだ。その忌々しい半端者なら理解出来るだろう！イリヤを救えるのは俺だけだ！この方法なら、絶対にイリヤを救える！だから、俺の元へ」

「イリヤに向けられたその言葉は、もはや慟哭に近かった。憐れな一匹の獣の慟哭。」

「それは、揺れていたイリヤの心を動かすに事足りる。優しい少女はこう思ったハズだ。」

「苦しんでいる彼を救いたい、と。」

「わたし、は」

イリヤが震える足で一步を踏み出す。

それが少女の選択だった。

苦しむ彼を見ていられない。その苦しみから解放する事が出来るのならばと、少女は奴に歩み寄ろうとしていた。

それが少女の選択である以上、俺に止める権利など無いのかもしれない。しかし

「俺からも一つ、聞きたい事がある」

これだけは、奴に問わねばならない。

「貴様は言ったな。イリヤを救済出来るのは自分だけであり、その事を私ならば理解出来るはずだ、と。それは何故だ？何故、貴様はそのように考えた？」

「何故、だど？そんなの決まっている。貴様だって後悔しているはずだ。イリヤを死なせてしまった事を、あの子を幸せにしてやれなかった事を。なら、どうすれば良いのか。どうすればあの子を幸せにしてやれるのか。答えは簡単だ。——そう、死んでしまったのなら、生き返らせばいい」

イリヤ達の間には戦慄が走る。

——俺だけが、その答えを知っていた。

何故ならそれは、俺が一度捨てた選択肢だったから。

聖杯戦争に勝利した後、衛宮士郎に残された選択は2つあった。聖杯を使うか、壊すか。

結論から言えば、奴は聖杯を使ったのだ。

イリヤを生き返らせるため、決して触れてはならない奇跡に手を伸ばした。故に、対極。俺と奴は同じ存在でありながら、決して交わる事の無い時針だった。

「そんなの、おかしいよ。だって、そんな——」

「おかしい？」

イリヤは震えながらも、言葉を絞り出す。その言葉を耳にした奴は聞き捨てならないとばかりにイリヤへと鋭い視線を向けた。

「おかしい事なんてあるものか。イリヤの死は誰にも望まれなかったものだ。俺は勿論、セイバーも、遠坂だってその死を悔やみ悲しんで

いた！そんな、誰も幸せにならない結末を拒んで何が悪い！そんな結末を無かった事に来るのならば、継り付くのが当然だろう！！」

——ああ、誰だって同じだ。

大切な誰かの死はとも受け入れ難く、出来ることならばその死を無くしてしまいたいと考えるのはおかしな事ではない。俺とて、かつて自分の願いを天秤にかけて、懊悩した。

「おかしなのは、お前の方だろうアーチャー」

● 奴の矛先が俺へと向く。

● その声は怨嗟を孕み、澱んでいた。

「お前はイリヤを愛していると言いながら、イリヤを救う事を諦めた半端者だ！！何故だ、何故彼女の命を諦める事が出来た!?お前はイリヤの死を何とも思わなかったっていうのか!?!」

「」

「答えろアーチャー!!お前は、どうしてイリヤの命を諦める事が出来た!!お前は俺であるはずなのに、どうして道を踏み誤ったんだ!!」

● 半端者。ああ、奴の言う通りだ。俺という存在を表すもので、これ以上の言葉はない。

● いつだって、俺は間に合わなかった。抑止の守護者という機械に成り果てた今とて同じだ。

● 何もかも中途半端な、憐れな贖作者。だから、そんな俺が出す答えは、きつと変わらず中途半端なのだろう。

「——イリヤを生き返らせる。無論、その願いが浮かばなかった訳では無い。貴様の言う通りだ。あんな、誰も望まなかった結末を無かった事に来るのならばその方が良いに決まっている」

「それが分かっているながら、何故——!」

「貴様の姿を見て気付いた事が一つだけある。俺はその選択を選ばなかったんじゃない。選べなかったんだ」

● そう。俺は、選んだのではない。

——時は遙か昔。俺がまだ、衛宮士郎であった時に遡る。聖杯戦争に勝利した俺が、聖杯と相對していた時だった。

『イリヤを生き返らせる事は、聖杯をもってしても難しいでしょうね。遺体が残つていれば別だっただろうけど、完全な死者蘇生は魔法以上の奇跡だもの。その上で、貴方に聞いわ。貴方は聖杯を使って、イリヤを蘇生させる？それとも——』

『俺、は』

『シロウ、時間がありません。もしもシロウがこの聖杯を使わないというのなら、我が聖剣をもってこの杯を破壊します』

『選べ、ない。俺は選べないよ。だって、イリヤを生き返らせる事は、イリヤへの。』

『良かった。それが分かっているのなら、貴方は狂気に吞まれる事はないもの。貴方に決断出来ないというのなら、私が聖杯を破壊する。——アーチャー、お願い。』

『承知した』

空を穿つ一条の光。アーチャーのそれが聖杯を貫き、微塵も残らず破壊し尽くす様を俺は黙って見詰めていた。

イリヤを生き返らせる。その願いが浮かんだ瞬間、俺はその願いだけは、絶対に叶えてはいけないような気がしたのだ。

理由は分からなかった。

しかし——『答え』を得た今だからこそ、気付けた事がある。

「選ばなかった、だと？」

「そうだ。イリヤを生き返らせた。その願いは紛れもなく本物で、故に俺は懊悩した。あの時、もし聖杯を使う選択をしていけば。そう考えた事が無いとは口が裂けても言えない。後悔はある。無念もある。だが、これだけは分かるんだ。

——俺が歩んでいた道は、決して間違つてなどいなかったのだと」

俺と奴。果たして、どちらの選択が正しかったのか。そんな事は、俺の預かり知る所ではない。

今の自分がイリヤに誇れるような道を歩んでいると、胸を張れる。

!!!!  
それで、いいのだ。

もう一度、俺は一步踏み出した。

イリヤを守るように、両手に握る干将・莫耶を構える。

「——イリヤが託してくれた『願い』を踏み躪るような輩に、この子は預けられない。悪いが、貴様の救済とやらはここで阻ませてもらうぞ」

「願い、だと」

「分からないか。無理もあるまい。私とて気付けたのは後になってからだからな。その道を歩んできたお前なら尚更の事だ」

「ツツ」

ギリ、と歯噛みした奴は後方へと跳躍した。

憤怒の色に顔を染め上げ、眈を釣り上げている。

「——最後の、問いだ。俺の隣に来てくれ、イリヤ。俺達の救済を果たすためには、お前が」

縋るような奴の言葉は、しかし、

「——ごめんなさい。貴方の隣には行く事は、出来ません」

揺れる心押し留め、確固たる決意と覚悟を宿した一人の少女の言葉によつて、拒絶される。

もう身体の震えは止まっていた。

その堂々たる様子に俺は目を見張る。

そんな俺とは裏腹に、小さな笑みを漏らしたのはクロと美遊であった。

「ようやく決意出来たようね。毎度の事ながら、そこに辿り着くまでが遅いのよ」

「けど、一度決意を固めたイリヤは強い。それは、わたし達が良く知っている。——行こう、あの人を止めなきや。それが彼を救う

事が出来る、唯一の方法だと思っから」

きっとそれは、彼女達が幾度となく見てきた背中なのだろう。勇気を振り絞って立つその姿は小さくも、頼もしい。

イリヤはルビーを構えて、真っ直ぐ奴の瞳を見据える。迷いのない紅の瞳が、奴の双眸を射抜いている。

「わたしには、貴方がどんな気持ちでその選択をしたのかわからない。どんなに辛く悲しい出来事だったのかも、分かるだなんて、気安く言っていていいものじゃない事も。けど、これだけは分かるよ。『彼女』が今の貴方を見たら、きつと貴方と同じぐらい、悲しむって」

「だから、ここで貴方を止める！わたしは、貴方の救いになんてならない！」

その言葉は、奴にとって刃そのものだっただろう。ぐらり、と大きく上体が揺れる。

踏み留まろうとたたたらを踏んだ奴は、5mほど後方へ後ずさってから顔を上げた。

感情が失われた双眸。

色の無い視線で俺達を見ている。殺気も何も込められていないはずのその視線に、俺の背筋にゾクリとした冷たい感覚が走った。

「本当は無傷で手中に収めたかった所だが、仕方ない。ああ、最初からこうしておけば良かったんだ。真に必要なのは、君の器カラダだけなのだから」

夜気に響く虚ろなる声。

その声には、感情らしい感情が欠落している。

それも当然だ。

正義の味方という使い捨ての機械が英霊エミヤの在り方だとするのなら、奴はイリヤを生き返らせるといふ目的だけを入力された自動人形オートマトンだ。

衛宮士郎の本質は『機械』だ。

願いの根底には確かに感情が存在するものの、何か一つ目的を定めた以上、どれ程時が経過し心身が摩耗しようともその目的に向かって走り続ける『機械』だ。

衛宮切嗣から受け取った正義の味方という夢に向かって、愚直に走り続けた事からもそれは分かるだろう。

つまり、イリヤを手中に収めるといふ目的を掲げた以上、奴は感情すら捨ててそれを成し遂げんとする。

「令呪をもって、我が傀儡に命ず」

ドス黒い光が奴の腕から発せられる。

見るとそれは、左腕を埋め尽くさんという勢いで刻まれた令呪だった。

かつて俺も宿した事のある令呪を中心に、絡み付く茨の如き紋様が伸びている。

その令呪が、かつて無いほどに邪悪な光を灯していた。

「来い、バーサーカー!!!」

その輝きを、宣告と共に解放する。

硝子細工の如く、一画の令呪が砕け散った。

眩い光に目を細め、収まると同時に目を開く。

視線の先に黒い、鉄塊が鎮座していた。

その体躯を覆う筋肉は鎧の如くゴツゴツと隆起しており、まるで巨大な岩、あるいは鉄塊が立ち塞がっているかのような錯覚に包まれる。

胴体が巨大な岩石だとするならば、そこから伸びる一对の黒腕は屹立する巨木だろうか。

丸太の如き両腕は人のそれを優に超えており、手には岩を削って造られたと思わしき巨大な剣斧が握られていた。ソレが放つ一撃は万物を灰燼に帰す破壊槌の如き威力を誇るだろう。

その筋肉は顔面にすら及んでおり、鼻梁も口元も岩のような筋肉に覆われているせいか、顔の輪郭を曖昧なものにしている。

なのに炯々と鋭く灯る双眸だけが、鐵色を纏う巨軀の中で一際強く存在感を放っていた。

「サーヴァント、バーサーカー。」

真名をヘラクレス。筋肉の鎧を纏ったその巨人は、奴の傍らで奴に従属するかのように膝を折り、ひざまづ跪いていた。

「それが、貴様のサーヴァントか」

「いや、コイツはまだ未完成だ」

「っ、？」

未完成。妙な言い回しだと、俺は思った。



「くっ」

咄嗟に、イリヤ達を庇うように前へ出る。

右手の莫耶と左手の干将を交差させ、頭上から振り下ろされる巨大な戦斧を迎え撃たんとする。

——しかしそれは、バーサーカーに対しては暴風に晒された木の枝にも等しい。

激突した瞬間、俺の身体は吹き飛ばされていた。

溶けるように流れる視界の中で、砕け散った干将と莫耶の破片が後方へと散っていくのが見えた。

なんて、膂力。一秒の拮抗すら許さずバーサーカーは俺の干将と莫耶を砕き、俺の身体を吹き飛ばしたのだ。

ミシリと身体の芯が嫌な音を立てて軋む。

あまりに圧倒的な力量だったのが幸いだったのかもしれない。俺にもう少し膂力があれば拮抗した分、逆にダメージを負っていただろう。

しかしそうでなくとも今の一撃は効いた。

一步間違えれば、両腕がへし折られていただろう。

「っ、下がれ！」撃でもまともにくらえば即死は免れんぞ！」

続く第二撃目を今度は躲し、固まったままのイリヤ達へと警告を飛ばす。その声で我に返ったのか、イリヤと美遊は上空へ飛び上がりク口は後方へと飛びずさる。

「っ、凶体の割に良く動く。」

縦横無尽に振るわれる戦斧はまさに暴風。

元のバーサーカーを遥かに上回る速度と膂力は、俺に反撃を与えさせてはくれなかった。

「ぐっ」

完全に回避し、完全に受け止めたと思った一撃でさえ余波によって身体が削られ、全身の骨が軋みを上げる。

赤い外套の下は、既に血と汗に濡れていた。

「このっ！」

「いい加減に、して！」

バーサーカーの顔面に突き刺さる桃色と蒼色の閃光。

イリヤと美遊が放った魔力砲はバーサーカーを傷付けるにはあまりにも軽い攻撃だった。しかし、眩い閃光はバーサーカーの視界を刹那の間だけ奪い去る事に成功する。

その一瞬が、反撃の機会だった。

バーサーカーの動きが止まると同時に、俺は地を蹴り、巨人の懐へと踏み込んだ。

干将・莫耶を走らせる。夜気に刻まれる黒と白。

泥によつて腐った身体は、元の硬質さを失わせているようだった。干将・莫耶がバーサーカーの体表を削る。直後、頭上目掛けて振り下ろされた戦斧を俺は身体を捻って回避する。

追撃は来ない。クロの放った矢が、バーサーカーを爆風に包み込む。

「大丈夫ですか、お兄さん!？」

「ああ、何とか大丈夫だ。済まない、援護助かった」

俺の返答に、イリヤと美遊は安堵の息をこぼす。

あの援護が無ければいずれあの戦斧によつて身体を砕かれていただろう。

「やっぱり硬いわね。結構クリティカルで良い一撃が入ったと思ったんだけど」

クロの放った矢、俺の干将・莫耶の刃はバーサーカーの身体の体表を削る事には成功したものの斬り裂くまでは叶わなかった。鉄の如き硬度を有する巖の身体の前には、それも当然だろう。泥に吞まれたとて、その頑強さは健在という事か。

ほう、と感心したような奴の微かな息遣い。奴は何をするでもなく、バーサーカーの後ろで戦場を俯瞰していた。

それが、妙と言えは妙だった。

これまで身を焦がす程の妄執に駆られていたであろう奴が何もしてこないだなんて

「もう、今の攻防で理解しただろう。お前達ではバーサーカーに勝てはしない。その様子では、命を一つ削れるかどうかす

ら怪しいぐらいだ。それでも、立ち向かうと？」

思考を中断する。奴の言葉は正しい。今はまだ危うい均衡を保っているものの、いずれ破綻するのは目に見えている。

傍らで浮遊するイリヤが、きゅっ、と何かに耐えるようにステッキを握りしめた。

——イリヤは、きつとこう考えているはずだ。

自分の身を差し出せば皆の命は守れるんじゃないか、なんて馬鹿げた事を。

「だから、イリヤを引き渡せと？ 悪いがそれは無理な相談だ」

もう一度、干将・莫耶を構え直す。

——内心では、焦燥を感じていた。

バーサーカーの力は規格外だ。俺達だけでは倒す事はおろか、撤退する事も叶わない。

「往生際が、悪いんだよ」

どこか寂しげな声が出た。

瞬間、バーサーカーの巨軀が消え失せる。

否、消えたのではない。その速さ故、消えたというふうにはしか認識出来なかつたのだ。

バーサーカーの戦斧が神速をもって振るわれる。

干将・莫耶を交差させ、辛うじて受け止める事に成功した。

——しかし、長くは持たない。

一瞬の拮抗の後、干将・莫耶が砕け散る。

そのまま、地面へ叩き付けるように振るわれたバーサーカーの戦斧が俺の胴体を薙ぎ払った。

「っ、ぐ」

漆黒に穢された刃は俺の胴を斬るといふより抉る形で袈裟に抜けていった。

咄嗟に刃の動きに合わせて身を捻ったからだろう。胴体は両断される事は無く、しかし刃は決して浅くない傷を俺に負わせた。

——叩き付けるように振るわれた戦斧は、そのまま地面へ

と着弾する。

粉碎、と呼ぶのが相応しい。

戦斧は地面を粉碎し、その破片を散弾の如く全方位へと撒き散らした。

「きゃっ!?!」

イリヤ達の悲鳴が聞こえた。

直撃せずとも、地面を中心に拡散する余波だけで華奢な身体は吹き飛ばされてしまったようだ。

俺も同様。戦斧によつて抉られた身体は言う事を聞かず、無様に吹き飛ばされた。

吹き荒れた暴力は止み、静寂が闇の中に満ちる。

——視界の端に真紅が見えた。

間違いなく俺の血だ。無様に寝転がっている俺の胴体から流れた血が地面を侵食している。

「が、ふ」

血の塊を吐き出した。それと同時に、視界が狭窄する。奴からすれば僅かに触れた程度。

——しかし、それだけで俺の命を削り取るには事足りたようだ。抉られた傷から、冷気が侵入してくる。

全身が茹だるような灼熱に覆われているというのに、その傷だけが極寒じみていた。

「い、た」

横で何かが動いた。イリヤだった。

あの破壊に巻き込まれたのだろう。色鮮やかな衣装は土と泥で汚れ、白磁器を思わせる白い肌には無数の擦過傷が刻まれていた。

つう、とイリヤのこめかみを伝う赤い雫。

——それは間違いなく、イリヤの血だった。

美遊とクロも、同じ。

バーサーカーが引き起こした破壊によつて傷付き、血を流し、苦しんでいる。

「」

ズギン、と鋭い痛みが走る。

気が付けば俺は上体を起こして、投影した干将・莫耶を血が滲む程の力で握りしめていた。

——立ち上がろうとする度に命が削られる。

しかし、構わない。傷口から侵入してきた冷気は思考までもをクリアにしてくれたようだ。

無駄な思考は消え失せる。

——ただこの剣を奴の身体に叩き込む事しか、考えられない。

「諦めろ、と言っているのが分からないのか。その身体では彼女達を守るどころかここから逃げる事もままならないだろう。身に染みて分かったはずだ。これが俺の覚悟、そして力だ。カルデアなんて代物が総出でかかってきたとしても俺を止める事は叶わないだろう。それを、たった4人。しかもそのうち3人は殆ど荷物状態と来た。そんな貧相な戦力で何故立ち向かう。どうして、俺の邪魔をする——

!!!

その言葉に、動きを止める。

奴が発した言葉。その微かな違和感に、俺は気付いたような気がしたからだ。

「は。まるで、私達にこれ以上立ち向かってきて欲しくないとでも言いたげな口振り、だな。そんなにも圧倒的な武力を有しているのなら、いつでも邪魔者を殺せただろうに。どうして今更、私達にそんな悠長な問いを繰り返し投げ続ける。本当に殺せるのなら手っ取り早いだろう。まずは私から殺してみるがいい、『半端者』

「ッ、貴様——!!!」

奴の顔が憤怒に染まる。

——それを、俺は冷たく見詰めていた。

どこか、空虚。怒りと悲しさが螺旋を描いている。

この胸に去来する感情は、何だと言うのだろう。

「殺れ、ソイツを殺せ！バーサーカー!!!」

咆哮を上げて、迫り来る巨躯。

—— 剣を構える気にも、なれなかった。

何故なら、コイツは

「お兄さん、逃げて!!!」

美遊の悲痛な声が聞こえる。

—— 逃げる訳には、いかない。

刹那の逡巡の後、剣を構える。

しかし、どうあつてもバーサーカーと真正面からの剣戟を交わす事など出来まい。

「ッ——!!!」

干将・莫耶とバーサーカーの戦斧が激突する。

緋色の閃光が闇夜を照らし上げる。

砕け散る干将・莫耶。

その膂力の前に体勢を崩す。

それは間違いなく、先刻の焼き直しだった。

戦斧が落ちてくる。容赦など皆無。直撃すれば間違いなく霊基ごと粉碎される死の一撃。

—— そう、分かっていた。バーサーカーと単騎で真正面から

斬り結ぶのは不可能だ。

ならばどうするか。答えは簡単だ。

「ハアッ——!!!」

簡単な足し算だ。単騎では無かったら。或いは、その絶望的な状況を打破出来るかもしれないというだけの事。

—— 俺と戦斧の間に割り込む一陣の疾風。

それは俺との激突によって一瞬勢いが弱まった戦斧と激突し、銀色の閃光を迸らせながらバーサーカーの戦斧を押し戻し、その巨軀に袈裟の斬撃を叩き込んだ。

「?????」

突然割り込んできた闖入者が放った一撃にバーサーカーは体勢を崩し、たたらを踏みながら奴の元へと押し返された。

銀色の風が吹き抜ける。

澄んだその輝きが澱みよどを押し流していく。

「その身体であの一撃に立ち向かったと思えば、最初から私が割り込んでくる事を予測しての行動だったとは。まったく、豪胆と言うべきか他力本願と言うべきか。不思議な御仁ですね、貴方は」

風のように涼やかなる声が耳朶を打つ。

視界に映るのは月明かりに照らされた金色の髪。

闇を貫かんと燦然と輝く碧玉の双眸が鋭く細められ、漆黒の巨人を射抜いている。

——月の光に濡れた、その姿。

その姿を、俺は覚えていた。

互いの立ち位置が変わろうとも、決して変わらないその在り方を忘れるはずも無い。

いつか、共に夜を駆け抜けた。

薄れて欠けた記憶。しかしそれでも、脳裏に焼き付いた少女の姿が色褪せる事は無い。

——セイバー。

その気高い立ち姿を、俺はみつともなく尻もちを着いて、まるで遠い星を望むかのように見上げている。

——それは奇しくも、俺にとっての最初の出会いのようで、自然と笑みが零れた。

「私は弓兵だからな。ああいった、猪突猛進してくるような輩を相手取るのならば、君のような剣士が相応しいだろう?」  
「しかし、私が助勢に来る保証など無かったでしょう。それなのに、どうしてですか? どうして、私に命を預けるような真似を——」

「どうして、か。そう問われると返答に困るな。特に理由など無いんだ。君の気配がして、君なら助けに来ると思った。——ただ、それだけだ」

——本当に、それだけだった。

何となく、この少女なら助けに来てくれると思ったから。

俺はその勘を信頼しただけの事。

「それが、どうしてなのかと聞いているのです。貴方が私を信頼する理由など少しもありはしないではないですか」

俺の返答が不満だったらしい。

セイバーは今にも斬りかからんばかりの剣幕で俺に鋭い視線と声を飛ばす。

「理由ならあるさ」

しかしそれは、遠い世界の遠い時空での話。

目の前の少女が知る由もない、しかし確かに俺の中にある大切な記憶。信頼？そんなものしているに決まっているだろう。

——かつて彼女に助けられ、そして、同じ夜を駆け抜けた。理由なんて、それで十分に過ぎる。

例え。それが、目の前の少女の知らない記憶だとしても。

「セイバー！ゆつくり話をして！いる時間はないわ！その赤マントとコスプレ少女達連れてきて！撤退するわよ！」

何か言いたげだったセイバーだったが、マスターである遠坂凜に呼ばれて俺から視線を外す。

「撤退って、わたし達はまだ」

「万全の状態だろうと今のままではアイツには勝てないわ。これは勝つための撤退なの。今は大人しく撤退しなさい。でないと、貴方達を助けた意味がないわ」

イリヤの抗議を、遠坂凜は素っ気なく突き返す。

撤退自体には賛成だった。このまま無策で勝てるほど、バーサーカーは甘い相手ではない。

「待て。イリヤを渡そうとしない以上、俺はお前達を逃がす訳には」  
「うっさいー！アンタの都合なんか知ったもんですか！セイバー、ド派手にやっちゃってー！」

「了解です。ですが、もう少し離れていてください。そこだと巻き込んでしまいます」

セイバーが不可視の聖剣を掲げる。

その気迫に押されるように、バーサーカーが僅かに後ずさった。

「ストライク・エア!  
風王鉄槌!!!」

掲げられた聖剣から、マトモに前方を直視出来ない程の豪風が迸る。東ねられた風はもはや槍に近い。

岩すら砕くであろう風の奔流が、バーサーカーの身体に殺到する。命を削るには至らないだろうが、それでも足止めには申し分ない。

「今のうちに!」

「―――すまない、助かる」

「礼ならばマスターに。これは全て、マスターの指示ですから」

イリヤ達がついてきている事を確認してから、砂塵が舞う境内を走り抜ける。―――咆哮。

バーサーカーの咆哮が砂塵のカーテンを裂いて、ビリビリと大気を震わせる。

「―――トレース 投影・開始」

走りながら、地面に剣を突き立てていく。

それと同時に、奴が俺達に向かって疾駆する。

俺達が居る位置まで、恐らく3秒とかかるまい。

一瞬で、開いた距離を埋められる。

しかしバーサーカーの戦斧の射程内に入った瞬間、地面に突き立てていた剣が閃光を放ち、爆発した。

爆炎は瞬く間にバーサーカーの巨体を包み込み、その姿を緋色で覆い隠す。

その間隙を縫うように正門を抜け、俺達は落ちるような勢いで階段を駆け下りた。

「追って、こない」

夜の帳が降りた街は、静寂に満ちていた。

人の気配は皆無。死んだように眠る街を、螺旋の空から覗く銀色の月の光が照らしている。

白く。白く。まるで、街全体を埋葬するかのよう。

バーサーカー、そして奴が追ってくる気配は無い。

しかしイリヤへ抱いていた妄執を考えるに、諦めたとは考えにくかった。

「何か、理由があると見るのが妥当だろうか」

眩くと同時、ズギン、と忘れかけていた痛みが胴体に走った。サーヴァントの身である故、胴を薙がれたぐらいで消滅する事は無いが、動きが鈍る事に変わりはない。

命に差し障りがない事だけ確認し、俺は遠坂凜とセイバーに向き直る。

「先程は本当に助かった。しかし生憎、君達に返せるものなど何も無くてね。頭を下げる事しか出来ない」

「え？見返りなんて要らないわよ。確かに魔術師の世界は等価交換が常識だけど、今回は私が助けたくて助けたんだしね」

「成程、心の贅肉というわけか。ふ、君らしいと言えば君らしいな」

思わず笑みが零れる。

『偽物』であるとは言え、やはり何処に居てもこの少女の在り方は変わらないらしい。

「な、何よその含みのある笑いは。勿論、私だって100%善意で助けた訳じゃないわよ。目的は一緒なんだし少しは利用出来ると思って

「遠坂凜、それは利用ではなく利害関係と言うんだ。そんなもの、こちらから申し出たい所だよ。情けない話だが、私達では奴等に太刀打ち出来なさそうなのでね。君は構わないか、セイバー？」

セイバーは俺を一瞥した後、静かにコクン、と頷いた。

「なんかすんなり行き過ぎて怖いんだけど、アナタ、随分と物分かりが良いのね」

「私は現実主義者だからな。それが最善の方法だというなら躊躇い無く飛び付くさ」

肩を竦めて答える。——ふと、背中の辺りに妙な視線を感じて振り返った。

イリヤ達が、何故かジトつとした視線を向けてくる。

何か変な事を言っただろうか？なんて事を考えていると、

「どうしたんだ、三人とも。まるで君達が自身の兄の痴態について話している時のような目をしているが」

「ううん、別に。ただ、リンと話している時のお兄さんって凄く楽しげだなあって思っただけだから気にしないで良いわよ。ね、二人とも？」

クロの含みのある言葉に、イリヤと美遊が妙な面持ちで頷いた。何だか凄い誤解を受けている気がするのだが、そんなに楽しそうな表情をしていたのだろうか。

軽い咳払いを一つして表情を引き締めてから、俺は再び遠坂凜に向き直った。

「——色々あったが、とりあえずこれからよろしく頼む」

「はあ、何だかアナタも大変そうね。——ええ、勿論。お互い良い関係を築いていきましょう」

言って、遠坂凜は手を差出してきた。

差し出された手を握り返す。

——微かに冷たい、柔らかく華奢な手。

その感触が、俺にはどこか懐かしく感じられた。

遠坂凜、そしてセイバーと別れた後、俺達は真っ先に武家屋敷へと足を向けていた。

離れていたのは精々3時間程であるにも関わらず、酷く時間が空いていた気がする。

屋敷周辺を覆っていた泥の膜も既に消滅しており、屋敷はいつもと

変わらない様子でその場に鎮座していた。

「良かった」

そつと、イリヤが屋敷の壁に手を触れさせる。

それを穏やかな心持ちで見送ってから、屋敷の扉を開け放った。重たい足取りで居間へと移動する。

今日は疲れただろうから今すぐ寝かせてやりたい所だが、生憎そういう訳にもいかない。

何故なら

「——また会えたわね、シロウ」

『彼女』が、居間に居たからである。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

『奴』が、衛宮士郎が愛した少女。

少女は固まる俺達に向かって、雪のように儂い笑顔浮かべていた。

## 第九節 『焰下の誓い』

張り詰めた空気が居間を占領していた。

特にイリヤは緊張しているのか、先程からソワソワと落ち着きがない様子を見せている。

——そう。今回、少女はイリヤの身体に憑依するという事をしていなかったのだ。

結果、同じ顔をした人間が3人も一堂に会しているという奇妙な状況に置かれている訳だが、当然落ち着けるはずもない。

邂逅から、10分。凍るような静寂の中、聞こえてくるのは秒針と心臓の鼓動のみ。

心臓の鼓動は常時より、その速度を上げていた。

「今回は、イリヤに憑依しなかったんだな」

それを誤魔化すかのように、俺はそんな事を聞いた。

少女はイリヤを一瞥すると、

「ええ、その子に憑依する前までは上手くカタチを得る事が難しかったから。今はあの時憑依した影響である程度存在を確立する事が出来るけど」

目覚めた。カタチを得る。存在の確立。

気になるワードは幾つかあるものの、取り敢えずは後回しだ。

「何故、またここに？」

「そうね。けどその前に——『彼』とは会えた？」

『彼』、というのは衛宮士郎の事だろう。

この街を投影、バーサーカー他のサーヴァントをまとめて使役する怪物。

——ああ

領くと、少女はどこか懺悔するかのように目を伏せた。

少女が初めて見せる表情に心臓がチクリと痛む。

「ごめんなさい」

ポツリ、と顔を俯かせてから少女は謝罪する。

何に対しての謝罪なのか。この少女がそうする理由なんて、どこに

も無いだろうに。

「どうして『彼』がそんな凶行に及んだのか。その理由を、アナタ達は知っているはずよ」

「アナタを生き返らせようとしたんだよ、ね？」

恐る恐る、といったふうにはイリヤが口を開く。

同じ顔というだけならばイリヤとクロだつてそうなのだが、イリヤと少女は肌の色や声音すら同じなので、会話をしている所を見ると本当に合わせ鏡のようだ。

「その認識で間違いないわ、もう一人のわたし。彼はわたしを生き返らせるためにこの道を選んだ。聖杯を使ってわたしの命を救済する事だけを考えて、ね」

少女の表情は曇りきつている。

「さっきの謝罪は、そういう事か。」

自分を生き返らせるため、全てを捨て去った少年。

「さっきの謝罪は奴と、その奴の凶行に巻き込まれてしまうであろう俺達に対する謝罪だったのだ。」

「一つ、聞かせてくれ」

俺の確認に少女は首肯で応じる。

「この問いは、きつと核心に迫るものだろう。」

「故にだろうか。俺の両手は握り拳になっていて、手の中はじつとりと汗ばんでいた。」

「深呼吸をして、肺に酸素を送り込む。」

「それで、ある程度覚悟は決まったみたいだった。」

「君が、私達のマスターなのか？」

驚く声はイリヤ、クロ、美遊のものだった。

少女は突き付けられた問いに動じる事なく、真紅の双眸で俺の瞳を

射抜いている。

数秒後、彼女はゆっくりと口を開き始めた。

「――厳密に言うのならわたしじゃないわ。顕界に必要な魔力を提供しているのはわたしだけど、アナタのマスターは変わらずカルデアのマスターよ。そして、わたしが魔力を提供しているのはシロウ、アナタだけ」

「え・じゃあ、わたし達は どうして――」

「アナタはミュ・だったわね。どうしても何も無いわ。そもそもアナタ達は普通のサーヴァントのように完全なる霊体というわけでは無いもの。顕界に魔力なんて殆ど必要ない。唯一、クロエだけは存在するのに魔力を必要としているみたいだけど、それだって半分は別の何かで補っているでしょう？」

少女の言葉は最もだ。確かにこの中で、顕界するのに楔を必要とするのは俺だけだろう。

「――で、アナタがわたし達をこの世界に召喚したのは結局の所、『彼』を止めるためって事？」

クロの問いも、かなり切り込んだものだった。

しかしイリヤは首を横に振って、

「クロエ。アナタの言葉は半分は正解だけど、もう半分は不正解よ」

「は？だってアナタさつき――」

「わたしは確かにシロウに魔力を供給しているし、あの子を止めるためにこの世界に引きずり込んだのもわたしよ」

「クロは、違うんですか？」

イリヤが少女に恐る恐るそう言うと、少女はじろりとイリヤを一瞥した。

「はあ。歩んだ道が違うとは言え、どうしてそっちのわたしってばそんなにも能天気なのかしら？」

「ひ、酷いっ・あ、アナタだってお兄さんの事をシロウって呼び捨てにしたりしてお姉さんぶってるじゃない！わたしお兄さんの事呼び捨てにしたりなんかしないもんね！クロからのお姉ちゃん呼びはいつでも受け付けるけど！」

「アナタをお姉ちゃん呼び？そんなのお断りよ。だってわたしの方がお姉ちゃんなんだもの。妹はアナタの方でしょ、イリヤ」

「なあっ」

「ちなみに、わたしお姉ちゃんぶるも何も本当にシロウのお姉ちゃんだから。その所、勘違いされては困るわ。歳も18だし」

突如勃発する姉の称号を巡る戦いに、3人のイリヤは互いに額からバチバチと火花を散らしている。

そんな3人の様子を見て、美遊はどうしたら止められるのかとオロオロし始めていた。

話が、壮絶に脱線している。

完全に取り残された俺は一人静かに頭を抱えていると、

「ホーン、話を戻すわ」

咳払いと共に少女がこちらへ向き直る。

「是非、そうしてくれると助かるな。イリヤ達を召喚したのは君ではないという話だったが」

「そうよ。少し考えれば分かると思う。その子の器クラマを求めているのか、一体誰なのかを」

「つまり、それは」

「ええ。イリヤを手中に収めようとカルデアにアクセスし、イリヤをこの世界に引きずり込んだ者——無論、『彼』の事よ」

「衛宮士郎、か」

「どうやってそんな芸当を、なんて事はどうでもいい。」

「しかし、それを差し引いても少し疑問が残る。」

「何故クロと美遊をこの世界に召喚——いや、引きずり込んだのか。目的を達成するためだけならば、世界に引きずり込むのはイリヤだけで良いはずだ。」

「そんな疑問を見透かしたかのように、少女は口を開く。」

「本来ならば、イリヤ1人をこの世界に誘なびうつもりだったのですね。けど、そうはいかなかった。カルデアは言うに及ばず堅牢なセキュリティを誇っている。だから、迅速に目的を達成する必要があったの。そのために、『彼』はフィルタを設定した。そのフィルタが——

——聖杯の『器』を持つ者以外を認識から除外する事。そうすれば余計なモノは付いてくるけれど、確実にイリヤをこの世界へと誘えるでしょう？その甲斐あつてか、計画はいとも容易く成し遂げられたわ」カルデアは確かに堅牢なセキュリティを誇っている。

しかし今まで幾度となくそれが破られている以上、こういう事例は割と珍しくはない。

実際、カルデアの全サーヴァントがとある建物の素材になってしまったという事件もあつたぐらいだ。

「では、私は」

「ええ。アナタを呼んだのはあの子の——シロウの目的を阻止するためよ。『彼』が作り出した穴を利用して、わたしはアナタをこの世界へ誘つた」

少女の話で、今まで謎だつた事柄が一気に解消された。

どうして己がこの世界に喚びだされたのか。それは、長らく疑問に思っていた事だつたのだ。

一人納得していると、少女が不安そうな面持ちでこちらを見詰めている事に気が付いた。

「怒って、ないの？」

「？ どうして、私が怒る必要がある？」

問い返すと、少女は俯きながら訥々と話し始めた。

「わたしは、シロウを止めて欲しくてアナタを喚んだ。けどそれは、本来アナタには全く関係の無い事よ。なのにわたしはアナタを巻き込んでしまった。だから、その」

少女は申し訳無さそうに頭を下げる。

「ああ、全く。」

普段はわがままのクセに、どうしてこの少女はこういう時だけそんな悲しそうな顔をするのか。

俺は、少女へと手を伸ばす。そして瞠目する少女の額に、やんわりと力を込めたデコピンをかました。

「ふえうっ」

大きく仰け反る少女。唾然とこちらを見詰める彼女に、俺は言い

放った。

「手間が省けた事に感謝こそすれど、君に対して腹を立てる道理などあるまい」

「手間が、省けた」

額を手で押さえながら、少女は不思議そうに首を傾げる。

「ああ。なんせ、この子達が何処の馬の骨とも知れぬ輩に攫われたんだ。もし私がカルデアに取り残されていたとしても、必ずこの世界へ辿り着く方法を見つけ出し、助けに来ていただろう。しかし、君はその手間を省いてくれた。——だから、君が謝る必要などないんだ」

俺だけじゃない。イリヤ達が、仲間達が攫われたのだ。

マスターはもちろん、カルデア内の全サーヴァント並びに全職員が総出となつてこの世界へ辿り着く方法を見つけ出していただろう。あそこはそういう場所だ。

今もきつと、俺達の捜索に全力を費やしているに違いない。

「やっぱり、アナタは」

変わらないわね、と。少女は微笑んだ。

そんなの、当たり前前だと思う。

人はそう簡単に性根までは変わらない。

「私達については、もういい。聞きたい事は全て聞けたのでな。次に聞くべきはやはり、君の事だろう」

「うん。ここまで来たら、教えないわけにはいかないかな」

儂げに笑つて、彼女はゆっくりと話し始める。

——その姿が、俺の目にはどこか寂しげに映つて見えた。

「彼」はイリヤを——わたしを生き返らせようとして、そして壊れてしまった。けど、わたしがそんなのを黙つて見過ごすと思う？」

「いや、思わないが」

即答する。その即答っぷりに少女はくすぐつたそうに笑つてから、再びあの寂しげな表情を浮かべた。

チクリと胸が痛む。少女のそういう表情は、見たくない。

だって、その表情はあまりにも辛そうだ。

俺と奴が抱えた懊悩と悔恨。

それに劣らない程の激情を感じる。

見れば少女は、その手を血が滲まん勢いで固く握り締めていた。まるで、自らの内より込み上げる何かに堪えるかのように。

「もう分かっているとは思うけど、わたしは実体を持たない、『夢』のような存在よ。いえ、夢そのものと言うべきかしら。わたしはこの『世界』が見ている夢に過ぎない。だからカタチは無いし、存在も霧のように不確か」

「夢」

少女の言葉に、イリヤが不思議そうな顔をする。

この世界が見る夢。

それが己の本質なのだ、目の前の少女は言う。

それで、俺は少女が何者なのかを理解した。

夢。ああ、確かにその言葉は的を射ている。

以前、俺がイリヤ達に挙げた話に、この世界は誰かが投影魔術によつて作ったものであるというものがあつた。

無論、その誰かとは奴——衛宮士郎である。

そしてこの街を生み出したのが衛宮士郎だというのなら、ある一つの可能性が導き出される。

それは——

「もう、アナタは分かっているでしょう？この世界は彼の投影魔術によつて成されたもの。——その下地に、彼は己の『心象風景』を用いた」

「——つまり、この世界自体が一種の『固有結界』である、という事か」

固有結界。術者の心象風景を具現化させ、現実を侵食し世界の法則を塗り潰す大魔術。

それがこの世界の下地となっている。

世界が見る『夢』。

それは即ち、奴の心象風景に刻まれた記憶。

——この少女は奴の心象風景が、奴の心が生み出した幻想に過ぎない、という事だろう。

文字通り、少女は心象風景が見る夢だったのだ。

奴の根底にあった、強過ぎる想いが生んだ『幻想』。

それが、目の前の少女の正体だ。

「それって、ファースト・レディみたいな事をお兄ちゃ  
ううん、あの人がしたって事？」

ファースト・レディとは確か、イリヤ達がカルデアのマスターと知り合うきっかけになった事件の黒幕だったか。

データだけしか見ていないが、その認識に間違いはないだろう。ファースト・レディが続べていた世界も固有結界で形成されたものと記述されていたのを覚えている。

「けど、それは莫大な魔力があつてこそでしょ？普通に考えてそんな事出来るはずが。」

「——そうね。普通に考えればそれは奇跡としか思えない所業よ。けど、奇跡ならすぐ傍にあつた。聖杯戦争の勝者であつた彼が取つた行動って言えば、分かるでしょ？」

思い当たる節があつたのか、クロは僅かに歯噛みして押し黙る。一瞬生まれた静寂。その静寂を機とするように、俺は気になっていた事を聞く事にした。

「先刻、君は言つたな。自分があの凶行を見逃すはずがないと。それは、奴の説得に失敗したという事なのか？」

「——ううん。まず、わたしは彼に存在を認識すらして貰えなかつた。だから彼はわたしの姿を見ることも、わたしの声が届く事も叶わない」

「なに。」

「だから、わたしはアナタをカルデアから喚んだの。わたしには彼を救う事は出来ないから、代わりに彼を救って欲しかった。——  
——全てを話すわ。あの後、彼が聖杯を手に入れてから何があつたのか。その全てをね」

そうして、少女は訥々と語り始めた。



まったらしい。

後に残ったのは血溜まりと細かい肉片。

それが——イリヤの命を奪った男の成れの果てだった。

「満足した？」

後方から固い声音。肉を穿つ音以外の音色を聞いたのは、約半日ぶりだった。——遠坂凜。

アーチャーのマスターであり、俺の、大切な『仲間』だ。

「分からない。ただ、酷く空虚だ。まるで自分が自分じゃないみたいに思えてくる」

「でしょうね。ギルガメッシュを殺したところであの子がアナタの元に帰ってくるわけじゃないもの。ギルガメッシュを殺す。アナタはそれだけを原動力にしてここまで聖杯戦争を勝ち残ってきたんだもの。葛木先生を殺し、綺礼を殺し、慎二を殺し、臓硯を殺し——桜を殺して、ね」

「仕方ないだろ。これも全て、イリヤを救うための犠牲なんだ。決めたんだよ、俺は。イリヤだけの、正義の味方になるって」

「遠坂は何も言わない。」

ただ黙って、俺の事を見詰めていた。

氷のような緊迫感は、2つの足音によって破られる。

セイバーとアーチャー。殺戮の果て、最後に残ったサーヴァントがその2騎だった。

「ねえ、士郎」

傍らに立つ遠坂が話しかけてくる。

「私、やっぱり士郎に聖杯を渡すわけにはいかない」

決別の言葉を、俺は空虚な気持ちで聞いていた。

本来ならば悲しんだり、怒ったりする場面なのだろう。

しかし、俺は不思議なほど何も感じなかった。

まるで心まで鉄になってしまったかのよう。

——だから、受け入れられた。

遠坂凜は殺さなくてはならない、『敵』である、と。

「休戦協定はこれで終わりよ。今のアナタを放って置くのは危険過ぎる」

「俺が、大人しく従うとでも?」

「思わないわね。——ええ、分かっている。アナタが、一度やると決めた事をそう簡単には曲げないって事ぐらい。私はそんなアナタを、ずっと昔から知ってるんだから」

「アナタは知らないでしょうけどね、と。」

「遠坂はどこか温かみのある笑顔を浮かべて、そんな事を口にした。それは、遠坂凜の思い出でしかない。」

「少女は幻視する。」

「校舎を覆う夕暮れ。その黄昏を背に受けながら、決して跳べない高さの走り高跳びに挑戦し続ける少年の姿を。」

「そうか——お前も、俺の邪魔をするんだな」

「ええ。ここで止めさせてもらう。アナタの選択はとても危険なものだもの。この街の管理者セカンドオーナーとして。」

「そして、数少ない友人として。アナタにこれ以上、道を踏み外させるわけにはいかないわ」

「遠坂を中心として膨大な魔力が踊る。」

「色とりどりの輝きは十指に挟んだ宝石によるものだ。」

「キン、キン、キン、という金管楽器のような高音。」

「高まる魔力は限界を越えて臨界へ。」

「その全てが、俺へと牙を剥く。」

「シロウ」

「こちらを慮おもんばかる声は、セイバーのものだ。」

「だからどうした。」

「俺はもう、引き返せない所まで来てしまっている。」

「遠坂の言う通りだ。まず、キャスターを統べていた葛木先生を首を撥ねて殺した。」

「ランサーを統べていた言峰は、ランサーとセイバーが交戦している間に四肢を斬り落とし胴体を両断して殺した。」

「逃げ惑う慎二は心臓を穿ち、」

間桐臓硯は『破戒すべき全ての符』でその存在を霧散させた。

真にライダーを統べていたらしい桜も、殺した。

ライダーをセイバーが抑えている間に、抵抗する事も逃げ惑う事もなく桜は俺の剣を受け入れたのだ。

最後まで。俺が大好きだったあの笑顔を浮かべて、彼女は死んだ。邪魔となる者は全て殺した。

ならば、目の前で俺の邪魔をする遠坂とて同じ事だろう。

「」  
そう考えるだけで、遠坂を殺す恐怖は止まってくれた。

身体を支配していた熱が引き、代わりに凍てつくような冷気が身体に忍び寄る。

まるで、全身を巡る血潮が全て凍り付いたかのように。

「良いのですか、それで。リンはアーチャーは、これまで共に戦ってきた仲間でしょう！確かに最初は敵同士だった。互いに命を闘ぎ合うような関係だった。しかし、しかし今は」

五月蠅い。俺はもう、生まれないんだ。

「第七のマスター、衛宮士郎が令呪をもって命ず。セイバー。その全霊をもって、アーチャーを始末しろ」

「ツ シロウ」

「重ねて令呪をもって命ずる。」

「セイバー。全霊をもって、アーチャーを、始末しろ」

己の意志とは関係なく、セイバーの軀が迸る。

銀色の風を纏い、アーチャーへと不可視の斬撃を叩き込む。

危なげに、アーチャーはセイバーの剣を受け止めた。

「ふん。どうやら、お互いロクでもないマスターを引き当てたようだな。私はとんでも無くお人好しなマスターを。そして君は、その破綻者を」

「ツ アーチャー。速く、離れ」

「別に君が気に病む事ではあるまい。元々、私は君のマスターが気に入らなくてね。ここで始末出来るのならそれに越した事はない。

故に、全力でかかってくるが良い。

でなければ、己のマスターを失う事となるぞ」  
剣戟が夜闇に響く。

直後、俺の視界が眩い閃光で埋め尽くされた。

言わずもがな、遠坂の宝石だ。宝石を十指どころか周囲にすら浮かばせ、自身の身を守るかのように、或いはこちらに砲身を向けるかのように構えている。

徐々に大きくなる高音は、ジェット機のエンジン音じみていた。

「

対して、俺は投影した数十本の剣を宙に浮かばせた。

その刃は全て遠坂に向けられている。

一度俺が命じれば、全ての剣が遠坂へと豪雨の如く降り注ぐだろう。

互いの距離は10mも無い。

この距離でそれらがぶつかり合えばどうなるか。

言うに及ばず。それを踏まえた上で、両者は己の敵を滅ぼさんと、

全ての力を解放した。

「Neun, Acht, Sieben

Stil, sciest, Beschiesen

Erschießung——!!」

キン、キン、キン、キン——!!

甲高い音が連なり、反響する。

宝石から宝石へ。まるで木の枝の如く光条が巡り、複雑な模様の魔法陣を虚空に描いていく。

それは、まるで夜空に燦然と輝く星々の如く。

炉心たる遠坂はその中心で、左腕を掲げていた。

イメージは砲身。自身を巨大な砲身と見立てるように、遠坂は広げた掌を俺に向けている。

扱っている魔力量による影響だろう。

遠坂は苦痛に顔を歪める。

しかし、その目だけは違った。苦痛に顔を歪めながらも、爛と見据えた双眸で俺の事を射抜いている。

迸る雷光。うねり狂う魔力は大蛇の如き紫電を纏う。

大気。自身。宝石。

持ちうる全ての魔力を収斂し、一息に解放する。

それらが星々の輝きであるならば、魔法陣から放たれる幾条もの魔弾は正しく流星と呼ぶべきだろう。

夜空を斬り裂くべく殺到する流星群。

しかし、

「熾<sup>ロ</sup>天<sup>ア</sup>覆<sup>イ</sup>う七<sup>ア</sup>つの円<sup>ス</sup>環」

——そこに、第二の光が割り込んだ。

俺と遠坂のちようど中間辺り。

流星群の輝きはそれを上回る存在によって霞んでいく。

咲き誇る花卉は万物を呑み込む太陽の如き有様。

展開される花卉は遍く攻撃を防ぐ無謬の盾となり、その姿を燦然と夜に刻み付けた。

刹那の後、2つの輝きは邂逅を経る。

その邂逅は本来、決して有り得まい。

本来ならば決して交わる事の無い星と太陽。

本来ならば決してぶつかり合う事の無かった俺と遠坂。

——奇しくも。その二つの在り方は示し合わせたかのように酷似していた。

攻防は5分に及んだ。

地面にはいくつものクレーターが穿たれている。

そのクレーターと濛々と立ち上る砂塵が、その戦闘の激しさを物

語っていた。

「か、は」

砂塵越しに聞こえてくる掠れた呻き声。

びしやり、という水音が何の音なのかは、もはや問うまでもないだろう。徐々に土煙が失せていく。

そのせいにか、土煙の奥の光景が顕になった。

遠坂が、赤い絨毯の上に身体を横たえていた。

遠坂の血で出来た赤い絨毯は遠坂が身じろぎする度に円形の波紋を広げていき、揺らぎを生んでいる。

赤い。紅い。朱い。

網膜を蹂躪する、鮮烈の赤。

「

構わず、俺は遠坂に向かって歩を進めた。

遠坂はまだ生きている。

だから——殺さ、ないと。

「

凍らせた心で、遠坂を見下ろす。

顔は鮮血で染め上げられ、瞼は半分開いていなかった。

苦痛によるものだろう。荒い呼吸と共に不規則なリズムで上下する胸は、痛ましかった。

先程までは確かにあった左腕は無くなっている。

その答えは後方10メートル程にあった。

地面に描かれた血の軌跡。それは、地に落ちた腕の断面から迸ったものだ。

腹部からの出血が酷い。そこは、間違いなく俺の剣が貫いた場所だった。

「負けちゃった、か」

俺の事を見上げながら、弱々しく遠坂が呟く。

どこか、遠い夢を見ているような虚ろな瞳。

喉に血塊が引つかかっているのか、声にひゅーひゅーという掠れた音が混じっている。

俺が斬り飛ばした腕は魔術刻印が刻まれた左腕。魔術刻印が失われた以上、刻印による自然治癒も有り得まい。

つまるところ、このまま放っておけば間違いなく遠坂は死ぬという事だった。

「アーチャーは」

遠坂は自身の右手の甲に視線を落とす。

——先刻まで、確かに存在したはずの令呪が消えていた。それが何を意味するのか、もはや言うまでもないだろう。

遠坂は「そつか」と呟き少し寂しそうに苦笑する。

セイバーとアーチャーの戦闘は終わっていた。

剣を振り抜いた体勢で、セイバーは胸中から込み上げてきた何かに耐えるように、その動きを止めている。

「本当は冬木の管理者とか、そんな事どうでも良かったんだ」

不意に、遠坂がそんな事を口にした。

「私ね、士郎が桜を殺したって聞いた時——本当に、憎んだんだ。それがお門違いの憎しみだって事は、分かった。聖杯戦争なんだもの。マスターが他のマスターを殺す事は、当然なもの」

「だったら、どうして？」

冷たい心で、何も無い感情で問いかける。

そして、遠坂の心臓辺りに狙いを定めた。

苦しげに上下する薄い胸。

そこを貫けば、遠坂凜の命は終わる。

「桜はね、私の——妹だったんだ」

「な、」

凍り付いていたはずの心臓がドクン、と跳ねた。

何だ、それは。聞いていない。俺はそんな事聞いていない。

だって、そんなの——

「だから、士郎の事が凄く憎かった。毎晩、思い悩んだわ。士郎を殺すか殺さないか。屋敷に居る時の士郎はあまりにも無防備だったから、

幸い手を下すのは簡単そうだったもの。寝てる間にナイフで首でも切り裂けばそれで終わる——けど、私には出来なかった」

本当に可笑しそうに、遠坂はクスリと笑みを零す。

「士郎の部屋に近付くとね、聞こえてくるの。」

「ごめんなさい。ついで。何度も何度も、誰かに謝ってる声が、聞こえてきた。その声が凄く苦しそうで。そんなの聞いたら、士郎を殺す事なんて、出来なかった。」

「本当、バカみたい。」

遠坂は笑う。死を目前にしながら、彼女は笑っていた。

「ッ。ああ、本当に。遠坂は、バカだ。アーチャーの言う通りだよ。俺は桜を、お前の妹を殺したんだぞ。お人好しにも、限度がある。そんなの、いつものうっかり癖よりもタチが悪いじゃないか。」

「む、失礼ね。私、いつもって言われるほどそんなにうっかりしてないと思うけど?」

「何、言ってるんだ。俺はいつもそのうっかりに付き合わされてきたんだぞ。いつもはしつかりしてる癖に変な所で不器用で、肝心な所で失敗するだもんな、遠坂は」

「そんなの、お互い様でしょ。士郎だつて。魔術の知識なんて殆ど無く、常識外れで、どうしようも無いぐらい唐変木で。一度決めた事を曲げる事が出来ない、バカ正直な奴。」

互いに軽口を叩き合う。不意に、カランと音がした。

視線を落とすと、先程まで手にしていた剣が落ちていた。

——もう、この剣は振るえない。

凍り付いていた心は解かされた。

けど。今更どうしようも無い。

遠坂はじきに死ぬ。俺が殺したのだから、それぐらいは手に取るように分かってしまう。

——あまりにも、身勝手だ。

俺は遠坂を殺しておきながら、今この瞬間、遠坂に死んで欲しく無いなんて事を、思ってしまったているんだから——

「泣いて、るの。」

遠坂の声がする。いつものハキハキとした声ではなく、今にも消えてしまいそうな掠れた声。

「っ、俺、は」

言葉が見つからない。

こんな時、なんと言葉にすれば良いのかわからない。だから、嗚咽を零す事しか出来なかった。

——なんて、無様。

半端者にも程がある。どうせ壊れるのなら、完膚無きまでにイカれてしまえば良かった。

そうすれば、こんなにも辛い思いをしなくて済んだというのに。

——アナタが泣く必要なんて、ないわ。

言っただでしょう？これは聖杯戦争だって。

殺し、殺されるのが当たり前前の世界。だから、アナタが気に病む必要なんて無いの」

そつと、遠坂の手が俺の頬に触れる。

——あまりにも冷たい手。

その手が、この刹那の触れ合いに終わりが近付いている事を告げていた。縫るようにその手を取る。

——それに、泣かれるなんてあまりにも無責任だわ。奪ったからには、その全てを背負いなさい。それがアナタの、果たすべき責任。なん、だから。」

遠坂は先程とは打って変わり、いつもの厳しく、毅然とした声音でそう言った。

突き放すような言葉。

それで全ての力を使い果たしたとでも言いたげに、遠坂の手から完全に力が失われた。

「……とお、さかか？」

返事はない。薄らと開かれた瞼から覗く瞳は、役目を終えたかのようには輝きを失わせている。

——穏やかな微笑。

少女は最期の眠りにつく時でさえ、その名の通り凜とした態度を崩

さなかつた。

それは、少女が見せた誇りだったのかもしれない。

少女らしい最期と言え、その通り。

凜として咲き誇る花の如く。

それが場違いな感想だと分かっている。

その最期は儂く、美しかった。

「シロウ」

「ああ、分かっている」

遠坂の亡骸を横たえて、俺は立ち上がった。

聖杯は直ぐもう傍まで迫っている。

元から、こうするつもりではあった。

イリヤを救うと決めたその瞬間から、他のサーヴァントを倒す事は決定事項だったからである。

しかし、いざ迎えた結末はあまりにも空虚。

それも当然と言え、当然だった。

目的のため、俺は言葉通り全てを失ったのだから。

「進まない」と

だが、未だ残っているものもある。

求め続けた奇跡までは後少し。

—— さあ、行こう。

たった一つだけ。全てを失った俺に唯一残された、最後の希望を取り返しに。

—— この世に『地獄』があるとすれば、まさにこの場所がその名を冠するのに相応しいだろう。

空の光を遮る天蓋。それを支えるようにぐるりと広がる、光沢のある奇妙な色の岩肌。鍾乳洞と呼ばれる、自然が長い時をかけて造りあげた巨大な洞窟が、視界いっぱいに展開される。

その規模たるや凄まじく、直径3キロは下るまい。

洞窟というよりも、荒涼とした大地そのものだった。

あまりにも巨大な円蓋型ドームの大空洞は、無機質でありながらも『生』の色で溢れている。

——まるで、生物の胎内。

龍洞の名を冠する通り、ここは生暖かい生氣に満ちた龍の臓はらわたその物だった。

人の願いも、生命も、苦悩も、死も、何もかもが泥のように溶け合い絡み合う地獄の釜。それが、定められたこの場所の在り方である。

「あれが、大聖杯。」

龍の臓。その最奥に、大聖杯は鎮座していた。

例えるならば、漆黒の太陽。或いは、万物を呑み込むブラックホールとでも言うべきか。

主観で言わせてもらえば、後者の方が嵌る。

あれは、孔あな以外の何物でも無い。

龍の臓、その天蓋近くに開いた孔。

空虚でありながら無尽蔵。

果てが無いという意味では、ブラックホールという喩えは本能的に射ていると思う。

「」  
知らず、固唾を飲んでいた。

成程、これまで五度に渡って幾多の魔術師がこの奇跡に手を伸ばそうとしてきたのも今なら頷ける。

扱い方を間違えれば奇跡にも絶望にもなる、無色透明で方向性の無い、膨大な魔力の渦。

これだけのモノがあれば、本当にイリヤを生き返らせる事だって可能かもしれない。

「いや、違う。かもしれないじゃダメなんだ。叶えないと。じやなきや、今まで奪ってきた命に顔向けが出来ないもんな」

セイバーは何も言わずに、俺の横に立っている。ただその表情は、どこか辛そうだった。

仕方の無い事かもしれない。

一時の同盟関係だったとはいえ、遠坂とアーチャーは俺達のおかげがない仲間だったのだから。

「行こう、セイバー」

「はい、マスター」

自然と、俺達は手を取っていた。

セイバーと2人、その虚無に向かって手を伸ばす。

「我、聖杯に願う」

それが起句だとも言うかのように。

ドクン、と大空洞全体が胎動した。

さながら、大聖杯はこの大空洞の心臓のよう。心臓から伸びた地脈という血管に、血液という魔力が行き渡る。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン。

背筋が凍りそうになる。

その濃密な魔力によるものか。

大空洞内の空気は徐々に熱されているというのに、背筋は畏怖するかのように凍り付いている。

——構うものか、と伸ばした五指に力を込めた。

意識が孔に引きずり込まれそうになるのを何とか堪えて、俺はその願いを口にした。

「イリヤを、俺の大切な人を、返してくれ」

切なる願いは、声を通じて確かに孔へと届けられた。  
起動する大聖杯。それに呼応したのか、大空洞全体が地響きを立てていた。

大聖杯の周りを濃密な魔力が取り囲む。  
傍らに立つセイバーと共に、俺はその光景をただ黙って見詰めていた。

——直後。

俺とセイバーを、孔から溢れ出した『泥』が呑み込んだ。

——暗い、海の中に沈んでいる。

果ては無く、天上も有り得ない海の中。

生と死。そんな当たり前の境界線すら曖昧な世界に、俺は沈んでいくらしかった。

らしかった、とどこか他人事のような表現なのは、文字通り俺は俺という人格を無くしてしまったからだろう。

『い、り、や』

認識出来るのは、その3つの音だけ。

人格を無くしたとて、その願いだけは無くさなかったみたいだ。それが嬉しかったけど、嬉しいという感情を表す方法が分からなくて、そのまま何もせず闇の中を揺蕩った。

——何年も。何十年も。何百年も。

体感する時間は、悠久に等しい。

本来ならば完全に自壊するはずの自我は、あろう事かギリギリの所

で保たれていた。

い、り、や。  
い、り、や。  
い、り、や。  
い、り、や。  
い、り、や。  
い、り、や。  
い、り、や。  
い、り、や。

いりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり  
やいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいりやいり

泥に呑み込まれてから体感で約二千年が過ぎた。

二千年という悠久に等しい時間の中で、『ソレ』は3つの音で構成されたその名だけを紡ぎ続ける機械だった。

とうに身体という外殻は失われ、『ソレ』は泥と完全に同化してし

まっている。

それでも自壊せずに二千年という時を経ているのは、いりやという名を紡ぎ続けるためだったに違いない。

——しかし、そこで変化が起こった。

二千年もの時を経て、『ソレ』は完全に泥と同化してしまった。だからだろう。

ひよんな事から、かつて泥に呑み込まれたはずの己の人格を見つけたのだ。ごく自然な挙動でそれを拾う。

覚醒する。二千年眠ったままだった意識が覚醒する。

——目覚めの時。

『俺』は、二千年ぶりに外の世界の空気を吸った。

「あ」

身体は失われているから、覚醒という表現はひよつとしたら違うのかもしれない。

けど、自己はしっかりと認識出来る。

とりあえず、散歩してみよう。

二千年も経ったのだ。外界がどうなったのか、見てみたい。

失われた身体を泥で補って、外へ出る。

世界は漆黒に染め上げられていた。

何か、マグマのようなものが席捲したのだろうか。

どこもかしこも破滅していて、死んでいる。

かつて、日本と呼ばれた漆黒の荒野。

かつて、太平洋と呼ばれた漆黒の荒野。

かつて、アメリカ大陸と呼ばれた漆黒の荒野。

大西洋、アフリカ大陸、ユーラシア大陸、e t c.

—— 嗚呼、世界は真っ黒だった。

どうやら俺を呑み込んだ『泥』は世界まで呑み込んで、そのまま丸ごと滅ぼしてしまつたらしい。

2年ほどかけて、世界を一周してみた。

もちろん生存者なんて居ない。

この星は死んでいる。

アラヤ、ガイアといった抑止力が働く暇も無かつたのだろう。

世界は『泥』に蹂躪され、跡形も無く滅び去つた。

理由は簡単だ。

『俺』が、その原因だった。

恐らく、あの聖杯は元々何かに汚染されていたのだろう。

—— 願いを、破壊を前提とした方法で叶える。

その結果、世界は滅んでしまった。

しかし、破壊を前提として願いを叶えるというのなら願いが叶つてなくては道理に合わない。

俺が願つたのは、イリヤを取り返す事だった。

しかしイリヤは居ない。

それは、つまり——

「は。アタマ湧いてるんじゃないのか。

イリヤはホムンクルスだった。けど俺の一生を費やしたとて、イリヤと同じ存在を作り出す事は出来ない。

—— だから聖杯のクソ野郎は俺を『不老不死』にして、『永い年月を生きればいつかは作れるかもな』、なんて事を囓わらいながら抜か



あまりにも深過ぎる絶望を振り払い、立ち上がる。  
そうして、『彼』の終わりの無い旅路は始まった。

——滅んだ世界。

ただ独りの孤独な王は、破滅の道へと足を踏み入れる。

奇跡  
月は無く、

希望  
星も無く、

理想  
道は闇に溶けた。

それでも。

それなのに、未だ

——地獄<sup>俺</sup>が、残っている。

頭上には、大聖杯の孔。

この漆黒の世界を生み出したソレは、今なお人々を灼き殺した地獄の焰<sup>ほのお</sup>が燻り続けている。

その焰の下で、俺は一つの『誓い』を立てた。

必ず、イリヤを取り返してみせる。

その為ならばどんな手段も厭わない。

歩き出す。一歩足を踏み出して、俺は前を向いた。

——そんな俺を。太陽よりも禍々しい頭上の灯火が、憐れむように、愉<sup>たの</sup>しむように覗いていた。

「——聖杯の泥の中で二千年という時を過ごした影響なのでしょうね。『彼』は聖杯と密接に繋がってしまった。」

手中に収めた魔力の総数は計り知れない。

投影魔術によって冬木市を構築する事すら、少し『制限』が付くとは言え、『彼』にとっては念じるだけで可能なものだった」

言葉が、出なかった。この世界が異常だという事は重々承知していた事であり、ある程度は覚悟していた。

しかし、それは俺の想像の埒外を向いていたのだ。

あまりの壮絶さに、イリヤ達に至っては顔面を蒼白にして、あたかも魂が抜けてしまったかのように呆然としている。

「それから、どうなったんだ？」

「前述の通りよ。『彼』は固有結界を下地に冬木市を再構築してみせた。そこから、彼の救済への道程は始まったわ。

彼がした事は、まず知識を得る事だった。

聖杯を通じ、ありとあらゆる知識を得ようとしたの。

そして、その中には『平行世界』の知識すら含まれていた」

「な、平行世界、だど？」

然り、と少女は頷く。

にわかには信じられなかった。平行世界へのアクセスなんて、もはや魔法の域と言っても良いだろう。

「『彼』が目をつけたのはエインズワースと呼ばれる魔術師の家系に伝わる秘奥、『置換魔術』だった」

「ッ」

美遊の身体が大きく震えた。

事情を知っているが故、俺とて同じ思いだった。

こんな所でその名を聞くことになろうとは、思いもしなかったのだから。

「正しくは、置換魔術を用いて製造される、『ドールズ』と呼ばれる人形に、かしらね。『ドールズ』と似た原理で、『彼』はイリヤスフィールという人格を人形に付与しようとした。

けど、死者の概念置換には多くの欠陥があるの。

記憶障害、感情の欠損、倫理破綻といった、内面的な欠陥が。だから、『彼』は人形ではなく、適した器カラダを用意する事によって、魂と肉体の親和性を高めようとした」

「その器カラダが、わたしって事なの？」

イリヤの言葉に、少女は頷く。

概念置換と言うより、改変と言った方が良いのか。

予め備えられている人格の改変。

そうして、奴はイリヤを己が愛した少女イリヤへと生まれ変わらせようとしたのだろう。

「どうやって人格——魂を改変させようとしたのかは分からないが、何かしらの方法を画策していたと見える。」

それは、一種の『再臨』とも言えた。

「わたしは、壊れていくシロウを見ている事しか出来なかった。だから、アナタを召喚したの。身勝手な願いだとは分かってる。ただ、それでもお願い。」

あの子を。——シロウを、地獄から助けてあげて」

切なる願いを聞き届ける。

奴は、自分にもう希望なんて無いと思ったのだろう。

——愚かな奴め。

希望なら、すぐ傍にあったというのに。

少女の抱くこの想いが、希望で無くて何と言う——？

「言われるまでもないさ。一時的にとは言え、君はわたしのマスターなのだろう？」

マスターの命令には従う。それが、サーヴァントというものなのだから」

少女は、衛宮士郎に己が認識されないと口にした。

そして、壊れていく所を見ている事しか出来なかったとも。

少女はいつだって奴の傍に居た。

傍に居て、叫び続けていた。

なのに、それに気付かず少女を独りきりにし、愚かな行いを繰り返した奴には重い罰が必要だろう。

「うん。ありがとう、シロウ」

少女は礼を言う。

——花が綻ぶような、暖かい笑顔を向けて。

## 第十節 『最後の休息』

そうして、銀色の少女は再び眠りについた。

——少女は祈る。

雪解けを待つ花々のように淡い切望を抱きながら、目覚めの時を静かに待っていた。

.....  
目覚めたのは昼を僅かに過ぎた頃。

昨日——いや、今日の深夜に話が終わってから直ぐに訪れた眠気は容赦なくイリヤの意識を刈り取った。

疲れのせいだろう。ずっと張り詰めさせていた身体と心は、どうしようも無く休息を必要としていたらしい。

「朝だ」

ポツリ、とイリヤは呟く。

当たり前の朝。当然の如く、青い空に浮かぶ太陽。

太陽の傍には真つ白な雲が寄り添っていて、吹き抜ける風は冬のものにしては暖かい。

空気は清水の如く澄み渡っていて心地が良い。

衛宮の屋敷は、これ以上無いってぐらいの朝の色に染まっていた。

「うん、朝だね」

独り言に応える声があつて、イリヤは瞠目する。

ミュだった。イリヤよりも数分前に起床したのか、微かに乱れた髪を直している最中だった。

隣の布団に視線を落とすとクロが居なくなっている。

既に起床し居間へと向かったのかもしれない。

「おはよおーミュ。何だか、ミュのそういう姿見るの珍しいかも」

そういう姿、とは寝起きの無防備な姿の事だ。

エーデルフェルト邸でのメイド歴のせいなのか、ミュはいつも起きるのが早い。

それは衛宮邸に来ては変わらなず、いつもしつかりと身なりを整えた状態なので、こういつた髪を直すという仕草を見るのは珍しかったりするのだった。

「あ、うん。わたしも、今起きたばかりだったから」

恥ずかしそうに、ミュは頬を赤く染める。

別に女の子同士なのだし恥ずかしがる事でも無いと思うのだが、そこはミュにもミュなりの事情があるのだろう。

ただミュのそんな姿は間違いなくレアなので、今のうちに存分に拝んでおくとする。

眼福眼福。カメラがあつたら思わずパシヤリと撮つてしまいそうなくらい目の保養になる。

寝汗で頬やうなじに張り付く艶やかな黒髪。微かに上気する肌。

ホットパンツ型のパジャマから惜しげも無く晒された白磁器のような足。普段見せる姿とは違う、今まで秘められていた少女の素顔に対しイリヤは一言。

「ふむ、ミュのえっち」

「どうしてそうなるの!?!」

その暴言に、あんまりだとミュが悲痛な声を上げる。

《確かに、今のミュさんの姿はどことなくエロティックな香りがしますねえ。キャップ萌えというやつでしょうか。ルビーちゃん的に、ポイント高いですよ?》

「アナタからの評価なんてどうでもいい」

ルビーに対し、ミュはピシヤリと冷たく突き返す。

「あはは、そういえば、少しお腹空いたかも」

昨日の夜から何も口にしていないので、それも無理はない。きゆるる、と胃が情けない音と共に空腹を訴える。

ミュも同じ気持ちなのか、下腹部をそつと抑えながら頬を赤く染めた。そんな反応に苦笑しつつ、イリヤは居間へ行く事を提案。2人並んで、居間へと向かう事にした。

「」  
「」

互いの間に会話は無い。板張りの廊下を踏む音と吹き抜ける風の音だけが耳朵を打つ。

廊下から望める景色は平穩そのものだ。

——これが全て贗作だと、信じられないぐらいに。

「イリヤ」

ミュが、イリヤを呼び止める。

振り返ると、ミュは少し沈痛な面持ちをして立ち止まっていた。ただならぬ雰囲気だ。

目に見えて伝わってくるその緊張に、こちらの背筋もピンと伸ばされる。

「え、と、どうしたの、ミュ？」

ミュはすぐには応じなかった。

しかし深呼吸をしてから、ミュは意を決したように訥々と口を開き始めた。

「もし。もし、イリヤに大切な人が居て。

世界と、その大切な人を天秤にかけなければいけないとしたら。イリヤは、どっちを救う？」

ミュの問いかけは、分かりにくかった。

いや、違う。イリヤが、その問いに対する答えを持ち合わせていなかったのだ。

大切な人と、世界。

どちらを取れば良いのかなんて分からない。

しかし、分からないままにしておいて良い問いでも無い事は、イリヤも理解していた。

この戦いにおいて、その問いかけは重要な意味を持つ。

それを踏まえた上で、イリヤは答えを口にした。

「わたしは、選べないと思う。だって、重すぎるよ。誰かの命と世界なんて、わたしが背負うにはどちらも重すぎるから」

ただの小学生であるイリヤには、選べない。

多くを救うか、1人を救うか。  
どちらの選択も間違いない。

—— 故に、悔いの残らない選択を。

「—— だから、きつと両方を救う道を選ぶよ。欲張りかもしれないけど、希望を失わない限りわたしはその道を全力で突き進む」

ミュが、イリヤの答えに目を見張る。

自分でもどうかと思う答えだけど、どちらが正解かでは無く自分に悔いを残さない選択を選べと言われたら、わたしはきつとそうするだろう。

「もし、両方失う事になっても」

「—— うん。何かを犠牲にして得たものに、わたしはきつと、笑顔を向ける事なんて出来ないもん」

真っ直ぐミュを見据えて答える。ミュは僅かに目を丸くした後、クスリと口元に笑みを刻んだ。

—— イリヤらしい答えに、安心したからだ。

無論、子供の戯言だと言われれば否定する事は出来ないだろう。

二者択一の問いにおいて両方を選ぶなど、ルール違反にも程がある。

しかし、子供の戯言と決め付けているのは成長し、物の道理を多少学んだ大人だけだ。

子供だからこそ出せる結論。

それはあまりにも未熟であり、同時に瑞々みずみずしい。突き付けられた現実を受け入れられず、両方を選択する事。

それは即ち、大人がもう忘れてしまった、宝物わがままに他ならない。

「—— イリヤは、変わらないね」

「そ、そうかな?」

《良いことじゃないですか、イリヤさん。やはりロリっ子は未来永劫ロリっ子であるべきです! ペったんこサイコー!》

「ミュの言ってる事はそういう事じゃない!!」

イリヤが、茶々を入れてくるルビーに向かつて拳を振り上げる。そのいつも通りの光景に、ミユは呆れながらも安堵するのだった。

机の上に規則正しく置かれた食器から湯気が立ち上っている。メニユーは唐揚げを始め味噌汁、白米、ハーブチキンのサラダと続き、ごく普通な、しかし細やかな手間のかけられた、作る者の拘りが感じられる料理の数々が並んでいた。

その料理を皆で囲む光景は、さぞかし平和に満ちたものとなるはずだったのだが。

「ちよつと待ってくれ。何しに来たんだ、君は」

「何って、決まってるじゃない。お昼ご飯のついでに作戦会議しに来たの。ほら、早く私達の分も作ってよね。色んな準備に忙しいんだから」

その平穩も、唐突に屋敷を訪ねてきた（押し入ってきた）あかいあくまによって木っ端微塵に破壊される事となる。

——遠坂凜。

突然の来客は居間にドカリと腰を下ろすと、我が物顔でそんなふざけた要求を口にするのだった。

唐突に居間の障子が開く音がした。

俺は調理をする手を止め障子の方へ振り返る。

入口に立っていたのはイリヤと美遊だった。

しかし、2人は石化の魔眼でも受けたかのようにピクリとも動かず、居間の様子を呆然と見つめている。

——より詳しく説明すると、居間に当然の如く居座る遠坂凜を見て目を丸くしていた。

その傍らにはセイバーも座っている。

遠坂とは違い、どこか居心地が悪そうな雰囲気だ。

「なに二人ともぼうつと突っ立ってるの？早く入ってきなさいよ」

「いや、そのクロはこの光景に何も疑問を覚えないの？」

「最初は驚いたけど、リンの事だし。別にさほど不思議な事じゃ無いわよ」

妙に説得力のある言葉だった。

「リンは彼女達に随分と信頼されているのですね」

「信頼って言うのかしら、これ。どう見ても呆れられてるようにしか感じられないんだけど」

セイバーのどこか抜けた言葉に、遠坂凜はため息混じりに返答する。そのタイミングで、ちようどこちらの調理も完成した。居間に配膳し、全員で「頂きます」の唱和。妙に緊張感のある昼食が始まった。

「む」

「ほう、これは——」

感嘆するような声。どうやら味に文句を言われるような事は無さそうで、密かに安堵する。

昼食後。後片付けをしようとした俺に遠坂凜が自分も手伝うと言い、遠慮しようとしたのだが、「ご馳走してもらったんだし、後片付けぐらいやるわよ」と言っさつと始めてしまったのだ。

互いの間に会話は無い。

水の音と食器の触れ合う音だけが、二人の間に流れている。一方、居間ではセイバーとイリヤ達が何やら楽しげに話していた。

「ほう。アーチャーの作る料理はそんなにも美味なのですね。ですが確かに、先程の料理はその評価に値するものでした」

「うんうん、セイバーさんご飯お代わりしてたもんね」

「アーサー王が食いしん坊なんていう伝説あったかしら？水を得た魚の如き勢いで白飯が無くなってたわよ」

「く、クロエー！人が食い意地が張っているみたいと言わないで下さい！こ、これはあくまで英気を養うための食事です。どこかの国にもあるでしょう。腹が減っては戦ができぬ、と。まさしくその通り。空腹

状態で敵と戦うなんて言語道断です。食事とは、サーヴァントにとって魔力と同じぐらい大切なものなのですから」

「凄い、力説」

「ええ。でも説得力は無いわね」

「ま、まあ食べないと大きくなれないし」

「イリヤ、そもそもサーヴァントは成長しないんじゃないか」といふかマスタールさん曰く「食事も摂る必要が無いって」

——とまあ、こんな感じである。

その光景は、どこか懐かしかった。

イリヤが居て、遠坂が居て、セイバーが居る。

張りぼてでしか無い贋作だとしても、その光景は酷く俺の心を揺さぶり波打たせる。

そう、贋作つくりもの。

この屋敷も、そして傍らに立つ遠坂凛でさえも、作られた存在に過ぎない。遠坂凛を含めたこの世界の住人は恐らく、彼女の話に出ていたエインズワースという魔術家系が生み出したとされる置換魔術。

それによつて生み出された、『ドールズ』と呼ばれる人格を植え付けた人形——その原理を応用したものだ。

聖杯の泥に呑み込まれた奴は、2000年の時を経て完全に同調した。そして呑み込まれた自身の人格を取り込んだように、器に泥によつて呑み込まれた他の人格を植え付けたといった所か。

——第三魔法とは似て異なる、魂へのアプローチ。

不完全ながら、それは充分奇跡と呼称するに相応しいものだろう。

——その様子だと、貴方は知ってるのね」

唐突に。遠坂凛は、俺に向かってそう言った。

「君は知っていたのか？自分が、何者かによつて作られた存在だという事を」

「そりゃ、誰だつて気付くわよ。この世界はあまりにもおかしな点が多かつたし。何より——私が遠坂凛である事に自信が持てな

かった」

「」

「全く、私を造った奴も悪趣味だわ。人形なら人形のまま、いつそ感情とかそういうのを一切排してくれれば良かったのに。そうしたら――」

カタカタと、音がする。

それは、遠坂凜の持つ食器が立てる音だった。

食器を持つ手が震えているから、そんな音がするのだろう。

「残酷なものよね。『遠坂凜』として17年間を生きてきた記憶は確かにあるのに、私は遠坂凜の偽物でしか無いなんて。自分の存在を根底から丸つきり否定されてるようなものだわ。」

――本当に、残酷」

「怖くは無いのか。自分が偽物でしか無いという事実が。遠坂凜を模しただけの人形に過ぎないという、現実が」

「意地悪な質問ね。怖くないわけじゃないでしょう。人形って事はいつ自分が廃棄されるかすら分からないって事だもの。そんなの、怖くないわけが無い。――けど、それ以上に私は許せないの。私が、遠坂凜わたしらしくない事が。私はそれが何よりも許せない」

――ああ、確かにそれは残酷だ。!!!

遠坂凜という少女はいつだって前を向いていた。

故に自身が何者かによって作られた人形、贋作でしかないと自覚しながらも、少女は『遠坂凜』という人格を植え付けられているが故に、『遠坂凜』を曲げる事が出来ないなんて。

「――ううん、それだけじゃないわ。何が目的なのかとかそんな事はもうどうでも良い。こんな事をしでかした奴に、一発でもお見舞いしてやらないと気が済まないってものだわ」

「ふ」

思わず、口から笑いが零れる。

当然傍らに立つ人物がそれを見逃すはずも無く、

「何よ。笑いどころなんて無かったと思うんだけど？」

「いやなに、実に君らしい考えだと思っただけだ。競争相手がいれば

周回遅れにし、ケンカを売られれば二度と齒向かえなくするのが君の流儀だろう？

——ああ、本当に君らしい。多少環境が変わった所では、君の性根を変えられるはずも無いという事か」

「え」

俺の言葉によほど驚いたのか。遠坂凜は目を丸くして俺の事を見詰めていた。

「貴方、もしかして」

何かを言いかけて、遠坂凜は言葉を切る。

いつの間にか、洗い物は終わっていた。

会話をしている間にも、どうやら無意識に休む事なく作業を続けていたらしい。

「今夜〇時」

ポツリ、と。背中に投げかけられる声。

「今夜〇時に、もう一度私は柳洞寺へ行こうと思う」

「分かった。私もその時刻に向かうでしょう」

その言葉に遠坂凜は淡い微笑を浮かべて、背を向けた。

——ありがとう。

去り際に、そんな声が聞こえた気がした。

昼食後に訪れる、穏やかな昼下がりに。

イリヤは「何をして過ごそうかなあ」、なんて暢気な事を考えながら廊下を歩いていった。

すると、柱に寄りかかって眠っている『彼』を見付けた。

午後の暖かな陽射しが降り注ぐ中、あどけない寝顔を見せている。

「

ぼっ、と自分の顔が赤くなるのを感じる。

別にお兄さんの寝顔に見惚れたという訳では無い（多分）。

ただ、その隣りで自分も眠ってみたいなどと考えてしまった自分の思考に対して赤面したのだ。

「す、少しだけなら、いいよね?」

ゴクリ、と生唾を飲み込みつつ彼へと近付く。

浅く上下する肩。微かに耳朶をはむ吐息。いつもとは異なり、あどけない雰囲気を放つ寝顔。

——カチリ、と。

イケナイスイッチが入る音がした。

「お、お邪魔しまーす」

恐る恐るといった様子で、彼の横に腰を下ろす。

そのまま彼の身体に自身の身体を預けようとして——

「ん」

女の子らしい、どこか艶っぽい吐息が漏れる。

イリヤのものでも、当然ながら彼のものでも無い。

嫌な予感をひしひしと感じつつ、声が聞こえた方向へ首を動かしてみた。

「ッ、クロ!!」

なんとというかやはりというか。

彼の膝で、クロは猫のように丸まりながら眠っていた。

どうやら彼に気を取られて気が付かなかったらしい。

いわゆる膝枕状態である。まるで極上の枕でも見付けたとでも言

いたげに、クロは幸せそうな顔で眠っていた。

ぐ、ぐぬぬ、クロってばまたお兄さんにベタベタして——

そしてここに、自分の事を棚に上げてわななく白猫が一人。

「ていつ!!」

「ふにゃあ!」

彼の膝に乗せられたクロの頭を一閃。

ゴロン、と彼の膝の上からクロの頭が転がり落ちる。

いきなりの暴挙にクロはイリヤを睨むと、

「な、何すんのよバカイリヤ!」

クロは至極当然の反応を返した。

誰だって、いきなりこんな事をされれば怒るに違いない。

クロとてその例外に漏れなかったようだ。

「大方、わたしがお兄さんの膝で寝てる事が理由でしょうけどそれなら前にイリヤもシて貰ってたじゃない！自分だけなんて不公平極まりないわ！」

「うぐ。」

それを言われると恥ずかしいやら正論すぎて言い返せないやらで言葉に詰まるイリヤだった。

「じゃ、じゃあ片膝だけわたしに。」

「はあ。結局それが狙いだっただけ？」

クロの呆れたような声には返答せず、イリヤは赤くなつた顔を隠すかのように彼の膝へ顔を埋めた。

「ん。」

昨日は夜遅くまで起きていたからだろう。

目を閉じてみると案外直ぐに眠気は訪れた。

昼近くまで寝ていたとは言え、実際の睡眠時間を考慮すれば充分眠つたとは言い難い。

そして何より——彼の膝に身体を横たえていると、凄く落ち着いた。そりやあ瞼も重くなる。

クロも最初は少しからかってみようと近付いた所で、この幸せな罠に引つかかってしまったのだろう。

「ふあ。」

そつと欠伸を漏らして、目を閉じる。

ズキン、と。微かに胸が痛んだ。

この時間はもうすぐ終わってしまう。

だつて彼を倒すという事は——この世界の創造者を倒すという事は、この世界の破壊を意味するのだから。

「世界が大切な人か、かわたし、どうすれば良いのかな。あの人を止めたい。けど、そうするには倒すしかなくて——」

生半可な言葉で彼を止める事は不可能だ。

だから、倒すしかない。両方救える結末なんて、ありはしない。

「ミュにはああ言つたけど、わたしなんかじゃどっちも救う事なんて出来ないよ。」

イリヤらしくない言葉だと思っただろうか。

世界も大切なものも両方救う。

それが少女の願いであり希望である。

可能性がまだ残っているか、未だ何か方法が模索出来るのなら迷いなくその希望に向かって手を伸ばすだろう。

——しかし、今回に限って希望は無かった。

もう『彼』は救えない。

イリヤをしてそう思わせる程、『彼』は既に終わっていた。

「お兄さん、お兄さんだったら、どうする？」

当然ながら答えはない。

そもそもこの問いかけに、正解なんてありはしなかった。

故に、悔いのない選択を。

「お兄さんだったら、クロだったら、ミュだったら、わたし、だった  
ら——」

わたしだったら——諦めたく、無い。

救えないという事実は、これ以上無いってぐらいに定められてしまっている。

ただそれでも、諦めるという事だけは出来なかった。

希望が無いのなら探せばいい。

暗闇しか無いのなら切り開けばいい。

それすら不可能であるとしても、イリヤは走り続ける事を止めたくはなかった。

「——諦めない。諦めたく、ないよ」

きゅっ、と彼のズボンを掴む。

その言葉を最後に、イリヤは深い眠りの底に意識を落としていった。

「い、これは」

ズガーン、とピアノの重低音のような重いBGMがどこからか聞こ

えた気がした。

美遊・エーデルフェルト。少女は居間から自室へ戻ろうとしていた時に、その光景に遭遇した。

傍からは一枚写真に撮りたいぐらい素晴らしい光景。

美遊にとつては垂涎ものと言つて然るべし楽園。

つまり、何か問題があるのかと問われれば無いのだが、衝撃的である事には変わるまい。

《おや、ミュさんもお昼寝ですか？》

イリヤの銀を梳つたかのような髪から飛び出したのは、どこかおもちやじみた外見のステツキ——ルビーだった。

《あの、ミュさん？》

《姉さん。ミュ様は放心状態になっているようだから少しそつとしてあげて》

《はあ。色々大変なんですなぁ》

ちつとも大変そうに思つてなさそうな声でそう言つてから、ルビーはカメラモードに変形してパシヤリと一枚写真を撮つた。その写真は後で内密に貰つておこう。

「もう大丈夫。だけど、これはどういう状況なの？」

《見ての通りですよ？イリヤさんとクロさんがお兄さんと寝てます》

《それだけ聞くと事案ですね》

「どうしてそんな事に——」

《いやあそれがイリヤさん達、まるで電灯の光に誘われる虫さん達みたくふらふらとお兄さんの膝に近付きまして。魅了のパッシブスキルでも持つてるんじゃないですかねこの人？》

「魅了——」

チラリ、と彼の寝顔を覗いてみる。

なるほど。これは確かに魅了だ。魔的とすら言つていい。

「うん。これは魔的——なら、一緒に寝なくちゃ」

《ミュ様、その理論は少しどうかと。それにそのネタはかなりアウトな気がします》

《まあまあ、良いではないですかサファイアちゃん。この屋敷に滞在

出来るのも残りわずか。少しぐらゐは無礼講というものです」

《

》

「これには二人とも押し黙った。

残りわずか。その言葉は、現状をハッキリと認識させる。

胸より込み上げた感情を押し留め、美遊は彼の身体で空いている場所を探す。両膝はイリヤとクロが占領しているため使えない。残っている場所は――

「ん」

そつと、起こさぬように彼の胸に頬を寄せる。

美遊が選んだ場所は彼の胸元だった。足と足の間に身体を割り込ませるような形で、身体を彼の胸に預けている。

不思議な事にそれだけで落ち着いて、忘れていた眠気がどつと押し寄せてきた。

「暖かい」

ゆつくりと瞼が落ちていく。

――かつて。

世界か大切な人か。その選択を迫られた人が居た。

彼は大切な人が幸せになつてくれる事を祈り、願つた。

だからどうしても、重なつてしまう。

大切な人のために壊れながらも奔走する姿が、その傷付いた背中が、自分を救つてくれた『兄』に似ていた。

「でも」

明確に違う事がただ一つ。

それはもう、きつと彼が無くしてしまったものだろう。

「だから止め、なきや」

目を閉じる。意識は深く深く、水の底に落ちていった。

「どういふ状況だこれは」

俺が目を覚ますと、イリヤ、美遊、クロの3人が俺の身体に抱き着くようにして眠っていた。

立ち上がりたかったものの、それは叶うまい。

3人はあまりにも気持ち良さそうに眠っていて、起こすのは少し躊躇われた。

「仕方ない、か」

俺は上げかけていた腰を下ろし、空を一瞥した。

太陽がどこか遠くに沈んでいく。

——あと、6時間。

それが、この平穏が続くであろう時間だった。

時刻は午後11時30分。すっかり寝静まった屋敷を、俺は誰にも見付からないようそっと抜け出した。

街を夜の帳が覆っている。！！

冬の冷気が容赦なく肌を突き刺し、吐き出された息を白い輪郭で染め上げていた。

ダン、と夜気に響く屋根を蹴り付ける音。

家屋から家屋へ、八艘飛びを思わせる動きで俺は遠坂凛との待ち合わせ場所だった柳洞寺へと向かう。

「お兄さん見付けたー!!」

「サファイア、魔力全開!!」

「全く、手間がかかるんだから」

「ッ!?!」

突如、後方から響き渡る声。

驚きと共に振り返ると凄まじい速度で俺に追隨するイリヤ、美遊、クロの姿が見えた。

立ち止まり、イリヤ達と対面する。

「——どうして分かったんだ。誰にも気付かれないよう抜け出したつもりなのだが」

「お兄さんの考えそうな事ぐらい、簡単に分かります」

「そーそー。どうして何も言わずに一人で勝手に行っちゃうのかしら。過保護なのも良いけど、そろそろ考え物よね」

少し怒った様子の美遊とは対照的に、クロはどこか楽しそうに笑っていた。

——しかし、今回ばかりは譲れない。

イリヤ達は分かっているのだ。

『奴』を倒すという事は、この世界に終止符を打つという事なのだ。その選択はあまりにも、辛い。

この子達には重すぎるものだろう。

「分かってる」

「イリヤ？」

「あの人を倒しちやったら世界が壊れちゃう事なんて、分かっている。

——だから、わたしは行くよ。わたしに出来る事がまだあるのなら、絶対にまだ諦めない！あの人も、世界も、両方救う！」

少女は言う。

アレはもう終わった身だ。

奇跡はなく、希望もなく。

アレは妄執に衝き動かされているだけの機械でしかない。

——だというのに、まだ終わっていないと。

諦めないと、少女は言う。

「——両方、か。全く、君らしい『答え』だな」

思わず微笑が漏れる。

それで、俺にも覚悟が決まった。

「——行くぞ。救うにしろ討つにしろ、奴の凶行を止めるために」

三人は強く頷くと、俺の隣りに並んだ。

目指すは柳洞寺円蔵山。

地獄を内包した龍の臓腑ぞうふにて、業火を殺せ。

## 第十一節 『鶴翼重奏』

柳洞寺円蔵山。

その最奥にある巨大な大空洞に一人の男が佇んでいた。たった一人のために、この世全ての絶望を背負ったモノ。

人である事を捨て、かつて業火の下で立てた『誓い』だけを胸に抱き走り続ける機械である。

「喜べよ、バーサーカー。お前も会いたかっただろう？ かつての主に。お前を最後まで残しておいたのもそれが理由なんだぜ。とは言え、流石にお前はイリヤの事を覚えていないか。—— お前はイリヤ達同様、カルデアから引つ張つてきたサーヴァントだもんな。あの子の記憶が無いのも無理は無い」

「バーサーカーは当然ながら俺の言葉には答えない。

「キヤスターやライダーなどは、カルデア風に表現するとシャドウサーヴァントと呼ばれる存在に該当する。

「しかし、ここに居るバーサーカーは違う。

「前述の通り、カルデアから奪つてきた霊基なのだ。

「そして、それとは別にもう一騎。

「全く。事を成すためにはそんな躊躇は枷にしなければならないって、充分理解してるってのに」

「誰に向ける訳でもなく、言葉を紡ぐ。

「口元に浮かぶ笑みは自嘲の色を孕んでいて、痛々しい。

「お前をここまで引き摺り出したのは俺なのに何言ってるんだって話だけどさ。それでも、俺は。お前にだけにはいつものお前で居てもらいたかったんだよ—— セイバー」

「その言葉はもう届かない。

「少なくとも数時間後には、俺とアイツはこの場所で対峙する事となるだろう。」

—— 殺すべき、敵同士として。

「俺は誰にも止められない。いや、止める訳にはいかないんだ。——だから、さ。俺はお前達を殺すよ。それでイリヤの命を救えるのなら、俺は躊躇いなんてしない」

「」  
その独白を聞いていたのは、傍らに待っていたバーサーカーだけだった。聞いた所で、バーサーカーにはなんの意味も無いだろう。

だが、彼は気付いただろうか。

——イリヤ。その三文字の音色が発せられた瞬間、微かにバーサーカーの巨軀が震えた事に。

「さあ、行こうかバーサーカー。これはお前の主を取り戻すための戦いだ。存分に、その戦斧を振るってくれ——」

◇?

「ちゃんと来たわね」

開口一番、遠坂凜は鋭い声で俺達を迎え入れた。

傍らには既に銀の鎧を纏ったセイバーが控えている。それに対し、遠坂凜は見覚えのある制服姿で腕を組んでいた。

「何だ、来ないとも思ったのか？」

「まさか、念のための確認よ。それより——」

チフリ、と遠坂は俺の後方に立つイリヤ達を一瞥する。

「前もちよつと思っただけど何なのその格好。今からコスプレパーティーに行く訳じゃ無いのよ？」

「う。これは一応、わたし達にとっては正式な戦闘服と言いますか」

「そんなのが？わたしだったら死にたくなるわね」

「リシさんの方がわたし達より先に着てたからね!？」

《完全に自分の事棚に上げちゃってますねえ。世界線が違うので無理はありませんが》

「やっぱりコレ、恥ずかしい格好だったんだ」

「いいえ美遊様。とつても良くお似合いです」

「お兄さん、そのわたし、似合ってますか？」

「どうしてそこで私に話を振るんだ美遊」

急に話を振られ、俺は少し困惑する。

しかし、その問いを無碍にする訳にもいかない。

美遊にとつては勇気のいる質問だったらしく、美遊は微かに頬を赤らめて恥ずかしそうにしていたからだ。

方向性はともかくとして、美遊のような女の子が勇気を出して聞いてきたのだから真摯に答えるのが男としての矜持というものだろう。

「まあ、なんだ。似合っているかいかで言えば、これ以上無いぐらい似合っていると思うぞ。完璧だ。ベストマッチだ。落ち着いたデザインが美遊の楚々とした雰囲気と良く表現されている。少しばかり露出が多過ぎる気がしなくもないがね」

俺が出来る最大の賛辞を送ってみる。

今の言葉に偽りはなかった。露出こそ激しいが、美遊の魔法少女姿というのとはなかなかどうして悪くない。

イリヤが元気に飛び回る小鳥だとしたら、美遊はさながら花が咲き誇る野原を優雅に舞う蝶々だろう。

ベースはスクール水着を改造したかのような、紫と黒を基調とした衣装で、所々に鱗翅を思わせる意匠があしらわれている。落ち着いた、美遊らしいクールな雰囲気と魔法少女らしい形の衣装は鬼に金棒、弁慶に薙刀と言っても過言では無いぐらい合いますぎているのだ。

「うわ」

「ちよつと待てトオサカリン。どうしてそこで私がそんな生ゴミを見るかのような目で見られなくちゃいけないんだ」

「いや、だって普通『可愛いと思うよ』とかそんな感じで答えるでしょ。それをあんな本気っぽく解説してるのはちよつとねえ？」

《事案です。ね。通報しましょう》

「お兄さん」

「安心しなさい。わたしはお兄さんがどんな趣味を持ってたって、ちゃんと愛せるから♪」

《おお、流石クロクさん！ 真実の愛です。ねえ》

「」

● 男の矜持、敗北。遠坂凜はともかくイリヤの視線が痛い。

● いつもはキラキラと輝いている紅の瞳だが、それが今は蔑むかのよ  
うな視線に変わっていた。

● そして肝心の美遊はより一層顔を赤くして、遠坂凜の背中に隠れて  
しまった。

「と、とにかくだ。この子達の格好はこれが普通なのだから、これ以上  
はあまり突っ込まないように」

「一番深く突っ込んだのアナタだけだね」

● 遠坂凜の言葉をスルーして、俺は面持ちを戻した。

● 一体どうしてこんなにも話がズレてしまったのだろうか。

● それを考え始めるとまた時間をロスしそうなので、さっさと本題に  
入ってしまおうと俺は口を開き始めた。

「———それで、どうやって攻めるんだ？ 何か作戦があるのなら  
聞いておきたいのだが」

「残念ながら、そういう類のものは無いわね。何せ相手の力があま  
りにも未知数なんだから。無理に作戦を立てて動くより、お互い臨機  
応変に立ち回ってくれた方が有難いわ。あまり緻密に作戦練ろうと  
すると、上手くいかなかった時に混乱を生むでしょうしね」

「同じ意見だ。それなら———」

「ええ。正門からの正面突破あるのみよ」

● 敵の本拠地に何も考えず正面突破をかけるなど、本来ならば愚策と  
言う他ないぐらいの愚行だろうが、そもそも柳洞寺には正門からし  
か入る術が無い故、その選択肢しか選べない。

「大丈夫、なのかな」

● イリヤが不安そうな声を零す。

脳裏を過ぎるのは『泥』の鎧を纏い、巨大な戦斧をもって全てを粉砕せんとする漆黒の狂戦士。

バーサーカーとの戦力差は一目瞭然。俺達が全員でかかってもその差を覆せるか分からない程、壁は厚く高い。

「遠坂凜、もしも俺が戦闘不能に陥ったら——」

言うべき言葉は最後まで続かなかった。

口を開いた瞬間、トスツと俺の腰辺りに、イリヤが自身の身体をぶつけてきたからだ。

抱き着くとはまた違う、拙い主張。

瞳目する俺に対して、イリヤは雨雲を滴らせるかのような訥々さで言の葉を紡ぎ始めた。

「いや、そんな事言っちゃ、やだよ」

「イリヤ？」

「約束、した。カルデアに帰ったら、わたし達に料理教えてくれるって、約束したもん。だから、だからっ」

「ああ、そうか。そうだった、な」

言って、イリヤの頭に手を置いた。

——この戦いに、勝たなければならない理由がある。

今は、それだけで充分だ。

「——それじゃ話もまとまった事だし、行くわよ」

遠坂凜を先頭に俺達は柳洞寺への階段に足をかける。

——そこで不意に、俺は奇妙な視線を感じた。

振り返ると、すぐ後ろに視線の主が立っていた。

視線の主はセイバーだった。憂いに染まった顔は彼女らしくなくて、思わず俺は声をかけていた。

「何か、用でも？」

セイバーは驚いたように蒼い瞳を丸くしたが、直ぐに表情を引き戻す。

「いえ。あまり大した事では無いのです。ただ、イリヤスフィールの言っていた、カルデアという言葉に何故か違和感のようなものを覚えただけで——」

「違和感？」

聞いてみたものの、かなり曖昧な答えが返ってきた。

いや、待て。カルデアという単語に違和感——？

「セイバー、君はまさか。」

「二人とも、何話してるのよ。置いていくわよー！」

俺達の歩みが遅かったからだろう。既に数段階段を登っていた遠坂凛がこちらを振り返って声を飛ばしてきた。

余計な疑問は出来るだけ戦闘前に解消しておきたいのだが、急かされてしまつては仕方がない。

それに——俺の『推理』が正しければ、きっとその答えは彼女にとつて心を揺るがすものになる。

それだけは、あまりしたくない。

「すみません、この話はまた後ほど」

セイバーは遠坂凛を追つて、階段を駆け登つていく。

俺もそれに倣つて階段を登つた。

足取りは重い。

この先に待ち受けているであろうバーサーカーをどうすれば倒せるのか、その方法がどうしても思い浮かばないのだ。

直接矛を交えた俺だからこそ理解出来た。

あのバーサーカーは、規格外に過ぎる。

ただでさえ敵に回す事が躊躇われるサーヴァントだというのに、奴が手を加えてくれたおかげで更にその度合いが増してしまった。

——勝利へのビジョンが見えない。

俺達ではどうしても、後一步及ばない。

「いや、何も無いわけではなかったな」

今の予測は、少しばかり計算が甘い。

何故ならば俺が目指そうとしたのは、全員が生存した上で勝利するという理想の光景だったからだ。

結論から言えば、まだ手はある。

——バーサーカーに一步及ばないというのなら、その一步を生み出してしまえば良いだけの事。

無論、それは簡単ではない。

その代償として失われるのは——俺の『命』だ。

「イリヤ達には、すまないと思っっている。俺が非力なばかりに、君達に辛い思いをさせてしまうだろう」

一人、俺は言葉を紡ぐ。

先程はイリヤに止められて言えなかった言葉だった。

イリヤ達は俺が消えてしまったら、きっと悲しむだろう。

それは俺も望む所じゃない。

イリヤ達の願いは俺と一緒にカルデアへ帰る事であり、俺のやろうとしている事はそれを真つ向から否定する行為だからだ。

「だが、もう見て見ぬふりは許されない。俺が衛宮士郎である限り、奴だけは必ず俺が止めなくてはならないんだ」

イリヤは息を引き取る直前、俺に言った。

——自分は幸せだった。だから俺にも幸せになって欲しい、と。誰よりも幸福を求める権利があったはずだ。

なのに、イリヤは最後にその願いを、俺に託してくれた。雪のように儂い、幸せそうな笑顔で。

「だから、これは俺が成さねばならない事。」

そのために、俺は「ちよつと、さつきからどうしたのよ。何か心配ごとでもあるの？」

いきなり遠坂凛の顔が視界いっぱいに映し出された事によって、思考が寸断される。

両腰に手を当てて、下から覗き込んでいるらしい。

可愛らしく、同時にお姉さん然とした、どこか頼もしさを感じさせる仕草だった。

「いや、何でもない。それより、君の方はどうなんだ。すっかり夕飯と休息は取ったか？土壇場になって取り返しのつかないうつつかりをされては堪らない」

「何その心配。アンタは私の保護者かっつての」

「ふ、どうやら聞くまでも無かったか」

「当然でしょう？ 私達の手に負えないような化け物が相手だもの。寶石の用意は潤沢。魔術回路には一切の淀み無し。有り体に言っちゃえば、絶好調ね」

「ほう、それは良かった。では君の技量に期待するでしょう」

「任せときなさい、と胸を張る遠坂凜」

「しかし不意に表情を翳らせて、

「私としては、アナタの方が心配なんだけどね」

「それは、どういう意味だ？」

「俺の問いに遠坂凜は「別に、何でもないわよ」と答えて、山門へと続く階段を駆け上って行ってしまった」

「遠坂凜が残っていた言葉の真意を計ろうとして、やめる。先に述べた通り、戦いの前に余計な迷いは抱くべきではない。俺は迷いを掻き消すように深く深呼吸をしてから、階段を上り始めた」

「あんなにも重かった足取りが今は軽い」

「俺は冷たい心で、暖かな幻想を切り捨てる」

「ここはさながら、処刑台まで続く十三階段だ」

「そんな事を考えてみてから、その喩えが実を射ている事に気が付き、苦笑が漏れた」

「そして、遂に長い階段を上りきる」

「眼前には古びているものの、大地に強く根を張る大木の如き荘厳さを感じる山門が——地獄への入口が、俺達を誘うようにその口を開けていた」

「誰も、いない」

「境内の中に踏み込んだ俺達を待ち受けていたのは、肌を突き刺すような冷気と深海の如き静寂だけだった」

「奇襲を仕掛けてくる雰囲気もない」

「横たわる空虚さが、俺達以外の何者もこの場に存在していない事を証明していた」

「もしかして、移動した!けどそれなら」

《ハイ、美遊様。『彼』が自ら攻めてこないのは何かしらの制限があるという見解ですが、そもそも自由に移動出来るのなら今までのように回りくどく私達を攻撃する必要がありません。どこかに拠点を移したという線は薄いかと》

《です。ねえ。もし自由自在に行動できるのなら遠回りなやり方をせず、にイリヤさんの寝込みを襲うだけでジ・エンドですから》

「ね、寝込みを襲うって、変な言い方しないでよ、もう!」

「ちよつとそこ、気を緩めない!どこから奇襲されるか分からないんだからもつと真面目に」

遠坂凜がイリヤに声を上げた、その瞬間。

何の前触れもなく——今自分達が立っている地面が、轟音と砂塵を撒き散らしながら崩壊した。

「な」

驚愕と同時に胃が持ち上げられるかのような、奇妙な浮遊感が俺達を襲う。このままでは数秒を待たずして、落下エネルギーを伴い地の底へ激突するだろう。

「セイバー、着地させた!!」

「了解です、マスター!」

しかし流石と言うべきか、唐突な落下に見舞われても遠坂凜の判断は早かった。

セイバーは遠坂凜の指示を受ける前からそうするつもりだったのか、言い終わったコンマ1秒後には遠坂凜の身体を受け止め、落下体勢へと移行する。

それを横目に、俺はイリヤ達の様子を確認する。

しかしその心配は杞憂だったようだ。

イリヤも美遊も、突然の落下に顔を青ざめさせながらも既にカレイドステッキの力によって空気中に浮いている。

となれば

「きゃあああああああああつ!」

悲鳴を上げながら、地の底へ吸い寄せられるようにジタバタと落ち

ていくクロだけだろう。

俺は足元に一振りの巨大な剣を投影し、それを蹴り付けてクロの元まで一息に跳躍する。

そのまま華奢な身体を、胴と足を両手で支えるようにして受け止めた。俗に言う、お姫様抱っこというやつである。

「無事か？見た所怪我は無いようだが」

「う、うん 大丈夫 あ、ありがとう」

「構わん。それより、しっかりと私の身体に手を回せ。着地の衝撃に備えるぞ」

「て、手を回すって ああもう！分かったわよ！やれば良いんでしよう!?やればー」

「あ、ああ 頼む」

疑問符を浮かべる俺を他所に、クロは躊躇いがちではあるものの俺の首に手を回す。

直後——普通の人間ならば身体の骨という骨が粉碎しかねない衝撃が、足元から頭蓋まで走り抜けた。

「っ、流石に、多少は堪えるか」

「だ、大丈夫」

「ああ、少しばかり身体が痺れているが問題ない。君の方はどうだ？衝撃はある程度殺したつもりだが」

「わたしの方も大丈夫よ。ふふっ、これも頼りになるナイト様が優しく抱きとめてくれたおかげかしらね？」

クロは楽しげに笑いながら、そんな事を口にする。

「ふ、ナイト様と来たか。生憎と私にライダークラスの適性は無い。しかし、その名に恥じぬようお姫様を守る剣の務めぐらいは果たすでしょう。お姫様と呼ぶには少々、わがままでおてんばな気がしなくも無いがね」

「そりやそうよ、女の子だもの。奔放に、わがままに、自分らしく。それが女の子の特権でしょう？」

彼女らしい言葉に、俺は苦笑を零す。

わがままに自分らしく居るのが女性の特権だと言うのなら、男の特

権はそのわがままに付き従い甲斐性を見せる事……なのかもしれない。

「……全く、君には恐れ入ったよ」

言つて、クロの身体を降ろす。

クロの挙動に異常は見られない。その事に軽い安堵を覚えつつ、俺は辺りを見渡した。

——この世に『地獄』があるとするのなら、まさにこの場所がその名を冠するのに相応しいだろう。

空の光を遮る天蓋。それを支えるようにぐるりと広がる、光沢のある奇妙な色の岩肌。鍾乳洞と呼ばれる、自然が長い時をかけて造りあげた巨大な洞窟が、視界いっぱいに展開される。

その規模たるや凄まじく、直径3キロは下るまい。

洞窟というよりも、荒涼とした大地そのものだった。

あまりにも巨大な円蓋型ドームの大空洞は、無機質でありながらも『生』の色で溢れている。

——まるで、生物の胎内。

龍洞の名を冠する通り、ここは生暖がい生氣に満ちた龍の臓はらわたその物だった。

人の願ひも、生命も、苦悩も、死も、何もかもが泥のように溶け合い絡み合う地獄の釜。それが、この場所の在り方だった。

「……か」

間違いない。ここが奴の用意した祭壇であり——俺が何としても殺さなくてはならない『地獄』の源流だ。

「なに、この膨大な量の魔力のうねり……こんなの普通じゃないわ」  
傍らに立つクロが呆然と呟いた。

クロの言葉通り、濃密な魔力がこの胎内を満たしている。そういった類の力を感じにくい一般人でさえ、ここに足を踏み入れれば何かしらの異常を感じるだろう。

「お兄さーん!!!」

「無事ですか、お兄さん!!」

イリヤと美遊の声が近付いてくる。

飛行が可能である2人は、当然無傷だった。

瓦礫が上から落ちてきたとしても、ルビーとサファイアが物理保護障壁を常時張っているはずなのであまり影響は無いだろう。

「ちよつと二人とも、わたしの心配はしてくれないの？」

「クロはお兄さんに助けて貰ってたじゃない。しかもお姫様だつこで」

「べ、別にわたしから頼んだ訳じゃっ」

そんなやり取りが繰り返られる中、俺はセイバー達を探そうと視線を張り巡らせていた。

地表に緩急があり見通しづらかつたが、幸い両者は直ぐに見つかつてくれた。

距離にすれば100メートルもない。

何やら火花を散らし合っている3人を呼び止めて、俺達は遠坂凜とセイバーの元へと向かった。

「取り敢えず、全員無事みたいね」

遠坂凜はこちらを一瞥した後、もう一度この大空洞の奥に視線を移した。数キロメートルに渡って広がる大空洞。

その奥に、崖が見えた。

ゴツゴツと岩が隆起しているので、人並みの筋力さえあれば簡単に登る事が出来るだろう。

後は別段、目立つようなものは見当たらない。

「このあからさまに禍々しい魔力——間違いないわね。ここがアイツの工房とでも言うべき場所よ」

「ここが」

「」

イリヤが固唾を呑む一方、美遊は険しい表情でその『祭壇』を睨んでいた。胸中から込み上げる想いを抑えるかのように、両拳を握りしめている。

「まるで、その場所を知っているかのように。」

「セイバト、何か感じる？」

「リン。その問いに対する答えを述べるのは少々躊躇われる。ここはあまりにも魔力の濃度が高い。もしもその何かがあったとしても、余

程のものでない限り探知は出来ません」

「そうよね。全く、ここの魔力の濃度が高いと異常を探知するのも一苦労だわ。強い磁場が発生している場所でコンパス使って方角を調べようとしているもんだし」

「的確な喩えだな。さて、これからどうする?」

「決まっているでしょ。ここがアイツの根城だつてんなら速攻で叩き潰しに行くだけだわ。例え、何が待ち受けていようとね」

自分を鼓舞するようにそう言い放って、遠坂凜は歩き出す。そこからは全員、終始無言で足を動かし続けた。

前述の通りこの大空洞は数キロメートルに渡り広がっていて、地上の星を拒絶している。

大空洞の中は澱んでいた。

その澱みは歩を進めることに濃くなっていく。

魔力とはまた違う。

これは——怨嗟か。

奴が背負うもの。その一端が、この怨嗟なのだろう。

この場所に堆積している想念ですらこれだ。

奴が実際に背負い込んでいるもののおぞましきは、マトモな人間ならば数秒と持たず発狂してもおかしくはない。

なんせ、奴が背負っているものは己が奪い尽くした人類60億人の怨念そのものだ。

ただの人間が背負うにはあまりにも重く、深い絶望の澱。

その果てに奴は、何を得たのだろうか?

「いや、貴様が何かを得ようとするのはこれからか。その絶望は希望を求むるが故に生じたものに他ならない——違うか、衛宮士郎?」

「——知ったような口を叩くな、半端者」

俺の独白じみた言葉に、応じる声があった。

奴は——衛宮士郎は、まるで俺達の事を待っていたかのように堂々とその姿を晒していた。

その姿は地獄に佇んでいるというのにあまりにも自然体であり、その存在がこの空間と同一の存在である事が如実に伝わってきた。

「つ、アナタは」

「やあ、イリヤ。もう来ないと思っていたけど、もう一度来てくれて嬉しいよ。——ああ、今度こそ君を手に入れてみせる。俺の願いの成就のために。そして、この絶望を終わらせるために。そのためには、やはり、お前は邪魔だ」

濁った琥珀色の瞳にかつての面影など皆無。

目の前に佇んでるのは既に終わった命であり、世界を滅ぼした元凶であり、そしてイリヤの身体を使つて己の身勝手な願いを遂げようとする『敵』だ。

「ふん、それはお互い様だろう。」

私達をこの世界に引きずり込んだのが貴様だというのなら、出口への鍵も貴様が握っているという事だ。

私達の最終的な目的はカルデアへと帰還する事。

それを邪魔する貴様は障害以外の何物でもあるまい。

故に貴様の妄言に付き合っている暇など塵芥一つ足りとも無く、無論、イリヤを貴様のような輩に渡す理由は皆無だ。

さて。長々と言葉を建て並べてみた訳だが、自分が私達にとってどれ程邪魔な存在か理解出来たか？」

言つて、眼前の『敵』に瞳を絞る。

俺はイリヤ達を庇うように立ち塞がり、予め投影していた干将・莫耶の柄を両手で強く握りしめた。

——出来る事ならば、イリヤ達と衛宮士郎をこういった形で会わせたくは無かった。

イリヤ達に『アイツは別の世界の住人に過ぎない』、なんて理屈が通じ無い事は既知の通り。

戦う事に対して、忌避の感情が発生しない訳もない。

——それはきつと、すごく辛い事だ。

「貴様には、指一本触れさせない。絶対だ」

イリヤ達を衛宮士郎には指一本触れさせないのと同時に、俺は彼女

達に、衛宮士郎を傷付けて欲しくない。

誰かを傷付けるといふ行為は、自分自身の心を刀で削り取るのと同義である故に。

「本当に、バカなんだから」

呻吟するように、クロが眩きを零す。クロの言葉の真意を確かめる前に、

「下らない」

怨嗟に満ちた声があった。憤怒に見開かれた双眸は今にも眼窩からこぼれ落ちてしまいそう。

怒りに震える身体は、陳腐な表現ではあるが爆発寸前の火山を彷彿とさせた。

「下らない下らない下らないッツ!!!」

自分がその子に頼られているのが、寄り添われている事がそんなに気持ちいいか!!!お前のそれはただの自己満足だろう!!自分の失ったものから目を背けて、その子で自分を慰めているだけだ!!!俺は諦めない!!俺は逃げない!!失ったものを取り戻すまで、俺はその現実から目を背ける訳にはいかないんだよ!!!」

血を吐くような絶叫。

確かに、奴は立ち向かった。

俺と同じく『イリヤ』を失っておきながら、奴は諦める事なくイリヤを救う道を選んだ。

有り体に言えば、俺は怖かったのだ。

俺はかつて『衛宮士郎』と同じく聖杯を使ってイリヤを救うか、使わずに聖杯を壊すか、その二択を迫られた。

俺は、自身に問うたのだ。

その願いは本当に正しい事なのか。

それは本当に、彼女の望む願いだったのかと。

「確かに、そうだな。」

俺はイリヤを救う道を選ばなかった。貴様よりも幾分が臆病な性格でね。最後まで自分の望みを、イリヤを救いたいという願いを成し遂げる事が出来なかったんだ」

「そんな、そんな事」

「俺の言葉を否定しようとするイリヤを片手で制し、俺は毅然と前方を睨んで言葉を紡ぐ。」

「そうだ。俺は臆病だった。だが、貴様は理解しているか？」

「何の事だ」

「そんなもの決まっているだろう。」

「俺と貴様の、真の意味での違いを」

「なに」

「俺は逃げた。自分の願いだったイリヤの命を救う事を諦めて、逃げ出した。そしてお前は立ち向かった。その愚直さで、その芯を貫き通す強さでお前は絶望に抗った」

「ああ、それに間違いなどあるまい。」

「俺は逃げ、奴は立ち向かった。」

「俺は弱く、奴は強かった。」

「その事実は、決して揺らぎはしないのだ。」

「そして、同時に——」

「衛宮士郎。貴様に無かったものはただ一つ。」

「自分の願いよりも、大切な誰かの願いを叶えたいと思う弱さだ」

「あの子は、イリヤは命を落とす直前に俺に言ってくれた。」

「——幸せになれ、と。」

「それが、彼女が最後に俺へと遺してくれた真の願い。」

「聖杯を目にした瞬間。俺の脳裏を過ぎったその願いが、俺をここまで導いてくれたものの正体。」

「抑止の守護者としての役割はあまりにも凄惨で、とてもイリヤに誇れるようなものでは無いけれど。」

「——いつか、もう一度会えた時に。」

「イリヤに、俺は幸せだったと。頑張つて生きたのだと胸を張れるようにになりたい。」

「俺は自分の弱さを、イリヤを救えなかった事を柵に上げているだけかもしれない。だがな、それでもイリヤは俺のために願ってくれたん

だよ。幸せになれって。頑張れって、応援してくれたんだ」

故に。俺は衛宮士郎を許せない。

衛宮士郎の選択が間違いではなかったと理解していても、俺はコイツを、聖杯なんて物に頼って自分だけの願いを叶えようとした衛宮士郎を許せない。

整合性なんてどうでも良い。

何が間違っていて何が正解なのか、そんなお利口な解答など求めない。

「その願いは万能の願望器でも万物の源流たるアカシックレコードでも叶えられない。

——俺だけだ。

イリヤの願いは俺だけにしか叶えられない、イリヤだけの奇跡だったんだ」

一步、足を前へ踏み出す。

柄よ砕けんとばかりに干将・莫耶を握り締めて、

「ああ、これは整合性の問題じゃない。俺は貴様の選択が、その結末が許せないだけだ。

——故に——遠慮は要らん。

貴様と対峙する今だけは、カルデアへの帰還など意識から排斥してやる。これは貴様と私の戦いだ。

互いが互いを認められない、半端者同士の。

その身勝手な願いを貫き通すというのなら、己の全てを賭して来るがいい。俺がその悉くを凌駕し、貴様の願いを叩き落としてやる」

長い、長い旅路を終わらせるための戦いの始まりを告げた。

◇？

「ああ、つまり——今までとやる事は何ら変わらないという事だろう」

パチン、と衛宮士郎の指が鳴らされる。

——途端。

地面から、漆黒の泥が噴出した。

「つ、全員距離を取れッ!!」

干将・莫耶を構えながら後方へ声を飛ばす。

そうしている間にも噴出した泥は徐々に形を成していき、巨人の姿を象つていった。

——サーヴァント、バーサーカー。

衛宮士郎が使役するサーヴァントにして、本来のバーサーカー以上の力を有する真正正銘の怪物である。

「ああ、最初からこうするつもりだったさ。言われなくとも、己が全てでもって貴様を振じ伏せてやる」

再び、パチン、という乾いた音。

その音と同時に、おぞましい程の魔力のうねりが後方から津波の如く押し寄せてきた。

「お前達は予想していたはずだ。お前達に襲いかかったライダーも、アサシンも、キャスターも、ランサーも。全てが俺の手駒であると。ならばこの結果も予想出来ただろう。俺は俺の魔力が尽きない限り、投影魔術を応用する事によってシャドウサーヴァントを生み出せる。そしてその魔力の貯蔵量だが——」

「聖杯と密接に繋がってしまっている以上、その魔力総数は兆に届くだろう。ああ、無尽蔵と呼んで差し支えない程の魔力総数だな。このままでは、シャドウサーヴァントが延々と垂れ流されるぞ」

「つ、ああもうバーサーカーだけでも手に負えないっていうの!!」  
「どうしますか、マスター? 一騎一騎は強力ではありますが、通常のサーヴァントと比べれば大した事はありません。数が多い分手こずるでしょうが、波を押し返す事は可能でしょう。ですがそこにバーサーカーが加わるとなると——」

ここにきて、圧倒的戦力差が如実に顕れる。

並大抵では覆せない、質量による暴力が。

「うわわ、本当にいつぱい出てきた!」

「イリヤ、気を付けて。いくらシャドウサーヴァントとは言え、数で押し潰されたら危険!」

そうしている間にも、バーサーカーの巨躯が完成しつつあった。一方衛宮士郎は、投影した剣を崖に橋の如く繋げる事によって、崖の上へと上っていた。

試すような瞳で、俺達を睥睨している。

「バーサーカーの相手は、私が引き受けよう。君達は後ろのシャドウサーヴァント共の相手を頼む」

動揺の気配が漣の如く走り抜ける。

無理もない。全員で立ち向かって勝てるかどうか分からない相手だというのに、俺一人でそれを打倒しようというのだから。

「そんな、一人じゃ」

「一騎一騎は取るに足りないものだとしても、あの数のシャドウサーヴァントを相手取るにはそれなりの頭数が必要だ。バーサーカーは幾ら脅威的とは言え、個体に過ぎない」

「だからこっちも一人でってこと? そんなに単純な話が通じる相手じゃないでしょう?」

「考えても見てくれ。バトサーカーに戦力を割いたあまり、シャドウサーヴァントの討ち漏れに戦闘を邪魔されてしまっただけは本末転倒だろう。バーサーカーとの戦いにおいて、他の敵にまで反応している余裕はない。それならば、シャドウサーヴァントが一騎足りとも邪魔をしない状況でバーサーカーと切り結ぶ方がまだ現実的だろう。幾ら有象無象の雑兵とは言え、一太刀貰えばその傷は無視出来るものではなくなる。多勢に無勢、というやつだよ」

「要するに貴方は、私達に一騎も討ち漏らさずあの影の兵士達を食い止めろと言いたいのですね、アーチャー?」

「流石だ。理解が早くて助かる」

「け、けどそれは問題を先送りにしただけでしょ? 幾ら食い止めてもバーサーカーを倒せなかったら貴方は」

そこまで言ってから、遠坂凜は口を噤む。

その必死な態度に、俺は思わず苦笑を零していた。

「な、なによ。笑う事、ないじゃない！」

「いや、失礼。君があまりにも必死だったものでね。あくまで私達は休戦協定を結んでいるだけの関係だ。」

——だというのに、君はそうやって私の事を気にかけてくる。最初はただの同盟関係だからとか何とか言っておきながら、君もつくづく冷徹には成りきれないらしい」

それは、もうどこかに置き忘れてしまった思い出を語る時の、寂しさを滲ませた苦笑だったに違いない。

きつと、その言葉や態度があまりにも彼女らしかったから。

思わず、妙な懐かしさを感じてしまったのだ。

「——大丈夫だよ、リン。それに君の心配は有難いが、そう心配されると自分の力に自信が持てなくなりそうだ」

少し冗談めかした言葉に遠坂凜はむっと頬を膨らませてから、可愛らしくそつぽを向いた。

「ふん、良いわよ。そこまで言うなら貴方の力、ここで見せてもらおうじゃない。——信頼、させてよね」

「無論だ。ご期待に添えるよう全力で抗うとしよう」

互いに、まるで旧友のような笑みを交わす。

直後、天を引き裂くかのような咆哮が耳朶を貫いた。

バーサーカーだ。泥の鎧を纏った漆黒の凶星は、巨大な戦斧を掲げて俺達を睨んでいる。

「マスター！」

「全員戦闘態勢に移行!!何としてでも、アーチャーの元にコイツらを辿り着かせないで!!!」

打てば響くような返答にセイバーが剣戟でもって応える。

不可視の剣が振るわれる度に影から濃い紫色の塵が鮮血の如く飛び散って、大気に溶けて霧散していく。

他の面子も同じだった。

イリヤや美遊は俺の方を心配そうに見ていたが、先程の俺の言葉が

効いたのか、最後は信頼を込めた瞳で俺を送り出してくれた。イリヤと美遊が放った魔力砲がセイバーを避けて迂回しようとしていたシャドウサーヴァント達を薙ぎ払う。

遠坂凜は、振り向く事もしなかった。

懐から色彩豊かな輝きを放つ宝石を取り出して、迎撃のための魔術を組んでいる。

そして、後の一人は――

「さてと、行きましようか。バーサーカーもいつまでもわたし達を待つてはくれないでしょうし」

――何故か俺の隣で、クロが手に握った干将・莫耶をくるくると弄んでいた。

「ちよつと待て。君は私の話を聞いていたのか？」

「お兄さん一人でバーサーカーとやり合うつて事？」

ええ、それならバツチり聞いてたわよ」

「ならばどうして君がここに居る。見る限り、向こうに余裕があるという訳ではあるまい。だが君が補助すればよっぽどの事がない限り完全に安全圏まで持つてけるだろう。分かったらすぐに――」

「うーん、イヤ」

バツサリと、俺の言葉をクロは一刀両断する。

「お兄さん言ったじゃない。整合性なんてどうでもいい。これは互いに互いを認められない者同士の戦いだって。」

――なら、わたしだってそうだわ。

これはわたしの戦いだもの。わたしが決めた戦場で、わたしはわたしの願いを遂げるために動く。正直、わたしにとってはそっちのイリヤの願いだとかそういうのもどうでも良いわ。

わたしが背負うにはあまりにも重いものだし、その権利はわたしには無いと思うから。お兄さんも言ったじゃない。その願いはお兄さんにしか叶えられないものだって」

パシ、と手で弄んでいた干将・莫耶を握り直す。

強く。強く。己の武器に、覚悟を籠めていく。

「願いか。なら、一つ問おう。君の願いは何だ？どんな願いがあった、ここに立っている？」

「――『約束』」

ポツリと呟く。恥ずかしそうに顔を赤く染めてから、クロは俺の事を毅然と見上げて続けた。

「こんな事言うの、イリヤみたいでシヤクなんだけど。わたし、楽しみにしてたもの。お兄さんに料理を教えて貰う事。だから、こんな所でお兄さんを死なせはしない。絶対に、ね」

「きつと、今の俺は相当間抜けな顔をしているに違いない。」

「あの約束は、何気なく言ったものに過ぎなかった。」

「しかしそれは俺だけの認識だったらしい。」

「イリヤもクロも、もしかしたら美遊も。」

俺と一緒にカルデアへ帰還する事を、そんなにも望んでいたというのか。

「わたしはイリヤと美遊に任せちゃったもの。シヤドウサーヴァントは波状で襲ってくるから、魔力砲で広範囲に渡って攻撃出来る自分達はここを動けない。だから、近距離タイプのわたしにお兄さんを支えてあげてつて。ほら、適材適所ってやつ？」

「む」？

「それは、その通りだと思う。」

「厳密に言うならクロに広範囲に渡って攻撃出来る術が備わってない訳では無いが、シヤドウサーヴァントとの戦いは消耗戦だ。魔力が尽きると存在してられないクロには向かない戦いだという事は否めない。しかし――」

「――あの子達、本当は自分達が戦いたかったはずなのにね。お兄さんにはいつも守られてばかりだから、今度は自分達が守る番だって、常々言ってたもの」

「イリヤ達が」

「そ。けどイリヤ達はそんな想いを押し殺し、これが勝つための最適解だと飲み込んであの場に立ってる。」

そんな妹達からお兄さんを助けてあげてなんて頼まれちゃったら  
さ——姉として、成し遂げないわけにはいかないじゃない」  
姉だから。その言い回しには少し弱い。

■紅色に金色を差したかのような、不思議な色彩を持つ瞳が真っ直ぐ  
俺の瞳を見詰めてくる。

■その言葉は、真っ直ぐだった。本当なら何としてでも止めたいの  
に、どうしてもそれが出来ないぐらい、その想いは和弓から放たれ矢  
の如く、真っ直ぐに俺の胸を貫いたのだ。

■俺は俺の戦いを。

■彼女は、いや、彼女『達』は彼女達の戦いを。

■その想いを聞いてしまえば、もう戦う事を止めようとする事なんて  
出来るはずがなかった。

「やれやれ。本当にわがままだな、君は」

「女の子？人分のわがままなもの。当然でしょ？」

■違う、と苦笑をこぼす。

■——再び、バーサーカーの咆哮が迸った。

■少し会話に時間を割きすぎたせいかな、もう身体の殆どが完成しつ  
つある。完全に身体が出来上がるまで、残り10秒ほど。

「——これも、因果か。」

■どこかの世界に召喚された『私』は一度バーサーカーと真っ向から  
戦い、これに敗北しているようだ。

■座の記憶でしか無い故に不確かではあるが、それが事実であるなら  
ば、ここで雪辱を果たしておかねばなるまい」

「ふーん。けどいちいち気にする事じゃ無いわね、そんな事」

「ほう。その理由は？」

「——今度は、一人じゃないからよ。わたし、狙ったものは絶対  
に手に入れてみせるタチだもの。」

■だからこの戦い、何としてでも勝たせて貰うわ」

「敵は強いぞ。恐らく、俺が戦ったものよりも」

「承知の上だわ。けど言ったでしょ？わたし達は一人じゃない。イリ  
ヤや美遊、リンにセイバー。」





突し、岩肌を掘削していく。

重なり合う黒と白。楽器を奏でるが如く優雅に、そして鮮烈に羽ばたく鶴の両翼。

——地獄の舞台に、音色が響き渡る。

「見事な速度だ。あの速度で振るわれる戦斧。直撃すれば、そのまま霊基を砕かれかねないな」

「それなら簡単。あの泥で錆び切ったポンコツに当たらないよう、優雅に舞うまでよ」

「ふ、違くない」

怪物を前にして、それでも二対の鶴翼は笑ってみせた。

これより舞台の幕は開く。

それは一夜限りの舞踏会。曇天を裂かんとするため、鶴翼は大空目指して飛翔する。

「さて、それでは私達と一曲踊って貰おうか。

なに、遠慮する事は無いぞ狂戦士よ。

貴様のステップがどれ程荒く醜いものだとしても。その拙いダンスに、我が翼が折れるまで付き合ってやろう——！」

拍手の代わりに剣戟を。

喝采の代わりに慟哭を。

——咆哮と共に、怪物と鶴の舞踏会の幕が開いた。

## 第十二節 『離別の剣』

泥のような闇が沈殿する地の底であった。

岩の天蓋で月明かりは閉ざされて、代わりに濃密な魔力がこの場を満たしている。

夜の静謐さなんて程遠い。

イリヤにはこの異様な場所を上手く表現出来る語彙を持ち合わせていなかったが——グロテスク、だと思った。

チラリ、と後方を振り返る。

真つ先に視界に飛び込んできたのは、『彼』とクロクが漆黒の巨人と剣戟を繰り広げている光景だった。

巨人の足元を飛び回る、美しい2羽の鶴。

黒と白の翼が、バーサーカーの身体を斬り裂き翻弄する。

その戦闘も気にはなる———というか心配で今にも飛び出して行ってしまう。そうなのだが、今はそこではない。

その更に奥。そこから、血のように赤い光が漏れていた。

グロテスクだと感じたのはその光によって、この大空洞全体が淡い赤に染まっているからである。

「何というか」

ここはまるで、身体の中だ。

以前、医療系のテレビ番組で見た事があった。

そのあまりの生々しさに当時のイリヤは思わず目を逸らしたのだが、ここはその光景にあまりにも酷似している。

赤く染まった岩肌は、まるで襲の付いた肉壁だ。

上を見上げればイリヤ達が落ちてきた巨大な穴が顔を覗かせていて、まるで生き物の喉のよう。

そして、極め付けはこの生暖かさだ。

あまり気持ちいいものじゃない、不快感を煽る空気がそつと首筋を撫でていく。

「ッ」

深く想像し過ぎたからか。感覚がより鋭敏になり、ゾクリと全身の肌が泡立った。

一瞬の硬直。その生暖かい空気は首筋どころかイリヤの踝、太もも、臀部、腰、腹部、胸、身体の至る所をいつそ淫靡とさえ言ってい手付きで撫でていった。

——その硬直を、敵は見逃さない。

・ シヤドウサーヴァントの一騎が、イリヤに向かって跳躍した。

「はあっ——！！！！」

影の剣がイリヤの身体に届く寸前。

銀色の旋風が影の剣を跳ねあげ——気付けば、シヤドウサーヴァントの身体が両断されていた。

金色の髪の毛がふわりと舞う。

イリヤを窮地から救ったのはセイバーだった。

イリヤとシヤドウサーヴァントの間に割り込んだセイバーは、影の剣を跳ねあげ、瞬時に手首を返し肩から脇腹までを袈裟に両断したのだ。

ここまでの一連の動作の全てが、刹那の間に行われた。

現在進行形で襲われているというのに、その斬撃の美しさにイリヤは目を奪われ、呼吸を忘れた。

——違い過ぎる。

これが、本物。クラスカードによって齎される力では、あの領域まで辿り着く事は叶うまい。

「無事ですか、イリヤスフィール」

「あ、ありがとうございますセイバーさん」

「その様子では大丈夫そうですね。しかし、先程は何か思い詰めたような表情をされていましたが何か問題でも？」

間近のシャドウサーヴァントを斬り伏せながら、セイバーはイリヤに問いかける。

「上手く言えないんですけど、ここに居ると少し、気分が悪くなるといふか何というか」

「成程、この濃密な魔力にあてられたのですね。聞けば、貴方とミュは元を正せば一般人だという。」

普通の人間にとっては、この濃密な魔力が渦巻く臓はらわたは毒にしかかなり得ないでしょう」

《その分、リンさんのような魔術師やセイバーさんのような魔力を糧にして存在している者達にとってはまさにベストプレイスですけどねえ〜》

「ふーん、という事はお兄さんやクロも？」

《はい。平時とは違い、魔力の使い過ぎを危惧する必要は無いかと思われまます。無論、限度はありますが――》

サファイアが感情の起伏に乏しい声音で、相も変わらずふざけた口調のルビーの代わりにイリヤの問いに答える。

するとリンが、

「アーチャー達の事が心配なのは分かるけど、こっちの戦闘にも集中しなさい。今は何とか均衡を保っているけど、決して余裕がある訳じゃ無いんだからね」

「うーごめんなさい」

「けど、心配になる気持ちは凄く分かる。」

「わたしも、お兄さんとクロが心配」

「そう口にしたのはミュだった。」

「いつもはサファアアと同様に感情の起伏に乏しい声だが、今はその  
声音に憂慮の念を感じる。」

「大丈夫、だよね」

「彼は強い。いつも自分達を守ってくれる。」

「それに、『約束』だってしたのだ。」

「カルデアに帰還したら、イリヤと美遊とクロに料理を教えてください、  
戻って、約束した。」

「彼が約束を破るような人じゃない事を、イリヤは知っている。」

「なのに、どうして」

「どうして、こんなにも不安になるのだろうか。」

「イリヤはもう一度だけ、後ろを振り返った。」

「彼とクロには傷一つない。バーサーカーの攻撃を捌きながら、返す  
刃でバーサーカーに斬撃を叩き込んでいる。」

「大丈夫。負けない。彼とクロの剣は確実にバー  
サーカーの身体を削り取っている。戦況は優勢以外のなにものでも  
ない。だから、2人が負けるはずがない。負けるはずがない。」

「」

「神様、お願いします。どうか、どうかお兄さんとクロを」

助けてください。

静かに。そんな行為に意味など無いと分かっているながら、イリヤは2人の無事を祈り続けた。

◇？

——頭上を鈍色の戦斧が掠めていく。

余波による風圧が身体を叩く中、俺はその風圧を突き破るように入歩前に踏み込んだ。

左足を軸にし、時計回りに身体を流しながらバーサーカーの太腿辺りを斬り裂く。

やけにくぐもった、鈍い斬撃音。

一瞬遅れて、裂かれた箇所から粘液質な黒い液体が迸った。

しかし。あたかもビデオの逆再生の如く傷が癒えていき、一秒後には何事も無かったかのように傷口は塞がっていた。

先程から、この繰り返し。

何度斬り裂こうとも、泥の鎧を纏ったバーサーカーの身体はたちまち復元してしまう。

幸い、鎧の強度自体は大した事は無い。

故にバーサーカーの体表面に刃が届く事はあった。

しかし——その度に『泥』はバーサーカーの身体を補い、巨軀を変質させていく。

その様はまるで、ウイルスに侵され衰弱しているかのようなだった。

「ッ、キリが無いわね」

「ああ、全くだ。普通に斬り刻むだけでは、傷付けた傍から再生するだけ。ジリ貧にも程がある」

「なら、どうするの？」

「前回と比べて、私達の刃が通るほど奴の身体は柔らかくなっている。恐らく、『泥』によって完全に身体が腐り落ちてるせいだろうな。とは言え、この再生力を前にしてはどちらが良かったのか判断に困るが」

前回は、皮一枚程度しか削れなかった。

それに比べればまだ手の打ちようがあるものの、だからと言って樂觀視出来る訳ではない。

斬っても斬っても再生する身体のせいで、俺達はバーサーカーに対して傷一つ負わせていないのと変わらないのだから。

それと、もう一つ――

「――俺達が戦った時より、明らかに弱くなっている」

目の前のバーサーカーは、あの時俺達に振るった速度と臂力には遠く及ばない。

それを手放しで喜べる程、お気楽な頭はしていないつもりだ。

「それはなんとというか、妙、ねっ！」

横一文字に振るわれる戦斧を、俺とクロは上体を反らして避ける。

その速度もたかが知れていた。

俺はバーサーカーの戦斧を側面から蹴り上げ、蜻蛉を切るように着地してから同時に予め投影していた干将・莫耶を投擲する。

放られた夫婦剣は重なり合うように弧を描きながら、バーサーカーの胸元辺りに突き刺さった。

微かに、バーサーカーが動きを止める。

その隙に背後からクロが忍び寄り、自身の身体の周囲に浮かせた十数本あまりの剣をバーサーカーに叩き込んだ。

機関銃の弾丸を砂山に向かって連射したかのような子気味のいい

音が耳朶を打ち据える。

しかし、その攻撃も再生力の前には歯が立たず、深々と突き刺さった剣を呑み込むような形で泥がバーサーカーの身体を修復していく。

「効果は無し……か。分かつてはいたけど」

「通常の斬撃では効果は無い。水を斬ろうとするようなものだからな。しかし——君の攻撃は今ので終わりという訳では無いのだろうか？」

俺の言葉に、クロがニヤリと口角をつり上げる。

「当然。水は斬り裂く事は出来ないけど、爆散させる事は出来るわ。例えば、爆弾を仕掛けるとか、ね——！」

クロは一度深呼吸をして大気に漂う濃密な魔力を体内に取り込むと、拳を突き出して叫んだ。

「消し飛びなさい——ブローケン・ファンタズム壊れた幻想！」

「■■ツ!？」

傷付いた箇所を再生し、立ち上がるようにしていたバーサーカーの動きが止まる。

苦しそうに呻き、膝を着いた直後。

バーサーカーから目を開けていられない程の凄まじい閃光が迸り、爆炎となって泥の身体を吹き飛ばした。

バラバラと、バーサーカーの身体の破片が四散する。

ブローケン・ファンタズム  
壊れた幻想。

自身の宝具を使い捨ての爆弾として用いるという、普通の英霊ならば絶対に用いる事は無い技の名だ。

通常の英霊が使わない理由は多々あるが、その最たるものは至って

シンプルなものだ。

例外はあるだろうが、基本的に宝具とは唯一無二の存在だ。

過去の伝承や神話において己が用いた、英霊にとつて相棒とも呼べる武具の総称。

それを、幾ら強力とは言え使い捨ての爆弾にして使おうなどと考える酔狂な輩はそういまい。

だが、俺とクロはその普通とやらには当てはまらない。

爆弾として用いても、俺達は投影魔術によつてまた新しく作り直せるからだ。

「合計20本の剣を同時に爆破。一本一本の威力は大した事ないけど、これだけあれば少しは——」

数瞬遅れて身体を叩く爆風に目を細めながら、クロは誇らしげに立ち上る爆炎を見ていた。

——緋色の炎に影が映る。

その影は間違いなくバーサーカーのものだ。

伝わってくる。爆炎越しにこちらを睨んでいる巨人の殺意が、冷たい刃となつて身体を穿つ。

先程よりも濃密な『気配』が、バーサーカーの体から放たれていた。

「そういう、事か」

「ちよ、一人で納得しないでよ！なに!?なんでアイツあんなにも魔力が強く!？」

「——これは熱間鍛造みたいなものなんだろう。熱間鍛造とはその名の通り赤熱するまで金属を熱し、柔らかくなった所で上から圧力をかける金属の加工方法の事だ。熱間鍛造をする事によつて、通常の鍛造よりも高い硬度と靱性を得る事が出来る。それが今、奴の身体で起きているんだ」

「つまり、わたし達が攻撃を加えれば加えるほどバーサーカーは強くなるって事」

「恐ろくな。奴の身体が傷付いていくごとに泥の鎧がバーサーカーの身体を溶かし、大気に漂う濃密な魔力と俺達の攻撃によって生じた魔力の残滓さえ用いて自身の身体を鍛造する。」

——全く、酷いジレンマだ。

バーサーカーを倒すためにはより強力な力で攻撃をしなくてはならないというのに、そうすればするほど奴の力が増していくとはな見た限りでは、その『鍛造』が始まるのは命のストックが1つ削られた瞬間。

つまりバーサーカーは殺され復活する度に、一つ前のバーサーカーよりも強くなるという訳だ。

命のストックをどれ程有しているかは分からないが、恐らく最高で12程だろう。

——無論、最終的には柳洞寺の境内で戦ったものよりも遥かに強力なものが出てくるはずだ。

その事実が意味するところは、つまり。

「■■■■■ッ!!!!!!」

「来るぞ、気を付けろ!!!」

「言われなくとも!」

咆哮と共に、バーサーカーの巨躯が霞む。

その速度は柳洞寺で戦った時と比べればまだ遅いが、つい数分前の奴と比べるとその差は歴然だ。

もしもこのペースで強化されるといふのなら——恐らく、あと5回程で柳洞寺で戦ったバーサーカーと同等になるだろう。

「■■■■■アッ!!!」



「おおおおおッ!!!」

いつもはカツコつけてて、どこか気障な態度を取っている彼からは信じ難い咆哮が放たれる。

それ程、余裕が無いのだ。

——バーサーカーを殺した回数は、既に八回にまで及んでいた。

柳洞寺で戦ったやつよりも一回り強い、まさに『最凶』の名を冠するに相応しい狂戦士。

振るわれる戦斧は豪風の如く。例え直撃しなくとも、戦斧が掠るだけで十分な致命傷になり得た。

事実、彼の傷は全て掠り傷によるものだ。

肉が深く抉られ骨にヒビが入っていようと、それはバーサーカーの戦斧が掠った『だけ』。

もし直撃すれば、霊基ごと粉碎されて消滅するだろう。

「いか、なきや」

剣を支えに、一歩進む。

「じゃないと、あの人は」

見えているのに。その背中に、手が届かない。

今の自分はただの怪我人。

バーサーカーの拳に殴りつけられ、20mほど先の壁に叩き付けられて動けなくなった足手まとい。

嫌だ。そんなのは、嫌だ。

けど理解している。少女は現実を知っている。

自分が行っても邪魔になるだけだと。

守るどころか、逆に守らせてしまうと。

彼の支えになる。彼の背中を押す。そう大言を吐いておきながら、結局はこうなってしまった。

「はは、何よ、うじうじして。やめてよね、わたしはイリヤじゃないんだから」

—— けど、それが突き付けられた現実というものだった。

自分は力不足だ。そう刻印されてしまったのだから、足掻くだけ迷惑というものだろう。

「そう、よ。仕方ないじゃない。わたしじゃ足手まといだわ。こんな身体じゃ、戦えないもの」

もう魔力も殆どない。大気に漂っていた魔力の大部分はバーサーカーが吸い取ってしまったっている。

—— 仕方ない。仕方ないじゃないか。

加勢しに行つて邪魔になるぐらいなら、ここで彼の帰りを待った方が良い。大丈夫。彼は強いから、なんだかんだと言いながらわたし達の元へと帰つてきてくれる。

そう考えたら、少し気持ちが楽になった。

クロは身体の支えにしていた剣をカランと地面に取り落とし、そのまま膝を着いてしまう。

—— けど、それで良い。

自分は待つだけで、それで——

「そん、なの」

—— なんて、無様。

戦う前、自分は何を思っていた？

何を思つて、この地獄のような戦場に立った？

「いやだ、そんなの、いや」

彼は今、独りで戦っている。

あんなにも怖い敵に臆する事なく立ち向かっている。

なのに、だ。自分だけここでのうのうと見ている事なんぞ、許されてなるものか。

——立たなければ。足手まといだなんて刻印を貼られて、悔しいと思わないはずがない。

役に立たないのなら、どうすれば役に立てるか考えろ。

それが出来ない奴に、ここで嘆く資格はない——！

「まずは、魔力……待ってて、直ぐに駆け付けるから」

再び、剣を支えにして立ち上がる。

クロは一度だけ戦場に視線を向けてから、身体をもう一つの戦場へと翻した。

「クロ!?その傷大丈夫なの」

クロを見たイリヤは深紅の瞳を見開いて、自分も戦闘中だというのに驚愕の声を上げた。

「少しキツイけど……魔力さえあれば大丈夫だと思うわ。という訳で——」

「ほえ?」

ガシツ、とイリヤの両肩に手を置く。

そのまま肩を引き寄せ、耳元で囁いた。

「魔力供給、お願いね♪」

「え、い、今ここで!? ちよ、ちよつと待って心の準備が出来てない今は戦闘中で——んむっ!?」

問答無用とばかりにクロはイリヤの背中に右腕を回し、抵抗されないようしつかりとホールドすると、自身の唇をイリヤの唇へと重ね合わせた。

「んっ、ふ、あ、」

最初は啄むように。上を向く蕾のような小さい唇で、イリヤの唇を食<sup>は</sup>んでいく。

当然イリヤはクロの唇から逃げようと堅く唇を閉ざしてしまおうが、そんなガードはクロにとって紙も同然だ。

クロは一度唇を離し、狙いをイリヤの白磁器のように白い首筋へと定めた。

ちろりと僅かに出された赤い舌を、イリヤの首筋に優しく触れるように這わせる。

「ひゃあんっ!?!」

首筋に走った生暖かくぬらりとした感触に、イリヤの華奢な身体がクロの腕の中でビクリと跳ねた。

赤い蹂躪は続く。あくまで優しく、わたあめを舌の温度で溶かすような淡い舌遣い。

あまりにも唐突な暴挙に、イリヤの口が微かに開く。

クロはその隙を突くようにイリヤの唇に再び自身の唇を重ね合わせて、舌を挿し入れた。

「く、くろお」

「大人しく吸われてなさい。これはバーサーカーに勝つために、必要な行為なんだから」

絡み合う舌と舌。

その行為は年端のいかない少女同士のものでありながら妙に艶めかしく、危うい香りを振り撒いていた。

それから30秒は続いただろうか。無限にも感じられるその交錯は、唐突に終わりを告げた。

クロが唇を離す。舌と舌の間にかかる銀色のアーチ。

イリヤはそれを、ぼうとした表情で見詰めていた。

「さて、魔力は充分つと」

「うう、こんな時にしなくても」

「バカ、さつきも言ったじゃない。これはバーサーカーに勝つためよ。あのままお兄さんだけ戦わせてたら、間違いなくお兄さんは死ぬわ」

「ッ！」

ゾクリ、と背筋を冷たいものが伝い落ちた。

死ぬ。お兄さんが、死ぬ？

その言葉は、イリヤの身体を凍らせるには充分だった。

大切な人が死んでしまうかもしれないという恐怖に震えるイリヤに対し、クロはあくまで冷静に言葉を紡ぐ。

「イリヤ、ここに来た理由はもう一つあるの。幾ら魔力を補充したわたしが加勢した所で、バーサーカーには勝てはしない。当初の想定よりも、バーサーカーはずっと強かった。わたしに任せるときなさいって言ったにも関わらず、こんな風に頼むのは情けないと思ってる。けど、それを踏まえた上でお願いするわ。お願い、わたしと——」

その『提案』に、イリヤは目を見開いた。

あまりにも危険。最悪、自分が生命を落とす可能性だってあるかも

しれない。

だが、それでも——その恐怖よりも、イリヤにとっては大切な誰かを失う恐怖の方が、嫌だった。

「さつきから落ち着きの無い様子で聞き耳立ててるみたいだけど、アナタはどうするの、ミュウ？」

ビクリとミュウの身体が跳ねる。

ミュウも、イリヤやクロと同じ気持ちだ。

しかし持ち前の生真面目さから、自身に与えられた持ち場を離れる訳にはいかないとでも思っているのだろう。

その生真面目さは美徳だと思うが、自分の感情を抑制してまで発揮する生真面目さはそうとも限らない。

「ま、強制する訳じゃないから。どうするかはミュウ自身が選びなさい。お兄さんに頼まれたからとかじゃなく、ミュウ自身がどうするかを、ね」

言葉を投げて、クロは『彼』の元へと駆け出していく。

イリヤもそれに続いた。

勝手な行動に、リンは呆れたように嘆息する。

「はあ、結局こうなるのね。セイバー。悪いんだけど、わたしとセイバーの『2人』でここを食い止めるわよ」

「り、リンさん……」

「いいから、行きたいならさつきと向こうに行く。迷いを抱えたままそこに立っていられると邪魔よ」

シツシツ、と手で追いやるような仕草と跳ね除けるような言葉に、ミュウは苦笑をこぼす。

実に彼女らしい見送り方だ。ミュに要らぬ気負いをかけないようにという配慮が伝わってくる。

「ありがとうございます、リンさん。必ずバーサーカーを倒して戻ってきますから」

「それが分かっているなら、私から言う事は何も無いわね。思う存分、アナタのしたい事を成し遂げなさい」

幾分穏やかな表情でそう言ったリンに深くお辞儀をし、ミュはもう随分と遠くなってしまうたイリヤ達の背中を追いかけようと地面を蹴った。その、直後。

「ミュ。一つだけ、貴女からアーチャーに伝えて欲しい事がある。お願い出来ますか？」

「は、はい」

あまり話した事が無いからか、少し緊張してしまう。

イリヤ達と接する上で人との接し方はだいぶ身についてきたミュだが、それでもセイバーのような、どこか浮世離れた人とは話をするのに困窮してしまう。

しかしセイバーの碧玉の瞳はあまりにも真つ直ぐで、そんな緊張は直ぐに霧散した。

一度深呼吸をして、ミュもセイバーの言葉を待つ。

そして、

「バーサーカーはあまりにも強大だ。見る限り、今のバーサーカーを相手取るには私とアーチャーが手を組んだところで恐らく不可能でしょう。故にバーサーカーを倒そうとするのではなく、バーサーカーを縛っているモノを取り除く事を優先しなさい。それが恐らく、我々

を勝利へと導く唯一の道です」

◇？

「ねえ、セイバー。どうして私と一緒に戦ってくれるの？」

その問いは、あまりにも唐突だった。

ここはシャドウサーヴァントが鯨波となつて無数に襲い掛かってくる戦場だ。

加えてイリヤスフィール達がアーチャーの助勢に向かった以上、片時の気の緩みも許されない。

それは彼女も——リンも承知しているはずだ。

しかし、セイバーにその問いを跳ね除けるつもりは無かった。その事を重々承知しているはずリンからの、問いかけ。それはきつと、今この場の何よりも優先されるべき事だと思つたからだ。

しかしセイバーが口を開く前に、

「気付いているんでしょう？私が遠坂凛じゃやない事に。なのに、どうして？どうしてアナタは私の傍に居てくれるの？」

それは、まるで道に迷つた幼子のようにだった。

——そんな事は、この世界に來た時から知っている。

厳密に言えば、遠坂凛が人間ではないという事に。

何者かによつて作られた人形でしか無いという事に。

セイバーは、以前から気付いていた。

「——どうしても何も無い」

だが、それでも誓つたのだ。

それは最初の契約。セイバーは彼女に問うた。

——貴方が、私のマスターか。

その問いに彼女は頷いた。

それだけで、セイバーが戦う理由には充分すぎる。

「私は貴女のサーヴァントだ。貴女と共に最後まで戦うと誓った。貴女を守る剣となると誓った。」

——それだけです。貴女が、そして私が何者であろうと私は気に留めない。私はこの戦いにおいて他の誰でもない、貴女と契約したのだから」

「」

その言葉に、『遠坂凜』はどれほど救われた事か。

冷たく閉ざされていた心臓が、ドクン、と躍動する。

そうして暫く打ちひしがれた後、

「——それじゃあ地獄の底まで、付き合ってくれる？」

「無論です。マスター、指示を！」

凄絶な笑みを浮かべて、遠坂凜とセイバーは戦場を駆け抜ける。最後の最後まで共に戦おうとする、『主従』の在るべき姿がそこにあった。そこに、もうこれ以上の言葉は必要ない。

傍らに『彼女』がいる。

——そのささやかで暖かな事実だけで。

◇？

ぐしやり、と冗談みたいな音が聞こえた。

音の発生源は俺の左腕。

バーサーカーの戦斧を受け止め損なった結果だった。

血が噴き出すとか、折れた骨が腕の筋肉を貫いて、だとか、そんな分かりやすい事態はとうの昔に超えている。

例えるならばそう、折れた傘だ。豪風に煽られて骨組みがひしやげ、原型を無さなくなった傘。

痛みは感じない。あるのは、ぐちゃぐちゃになった左腕から忍び寄ってくる冷気だけ。

この冷気が全身を蝕んだ時、俺は死ぬ。

痛覚という熱感を彷彿とさせる者が多いだろうが、これはその痛みよりももっと酷い。

これは、『死』だ。『死』の影が冷気となって全身の血管を巡っているような感覚。

全身が血で染まり両腕はひしやげ、足もロクに動かない。

視界は赤く明滅し身体は水の中に居るが如く鈍重。

——唯一の利点は、思考がクリアになる事だった。

痛覚も何もかも、この場では要らない不純物。

ただ剣を振るうだけの機械に成り下がるのならそんな感覚は必要ない。

となれば、この状況は喜ぶべきものだろう。全ての感覚が失われていれば、何も己を阻むものは無いのだから。

——ただ一つ。目の前の『敵』を除いて。

「  
■ ■ ■ ■ ■  
—— ツツツツ!!!」

耳障りな咆哮が全身を叩く。

しかし、意に介さず剣を振った。

折れる。投影。振るう。折れる。投影。振るう。折れる。投影。

振るう。折れる。投影。振るう。折れる。投影。振るう。折れる。

投影。振るう。折れる。投影。振るう。折れる。投影。振るう。折

れる。投影。振るう。折れる。投影。振るう。折れる。投影。振る

う。折れる。投影。振るう。折れる。投影。振るう。折れる。投影。振る

「.....」

身体が冷たい。冷たくて冷たくて。溶けて無くなってしまいたい。そうだった。!

だが、それでも止めてはならない理由がある。

後ろにはイリヤが、クロが、美遊が、遠坂が、セイバーが、皆が居るのだ。だからコイツを、ここから一歩足りとも進ませてはならない。

それだけが、今の俺を動かす動力だった。

だが、その身体ももはや限界。

随分と前から防戦一方な、戦いと呼ぶ事すらはばかられる蹂躪だったが、ここに来て身体が軋みを上げたのだ。

「ま、だ」

血の塊で塞がった喉から、掠れた声が漏れる。

声を出せた事に、自分自身でも驚いた。

だがそれはつまり、まだ自分が戦う力を残しているという事に他ならなかった。

ならば、剣を振ろう。全身に残留する力を総動員して、バーサーカーを止めるのだ。

そう、決意を固めた瞬間だった。

「お兄さんから、離れなさい——!!」

聞き覚えのある声に振り返る暇もなかった。

斬撃は後ろから。一对の鶴翼がバーサーカーの背中を斬り裂いて、鉛色の破片を散らす。

今の自分の状態を忘れ、目を見開き驚愕した。

俺のものより軽度とは言え、バーサーカーによって吹き飛ばされたクロは相当な傷を負っていたはずだ。

なのはどうして――？

「シユナイデン斬撃――!!!」

困惑する俺を、第二の驚愕が襲う。

今度の攻撃は頭上からだった。桃色のそれは、魔力砲を刃状に薄く引き伸ばしたものだ。

魔力による斬撃はバーサーカーの顔面へと直撃した。

当然ながら大したダメージは与えられてない。

しかし、効果はあった。俺に向かっていたバーサーカーの足が、一瞬だがその歩みを止めたのだ。

そして僅かに空いた、奇跡にも等しい間隙を縫うように。第三の影が俺の身体を攫って、バーサーカーから遠ざけた。

制止を促す間も無く、俺はバーサーカーから数十メートル離れた岩場へと運ばれ、そこに降ろされた。

俺の身体を攫ったのは、美遊だった。

「み、ゆ」

美遊は、顔を蒼白にして俺の事を見ていた。

厳密に言うならば、俺が負った傷を、である。

「酷い……こんな、の」

美遊の琥珀色の瞳から涙がこぼれ落ちる。

何に対する涙かは、朦朧とした頭じゃ分からない。

そして、それについて問答している余裕もまた無かった。

俺は微かに身体を起こして、美遊に向き直る。

何としても、この三人を死なせる訳にはいかない。

故に今すぐ逃げると伝えなくてはならなかった。

「私の事は、良い。それよりも早く」

言葉は最後まで続かなかつた。  
パシン、と。俺の頬を、美遊の手が打ったからだ。

「どうして、いつも……どうしていつも、そうやって自分の事を犠牲にしようとするんですか……!!!」

大粒の涙を零しながら、美遊は叫ぶようにそつと言った。

——痛い。美遊に打たれた左頬が、痛い。

痛覚が消えたはずの身体に、まるで電流が走ったかのような痛みが駆け抜けた。

砂粒ほどこしか残っていないかつた意識が僅かに引き戻される。止まりにかけていた心臓が再び脈動する。

「わたし達だけ……わたし達だけ助かってても、意味が無いんです。そこにお兄さんが居なきや、本当の意味で笑う事なんて、絶対に叶わない。だから、お兄さんはもう少し自分の事を大切に想ってください。お兄さんが死んじやつたら、わたしは、わたし達は……」

美遊は、怒っていた。

涙を流して、嗚咽を交えながら感情を爆発させる。

それはいつもは見せない、隠された感情と願いだつた。

嗚咽混じりの言葉はここに落ちる前、イリヤに言われた言葉にも似ているように思えた。

別れは辛い。美遊のような少女には、尚更だ。

他人の死というのはその人だけの問題では無い。

その死を悲しむ者が居る。

その死に悔しさを感ずる者がいる。

死とは、周りの者にもその重い十字架を背負わせるのだ。

——この子達を、悲しませたくない。

この子達が泣いている姿など、想像したくない。

泣いている美遊に手を伸ばそうとして、出来なかつた。

無理もない。両手はぐちゃぐちゃに攪拌されているのだから。

「ッ……この身体では、頭を撫でて慰める事も出来ない、な」

力なく笑う。だが、

「わたしに、任せてください」

頬を伝う涙もそのままに、美遊が立ち上がる。

何を、と思う前に。

「————  
地に瞬またたく願いの光」

詠唱ねがが、紡がれる。

途端。美遊の身体を中心に、複雑な紋様が描かれた魔法陣が地面に浮かび上がった。

美遊の足下に刻まれた魔法陣は淡く優しい光を帯びて、美遊の身体を照らす。

間違いない。あれは美遊の——

「落ちた月は無垢なる輝きを束ね、天を望む————」

僅かに、美遊の顔が苦痛に歪む。

あれは——美遊の『宝具』だ。

人の願いを無差別に叶えてしまう神稚児としての力を一時的に解除し、限定的に願いを叶えるもの。

マスターから聞き及んでいる。マスター、ひいてはカルデアの願望は人理を守る事だ。

マスター曰くそのみに焦点を当てる事によって成り立つ宝具であるため、何よりも信頼関係が大切だという。

しかし、マスターとのパスは遮断されているはずだ。

ならば、今の美遊は誰の願いを叶えようとしているのだろうか？

《気付きませんか、エミヤ様》

「なに、をっ？」

サファイアは感情の起伏に乏しい声を僅かに震わせて、少女の想いを代弁した。

《あれは美遊様自身の願いです。遠くで戦うイリヤ様やリン様、そして傷付いたアナタを助ける事。それが、美遊様が胸中で抱くたった一つの願いなのです》

「」

——地獄の底で、蒼く輝く月を見た。

蒼色の燐光を纏う美遊は、あまりにも綺麗だった。呼吸を忘れ、自分が消えかけている事も忘れて凝視する。

それは月。天を地を照らす遡<sup>さか</sup>さまに浮かぶ月。

少女の願いが込められた月光の輝きは天を越えて、全てを照らす星々に届くだろう。

「——星<sup>ほし</sup>天<sup>し</sup>を照<sup>に</sup>らせ地<sup>ね</sup>の遡<sup>い</sup>月<sup>を</sup>」

月の燐光は全てを照らす輝きとなりて。

バーサーカーを寸での所で押し留めているイリヤとクロ、シャドウサーヴァントを一騎足りとも通すまいと奮起するセイバーと遠坂、そして、消えかけていた俺の命。

少女の願いはその全てを蒼色の光で優しく包み込んで、立ち上がる力を与えてくれる。

力だけじゃない。心も、同じだ。  
俺は、俺の命は簡単に潰えていいものじゃない。  
誰も失いたくない。それが美遊の願いなら――

「は、あ、っ、う」

《美遊様!!》

宝具による余波のためか。ガクン、と美遊の身体が崩れ落ちた。そのまま地面に倒れ込む、その寸前。

美遊の身体を、俺は右腕を伸ばして寸での所で受け止めた。

「全く、君も無茶をする」

「それは、お兄さんの方です、よ」

違う、と二人で笑い合う。

暖かな光が凍っていた身体に、心に、温度を吹き込んだ。

しかし、ずっとこうしている訳にもいかない。

クロが転移魔術を、イリヤが飛行を駆使してバーサーカーを翻弄しているが、いずれ限界は訪れる。

その前に、バーサーカーを倒さなくてはならない。

「大丈夫です、お兄さん」

「なに？」

美遊の言葉に俺は頭に疑問符を浮かべた。

大丈夫、とは何が大丈夫なのだろうか。

「わたし達を信じてください。お兄さんを助けようと頑張っているイ

リヤを、クロを、そして——わたしを」

穏やかな声。その直後の事だった。

「イリヤ、準備は出来てる？」

「——うん、いつでもいけるよ！」

二人の声が呼応し合う。

先に動き出したのはクロだった。

干将・莫耶を構えながら、バーサーカーへと真っ直ぐに突っ込んでいく。だが、それは悪手だ。

クロの膂力と投影ではバーサーカーの攻撃は受け止められない。あのままでは剣ごと叩き斬られるだろう。

止めなければ、と俺は立ち上がろうとした。しかし俺の外套の裾の先を美遊が手で引っ張り、制止を促した。

何故、という表情を浮かべる俺に対して美遊が浮かべた表情はひどく穏やかなものだった。

「大丈夫です。だって2人は——」

その言葉は、最後まで続かなかった。

理由は唐突に発生した爆発音。

しかも、それはただの爆発では無かった。

ブローケン・ファンタズム  
壊れた幻想。

クロはバーサーカーの戦斧が振り下ろされる直前に、零距离で干将・莫耶を爆弾として利用したのだ。

爆発の直前にクロは後ろへと飛び退いたおかげで直接爆炎に巻き込まれる事は無かったが、余波によって華奢な身体は吹き飛び、ゴツゴツと隆起した地面に叩き付けられて転がった。

それでも、尚。

「いっつけえ!!イリヤあああああ!!!」

割れた額から血を流しながら、それでもクロは叫んだ。

自分の役目を果たし、そして次へと託す。

「行くよ、ルビー!!」

《もちろんです、マイマスター!!》

零距离からの『壊れた幻想』によって、バーサーカーは戦斧を跳ね上げられ体勢を崩していた。

その隙を縫うように、

《筋系、神経系、リンパ系 擬似魔術回路変換、完了!》

——上空から、声が聞こえた。

声だけじゃない。膨大な魔力が上空にあるカレイドステッキに束ねられている。

ステッキから今まさに放たれようとしているものは、今までの魔力砲とは格が違うように思えた。

台風を思わせるような魔力のうねり。

その中心地にいるのは、イリヤだった。

まるで、卵の殻を破って飛び立とうとする鳥のよう。

そして遂に、煩わしい殻を破った。不定形に揺らぐ虹色の翼を背負い、少女は天高く飛翔する。

天蓋に迫ろうかという高度まで飛翔してから、イリヤはバーサーカーに向かつて一息に急降下した。

地底の澱んだ空気を斬り裂きながら急降下するイリヤの身体は、まるで弾丸のよう。

バーサーカーがイリヤの急接近に気が付き戦斧を引き戻そうとするが、一足遅かった。

既にイリヤはカレイドステツキを振りかぶっている。  
そして斧で薪を割るみたいに、一息でカレイドステツキを頭上から  
振り下ろした。

「クザインテットフォエア  
多元重奏飽和砲撃——!!」

清らかで荘嚴な音色が地獄の底に響き渡る。

イリヤの放った魔力砲は、全ての闇を吹き飛ばす極光となってバー  
サーカーの漆黒の身体を貫いた。

——まるで、神話の1ページ。

虹色の羽が舞い地獄に光が瞬く。

魔力砲によって巻き上げられた砂塵のカーテンが、事の行く末を隠  
していた。

一体、どうなった？バーサーカーは倒せたのか？

——否。確かにあの魔力砲は強力だった。

だが、バーサーカーを倒せる程の威力は残念ながら無い。  
砂塵が晴れて視界が開く。

バーサーカーの身体は健在だった。胸に大きな穴が穿たれている  
が、あの傷も即座に修復されるだろう。

イリヤ達はあと一手、足りなかったのだ。

「お兄さん、破戒すべき全ての符を」

しかし、美遊のその言葉が鍵となった。

俺は即座に『破戒すべき全ての符』を投影し、同時に投影していた  
漆黒の洋弓に番え<sup>つが</sup>る。

限界まで弦を引き絞り、放つ。

奇妙な形をした短剣がバーサーカーの胸に開いた穴へと辿り着く  
のと、脅威の再生力によって傷口が塞がったのは殆ど同時だった。し  
かし、確かに届いた。

塞がりゆく傷口に吸い込まれるが如く、『破戒すべき全ての符』は

バーサーカーに取り込まれたのだ。

——それは、イリヤ達から受け取った願バトンい。

美遊からクロ、クロからイリヤ、そして俺へと繋げられた、願バトンいだつた。

「■■■■つ、■■■!?!」

異変はすぐに訪れた。バーサーカーの身体から、ドス黒い瘴気のようなものが溢れ出したのだ。

その瘴気は、バーサーカーの身体を犯していた『泥』。

それが『破戒すべき全ての符』によってバーサーカーの体内から取り除かれようとしているのだ。

「貴様っ!?!」

遠くから高みの見物を決め込んでいた衛宮士郎が、事の重大さに氣付いて立ち上がる。

しかし、今更もう遅い。

バーサーカーを縛る『呪い』は解かれた。

あたかも風船から空気を抜いているかのように、全ての泥がバーサーカーの身体から抜け落ちた。

ドシン、とバーサーカーが膝を着いた。

呪いが解かれた直後であるからか、随分と憔悴しきっているようだった。

「っ、あ、う」

ふらり、と視界の奥でイリヤの身体が揺れた。

以前、ルビーから聞いた事があった。

イリヤの『宝具』は身体の様々な器官を魔術回路と誤認させて発動する、イリヤの限界を越えた一撃であると。

五つの魔術回路から放たれるそれは星の光に匹敵する程の威力を

誇るもののイリヤの身体への負担は尋常ではなく、生身の身体より頑丈な霊基を兼ね備えていると言えど、その影響は目をつぶって良いものではないらしい。

イリヤの身体はふらふらとたたたらを踏んで倒れようとする。それを阻止すべく、俺は瞬時にイリヤの元まで駆けてその華奢な身体を抱きとめた。最近、こういう役回りばかりだなと苦笑しながら。

「おにい、さん？」

「ああ、そうだ。全く、美遊といいクロといい君といい、本当に無茶してくれるな」

「それはお兄さんでしょ　もう」

口振りは不満そうに。しかしイリヤは嬉しそうに俺の胸に身体を預けて、そのまま目を閉じた。

身体に異常は見られない。気絶している、というよりも宝具の影響で眠ってしまったらしい。

俺は苦笑しながら、イリヤの頭を起こさないようにそつと撫でてやった。

「本当に、危なっかしいんだから」

近付いてくる2つの足音。クロと美遊は疲労の残っている表情で、しかしどこか嬉しそうに微笑んでいる。

「すまないな。君達には迷惑をかけた」

「迷惑だなんて、言わないでください。これはわたし達の願い。わたし達が、心の奥底から望んだ事なんですから」

日向に溶けるような、穏やかな笑顔を美遊は浮かべる。  
その願いに俺は助けられた。

あのままではいずれ死んでいたであろう俺を、イリヤと美遊とクロは助けてくれた。

ああ、俺は最初の計算を間違えていたのだろう。

初め、俺はバーサーカーには絶対に勝てないと思っていた。だがそれは表層的な強さでしか測っていなかったのだ。

彼女達の本当の強さは、他にある。

可能性を切り捨てるんじゃない。可能性を掴もうとする、有り体に言えば子供らしいその在り方。

それこそがイリヤ達の強さ。

絶対に諦めないという、心の強さだった。

「君達には、負けたよ」

「えへへ、少しはわたし達の事を見直してくれた？」

「ああ、それどころか私の完敗だよ。子供の成長とは本当に恐ろしいものだ。しかし、どうやって『破戒すべき全ての符』が有用だと気付いて——」

「良くも、やってくれたものだな」

声が出た。声の主の方に、俺達は一齐に振り向く。

そう、まだ戦いが終わった訳では無い。

むしろ戦いはここからだ。

バーサーカーは王を守る盾に過ぎなかった。その盾を打ち破った今、俺達と相対するのは無論、王自身である。

「それはお互い様だ。いきなりこんな檻に閉じ込めてくれた返礼は高く付くぞ」

「はっ、お前達が俺に勝てるつもりも？無限の魔力を有する俺の投影に不可能なんてありはしない。」

——ただ一つ、あの子を取り戻す事以外はな。

だが、今日でその不可能も終わる。

「その器を渡せ。そうすればイリヤを生き返らせる事が出来る。俺の願いは、ようやく成就する。」

「言葉では無駄か。分かってはいたが、もう貴様は戻ってこれない域にまで到達してしまっただけだ。」

「イリヤを二度地面に下ろし、俺は両手に十将・莫耶を握りしめて前に出る。!!!」

「ゴイツを殺すのは俺の役目だ。」

「イリヤ達の手を煩わせる必要は無い。」

「本当はイリヤの身体は無事な方が良かったが、先程の一撃はなかなかどうして侮れない。」

「大事な局面であれをやられちゃ困るからな。イリヤには悪いが、動けなくなるまで、多少痛め付けさせてもらおうぞ。」

「ッ、貴様。」

「保護者気取りも大概にしろ、贋作者。」

「ああ、だが安心してくれて良い。お前は真っ先に殺してやる。喜べよ、お前はイリヤが血を流す所を見なくて済むんだからなあ!!!」

「衛宮、士郎おおおおおおお!!!」

怒りのままに地面を蹴り、疾駆した。

投影した剣は数十本ほど。それらの剣を身体の周りに滞空させた

まま衛宮士郎に向かって走る。

——応じたのは、同じく剣だった。

投影にかかった時間は僅かコンマ一秒。

その刹那程しかない時の間に、奴は末恐ろしい事に三百もの剣を投影してみせた。

「ッ 熾<sup>ロ</sup>天<sup>ア</sup>覆<sup>イ</sup>う七<sup>ア</sup>つの円<sup>ス</sup>環<sup>!!</sup>!!」

自分では無く、後方にいるであろうイリヤ達を守るために光り輝く花卉の盾を展開する。

直後、激突。暴風だなんて生温い。奴の投影した剣郡は、瀑布の如き勢いで光の盾を掘削する。

盾を展開しながら剣を投影し射出するが、奴の猛攻の前にはそれも無意味に終わった。

——圧倒的、魔力の差。

ここに来てその力量の差が浮き彫りになる。

「だから言ったんだ。勝てると思っっているのかと。この力を誇るつもりは無いさ。この力はおぞましいものだからな。だが、この力がイリヤを救う事に繋がるといふのなら、俺はどんな悪魔にだって魂を売る。当然だろう？俺はイリヤを、愛しているのだから」

「ッ」

劍群はその勢いを増していくばかりだ。

切っ先は容赦なく盾を削り、破片を散らす。

「お兄さん——!!!」

「来るな！今来たら、この盾が破られれば君達が」

花卉に、魔力を全力で叩き込んだ。

急激に失われていく魔力に視界が明滅する。

今は拮抗しているものの長くは保てない。

恐らく保って、あと一分。度重なった戦いに、魔力はその殆どを使い果たしていた。

それに比べて衛宮士郎、奴の魔力は無尽蔵だ。

どう足掻いても奴より俺の魔力の方が先に尽きる。

そうなれば、どうなるか。

結果は既に見えている。奴の剣は全てを蹂躪し、地獄を血肉で染め上げるだろう。

それだけは何としてでも避けなければならぬ。

何でもいい。魔力になりそうなものを己の身体から全て引き出すのだ。血液でも魂でも何でも良い。

不可能は承知の上だ。だがそれでも身体と魂、己が存在の全てを賭して、凌ぎぬ——！！

「がっ、あ——」

この盾は俺自身に他ならなかった。

俺の全てを注ぎ込んで展開された盾である。

故に、この盾の消失は俺という存在の『死』だった。

意識が、きえる。自己はもう砂粒ほどしか残されていない。その時だった。

「——言っただでしょ。一人で勝てないのなら」

「みんなで、押し返す——！」

クロと美遊が、俺の背中に手を添えた。

流れ込んできたのは魔力だ。その魔力は微力ながらも暖かく、魔術回路を通して身体が赤熱する。

——不思議だ。絶対に不可能だというのに、この子達を見て

いると本当に出来てしまうんじゃないかという錯覚を覚えてしまう。

「は、全く。私らしくない——」

自嘲気味に笑ってから、再び魔力を練り上げる。

枯渇した魔力は、美遊とクロのおかげで息を吹き返した。

だが、これで二人と少し後ろで気を失っているイリヤは運命共同体となつたわけだ。

益々、ここで折れる訳にはいかない。

例え不可能だとしても。

命ある限り、その手を伸ばし続ける。

——だが、それでも徐々に盾は削られていく。

細かな穴が穿たれ、剥離していく。

保てる時間は、残り10秒ほど。

ひび割れた盾は卵の殻を剥がすように、徐々に俺達の姿を曝け出していく。

「な」  
「！！！！」

驚愕の声は果たして、誰のものだったのだろうか。

まるで俺達が展開している盾を守るかのように、バーサーカーは奴が射出した剣群の前に身体を晒していた。

そして、奴の剣が牙を剥く。

数なんて数える事すらおぞましい。

こちらに向かつて来ていた剣の全てを、バーサーカーはその身で受け止めていた。

夥しい程の鮮血が迸る。だがバーサーカーは膝を着く事もなく、ただ衛宮士郎を睨んで耐えていた。

腕が千切れ飛び、内臓がボタボタと落ちてても、なお。

バーサーカーは大切な『誰か』を守るように、あたかも彫像の如く屹立していた。

「それは全ての疵、全ての怨恨を癒す我らが故郷」

「ッ!？」

——そしてそれは、あまりにも唐突に。

その声に誰もが息を呑み、驚愕した。

その少女は身の丈程もある盾を携えていた。

バックラーに十字架を合わせたような、無骨でありながら流麗さも内包した盾。

その雪花のような盾には見覚えがある。

しかし、有り得ない。彼女がここに居るはずがない。

だとすれば、俺が見ているものは幻か。

グルグルと頭の中を疑問符が飛び交う俺達を置き去りに、その少女は盾を掲げて、叫んだ。

「顕現せよーいまは遙か理想の城——!!」

少女はバーサーカーよりも前に出て、その巨大な盾で瀑布の如く牙を剥く剣群を弾き返す。

あれは、幻なんかじゃない。

本物だ。見間違えるはずがない。

彼女は剣群を弾きながら、くるりところちらを振り返る。

淡く紫がかった髪の毛がふわりと舞い、どこか儂さを感じさせる横顔が緋色の光景の中で鮮烈に浮かび上がる。

——マシユ・キリエライト。

カルデアに居るはずの彼女はまるでタイミングを見計らっていたかのように、颯爽と俺達の事を助けに現れた。

あまりの驚愕に維持していた『熾天覆う七つの円環』が空気に溶けるように霧散していく。

マシユは淡く微笑んでから、

「——無事ですか、皆さん！」

「マシユ!!」

「マシユさん!!」

「はい、マシユ・キリエライトです！遅くなりましたが、ようやく救援に参上しました!!」

俺達の無事を確認し、マシユは綻ぶような笑顔を見せる。

その笑顔の、何と頼もしく映る事か。

マシユが居るといふ事は、つまり——

「もちろん救援は私だけではありません。皆さんエミヤ先輩達のために——」

マシユが言い終える前に、もう一つの影が現れた。その影は巨大な旗をはためかせて、俺達の前に着地する。

纏っているのは、まるで着ている者の潔白さを表すかのような、清廉かつ鮮烈な白い装束。

そして——闇の中で一際存在感を放つ、金色の髪。

それは女性であった。

地獄のような戦場に身を置いているにも関わらず、否、戦場に身を

置いているからこそ、その女性の美しさは克明と際立ち、闇に鮮烈な純白の華を咲かせていた。

—— 聖女、ジャンヌ・ダルク。

ジャンヌは右手で握った旗を手の中でくるりと回すと、胸元で抱き抱えるように旗を構えた。

「主の御業をここに。」

我が旗よ、我が同胞を守り給え——」

凜、と響く声だった。紡がれる詠唱に時が止まったかのような錯覚さえ覚える。

その詠唱に呼応するかのよう。純白の旗が黄金に光り輝き、淡い燐光を放ち始める。

ジャンヌは詠唱を紡ぎ終わると、胸元に構えていた旗を天を突かんばかりに強く掲げた。そして、

「リュミノジテ・エテルネットル我が神はここにありて!!」

宝具の真名を解放する。

黄金の光芒が降り注ぎ、俺達をヴェールのように包み込んだ。それを見届けてからマシユは盾を下ろして、足元を覆うヒールの着いたサバトンを音高く鳴らしながら、こちらに駆け寄ってきた。

「良かった。皆さん、無事なようで何よりです」

「危ない局面ではあったがな。それより、君とジャンヌ・ダルクはどうやってここに——」

「ダ・ヴィンチちゃんのおかげだよ。ダ・ヴィンチちゃん曰く『何者かが道を開いてくれた』らしいんだけど、詳しい事は聞いてない。まずは仲間を助けに行くのが先決だと思ったからね。久しぶり、エミヤ。」

無事……ではなさそうだけど元気そうで、本当に良かった」

それは、聞き覚えのある声だった。

黒色の髪と微かに青みがかかった群青の瞳。

華奢とまではいかなものの細身の身体に沿うようにフィットしている黒と白のツートンカラーの戦闘服を纏っており、右手の甲の部分だけくり抜かれたグローブからは朱色の『令呪』が煌々とその存在感を主張していた。

——そう。彼の者こそ、我が忠誠を捧げる主マスターに他ならぬ。  
い。

彼は群青の瞳に穏やかな光をたたえて、安堵の声をこぼしていた。

「マスター……迷惑を掛けて、済まなかったな」

「迷惑だなんて思ってないよ。エミヤ達は仲間なんだ。盗られたら取り返す。そんなの、当たり前前の事だろ？」

「違う、と苦笑する。

「そう言えばこういうマスターだった。

「暫く離れていて忘れていたが、つくづくお人好きなマスターだと思う。」

「しばし再会を喜ぶ俺達だったが、ダ・ヴィンチの立体映像が目の前に現れた事によって一度中断する。」

《あー聞こえてるかな？再会を喜ぶのは良いんだけど、残念ながらその時間もあんまり無いみたいなんだ。あそこで剣をポンポン投げつけてくる『敵』は倒そうとせず、まずはこの世界から抜け出す事を優先しよう！》

「え、脱出……できるんですか？」

その疑問の声は、美遊のものだった。

マスター達がこうしてこの世界に介入出来ている以上、入口があるのなら出口もあるのが道理だろう。

前述の通り、衛宮士郎の魔力は無尽蔵だ。

今はジャンヌの宝具が剣群を受け止めてくれているが、その宝具もいつまでも保つという訳では無い。

ならば一刻も早く、この世界から抜け出した方が安全性は確保出来るだろう。

ダ・ヴィンチの言葉を信じるのならば時間は限られているようだし、一刻も早く行動を開始した方が良い。

《思わぬ『協力』があつたから脱出自体はそう難しい事じゃないさ。ただ、先方も簡単には逃がしてくれないだろうね。どんな理由があつてエミヤ達を攫つたのかは分からないし知りたくはあるんだけどまあ、流石に空気を読んで撤退行動に徹させてもらうよ》

「了解です。けどその前に——」

マスターは傷付いたバーサーカーの元まで歩いていくと、令呪の力でバーサーカーの傷を癒した。

「ふう、ヘラクレスは無事保護完了つと」

「それでは、やはり」

《おや、気付いていたのかな？このヘラクレスは本来私達と共に戦う仲間、カルデアに居たヘラクレスだよ。最初はカルデア中が驚天動地に見舞われていたものさ。なんせ、うちのサーヴァントが六騎も忽然と姿を消してたんだから》

『六騎』——俺、イリヤ、美遊、クロ、ヘラクレス。

そして最後は、

「アルトリアは、あそこだね。って、なんだあの馬鹿げた数のシャドウ  
サーヴァントは!?!」

「マシユ・キリエライト、アルトリアさんの救援に向かいます! マス  
ター、指示を!」

半ば予想していた答えだった。

セイバー、アルトリアの元へと駆けていくマシユとマスターを視線  
で追ってから、再び衛宮士郎へと引き戻す。

奴の感情は憤怒で染め上げられていた。

カルデアからの妨害は流石に予想の埒外だったのだろう。

「っ、邪魔をするなカルデアアアアアアアアアアア!!!」

「」

無数に降り注ぐ剣の波。無尽蔵の魔力を有しようとしていようと、衛宮士郎  
は衛宮士郎のままだ。

ただ剣を投げつけてくるだけの攻撃など、決して破られる事の無い  
強力な盾を備えておけば大した事は無い。

奴が自分自身で斬りこんで来ない限り、この膠着状態はいつまでも  
続くだろう。

「いきなり過ぎて頭が追いつかないんだけど 救援が来たって事は助  
かったって事で良い、のよね?」

「多分、良いと思う。けれどまだ安心は出来ない。あの人が何かを仕  
掛けてくる可能性だって——」

「フック。何だ、あのふざけた魔力量は」

とても子供には聞かせられないようなスラングと共に現れたのは、長髪を携えた男だった。

この場には似つかわしくない（それを言い始めたらいりや達の魔法少女の衣装も大概ではあるのだが）スーツを纏い、その上に赤い外套を羽織っている。

肩からは黄色い肩帯を下げ、既に吸い口が切り落とされたいかにも高級そうな葉巻を左手の親指と人差し指で挟んでいた。その葉巻の煙の香りだろう。

独特な、しかし決して不快ではない芳醇な香りが鼻腔を擦る。だが美遊達のような子供の前での煙草は流石に宜しくないと思ったのか、懐からシガーケースを取り出し、手馴れた動きで収納する。

——諸葛孔明。

そしてまたの名を、ロード・エルメロイⅠⅠ世。

「君も来ていたのか、ロード・エルメロイ」

「Ⅱ世を付けてくれ。私にその名はまだ重い」

眉を擡めて彼は顔に刻まれた皺シワをいつそう深くする。

だがそれも一瞬の事。すぐさま彼は双眸を細めて、衛宮士郎を観察するように見据える。

黒瞳に映るのは鈍色の剣群。彼は嘆息しながら、

「あれが全て投影魔術によるものだ」と

君の投影で少しは慣れたつもりだが、アレはそれ以上の化け物だな。本来の投影魔術とは逸脱している。だが、君と根本は同じか。才能、というよりそういう属性なのだろう。しかし、あの速度であの量の投影を行使しているというのに魔力が尽きる様子が無いのは一体

「う、んん」

エルメロイィー世が何やらぶつぶつと俯きながら思案していると、不意に銀の鈴を鳴らすような呻吟があった。

それがイリヤのものであると気付いた瞬間に、俺は彼女の元へと駆け寄った。

イリヤは地面に手を突いて、ゆっくりと緩慢な動きで華奢な身体を起こす。

薄ぼんやりとした瞳で辺りを見渡す。そしてたつぷり5秒程かけた後、紅の瞳が驚愕に見開かれた。

「なっ、何事!？」

「カルデアからの救援が来たんだ。まだ絶対に安心出来るという訳では無いが、格段に状況は良くなった。このまま巻き返す事も決して不可能では無いだろう」

「カルデアからじゃあ、わたし達帰れるの!?お兄さんと一緒に、みんなと一緒に!」

「だから安心はまだいや、そうだな。そう出来るように、わたし達も力を尽くすでしょう」

「うん!」

イリヤは元気良く頷いて、その勢いのまま立ち上がろうとしたがすぐにバランスを崩してしまった。

「あう た、立てない」

《霊基の再臨もしきっていませんからねえ。やはり今の状態でのあの

技は危険でしたか〜

「ま、あれだけの威力の魔力砲だもの。本当ならもつと大惨事になってただろうし、そう考えるとまだマシよね。ほら、手貸してあげるから頑張つて立ちなさいな」

「うん。ありがとう、クロ」

クロから差し伸べられた手を取り、イリヤは立ち上がる。そして、衛宮士郎へと紅の瞳を向けた。

「つつつつ、どいつもこいつも!!!邪魔だ!!邪魔なんだよ!!!無関係の奴が次々と出しゃばつて来やがって!!!殺してやる!!!邪魔する奴等全員殺してやる——!!!」

怨嗟の声が地獄に響き渡る。

イリヤは心配そうな表情を浮かべていた。

クロは胸中から湧き上がるやるせない気持ちを抑えるように、唇を噛み、美遊は悲しそうに瞼を伏せて、顔を俯かせていた。表情こそ三者三様だが、抱いている気持ちはきつと同じだろう。

——あの人を、救えないのか。深い絶望の檻に囚われた彼を救い出す事は出来ないのか、と。

だが残念ながらそれはもう叶わない。奴はもう戻つてこれない所まで、堕ちてしまったのだから。

それを、3人は理解していない訳じゃない。

理解していてなお、手を差し伸べようとしているのだ。

俺たちの間に沈黙がおりる。

事情を把握していないであろうエルメロイⅡ世も、怒り狂うあの姿には何か想う所があったのか、口を引き結んだ険しい表情で、その働哭を見据えていた。

「ふはははははははははは!!」

マスターに懇願された故、つまらん贗作者フレイカー風情の救出に渋々赴いてみたが、なんだ。これまた随分と面白いモノが居るではないか!」

突然の哄笑に、その場に居た全員が驚き振り向く。

それは、数多の黄金を身に纏った男だった。

網膜を鮮烈に灼く金色の髪。

その下に灯る双眸はイリヤのそれとは異なり滴る血を彷彿とさせ、見る者に畏怖の感情を与える。

屈強ながらしなやかな肢体は神が命を吹き込んだ彫像のようで、芸術品のように整い過ぎていた。

口元には己以外の全てを見下すような凄絶な笑み。

妖艶ささえ感じさせる笑みはしかし、向けられた者には不幸以外の何物でもないだろう。

英雄王、ギルガメツシュ。

人類最古の英雄であり、千里を見透す『目』を持つ裁定者。

「よい。その道化に免じ、我をオレこのような陰気な場所に出向かせた非礼は水に流してやる。感謝するがよいぞ、贗作者及び面妖な衣装を纏ったその女共よ」

「」

「」

思わぬ登場に、俺は頭痛に堪えるようにそつと頭を抱えた。エルメロイⅡ世も同じような反応をしている。

イリヤ達は突然現れたヘンな人に呆然と。

今なお衛宮士郎の剣群を受け止めているジャンヌ・ダルクは誰にも聞こえない程度にそつとため息を漏らした。

唯一、異常なまでの敵意を向けるものが一人。

「ギルガメツシュ

!!!!」

衛宮士郎。

かつて英雄王に愛する者を殺された過去を持つ者。

「ほう、良き憎悪だ。その憎悪、たかが数年で醸成されるようなものはあるまい。その憎悪がどのようにしてここまで純度を高めていったか気にならない訳でも無いが、ダ・ヴィンチとやらが言うには穿孔が閉じるまでの刻限が迫っているらしいのでな。ここは大人しくマスターの命に従うとしよう。なに、その時までならば一手興じてやらんでも無い。王である我にその醜い剣の切っ先を向ける事を、特別に許してやろう」

ふはははははははははは!!!!!!

と再び哄笑が上がる。その態度に、奴が激昂するまでにそう時間はかからなかった。

だがギルガメツシュは気にした様子もない。

ただ愉しそうに、口角を吊り上げて笑っていた。

「貴様ら雑種は疾く失せよ。そこで旗を掲げる聖女とやらもだ。邪魔する者は我が至高の財宝でもって跡形も無く消し飛ばしてやる故、そのつもりでいるがよい。それよりいつまでその粗末な旗を掲げているつもりだ旗振り娘！疾く失せろと言っただろう!!」

「は、旗振り娘。それってもしや私の事ですか!？」

「他に誰が居る。もう良いから疾く失せろと言っているのだ！それ以上拘泥するというのなら貴様から我が財宝の鍔に変えてやる!」

これ以上ギルガメツシュの怒りを買うのは不味いと考えたのか、

ジャンヌは『宝具』を解いて後方へと退がる。

当然、今までジャンヌが弾き返していた分の剣が雨粒の如くギルガメッシュ目掛けて殺到する。

「——ふん、貴様も贗作者と同種か。

だが偶には一興よな。精々、この我を愉しませるため存分に足掻くが良い」

ギルガメッシュの背後に、黄金の波紋が広がる。

それはあたかも、黄金の湖畔に無数の金塊を投じたかのようにだった。その波紋はギルガメッシュが有する『宝物庫』、その『門』に他ならない。虚空に浮かぶ無数の波紋がより一層揺らいだ瞬間、波紋から無数の宝具がその姿を顕にし、剣の群れに向かって一斉に射出された。

黄金と鐵が激突する。

轟音が耳をつんざく。緋色の閃光が弾け、互いが互いを喰らい尽くさんと相剋し合う。

それは、地獄を燦然と照らす花火のようだった。

「——仕方ありません。急いでここから離れましょう。彼は後ほど回収するとして、ルートの確保を優先します」

こうなってしまうのはギルガメッシュは止まらない。

ジャンヌはそう判断したらしい。無論、俺もそれに賛成の意を示した。

「でも、どうやって脱出するんですか？」

「ダ・ヴィンチはこの世界に来る際に空間にカルデアとこの世界を一時的に繋ぐ『孔』を開けた。

それは道のないトンネルみたいなものでね。

ジャンヌ・ダルクの言うルートの確保とはその道のないトンネルに道を作る作業の事だ。そのための術式は既にダ・ヴィンチがデータとして圧縮してくれている。後は布陣し起動させるのみだが、その『孔』が再び閉じるまではあまり時間に余裕がない。もう一度こじ開けるのもほぼ不可能。故に、こうして急いでいるという訳だ。時間が過ぎてしまえば、この世界に一生閉じ込められてしまうからな。それだけは、何としても避けなければならない」

エルメロイ二世の説明に、クロと美遊はなるほどと頷きイリヤは微妙な顔付きで頷いていた。

とにかく、あまり時間は無いという事だ。

「術式の圧縮データを持っているのはマスターだったか？」

「そのはずです。しかし、一つ問題が。」

「どうやらあのシャドウ・サーヴァントは無限に湧き出てくるものようです。マスター達を呼び戻してから布陣してとなるとこの距離ではどうしても邪魔が入ってしまいますが」

「仕方ない。多少運の要素が絡むが、こちらで何とかしてみよう。手伝ってくれ、アーチャー。君の投影魔術が必要だ」

◇？

「よし、これで———終わり」

エルメロイ二世、と呼ばれていた男の人が言っていたこの世界とカールデアを繋ぐ『孔』へ術式を通す作業が終わったらしく、マスターが額を汗で拭った。

理屈は良く分からないが、後は全員が地面に敷かれた魔法陣の上に立ち、刻まれた術式を起動させるだけらしい。

――― 終わりが近いからか。

この世界で過ごした日々を思い出す。

本当に色んな事があった。

最初はお兄さんに近付く事が怖くてロクに話せなかった。だけど徐々にお兄さんとの距離も縮まって、信頼して、信頼されて。辛い事も沢山あったけれど、この生活はイリヤにとって、とても楽しいものだ。だつたと今は思える。

「あの人、どうなっちゃうのかな」

《士郎さんの事ですか？》

「うん。わたし達が帰っちゃったらあの人、独りぼっちになっちゃうんだよね？」

我ながらその考えはどうかと思う。

あの方はイリヤの命を奪おうとした。ただの道具として、イリヤの命を使おうとしたのだ。

なのに、不思議と憎くない。

それどころか、この後の彼が心配でさえあった。

《変な事考えないで下さいね、イリヤさん。お気持ちは分かりますけど、これを逃せばもうカルデアへと帰る道は失われてしまうんですから。それに、今は大きい方のギルガメツシユさんが相手をしているようですし、迂闊に近付くと危険ですよ？》

「我オレを呼んだか、奇怪な魔術礼装よ」

いつの間にか、背後に大きい方のギルガメツシユが立っていた。驚

いたルビーはひいつ!?とイリヤの背中に隠れてしまう。

主を盾にするステッキにほとほと呆れながら、イリヤはちらりと大きい方のギルガメツシュを一瞥する。

なんというか、大きい方のギルガメツシュはもの凄く偉そうで、話しかけるのが躊躇われた。

それに、この人は『イリヤ』の命を奪った張本人である。

厳密に言うとは違うのだが、それでも目の前で傲岸不遜な笑みを浮かべるギルガメツシュと前述のギルガメツシュは同質の存在と言っているはずだ。

そんな人と普通に接しろと言われて出来るほど、イリヤは大人では無かった。

しかし恨んでいるかと問われれば、それは難しい所だ。

そもそもその話、そんな権利はイリヤには無い。

何せ実際に何かされた訳では無いのだ。

イリヤにとって目の前のギルガメツシュはあくまで『窮地を救ってくれた金ピカで偉そうで変な人』、という位置づけに帰結するものであり、感謝はすれどその逆は無い。

だから何も気にする必要は無いのだが、そこまで潔く折り合いが付けられるような人間だったならば、『彼』に「君の兄と私は同一の存在では無いのだから勝手に重ねるな」、なんて指摘をされる事も無かつただろう。

結果、イリヤはギルガメツシュの視界に入らぬよう出来るだけ身を縮み込ませる事ぐらいしか出来なかつた。

「ギルガメツシュ！あの人の戦いは!?!」

「生憎と時間切れでな。命を奪う所までは行かなかつたが、あの様子では彼奴も暫くは動けまい。それより、贗作者とあのデミ・サーヴァントはどうした?」

「エミヤ達ならシャドウ・サーヴァントの足止め中。今から呼びに行

くから少し待ってて！」

「刻限もすぐそこまで迫ってきている。急げ、我とてこんな陰鬱で娯楽の一つも無い場所に監禁されるのは流石に許容出来ぬぞ？」

愉しげに笑って、彼は近くの岩場に背を預けた。

先程から意外と時間を気にしていて、態度とは裏腹にもしかして真面目な人なのかと思ったがどうやらこの場所に監禁されるのはごめんだという理由があつたかららしい。

すぐに行つてくる、と言いつつ残してマスターは走り去っていった。

「

いつまで経つても心に小さな、しかし鋭い棘が残っている。気付けばいつも、『彼』が居る方向に瞳を向けていた。

「仕方、ないわよ」

「クロ」

「わたし達じゃあの人は救えない。彼を救えるのはもう死んでしまった、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンという名の少女だけなんだから。わたしでもアナタでもミュでも無い。あの人は『イリヤ』の面影だけを求めている。もう、あの人にはそれしか無いのよ。多分わたし達がこの世界から去つたとしても、彼は止まらなと思うわ。イリヤを生き返らせる。まるで、それだけをインプットされた機械みたいだね」

淡々とした口振りとは裏腹に、クロはどこかやるせない表情をうかべていた。

瞳は諦念と悔恨の間で揺れている。幾度となく胸中から湧き上が

り、そして霧散していった問答。それは結局、答えが出せないまま終わりを迎えようとしている。

本当にこのまま幕を閉じて良いのか。

イリヤの頭の中で、そんな自問自答がグルグルと回っていた。

「――どうした。浮かない顔をしているようだが、もしや何か身体に異常でも?」

いつの間にか、後ろに彼が立っていた。彼は心配そうにイリヤの顔を覗き込んでいる。

こんな時でも変わらない彼に嬉しくなって、思わずクスリと小さな笑みがこぼれた。

その笑顔の意味を正しく汲み取ったのか彼は軽く咳払いをしてから視線を後方へ投げて、

「シャドウサーヴァントはロード・エルメロイⅠⅠ世の石兵八陣かえらずのじんによって足止めをくらっている。脱出するのなら今のうちだ。いつでも動けるように準備をしておいてくれ」

彼の言葉に少し表情を引き締めて頷く。

気付けばマスターやマッシュも一同に足並みを揃えており、いよいよ時が近付いている事を暗に物語っていた。

マスターの傍にはセイバーの姿も見える。

しかし、リンの姿はどこにも見えなかった。

「お兄さん、リンさんは」

イリヤの問いに、彼は少し言葉を詰まらせる。だがその拘泥も一瞬の事だった。

「――彼女は、ここに残る事を選択した。」

事の終わりをしっかりと見届けたいと、そう言っていたよ」

終わりを見届ける。それは、なんの終わりなのだろう。

この戦いの終わりか。それとも、

「準備、整いました!!いつでもカルデアへ帰還出来ます!」

「よしー!」苦労さま、マシユ。このタイミングを逃せばもうカルデアへ戻る事は出来ない。さあ、早くみんな魔法陣の中に!もう時間が無いぞー!」

マシユと急かすようなマスターの声で我に返る。

マスターがガッツポーズと共に喜び、それが伝染して行って歓喜の声が重なっていく。

見ると、マシユが立っている場所の少し奥に半径5 m程の巨大な魔法陣が敷かれていた。

複雑な紋様が描かれ、淡く発光している。

イリヤは安堵した。何はともあれ、ようやく帰れるのだ。

ようやく安心して、皆と笑い合える。

この世界から離れる事に一松の寂しはあるけれど、それでも今は、喜びの方が遥かに勝っていた。

促されて、全員が続々と魔法陣の上に立つ。

最後は彼で、彼が魔法陣の中に足を踏み入れた瞬間、淡く発光していた魔法陣が強い光を放ち始めた。

遂にマスター達が起動させたのだろう。

きいん、きいん、と断続的に銀食器を鳴らすかのような音が聞こえる。不思議な、しかし不快ではない音色にしばし身を任せた。

「イリヤ」

そんな時だった。穏やかな声で、彼に呼ばれたのは。

「クロ、美遊」

その声は優しいがどこか寂しげで、不安になる。

——その直後だった。

彼はイリヤとイリヤの右隣に立っていたクロ、そしてイリヤの左隣りに立っていた美遊を一挙に抱きしめた。

強く、しかし優しく。逞しい両腕が3人を包み込んだ。

だが当然ながら嬉しさよりも先に驚きが先だった。

「え、え」

「お、お兄さんいきなりこんな」

「あ、あう」

突然の事に目を回す。それはマスター達も同じようだった。嬉しいか否かと言われれば120%嬉しいのだが、あまりにも不意打ちで上手く言葉が回らない。そんなイリヤ達に向かって、彼は穏やかな口調で訥々と話し始めた。

「3人共、良く頑張ったな。今ここに私が立っていられるのは、君達が最後まで諦めず奮闘してくれたおかげだ。

——本当に、ありがとう」

耳許で囁かれる言葉がくすぐったい。

彼の腕の中は陽だまりのように暖かくて、疲労と傷の痛みが残留する身体が段々と癒されていく。

それに何といても、幸せだった。

彼の体温がこんなにも近いというだけで、イリヤの鼓動は軽やかにリズムを刻み始める。

「ううん、お兄さんこそ。今わたし達がこうして居られるのはお兄さんのおかげなんだから。だから、本当に——」

語尾が消失する。気付けば、イリヤは泣いていた。

きつと、安堵したからだ。

あまりにも過酷な戦場で、皆が生きて戻ってこれたのだ。

その奇跡を、本当に良かったと思う。

彼は少し驚いた素振りを見せた後、そつとイリヤの目元を拭ってくれた。

恥ずかしさと嬉しさが混ざりあって、何だか不思議な気持ちになる。

「はあ、全くしようがないわねイリヤは。気持ちは分からなくもないけど」

「うん。実際、危ない場面も多かった。それでもこうして、全員でここに居る。それがすごく嬉しい」

噛み締めるような2人の言葉。

彼はその言葉を黙って聞いていた。穏やかな表情を崩さぬまま、しかし、何故か少し申し訳無さそうに。

きいん、きいんという音が更に大きく、高く反響する。

マシユが「あと30秒で、カルデアへの転移が完了します」とマスターに報告していた。

「けど、この生活も終わりか。色々大変でなし崩し的に始まった共同生活だったけど、振り返ってみると楽しかったわね。お兄さんはどう？小学生の女の子3人と一緒の魅惑の共同生活、楽しかった？」

からかうようなクロの言葉に彼は苦笑する。

「その言い方は語弊を生むからやめて貰おう。現にマスターが凄い勢いでこちらに興味を示している。」

だが、そうだな。私も楽しかった。数多の危険はあったものの、あの生活も今となってはかけがえのない思い出だ。ふむ、これで終わりだと思つと、少しだけ寂しさを感じてしまうな。自分らしく無い感傷だか」

「ううん。それは違うよ、お兄さん」

泣き顔もそのままにイリヤは顔を上げて、彼の琥珀色の瞳を真つ直ぐ見詰める。

「ここでの生活は終わつちやうけど、カルデアに帰つてもこの関係は終わらずに続くんだもん。」

だから終わりじゃない。むしろ、ここからなんだから」

「う」

彼はその言葉に驚いて、何故か辛そうな顔をした。

そして彼は、より強くイリヤ達三人を抱きしめる。

微かな疑問はそれによつて霧散し、再びその暖かさの中に埋没していく。

「カルデアでの生活は、楽しい事ばかりじゃない。困難という名の高く厚い壁が立ち塞がる事もあるだろう」

イリヤは、彼の声が僅かに震えている気がした。

彼の顔が見たくて顔を上げようとしたけれど、強く抱きしめられて

いてそれは叶わなかった。

彼は、そのまま言葉を続ける。

「だが、安心して欲しい。君達ならばきつとどんな困難だって乗り切れる。私は、俺は、そう信じている。」

だから――」

彼はイリヤ達に回していた腕を、おもむろに離した。

「残り10秒です!」、というマシユの声がどこか遠い。

その時だった。トン、と。微かに、地面を蹴る音がした。

彼の身体がそのまま後方に流れる。

そう。魔法陣の外側に。

「お兄さんなにを――」

「トレース・オン開始」

イリヤの語尾は彼の詠唱によって消失した。

そして連鎖するように、彼と魔法陣の間に切り立つ崖の如く幾本もの剣が屹立した。

それは壁であった。イリヤ達が魔法陣から離れられないようにするための、巨大な壁。

「お兄さん何してるの!?!早く戻らないと――」

――「済まない」

クロの慌てた声に対して、彼の声は酷く落ち着き払ったものだった。まるで、初めからそうするつもりだったとでも言うかのように。

「俺にはまだ、やり残した事がある。カルデアへ戻る事は出来ない。その責務を果たすまで、戻るわけにはいかないんだ」

有無を言わさぬ様子でそう言い、彼は投影した破戒すべき全ての符を自分に突き刺した。

マスターとの間に交わされた契約を断ち切ったのだ。

「エミヤツ!？」

「ダメです先輩！もう、魔法陣が」

駆け寄ろうとしたマスターを、マシユが取り押さえる。

何が起きているのか、理解できない。

どうしてマスターはあんなにも必死になって彼のもとへと駆け寄ろうとしたのだろう。

どうしてクロと美遊は瞳を涙を濡らして、必死に彼に呼びかけているのだろう。

分からない。理解出来ない。ただ、分かるのは。

——交わした『約束』が果たされる事はもう無いという、冷然たる事実のみ。

「お兄さん、ダメ 行っちゃ、行っちゃだよお」

イリヤの声に、彼は辛そうな表情を浮かべた。

だがそれも一瞬の事で、すぐに彼は表情を引き戻して再び『地獄』へと舞い戻ろうと歩を進める。

その背中はどうしようもなく孤独で、今すぐ彼の隣に行きたいのに、行かなくてはならないのに、それが出来ない。

焦燥感でイリヤの心臓が弾け飛びそうになる。

早くしないと術式が完全に起動してしまう。

それは、つまり。

永久に彼と会えなくなるという事だ。

「待って、待ってお兄さん——!!!」

悲痛な叫びは、しかし届かない。

彼はもう振り返る事をしなかった。ただ、一言。

「——『約束』。守れなくて、済まなかった」

彼自ら、終わりを告げる。

直後、光の奔流がイリヤ達を包み込んだ。

彼の笑顔が銀色の光に溶けていく。

必死に、喉が裂けそうなぐらい彼の事を呼んだ。

けど、もう届かない。声も手も。何もかも。

それでも、呼ばなくてはならないと思った。

彼の事を。そうすればきつといつもみたく仕方ない、と言って戻ってきてくれるはずだから。

「お兄さん——  
!!!!!!!」

視界が全てホワイトアウトする。

溶けていく視界の中。

最後に彼は「ありがとう」と囁いた。

光芒が吹き荒れる。泣き崩れるイリヤの声も、全て渦巻く光に掻き消されて行く。

まだ抱きしめられた時の感触を、温度を覚えていたい。

————ただその感触は徐々に薄れていってしまっていて、やがて消えてしまった。

その事が、まるでもう会えない事を意味しているようで。

——最後に、もう一度だけ名前を呼ぶ。  
嗚咽混じりのその声が、彼に届く事はずいぞ無かった。

## 終局『ローレライ』

——光の帯が天蓋を貫いている。

あたかも、地獄に垂れた蜘蛛の糸。闇を一直線に貫く細い輝きを、俺は身じろぎ一つせず見詰めていた。

声も手ももう届かない。

全ては光の奔流に飲み込まれて消えてしまった。

不思議だ。声も顔も喜怒哀楽の表情も抱き締めた時の感触も、彼女達の全てを思い出せるというのに、もう会う事は無いだなんて。何かの悪い冗談と言われたら、思わず信じ込んでしまいそうだ。

胸に酷い疼痛が吹き荒れる。俺を引き止めんとした嗚咽混じりの声が、いつまでも耳朶から離れない。

表情こそ見ていないが、きつとイリヤ達は泣いていたのだろう。別離の直前、振り返らなくて良かったと心の底から思った。

きつと、その顔を見てしまったら踏み出せない。

動悸する心臓を落ち着かせるため、深く深呼吸をする。

微かに震える指先を無理矢理抑えつけて、光が完全に収束したのを見届けてから再び『地獄』へ向き直った。

「——アナタ達って、本当に不器用よね」

はあ、と嘆息混じりの声があった。

遠坂凜。彼女は俺の隣に並ぶと、つい先程まで俺が見ていた場所に視線を向けた。

当然ながら、そこには何も無い。

虚ろな闇が首をもたげているだけだ。

「器用な生き方が出来たのなら、私はこの位置まで辿り着いていない。あの時から。大火災によって元の自分を喪ってから、私は不器用な生き方しか選択してこなかった。正義の味方なんて、その最たるものだろう。もう誰一人喪いたくないなんて、あまりにも傲慢な願いだと思

わないか？」

「じゃあ、『彼』は？正義の味方という目標を捨てた彼の生き方は、ア  
ナタから見てどうだった？」

「——そう、だな。奴は私以上に器用な選択を出来なかつ  
た。他を顧みず己の道を進むという事は、そういう事なのだろう。た  
だ、その願いが間違っていたかどうかは私には決められない」

「？　じゃあ、どうしてアナタは戦おうとしているの？間違ってい  
るかどうかわからないのなら、彼と戦う必要なんて無いじゃない」

「戦闘が始まる前に奴に向かって放った言葉通りさ。」

私はただ、イリヤの願いを踏みにじった奴を許せないだけなんだ。  
何が正しくて何が正しくないのか、そんな物差しに興味はない。これ  
は、『俺』の戦いだ。他人の定めた善悪の枷など、今は犬にでも食わせ  
てやる」

確かな意思と覚悟をもって、告げる。

それは己への鼓舞でもあった。

「随分と自分勝手な正義の味方ね」

「正義の味方なんてそんなものさ。独善的で矮小で。誰にも理解され  
ない孤独が報酬の裏仕事。」

だが、その果てによくやく答えを得た。

——イリヤに胸を張って誇れるような自分で居る事。

この選択を後悔しない理由なんぞ、それで充分過ぎる」

自嘲気味に。しかし意志力を込めた声音でそう答える。

遠坂凜は「そっか」と笑って頷いた。

「随分と回りくどい言い回しだけど要は、好きな女の子の前ではいつだってカツコイイ自分で居たい。そういう事でしょ？」

「少々有り体に過ぎる気もするが、そんな所だ」

一松の気恥しきを感じながら、俺は答える。

すると遠坂凜がニマニマと妙な笑みを浮かべながら、面白がるように俺の顔を覗き込んでいた。

じろりと睨めつけてみるも効果はない。

ひとしきり笑ってから、遠坂凜は顔を上げた。

「それじゃ、気持ち程度の餞別をあげるわ。後ろ向きなやつ」

「餞別だと？君が私に？」

怪訝な顔をする俺に、遠坂凜は「良いから！」と有無を言わさぬ様子で俺を急かす。

怪訝な気持ちこそ晴れないものの、彼女が俺に何か危害を加えるとは思えない。

俺は大人しく遠坂凜の言葉に従う事にした。

念の為、いつでも防御行動に移れるよう神経を研ぎ澄ませてから俺は遠坂凜に背を向けた。

背中越しに、微かに躊躇うような気配を感じる。

何を躊躇っているのかは分からない。

だが躊躇いを感じているという事は、無理をしているという事なのだろう。

ならば、無理をする必要は無いと伝えなければ。

そう思っって振り返ろうとした瞬間。

「ふん!!!」

「ッ!？」

背中にとんでもない衝撃が走る。

その衝撃は背中から全身へと電撃の如く伝播し、俺は一瞬の間だけ息を詰まらせた。

遠坂凜が俺の背中を掌で打つたのだと気付くまで、そう時間はかからなかった。

念の為、と警戒していたにも関わらずマトモに掌打をくらったのは背後に立っていた遠坂凜の躊躇う気配に意識を割いていたからである。

それと、まさかという気持ちもあった。まさか本当に俺へ攻撃してくるとは、思っていなかったのだ。

今度こそ振り返ろうと身体を捻る。

——その時だった。

遠坂凜に打たれた背中を中心に、何かが流れ込んでくる。

それは一瞬で俺の全身を駆け巡り、俺の霊基を満たした。

魔力。それも、かなり純度の高く濃密な。

通常の魔術師はおろか記憶にある遠坂凜の魔力の総量を遥かに越える魔力量に、俺は目を丸くして驚く。

「これは、一体」

「言ったでしょ、餞別をあげるって。ちょっと強引なやり方だけど、私の魔力を出来る限り叩き込んでみたわ。どう? なかなかのものでしょ?」

「待て。これは明らかに君の魔力の総量を超えている。どうやってこんなデタラメな量の魔力を」

「言いかけて、ふと思いついた。」

——『令呪』。

「マスターが有する、サーヴァントに対しての絶対命令権。本来ならばサーヴァントを律するためのものに過ぎないが、令呪とはあくまで膨大な魔力の結晶だ。」

「使い方を工夫すれば、自身のサーヴァントを一時的に強化する事だって造作もないだろう。」

「しかし、俺と遠坂凛の間には何の契約もなされていない。」

「なのにどうして、俺に魔力が譲渡されているのだろうか。」

「そんな俺の疑問を察したのか、」

「別に難しい事は何もしてないわよ？一度令呪を全て解放して、それを今やってみたみたいになタの霊基に叩き込んだだけなんだし。私の元の魔力に併せて令呪三分。これでかなりの魔力量になったはずだけど、どう？」

「」

「自身の身体を流れる魔力に身を委ねる。」

「かつてない程の魔力量に、霊基が驚いているようだ。」

——悪い兆候では全くない。」

「それどころか、寧ろ。」

「——ああ、悪くない。これ以上ないぐらいの餞別だ」

「そう。それじゃあ、一つだけお願いを聞いてくれるかしら？」

「こんな餞別を受け取っておきながら何もしないとというのは流石に気が引ける。良いだろう。私に出来る事ならば、可能な限り努力する」

「ああ、その点に関しては安心しなさい。これは、アナタにしか出来ない

い事だから。

——私の代わりに、あの『馬鹿』を一発ぶん殴ってきなさい。目が覚めるぐらい、思いつ切りね」

トン、と遠坂の突き出した指が俺の胸に触れる。

この戦いが始まる前。

その時の彼女の言葉を思い出した。

——こんな事態を引き起こしたバカを、ぶん殴る。

責任重大な役目だ。しかし、

「承知した。君の願いは、必ずや私が遂げてみせよう」

今日はやけに誰かの願いを背負う日だ、と。

そう思い苦笑を浮かべながら、俺は遠坂凛にそう答えた。

◇？

「頑張りなさい」

遠ざかっていく赤い背中に、遠坂凛はポツリと眩きをこぼす。その声は、あまりにもか細い声だった。

——『消滅』は、四肢の末端から。

『令呪』という、この世に己を繋ぎ止める楔が無くなった以上、遠坂凛という少女の亡霊である自分は消滅するしか無い。それが定められた『運命』であり、選択の結果だ。

黄金のリボンとなってほどこけていく自分の身体を、どこか他人事のように見詰める。

消滅、即ち死ぬ瞬間になっても恐怖は感じなかった。

ただ、残念だなと思う事はある。

——この戦いを、見届けられない事。

それが出来ない事だけが、無念だった。

だが『想い』は託した。

後は彼が、遠坂凜の願いを遂げてくれる。勝ち目は限りなく薄いと  
いうのに、不思議と彼を信じられた。

きっとそれは、『約束』したから。

彼が誰かと交わした『約束』を破るような人じゃない事を、知って  
いる気がしたからなんだと思う。

そんな事を考えているうちに末端から始まった消滅は徐々に加速  
していき、遂に人の身体としての原型は消えた。

後数秒も経たず、遠坂凜の魂は完全に消え去るだろう。

だから、その前に――

『――絶対に、約束を果たしなさい。私との約束だけじゃない。  
貴方が誰かと交わした約束を全て。じゃないと、鼻の穴にガンドぶち  
込んでやるんだから』

発せられた声は音にならず消えていく。

だが、確かに彼へ届いたはずだ。

そう確信して、遠坂凜はゆっくりと瞼を閉じた。

ようやく休める、と。

安堵の感情を抱きながら、深い眠りの底へ落ちていった。

◇？

荒涼とした大空洞の中を進んでいく。

戦闘による余波のためか。所々壁が崩れ落ち、凹凸のある地面は無  
惨に捲れ上がっている。

相変わらず光は届かない。

閉じた世界はあたかも牢獄のようで、感覚を麻痺させる。

遠坂凜はあの場に残った。自分が戦場に立っていると邪魔だろう、  
という遠坂凜の配慮だ。

だが、想いはここにある。遠坂凜から受け継いだ想いは、今なお俺

の身体を駆け巡っている。

——そうして、辿り着いた。

大きく隆起した丘陵の上。

そこに、深い影を纏った奴は佇んでいた。

「諦めて、たまるか」

俺の来訪に気付いたのか。

奴は憎悪を滲ませた白濁の双眸を俺に向けて、

「何度妨害されようと、変わらぬ。俺は俺という存在が朽ち果てるまで何度でも、何度でも」

声帯さえも壊れたのか。砂鉄を擦り合わせるかのような不快な音が、耳朶に噛み付いてくる。

奴の変貌はそれだけじゃなかった。

琥珀色だった瞳は腐り落ちたかのように白濁し、四肢の形が出来損ないの粘土細工のように歪んでいる。

俺は直ぐに、その理由に行きあたった。

英雄王——ギルガメッシュは言っていた。

殺してはいないがあれでは暫く動けまい、と。

つまりギルガメッシュは衛宮士郎の四肢を斬り落とし、衛宮士郎はそれを補うために『泥』を用いたのだ。

ならばあの異様なフォルムも領ける。

だが、あれの本質は『呪い』だ。

ああして身に宿す以上、生半可な副作用では済まない。

奴の身体は泥に代えた四肢を中心に、無数の蟲に全身を食い尽くされるかのような激痛に苛まれているだろう。

砕けんばかりに歯を食いしばり、地に這いつくばっているその姿からもそれはうかがえた。

だが、その眼に宿る憎悪は消えていない。

寧ろその痛みによって、増幅している。

「――悪いが、それは叶わない。貴様の旅はここで終わりだ」

俺はその姿を意に介さず、冷然とした態度で告げる。

再度、俺に対して憎悪が向けられた。

その憎悪を、俺は真正面から視線で斬り伏せる。

「もう言葉を交わす必要もあるまい。俺達がこうして相対している理由は単純明快だ。

――互いに、互いを認められない」

奴の憎悪の瞳が僅かに静まった。

虚を突かれたような表情で固まる。

だがその硬直も一瞬だった。先程よりは剣呑さの取れた声音で、奴は訥々と口を開く。

「俺はイリヤを救う。それをしなかったお前を、そしてそれを阻まんとするお前を、認められない」

「俺はイリヤの願いを叶える。その選択をしなかった貴様を、そして無関係のものを贄にしようとした貴様を、許す事が出来ない」

それがお互いの意思だった。

行儀のいい言葉なんて、もうこれ以上交わす必要は無い。

俺は俺の意志を貫き通し奴は奴の意志を貫き通す。

互いの願いを、互いが傲岸不遜に蹴落とさんとする。

――ただそれだけの、自分勝手な戦い。

「止められるとでも?」

「さあな。だが、こちらにも色々と事情があるのでね。ここで見逃した、などと言えばガンドと小言が飛んでくる。

——それに、要らぬ悔いを残したくはない。

悔いの残った人生だったなどと、俺に幸せになれと言ってくれたイリヤに対して、あまりにも失礼だ」

両手に干将・莫耶を構え、俺は剣のように鋭い視線でもって奴を見据えた。

もはや和解は有り得ない。

それは奴も承知しているだろう。

その証拠に、奴の腕が蠢いた。安定を欠いていた泥腕が細くなっていき、やがて人間の腕の形へと変化する。

「俺が死なせた。今までイリヤを独りぼちにした分、俺がイリヤを幸せにしてやるって決めたのに。

——だから、俺は進む。

イリヤの人生が、幸せな時間が、あんな冷たい場所で終わって良い筈がない」

白濁とした瞳が、僅かに光を取り戻す。

——動いたのは、全くの同時。

合図らしい合図は無かった。

ただ、同じタイミングで身体が動いたのだ。

俺は前方に。踏み込んだ大地に穴が穿たれた。その速度は、先刻までの己を遥かに超える。

湾曲し溶けていく視界の中、俺は奴の姿だけに瞳を絞った。

対して、奴は後方に。

疾風の如き速度で踏み込んでくる俺を瞳に入れながら、いつそ無機質とさえ言っつていい程冷静に後ろへ退る。

——瞬間。世界が壊れた。

「な」

それは、比喩でも何でも無い。

立っていた地面。遠目に見える壁。光を遮る天蓋。その全てが千差万別の『剣』へと変化したのだ。

数など想像もしたくない。無尽蔵という言葉をここまで顕著に抱かせる光景というのはかくもおぞましい。

世界の変貌は僅か一秒の間に行われ、瞬時に『敵』である俺に牙を剥いた。

全方位360度。ありとあらゆる方向から、鈍色に光る剣が津波の如く射出された。

避ける、なんて選択肢は最初からない。

何せ立っている地面でさ！え剣へと変化し、俺目掛けて飛翔せんとしているような状況だ。

それを踏まえて、俺は即座に足を止めて軽く跳躍する。

そして剣と化した地面と自身の靴底の間に間隙が生まれた瞬間、俺は足元に一振の巨大な大剣を投影した。

「初っ端からやってくれる」

足下に投影された大剣が、足下からせり上がってきた剣の波を僅かに押し留める。その間に、俺は天蓋から降り注いでくる剣群に向かって右の掌を向けた。

瞬間。喰らい尽くさんとするが如く、百を越える剣が降り注ぐ剣群に向かって飛翔し、殺到する。

そして、衝突した。金属同士が幾重もぶつかり合う、硬質かつ荘厳な音色が地獄に響き渡る。

砕け散った破片が雨のように降り注ぐのも構わず、俺は次の行動へと思考回路を切り替えた。

真っ先に対処せねばならないのは、壁から殺到する剣群。

俺は右手を右の壁に。左手を左の壁に向け、

「虚・千山切り拓く翠の地平！」  
絶・万海灼き祓う暁の水平——!!!」

叫ぶ。巨大、と簡単な言葉で表すのが躊躇われるほど巨大な二振り  
の剣を、それぞれ左右に突き刺す。

本来、『虚・千山切り拓く翠の地平』と『絶・万海灼き祓う暁の水平』  
は神造兵器と呼ばれるもの。

故にそのものを投影する事は不可能だが、中身の無い伽藍堂ならば  
投影可能となる。

無論、表面だけは硬度を保っているのだが、その硬度も通常の剣と  
相違はあまり無い。

左右の壁からの剣群は全て防ぎ切った。

残るは——前方。

「ッ」

奴が、微かに息を呑む気配がした。

それもそのはず、俺は迫りくる剣の津波に真つ向から突っ込んで  
いったのだ。

前方からの剣は、奴の後方辺りから放たれている。つまり、奴の  
立っている場所だけ僅かに隙間が生じているのだ。

その隙間にすかさず飛び込む。

再度の踏み込み。同時に、あらかじめ投影していた干将を横薙ぎに  
一閃する。

奴は咄嗟に近場に刺さっていた剣を抜き、俺の干将を真つ向から迎  
え撃った。

——電撃が全身を走る。その電撃は鋭い鎌となって脳髓を  
貫き、思考を遙か彼方へと誘う。

我ながら、というべきか。咄嗟の判断力と対応力には目を見張るも  
のがあるのは確かだ。

しかし、折れたのは奴の剣の方だった。

折れた剣は破砕音と細かい破片を散らしながら、主の手から零れ落ちていく。

俺は止まること無く返す刀で干将を引き戻しつつ、右手に投影した莫耶を袈裟に振り下ろした。

漆黒と純白の軌跡が弧を描いて虚空に刻まれる。

狙いはそれぞれ、首筋と胸。

取った。

確信と共に剣を走らせる。しかし、

「ッ」

ゾクリ、と背筋を冷たいものが伝い落ちる。

俺は咄嗟に、横へ転がるようにして身を投げた。

途端。下から突き上げるようにして、数十本の剣が現れる。

その剣は俺を追従するように天蓋目掛けて飛翔し、そのうちの数本が俺の身体を捉えた。

腕、足、背中、胸。

どれも浅いが、無視出来るものでも無い。

肉体を斬り裂かれる激痛を鋭い裂帛で吹き散らし、俺は空中で身体を捻りながら、奴の身体目掛けて干将・莫耶を投擲する。

「が、あッ!？」

咄嗟に身体を捻ったおかげで急所への直撃は避けたようだが、右胸と右眼を深く抉られたようだ。

激痛に呻き後ずさる奴を追撃しようと地を蹴る。

だが、追撃を許すほど奴は甘くなかった。

左腕を振るう。凝固していた左腕が再び形のない泥へと変化し、俺を覆い尽くさんと噴出する。

まるで、顎アギトを開いた龍のようだ。

俺は前方に剣の壁を作りながら、後退する。

そこで一度、互いの攻撃が止んだ。

——戦闘開始から、ここまで僅か10秒足らず。

そうとは思えない程、互いの駆け引きが交錯していた。

「戦闘、と呼ばれる行為を最後に行ったのはいつだったか。もう思い出せないが、これ程までのアドバンテージを受けておきながらこの体たらくか、それとも、お前の実力がそのアドバンテージを上回ったのか？ 全く、未恐ろしいな」

奴は挟まれた右胸と右眼を泥で補いながら、その際に走る痛みを誤魔化すように口を開く。

「それはお互い様だろう。

——そうか、失念していたよ。

この世界に立っているという事は即ち、貴様に囚われているという事を」

対して応じた俺の声は、冷たく鋭利。

壊れていた世界は元に戻っており、先刻までのけたましい金属音が嘘のようだった。

——『彼女』は言っていた。

この空間はそもそも奴、衛宮士郎の『固有結界』の中であると。つまり、俺は文字通り囚われているのだ。

奴の世界に。奴が作り出した、幻想に。

「この世界は貴様の固有結界が下地となっている。

成程、この固有結界に存在する物質全てが『剣』という記号を内包しているという訳か。

恐らくは、私達が過ごしていたあの武家屋敷ですらな。

だと言うのに何故、貴様は私達を殺さなかった。

イヤだけを傷付けずそれ以外をそのまま串刺しにするような芸当すら、貴様にとつては造作もなかったはずだ。

「だというのに何故、聖杯戦争という回りくどい形式を用いて俺達を排除しようとした？」

「それ、は」

「――答えられないのなら、代わりに答えてやる。」

「貴様は己の手で誰かを傷付ける事が怖いんだ。」

「世界を滅ぼし結果的に全世界の人間を殺戮した貴様だが、だからと言って『衛宮士郎』が誰かを傷付ける事を良しとするはずがない。だから、サーヴァントを使って間接的に手を下そうとした。違うか？」

「」

「貴様の剣は、軽い。」

「そんな半端な覚悟では刃が鈍るのは当然だ。」

「――衛宮士郎の『剣製』は剣を作る事が本質なのでは無い。」

「自分の心を形にする事。それが、衛宮士郎に許された唯一の魔術のはずだ。だが貴様のように半端な覚悟を持った者が術者であれば、あのような剣が生まれるのも道理。」

「貴様がどれ程の魔力を有していようと、そのような覚悟のこもっていない剣など幾らでもへし折ってくれる」

「奴に向かって、俺は『剣』を突き付ける。」

「――奴は何もかも、奪った。」

「過程はともかく全ての人間の命を奪ったのだ。」

「そんな奴が、傷付ける事を恐れるだと？」

「馬鹿を言うな。今更、そんな権利があるとも思っているのか。」

「イヤを救いたいのは自分自身の願いだろう。その願いを叶えたい

というのなら、貴様は誰かに任せきりにするのでは無く、自分自身の手で戦うべきだった。その願いがどれだけ醜悪極まりないものでも、そうするべきだったんだ」

俺の言葉に奴は俯き押し黙ったまま、微動だにしなかった。

「——お前は、良く分からないな」

やがて、ポツリと奴はそうこぼした。

「どうして俺に、そんな助言めいた事を？お前は、俺の事が許せないんじゃないのかよ」

「ああ、今すぐ素っ首落としてやりたいと思うぐらいにはな」

「尚更分からないぞ、お前。そんな相手に何故——」

「決まっているだろう。許せないからこそ、だ。せめてその腐り切った性根を直して貰わねば不愉快で仕方がない」

その答えに、奴は唾然とした。

「分かってはいる。自分がどれ程馬鹿な事をしているのかぐらい、重々承知している。しかし、

「頼まれてしまったものは、仕方がないのでね」

俺がこぼした囁きに奴は怪訝な顔をする。

「『彼女』は言った。

俺に、衛宮士郎を救って欲しいと。

彼女は俺がこの世界に顕界している間、ずっと俺に顕界に必要なだ

けの魔力を繋いでくれた。

「この世界で『あの子達』を守る力をくれた。

しかし、俺にそんな事を頼んできたあの少女は、自分で気付いているのだろうか。」

「俺にしかイリヤが託してくれた願いを叶えられないのと同じく、奴を救える者だつて、この世に唯一人しか存在しないのだという事を。」

「トリス  
オン  
投影、開始」

奴の唇がぎこちなくその音を紡ぐ。

それは、己の中にあるスイッチを切り替えるための言葉。

その言葉に導かれるように右手と左手が一瞬眩く発光し、収束と同時に干将・莫耶が現れた。

奴は口元に凄絶な笑みを浮かべて、

「敵に塩を送る、なんてレベルを超えてるぜアンタ。良いのかよ、ただでさえお前の勝ち目は薄いつてのにさ」

「ならばそれを踏まえて、貴様を超えれば良いだけだ。腑抜けた敵を斬ったとあれば、イリヤに胸を張れないからな」

対して、俺も獰猛な笑みを返す。

「左手に干将。右手に莫耶。幾度となく戦場を駆け抜けてきた相棒は、頼もしい重さを手首に伝えてきた。」

俺と衛宮士郎、二人は合わせ鏡となって相對する。

ここからは奴も本気だ。

奴の願いの根幹は変わらない。イリヤを助けるためなら、奴は俺を躊躇い無く殺しに来るだろう。

そしてまた俺も、全力で奴を叩き潰さねばならない。

だがそのためには、まずこの『世界』が邪魔だ。

ここは完全に奴の領域であり、その中に存在している以上、先程の繰り返しになる。

故に、

「I am the bone of my sword  
体は剣で出来ている」

朗々とした声が世界に凜と響き渡る。

その呪文が、合図となった。

俺と奴は同時に踏み込み、両手の得物を一閃する。

鶴翼と鶴翼。純白と漆黒がぶつかり合い、緋色の閃光がけたましい金属音と共に撒き散らされる。

砕け散ったのは奴の剣。しかし、先程俺が折った剣とは比べ物にならないぐらいの『覚悟』が込められていた。

無論、剣としての質も段違いだ。

振り下ろした状態の干将を、返す刀で逆袈裟に跳ね上げる。

瞬間、再び真下で鈍色の光が瞬く。

俺は最低限の動きで真下から突き上げる剣群を躲し迎撃するが、その間に体勢を立て直した奴は再び干将・莫耶を投影し直し、弧を描くような軌道で振り下ろした。

真下と前方からの攻撃。

奴の表情が勝利を確信する。しかし、

「Steel is my body, and fire is my blood.  
血潮は鉄で、心は硝子」

苛烈極まる連撃を前に、一抹の焦燥すら感じさせない声で『詠唱』を紡いでいく。

そして俺は地面を、地面から幾重にも連なり伸びる剣を、魔力を纏わせた足による踏み込みでその全てを踏み碎き、前方へと勢いを止める事無く突貫する。

「ッ、ハの」

奴の瞳が驚愕に見開かれ、呻き声がもれる。

自らが放った攻撃が足止めにならなかつたのだから、その驚愕も無理も無かつた。

硬直は一瞬。

奴が既に干将・莫耶を走らせている以上、奴が俺の剣を迎撃出来る余地は無い。

振り下ろされる莫耶。

奴は同じく莫耶で受ける。硬質な金属音。

そのまま剣戟は2度、3度と続き、10度目で奴の剣が砕け散った。

「I have created over a thousand blades.  
幾たびの戦場を越えて不敗。  
Unknown to Death.  
ただの一度も敗走はなく  
Nor known to Life.  
ただの一度も理解されない。」

——流れ込んでくる。

不鮮明な映像。モノクロな写真。しかし、確かな『絶望』が打ち合う剣を通して流れ込んでくる。

間違いない。これは、奴の『記憶』だ。

俺と奴は、剣を交える事によって互いの記憶を見ていた。

いや、見るといふ表現は正しくない。

脳裏に刻み付けられている。

こちらの意思などもとより介する気は無いらしい。

大切な人の『死』。

喉を裂き血反吐と共に吐き出される『慟哭』。

遍くを憎悪する『怨嗟』。

その果てに残った『絶望』。

歪な願いが生んだ『狂気』。

それら全てが、濁流の如く俺を呑み込んだ。

気持ち悪い。吐き気がする。瞋恚の炎が血管全体に広がり己が内から灼き尽くされ崩壊する。

落ちていく落ちていく落ちていく。

底が無く無限に近い自由落下。

地の底に叩き付けられる快樂は許されず。

ただ独り、誰にも理解されず孤独のまま『地獄』を奔る。

それでも止める訳にはいかない。衛宮士郎は、己の命に代えてもイリヤを救わねばならないからだ。

「Have withstood pain to create many weapons.彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う」

挫けそうになる。その選択のおぞましさに。残酷さに。

だがそれでも、この呪文だけは絶やしてはならない。

奴の選択がどうあれ、俺の成す事には変わりはない。

「Yet, those hands will never hold anything.故に、生涯に意味はなく

剣と剣がぶつかり合う。

その度に流れ込んでくる記憶は鮮明になっていった。

俺に追随せんとするかのように剣を振るう奴の顔は、苦渋に歪められている。

もしかすると、奴も俺の記憶を見ているのかもしれない。

意味などない。ただ消費され、摩耗していく機械。

正義の味方などという名ばかりの英雄。

——その名は、『地獄』だ。

しかし。その地獄の中でようやく、俺は『答え』を得た。

この世界で、ある少女が教えてくれたのだ。

俺はイリヤが遺してくれたもの、イリヤが託してくれたもの全てを背負って進んでいく。

故に、

「So as I pray, unlimited blade works.その体は、きつと剣で出来ていた」

——その世界は、『願い』を象る。

幾重もの蒼炎が俺の周囲を走り、世界を塗り替えていく。

それは奴の世界すら例外ではない。

完成された絵画に筆を入れるように、俺の『世界』が奴の『世界』に孔あなを穿つ。

それは、白色の絵の具に墨汁を混ぜる事と同じだ。

既に完成された色セカイを、歪ませる。

蒼炎はやがて一つの象へと収斂し、結び付く。

奴が炎の勢いに目を細めた瞬間。

世界は生まれ変わり、顛界を果たした。

「これは」

奴が息を呑む気配が伝わる。

視界に横たわる荒涼とした大地と丘陵。

曇天の空には巨大で錆び付いた歯車がひしめき合っており、回る度に重く、くぐもった音を世界に響かせている。

だがそれよりも目を引くものがある。

——荒野に咲く無限の『剣』。

剣が荒野を埋め尽くしている様は、まるで墓標のようだった。ここが俺の行き着いた世界。

正義の味方を志した者の、成れの果て。

しかし、その世界は俺が『答え』を得る以前のものに過ぎない。

「雪、だど？」

——銀色の輝きは、羽のように世界へ落ちてきた。

しんしんと、音も無く降り注ぐ雪の結晶。

それは、冷たいのに暖かい。遠いのに懐かしい。手を伸ばせば届く

のに、触れてしまえば消えてなくなる。

その雪を、俺は覚えている。イリヤと初めて会った夜にも、これと同じような雪を見た。

そして、イリヤが命を落とした夜にも。絶望の中で、俺は同じ夜空と降り注ぐ雪を見た。

■ 始まりの輝きと、別れの輝き。

■ 俺はイリヤに出逢えた喜びと、そして失った悲しさ。

■ その全てを背負って進むと決めた俺は、終わりの無い地獄の果てに、この雪を己の胸に刻んだ。

■ イリヤは死んだ。しかし、それでも消えないものが確かにある。俺はそれを、絶対に無くさない。

「俺と貴様の出発点は同じだ。なら、この雪に見覚えがあるだろう」

「ああ、覚えている。忘れるはずがないだろう。この雪は俺とイリヤの始まりであり、そして終わりの象徴だ」

「お前は、イリヤの死を終わりだと捉えるのか？」

「そんな事、当たり前だろう」

「そうかもな。けど、俺はそうは思わない。イリヤが遺してくれたものが俺の中にこうして残っている限り、終わってなんかいないんだよ」

『雪』は際限なく降り続ける。

それはまるで、イリヤが背中を押しているかのようにだった。

俺は傍らから一本の剣を引き抜く。

雪に霞む、濡れたような刀身に自分の顔が映る。

—— 笑っていた。

まるで憑き物が全て落ちたかのように、その笑顔は穏やかだった。

「さて。これで条件は整ったな。貴様が無尽蔵だということなら、こちらは無限とプラスアルファ。

加減は要らん。己が有する最大の力で向かって来い。

その上で、俺は貴様の願いを凌駕しよう」

引き抜いた剣を突き付ける。

奴は獰猛な笑みを浮かべて、それに応じた。

「ああ、ならこっちも本当の姿で立ち向かうのが、礼儀つてものだろう」

瞬間。世界に炎が渦巻いた。

漆黒と憤怒が混ざり合ってグラデーションを描く。

緋色よりも赤い。それは触れるもの全てを骨すら残さず灼き尽くす獄炎に他ならない。

収斂していく炎。そして、その世界は顕現する。

——漆黒と赤。

それが、この世界に存在する色の全てだった。

空は灰色。噴煙の如く厚い暗雲が、遍く光を遮っていた。

荒涼とした大地は炭のように黒く染め上げられている。

漆黒の荒野に咲く剣。

その剣もまた闇を固めたかの如き漆黒であり、刀身が絡み付く蛇のように燃え盛る『炎』を纏っていた。

——その世界の名は、『地獄』。

奴は傍らにあった剣を引き抜いた。

炎を纏う漆黒の剣。

それは、己すらも灼き尽くす地獄の業火に他ならない。

現に、奴の身体は燃えていた。

剣が纏う炎が移ったかのように、奴の身体は獄炎に包まれている。

己の身を贅にして、奴は俺の前に立っていた。

「『炎』と『雪』、か。本当に真逆だな。俺とお前は」

苦笑しながら、奴は笑った。それに合わせて身体に纏う炎が微かに揺れる。

片や、銀雪舞う荒野。

片や、獄炎燻る焦土。

白の世界と黒の世界がせめぎ合う様は、上空から見れば太極図のよ  
うに映ったに違いない。

世界を二分する陰と陽。

それは、干将・莫耶を主に用いる俺たちにとって不思議な一致だっ  
た。

俺は奴を、そして越えるべき世界を見据えて剣を構える。

冷たい。冴え凍るような冷たさ。しかし今はその冷たさが心地良  
良く、同時に綺麗だと思った。

俺が剣を構えたのと同時に、奴も微かに腰を落とす。

身に纏う炎が峻烈さを増した、その瞬間。

「——来い」

「——言われずとも」

交わした言葉は極僅か。剣に全ての感情を傾けて疾駆する。

同時に両者は丘から剣を射出。

剣は空を駆け、銃弾の如く戦場を裂く。

空中を飛び交う剣と共に、俺達は剣を交えた。

微かに霜がかかった剣と炎を纏った剣が交錯する。

剣戟は二撃、三撃と連なっていく度に苛烈さを増していく。

奴の斬撃は重かった。

剣で受ける度に骨の髄まで衝撃が走り、剣が纏う炎によって身体の  
表面を焼かれる。

だが、それは諸刃の剣に他ならない。  
現に奴の身体は、奴自身が纏う炎で灼かれている。  
文字通り奴は己の身体を犠牲にしているのだ。

「う、おおおおおおおおおおお!!!」

裂帛を迸らせ、奴の炎剣を押し返さんと猛然と剣を薙ぐ。

だが奴は「息で俺の剣を跳ね上げ、胴辺り目掛けて鋭い上段蹴りを叩き込んできた。

呼吸が詰まる。血塊が喉奥からせり上がってくる。

俺は何とか倒れる事だけは拒否し踏みとどまったが、負った傷は無視できるものではない。

口内に流れ込んできた血を飲み込み、俺は数歩後ろに後退しながら剣を数本、奴に向かって射出する。

「そんなもの」

放たれた剣は、炎剣が全て喰らい尽くした。

奴の身体には破片の一つたりとも届いてはいない。

だが、それで良い。元よりあの程度の攻撃が届くなどという甘い考えは持ち合わせていなかった。

目的は、もっと別にある。

「くっ?」

丘から射出していた幾本の剣の軌道を無理矢理ねじ曲げる。

さつきまでは奴が射出してきた剣を相殺するように放っていたが、その軌道を下に捻じ曲げた。

つまり、剣から衛宮士郎本体へと狙いを変えたのだ。

だが当然そんな事をすれば、俺を狙って放たれていた奴の剣が何の壁も無しに殺到する。

しかし、何ら問題は無い。

あの程度の剣の雨を越えられなくて、何が英霊か。

狼狽の気配を見せる奴に向かい疾駆する。

俺目がけて飛翔する劍群。その全てを両手に構えた剣で打ち砕き、一息で奴の懐に潜り込む。

衛宮士郎は自身に向かつて射出された剣を相殺するのに気を取られ、俺の速度に反応しきれていない。

その間隙を突くように、俺は霞がかつた剣を奴に向かつてふりおろす。

「っ、甘いんだよ!!」

奴が身に纏う業火が、その勢いを増す。

それは爆炎となって俺の身体を呑み込んだ。

爆弾が至近距離で爆発したようなものだ。俺の身体は灼熱の如き爆炎と爆風に叩かれ、膝から崩れ落ちる。

「甘いのは、貴様の方だ」

直後。俺は炎の中に自ら身を投げ、右手に構えた剣を衛宮士郎に向かつて袈裟に一閃する。

「が、あ」

炎の中でも変わらぬ霞を纏った刀身は深々と奴の身体に沈み込み、肩口から脇腹へと抜けていった。

傷口から噴き出した泥のような血が炎に触れて、ジュツと一瞬で蒸発する。

返す刀で、再び剣を振るった。

しかし衛宮士郎は咄嗟に後方へと跳び、同時に炎剣を俺に向かつて射出する。

地に手を突き蜻蛉を切つて剣を避け、着地と同時に後方へと大きく跳躍した。

最初と同じ立ち位置に戻ったのだ

「は、つが 炎に身を投げるとか、お前 正気かよ」

奴は傷口を『泥』で塞ぎながら、苦悶の表情を浮かべてそう言った。

「ふん 自分自身でもどうかと思つたさ。」

だが、言つただろう。覚悟の無い剣では軽い。

貴様がその業火を背負うと決めた以上、私もそれ相応の覚悟で挑むのが礼儀というものだ」

そう答えた俺も地に片膝を突いていた。

肌は無惨に焼けただれ、一部は炭化している。

炎は身体の内部まで及んでおり、出血こそ微量なもの傷の度合いとしては俺の方が多いくらいだ。

——だが、それでも未だ足りない。

奴の身体は今や殆ど『泥』で構成されている。

一太刀浴びせたぐらいでは直ぐに再生してしまふだろう。

しかし致命傷となるような、もしくは即死となるような傷を与えればその限りではない。

無尽蔵の魔力を有してしようと、衛宮士郎の命そのものは人間のものに準拠している。

バーサーカーのように命のストックがある訳でも無い。

一つの命しか有していないのなら、その一つの命を削ってしまえば良いだけだ。

当然、口で言う程簡単な話では無いが。

「壊れてるって意味では、アンタも大概だな」

「そうだな。だが、だからこそ私達はこんな地獄でさえ乗り越えんとするのだろうか」

「違うない。こんな地獄、壊れてなくちゃ歩けないからな」

立ち上がったのは同じタイミングだった。

軽口を叩き合いながらも、次の一手を模索する。

刹那の思考。斬る事が目的じゃない。

欲するのは奴の急所を確実に突くような、そんな一撃だ。

踏み込む前に、深呼吸をして酸素を体内に送り込む。

ズギン、と肺が軋みを上げた。

焼かれた肺が、悲鳴を上げているのだ。

「ッ———!!!」

無音の裂帛。地を蹴り疾駆する俺を、奴は射出した炎剣で食い止めようとする。

先程の捨て身の斬撃を警戒しているのだろう。

不用意に近付こうとせず外掘りから徐々に埋めていく気だ。

今度は数が多い。完全には避けられないだろう。

——それを承知で、速度を緩めず疾駆する。

回避行動は最小限に。脚が滞れば、みすみす奴の形成した剣の檻に

囚われるだけだ。

肌を炎剣が掠めていく。

奴に近付く度に身体が斬り裂かれ、血飛沫が舞った。

だが、それでも脚だけは止めてはならない。

身体を徐々に齧り取られているかのような、灼熱じみた激痛を意識

から排斥して———

「ぐっ、っ、ん」

身体に、重い衝撃が三度伝播する。

左脇腹、右足、そして右胸に、奴の射出した剣が深々と突き刺さっていた。

今度こそ、脚が止まりかける。

灼熱の刃が身体の外と内を焼いた。

視界が霞む。

糸が切れたように、手足が力を失う。

折れる。決して止まらぬと決意した身体が、折れる。

「が、あ、あ、つ、ず」

目の前が真っ黒に染まる。

今のは間違いなく、致命傷足り得た。

身体に突き刺さった三振りの剣は、俺の命を容赦なく削り取って

いった。

零れ落ちる。命が、身体を動かす熱が。

灼熱を通り越して身体は冷たく、何も無い闇に落下していくかのよ

うな孤独感と断絶感が心臓を握りしめる。

それが、何もかも零れ落ちた結果だった。

崩れ落ちる。何も、誰の約束も果たせぬまま、終わる。

意識が保てない。凍り付いた身体は、無様に倒れる事しか出来な

かった。

「？」

ふと、首筋に暖かい感覚が走る。

『雪』だ。

白い雪は冷たいはずなのに暖かい。

凍り付いた身体を溶かすかのように、その『熱』は全身を駆け巡っ

ていった。

止まりかけていた心臓が動き出す。

沈んでいた意識は徐々に浮上し、漆黒に覆われていた視界に純白の光が差した。

たった一雫の雪の結晶。

ちっぽけなその熱が俺の命を拾い上げ、繋ぎ止めてくれた。

懐かしい感覚。

狂おしいほど愛しいその温度に、胸をつかれる。

——立って、と言われていている気がした。

幻聴だろうか。いや、幻聴だろうが幻想だろうが構わない。

元よりこの身体はその幻想を成し遂げるためのモノ。

幻想を結び、カタチを与えるのは俺の役目だ。

「トレース、開始」

持てる意志力全てを総動員し、一つの幻想を結ぶ。

右手に現れたのは紅の呪槍だった。

茨のような意匠を施した、身の丈程もある紅の長槍。

——刺し穿つ死棘の槍。

一刺しで心臓を穿ち、命を奪う呪いの槍だ。

「なにっ」

地に倒れ伏す直前。突如体勢を立て直し、紅の呪槍を中段に構えた俺を見て、奴が目を剥いた。

そのまま俺は地を蹴り、槍を引き絞った。

狙いは心臓。心臓さえ貫いてしまえば、衛宮士郎は再生する間もなく死に到るだろう。

だが、奴とてそう簡単に心臓を穿たせてはくれない。

即座に炎剣を跳ね上げ、槍を迎撃しようとする。

俺が槍を放つ前に打ち落とす気だ。

それを確認し、心臓に狙いを定めて一息に突き入れる。

放たれた槍は紅の雷の如く奴の心臓へと走る。

だが、槍は奴の炎剣によつて阻まれた。炎剣は真下から突き上げるように跳ね上げられ、槍の穂先を捉えた。

紅の槍が砕け散る。

槍の穂先から柄頭まで、何もかも。

これで終わり。俺の身体は虚空を泳ぎ――

◇？

「っ、？」

その、砕いた時のあまりの手応えの無さに衛宮士郎は怪訝な表情を浮かべた？

あたかも、薄い陶器でも砕いたかのよう。

いくら剣以外は投影の質が落ちるとは言え、今の脆弱に過ぎる槍は一体何だ？

『俺』でさえもう少しマトモなものを作れるだろう。

奴の投影の精度が俺のものを遥かに上回っているからこそ、その疑問は顕著に浮上する。

背中を冷たいものが伝い落ちていく。

何だ、一体何が起きている――？

「お、まえ」

今の攻撃で全てを使い果たしたのか。

奴の身体が傾き、力無く虚空を泳いだ。

そして俺の真横を通過するように倒れ込み――

「トレース、  
投影、開始」

「っ!？」

虚空を力無く泳いでいたはずの身体が、流れるように俺の視界から消えていった。

俺は剣を振り抜いた状態で止まっている。

迎撃は不可能。剣の射出も間に合わない。

——伽藍堂、だった。

あれは外側だけを刺し穿つ死棘の槍に似せたただの伽藍堂、つまり張りぼてだったのだ。

真の本命は、別に——

◇？

「トレス投影、オン開始」

衛宮士郎の死角、側面を回り込むように地を蹴りながら、幾度となく繰り返してきた音を詠唱した。

右手に莫耶、そして左手に干将。

しかし、通常の干将・莫耶とは少し異なる。

オーバーエッジ。干将と莫耶の刀身を巨大な羽根を思わせる形状へと変化させ、巨大化させる技だ。

——刀身は微かに雪で濡れ、刀身を美しく見せていた。

俺は一对の巨大な翼を大上段に構え、頭上から折り重ねるように斬り下した。

完全に死角からの攻撃。

奴はガードも回避も叶わず、まともにオーバーエッジによる一撃を受けた。

「い」

だが、まだ終わらない。

奴を蹴り飛ばして干将と莫耶を身体から引き抜き、宙に浮いた奴を再び斬下ろす。

地面に叩き付けてから再び宙に浮かせるように蹴り上げ、今度は横薙ぎに双剣を走らせた。

縦横無尽に漆黒と純白の軌跡が走る。

「お、おおおおおおおおおおお!!!」

裂帛を走らせて、最後に奴の胸を干将で貫いた。

元々、限界の中での投影だったからだろう。

莫耶は途中で折れて砕けた。

干将にもひびが入っていて、恐らくあと一合でもマトモに剣戟を交わせばこれも同じ末路を辿る事になる。

奴の胸に突き刺した干将から血が滲み出していた。

心臓を貫かれ、加えて身体も七割を失っている。

しかし――

「お・われ、ない」

「っ、」

それでも、奴は息絶える事は無かった。

斬り飛ばした傷から『泥』の手が生え、それが拳の形を取ると俺の事を殴り飛ばした。

――甘かった。

奴の身体は一度完全に融解される形で死に絶え、汚泥によって再構成されたものだと言った。

つまり、それは心臓も例外では無い。

心臓を貫いただけでは、まだ――

「ぐっ」

吹き飛ばされ、荒野に叩き付けられる。

意識が再び落下しそうになるのを何とか耐え、起き上がろうと手を

突き――失敗した。

あたかも関節の全てが千切れたかの如く、身体は動かない。

魔力はまだ残っている。

しかし、肝心の身体が動かないのでは意味が無い。

「ま、だ、だ。まだ、終わって、ない。」

失われた身体は、既に半分まで修復されていた。

ぼ、ぼごと傷口からあぶくを吐き出しながら、『泥』は奴を生かそうと増殖を続けている。

衛宮士郎は痙攣する身体を無理やり起こし、地面に倒れ伏している俺を睥睨した。

「っ」

呻吟を零しながらそれでも立ち上がろうと足掻く。

しかしあたかも地面に縫い付けられているかの如く、身体は動いてはくれなかった。

全身を修復し終えたのか。

奴が炎剣を携え、俺に向かって歩んでくるのが見えた。

炎渦巻く焦土から、銀雪舞う荒野へと。

奴は心象風景の境界線を踏み越えて、俺を始末しようとして来る。

「……が、お前のセカイか」

立ち止まって、奴は眩いた。

空から降り注ぐ雪を見上げ、手を伸ばす。  
衛宮士郎の伸ばした手に雪が触れた。

雪は直ぐに溶け、夢みたいに消えていく。

その光景を、奴はどこか寂しそうに見送っていた。

「優しいな、この世界は。懐かしくて、胸が痛くなる」

そう言った奴の声は、酷く穏やかだった。

だからだろう。立ち上がるまでの時間稼ぎだとか、さっきまで考えていた事を全て捨てて、俺は奴と言葉を交わそうとした。

「お前の世界は、どうなんだ」

「見れば分かるだろ。あそこは、文字通りの『地獄』だ。立っているだけで、無数の剣に貫かれているかのような痛みが走る。拷問だよ、本当だよ」

「それが、代償なのか。世界を犠牲にし、イリヤを救おうとしたお前の」

「ああ。奪ったからには責任を果たさなくてはならない。当たり前前の事だ。だが、この責苦の果てにイリヤがいる。だから、こんな所で屈する訳にはいかない」

いつまでも、衛宮士郎は雪を見上げていた。

——壊れている。

とうの昔に、衛宮士郎は壊れている。聖杯を使ってイリヤを救おうとし、結果的に世界を崩壊させた。

それが意図的なものでは無いにしても、罪は残る。

全世界の人間の命。それはかつて正義の味方を目指した男が背負うには、あまりにも酷なものだ。

しかし、だからこそ。

衛宮士郎はせめて、イリヤだけでも救おうとした。

「俺は、何もかも失った。それを嘆き悲しむ事が俺に許されるはずがない事ぐらい、理解もしている。」

「けど、それでも——どんな形だっでもいい。」

「イリヤを救うために全てを滅ぼした。なら、せめてイリヤを救って幸せにしなければならぬ。それが俺の、責務なんだよ」

「奴は空から視線を外して俺へと向けた。」

「炎剣の柄を両手で握りしめ、両手で掲げる。」

「私の敗北か。彼女には謝らなくてはならないな。衛宮士郎を救えなかった、と」

「つ、何の話だ」

「いや、こちらの話だ。最も、貴様がイリヤを生き返らせるというのなら、その時に分かるだろう。精々、気長に待つがいい。その時にイリヤを慰めるのは、どうせ貴様の役目だ」

奴は俺の言葉に怪訝な表情を浮かべ、直ぐに表情を引き戻して炎剣を構え直した。

——心残りがあるとすればなら。

それは、『約束』を果たせなくなってしまう事だろう。色んな人達と色んな約束を交わした。

イリヤ達とは、料理を教える約束を。

遠坂凛とは、衛宮士郎をぶん殴って止める約束を。

この世界のイリヤとは、衛宮士郎を救う約束を。

——そして、大切な人とは幸せになる約束を。

それは忘れられない。忘れちゃいけない、約束だった。

しかし、それらの約束が叶えられる事はもう無い。  
俺はここで消滅し、交わした約束も消え去るだろう。  
そしていつかは相手からも忘れられて。

風化した思い出だけが、残るのだ。

視線の先で、炎剣が頭上まで振り上げられようとしているのが見え  
た。

自分でも驚くほど胸中は穏やかだった。

首へと落ちてくる炎剣が、どこか遠くに感じる。

最後に。俺は、すまなかった、と。

静かに、約束を交わした誰かに向かって、心の中でそう呟いた。

「——ううん。謝る必要なんて無いわ。」

だって、貴方は充分に約束を果たそうと頑張ってくれたもの」

声が、聞こえた。幾度となく求め続けた、愛しい声が。

炎剣が奴の手から落ちた。

それに引き寄せられるように奴は膝から崩れ落ちた。

衛宮士郎の瞳は、ある一点のみに注がれていた。

雪の中を歩いてくる1人の少女。

純銀を梳ったかのような銀色の髪。白く透き通った、処女雪を思わ  
せる透き通った肌。

見る者を魅了する、神秘的な紅の瞳。

少女は華奢な肢体を濃い紫色のコートに包み、同色の底の深そうな

ブーツで荒野を踏み締めながらこちらに歩いてくる。

永遠にも、一瞬にも感じられる静止した時の中に居た。

時間が止まっていたのは、奴だけじゃない。

俺もだ。その光景に目を奪われ、動けなかった。

——雪の中を歩いてくるその姿は、俺とイリヤが出会った時に見た光景と、酷似していたのだ。

「あ、うういり、や？」

「——ようやく、わたしを見てくれた。もう、レディを待たせるだなんて、シロウはダメね」

口では文句を言いながら、少女は衛宮士郎に向かって綻ぶような笑顔を見ていた。

——ようやく、見てくれた。

その言葉に、どれ程の感情が込められていた事か。

少女は俺達に言っていた。

衛宮士郎は、少女の存在を認識出来ない、と。

ついぞその理由が語られる事は無かったが、今は少女の声も姿も認識出来ているようだった。

しかし、何故——？

そんな俺の疑問を察したのか、少女はこちらに紅の瞳を向けて、訥々と口を開いた。

「言ったでしょう、わたしは固有結界が見ている『夢』に過ぎないって。

わたしは、イリヤがシロウの心の中に残した夢。

つまり、『願い』なの。イリヤがシロウの心の中に託した、シロウに幸せになって欲しいという願いの具現。

シロウは、イリヤの『願い』を無くした訳じゃない。

少し、忘れてただけ。本当に無くしたのなら、わたしという幻想が存在出来るはずがないもの」

「なるほど、合点がいった」

少女は、衛宮士郎に託されたイリヤの夢なのだという。奴はそれを忘れてしまった。

しかし忘れるというのには無くすという事では無い。忘れて取り出せなくなったとしても、それは認識されなくなっただけではない。永遠に残り続ける。

——それが、彼女の正体だった。

イリヤが死の間際、最期に残した願い。

衛宮士郎を幸せにするという願いの、具現。

「けど、それをアナタは取り戻してくれた」

「私が、だと？私は何も」

「ううん、アナタは気付いているはずよ。」

アナタの世界に降り注ぐこの雪も、イリヤという少女が残してくれた願いだって。

アナタはその雪を纏った剣で、シロウを斬った。

それが引き金となったんだと思う。

——願いは、ようやく届いた。

シロウはようやく、わたしという願いを見つけてくれた」

本当に嬉しそうに、少女は笑う。

その笑顔があまりにも華やかで、声が、詰まった。

「イリヤ、なのか。けど、なんで。どうして、イリヤが」

「うん。ずっと、わたしはシロウの傍に居たんだよ？けどシロウがあんまりにも気付かないから、迎えに来ちゃった」

「え、うあ」

衛宮士郎の瞳から、滂沱の涙が溢れる。

それを見た少女はくすりと笑うと、衛宮士郎の元へゆつくりと歩いていった。

衛宮士郎は呆然と、目の前の少女を見詰めている。

少女は少し背伸びをして、膝立ちになっていた衛宮士郎の頭にそつと、自身の右手を乗せた。

「ありがとう、シロウ。イリヤを助けようとしてくれた事、すつごく嬉しかった。本当に、頑張ったね」

そして左手を背中に回し、自身の胸へと抱き寄せた。

「あたかも、泣いている弟を慰めるお姉ちゃんみたいに。優しく頭を撫でて抱き寄せながら、労いの言葉をかける。」

「だから、もう休もう？」

「あんまり頑張りが過ぎると、シロウ疲れちゃうよ？」

「けど、俺はイリヤを、救わなきゃじゃないと、何も、何も」

「ううん、そんな事無いよ。イリヤは、充分に救われてる。」

シロウがここに居て、イリヤの名前を呼んでくれるだけで、それだけで——こんなにも、イリヤは幸せなんだもん。だから、ね？」

消えていく。

炎が。漆黒の焦土が。奴の固有結界が。その全てが消えて、雪が降る荒野へと変遷を遂げた。

気付けば、衛宮士郎の姿は元の姿に戻っていた。

泥に侵食され黒く染まっていた身体は、その呪いから解き放たれた

ように元の色を取り戻していく。

明るい色の髪。琥珀色の瞳。それらが、全て。

——戻ったのだ。

かつての姿に。共に笑い合い、共に悲しみ、共に互いの未来を信じ合っていた、あの頃の姿に。

「良い、のかな。

俺、沢山のを奪っちゃったんだ。なのに、ここで立ち止まっちゃっても、良いのかな——？」

「シロウは、もう充分に苦しんだよ。そしてこれからも、きっとその罪に苦しめられる。

だけど、安心して。今度はわたしが、一緒に歩いてあげる。

例えどんなものがシロウの事を裁こうとしたとしても、絶対に手を離さない。もう独りになんかさせない。

——好きな子のことを守るのは、当たり前なんだから」

少女は言う。少年は今まで苦しみ続けた。

これからも、自分がおかした罪を贖わなくてはならない。

——けど、それは2人で一緒に。

今度は自分が、少年を救う番なのだ。

「じゃあ行こっか、シロウ」

「ああ。俺も、今度こそイリヤを守ってみせる。この手を、絶対に離したりなんかしない」

2人は手を取りながら、どこか遠くへ歩いていく。

舞い散る雪の中で、笑いながら。

——なんて懐かしい笑顔なんだろう。

かつて見ていた光景。ダイヤのように輝いていた、硝子の如き日常

の断片がそこにあつた。

2人の姿は雪に溶けて、徐々に見えなくなっていく。

その背中を。俺はずっと、見えなくなるまで見詰めていた。

2人は何処に向かつているのか。それは分からない。

だが、心配は不要だろう。

イリヤの言葉通り。どんな困難が立ちふさがろうとも、きっと2人は乗り越えてみせるのだ。

「最後に、君との『約束』は果たせたみたいで良かった」

仰向けに倒れながら、降り注ぐ雪を見詰めた。

頬に当たる雪が冷たい。

柔らかい雪の感触が気持ちいい。

初めて、この雪を見た時の事を思い出す。

あれは、クリスマスの夜だった。

聖なる夜。あたかも雪が『奇跡』を運んできたかのように、その少女は俺の目の前に現れたのだ。

思い出す。こういうのを走馬灯、と言うのだろうか。

イリヤと過ごし交わした言葉が、脳裏を駆け抜けていく。

「あ、ようやく出てきた。もう、レディをこんな雪の中で待たせるなんてダメなんだからね」

『それじゃあ、改めて。』

こんばんわ、お兄ちゃん。わたしはイリヤ。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

『うん、お兄ちゃんはお料理上手なんだねっ！』

『いい、預きます』

『ん、確かにセラの作る料理の方が上品で洗練されてはいるけど――』

「でもこの料理も暖かくて、凄く美味しい」

『しろ、うしろ、うしろ、シロウ！』

「じゃあまたね、シロウ。今度会う時はお互い敵同士だ」

から。次に会った時は、出来るだけ苦しまな。よう一瞬で殺してあげ  
る。』

『またねって、言ったのに』

『ちゃんと名前、言えるようになったんだよ。もうお兄ちゃんに笑わ  
れないように、毎日毎日、頑張って練習したんだから』

『あの時は上手く出来なかったから、皿洗いも出来るように練習した  
んだから。何枚も割っちゃったりしてセラを困らせちゃったけど  
もうお皿、割らないように、なったんだよ？』

『イリヤ、頑張ったんだよ。お兄ちゃんに褒めてもらえるように、頑  
張ったん、だから。』

『ひとりぼっちは寂しい！ってわたしに教えてくれのは、シロウなん  
だよ？なのにシロウはわたしを、キリツグみたいにひとりぼっちにす  
るの？』

『そんなのやだ、やだよ。』

『シロウ？』

『どうして、あんな事したの？』

『わたしは、キリツグとシロウを殺すために来たんだよ？そんなわた  
しのために、シロウは戦うの。』

『——シロウの、ばか』

『大切な、もの。』

『わたしね。今の生活がとても楽しいの。変だよ、本来ならリンも  
セイバーも。そしてシロウも、殺さなくちゃいけない敵なのに』

『——なら、ダメだよ。わたしはシロウの事が好きだもん。  
好きな子を悲しませるなんて、出来ないよ』

『わたしじゃ、ダメだよ。』

『シロウが幸せに、なれない』

『わたしも、好き。』

シロウの事が、大好き。こんな気持ちになるのは初めてで、良く、分  
からないけど。』

『シロウと一緒に、居たい。シロウと一緒に、暮らしたい。でも、ダメ  
それをしたら、わたし、わたし、わたしは——』

『大好きだよ、シロウ』

『デートが、したいな』

『恋人同士二人つきりでどこかに遊びに行く事をね、その、デートって言うんだって。』

わ、わたしとシロウは恋人同士だから、デートがしたい。お店で買い物をして、美味しいご飯を食べて、そして——他愛のない話をしながら、シロウと一緒にこの家に帰ってくるの』

『——どう、かな?』

『——行つてらっしゃい、シロウ』

『ほら。泣いちゃダメ、だよ。シロウはわたしを甘えん坊さんだつて言つたけど、シロウは泣き虫さんだね』

『ううん。もう、わたしは死んじやつたの。』

わたしが未だこうして存在しているのは、昨日と今日シロウがわたしにくれた魔力のおかげなんだから』

『あはは。手が届かなくて、頭を撫でる事が出来ないや』

『シロウが好き。シロウの事を考えているだけで心が暖かくなつて、走り出したくなつちやうぐらいシロウの事が好き。シロウに会うまで、わたしの心は凍つたままだつた。だけどシロウが凍つた心を優しく溶かして、止まった時間を動かしてくれたから——わたしは、愛情を知る事が出来たんだよ?』

『ごめんね。こんな腕じゃもう、泣いてるシロウを抱きしめる事も、出来ないや』

『シロウは、わたしに愛をくれたよ?』

『少なくともわたしはシロウに救われた』

『——わたしはシロウからたくさんの幸せを貰つた。』

だからもう、泣く必要なんてないの』

『うん。わたしも、まだシロウとしたい事いっぱいある。どこかへ出かけたなり、美味しいものを食べたり、キス、したり。色んなこと、したい』

『最期に、キスがしたいな』

『わたしも、離れたくないや』

「シロウ、大好き。」

「今までシロウと一緒にいられて、本当に、幸せだった。だからシロウも。」

「幸せに、なるんだよ。」

「死の間際。俺にその夢を託して、イリヤは行ってしまった。どこか、俺の手の届かない場所に。」

「俺はイリヤを、幸せに出来たのかな」

「誰に聞かせるでも無く、呟いた。」

「なんて、綺麗な雪なんだろう。」

「降り注ぐ雪を見て、そう思った。」

「ああ、ここで旅を終えるのも悪くは無い。」

「イリヤと同じように、ここで。」

「俺はそう思い、目を閉じた。」

「魔力が尽きるまで幾ばくかの猶予がある。」

「だから、このまま——」

「こんばんわ、お兄ちゃん」

「時間が止まった。いや、いつそ本当に止まって欲しかった。」

「緩慢な挙動で、声のした方に顔を向ける。」

「それは、如何なる奇跡か。」

「視線の先に、1人の少女が立っていた。」

「胸が苦しい。その姿を見た瞬間、あらゆる感情が俺の胸に押し寄せ」

「て来た。」

「間違えるはずが無い。」

目の前に居る少女は正真正銘、俺が愛した少女だった。

「君は？」

初めて少女と会った夜と、同じ質問をする。

この世界に降る雪がああの時の雪ならば、そうすべきだと思ったのだ。

俺の質問に少女はクスリと笑みを浮かべて、

「それじゃあ、改めて。わたしはイリヤ。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

———また、会えたね。シロウ」

始まりを告げた雪の中。

成長した少年と在りし日から少しも変わらない少女は、悠久の時を経て再会を果たした。

———雪が降っている。

静かに、音も無く、埋葬されるように。

仰向けに寝転んでいた身体を起こして立ち上がる。

静寂に包まれた純白の中で、俺達は向き合っていた。

お互いの距離は、5 m程。一歩踏み込み腕を伸ばせばすぐ手が届く距離なのに、出来なかった。

イリヤは何も言わず、穏やかな表情で俺を見ている。

ただ何を話すでもなくただお互いを見つめう。

イリヤともし、再び会えたなら。

そんな益体もない想像をして、もし会えたらどんな話をするか、という気恥しい事を考えたりしていた事もあった。しかし、いざ対面してみると分からなくなる。

どう接すれば良いのか、頭が回らない。

困惑している俺に対して、彼女は笑顔だった。

俺に再び会えた事が心の底から、本当に嬉しいとでも言いたげな表情に胸が詰まる。

しかし、情けない事に俺は言葉に困っていた。

もつと何か話したい。

そう思っているのに、引き締められた唇が言葉を紡ぐ事は無かった。

「大きくなったね、シロウ」

そんな時だった。不意に、イリヤがそんな事を口にしたのは。

「昔は『男なんだからもう少し身長が欲しい』って言ってたけど、本当に大きくなっちゃった。

——わたし、そんなに長い間、シロウを独りぼっちにしちやっってたんだ」

「つ、そんな事——」

「そんなの、俺だって同じだ。

俺はイリヤをずっと独りぼっちにしてしまっていた。

だからそんな事を気にする必要なんて、無いんだ。

「イリヤは、変わらないな」

イリヤに謝って欲しくなんか無くて、俺は何とか言葉を捻り出した。過去の悔いるのは俺だけでいい。

イリヤまでその後悔を背負う必要なんて、ない。

「変、かな？」

「まさか。少し、安心した」

安心した、というのは事実だった。悠久の時を経ても、イリヤは変わらずそのままの姿で居てくれたのだ。

その事が嬉しくないはずが無い。

「？」——— けど、それはイリヤも同じはずだ。

イリヤと違って、俺は変わってしまった。

かつての面影など殆ど残っていない。

そんな俺の姿を見たら、イリヤがどう思うか。

そんなの、誰にだって分かる事だ。

「えへへ。でも、良かった。

凄く大きくなっちゃったから少し不安だったけど、シロウはやっぱりシロウだね」

「え」

「うん、安心した。性格も口調も体格も変わっちゃったけど、根元の部分は全然変わってないもの。

優しく、真っ直ぐで。

——— それにわたしの事、ずっと忘れずに想ってくれてた」

——— その事が、すごく嬉しい。

イリヤは大切なものを抱くように胸の前で両手を握りしめ、頬を上気させてそう言った。

胸が、痛い。張り裂けるような胸の痛みが鼓動を止める。

気付けば血が滲む程、胸から込み上げた激情に耐えるように拳を握

りしめていた。

もつと、楽しませてやりたかった。

今までアインツベルンの人形として縛られていたイリヤをその呪縛から解放して、幸せにしてやりたかった。

イリヤは幸せだったと言うけれど。

本当はもつともつと、したい事があつたはずなのだから。

——今すぐ抱き締めたい。

抱き締めて、キスをして、名前を呼びたい。

だがそれは叶わない。

目の前に居るイリヤには、触れられない。

世界に降り注ぐ雪は途切れることなく降り注いでいる。

——だが、降り続けた雪が積もる事は無い。

荒野に触れた瞬間、純白の結晶は溶けるように消えてしまう。

触れれば消えてしまう泡沫の『夢』。

彼女の正体は、その夢が描いた奇跡に過ぎないのだ。

この雪はあの日と同じ雪。

「イリヤ、俺は」

謝らなくてはならない。

イリヤを守るって約束した。

だというのに、俺はイリヤを守れなかったのだから。

「ね、シロウ。わたし達が初めて会った時の事、覚えてる？」

不意に、イリヤは楽しげな声でそう言った。

質問の意図は掴めなかった。

しかし、答えならばもう決まっている。

覚えていないはずが無い。

あの出会いを、忘れられるはずが無い。

「——ああ、覚えてる。クリスマスの夜に急にイリヤが訪ねてきて、俺の事をお兄ちゃんだなんて呼ぶから驚いたよ。どこを見ても外国人の女の子だったからな。お兄ちゃん、等と言われて困惑したのも無理はなからう」

「わ、わたしだって驚いたもん。決して相容れない敵同士としてシロウの家に行ったのに、シロウだったらのんきに『飯食つてくか?』なんて言うんだから。畏かどうか疑ったけど、そんな様子も全く無いし。あの時はシロウの危機感の無さに、ほんつとうに呆れてたんだから！」

「それを言うなら敵同士だった俺の、仮にも工房を訪れた君もだろう？敵の本拠地に正面からしかけるなんて、それこそ危機感が無いのでは?」

「ふうんだ、シロウが何かしてきたとしてもわたしが勝ってたんだから。幾ら敵の魔術工房の中だからって、あの時のシロウみたいなポンコツ魔術師に負けるほどわたし弱くないもん」

「手厳しいな、イリヤは。あんなにも美味しそうに俺の作った料理を頬張っていたのに。今でも忘れられないな。あの時のイリヤは、まるでリスみたいに料理を頬張ってた」

「〜っ!?ひ、人をはしたないみたいと言わないで!」

「はしたないだなんて思わないさ。ただ、あの時のイリヤは凄く可愛かった。料理を作ったこちらとしては、冥利に尽きたよ」

あの時の事を思い出して、笑みが零れる。

まだお互いを何も知らなかった頃の不器用なやり取り。しかし、分からないなりにこれだけは感じていた。この子は決して悪い子じゃない、と。それだけは分かっていた。

「今は？」

「む？」

「今のわたしは、可愛くないの？」

「」

それは、不意打ちだった。

ガツン、と頭をハンマーで殴られたかのような衝撃が走る。

今はその、反則だと思う。イリヤは不満そうな表情を浮かべつつ僅かに頬を赤く上気させ、俺の顔を覗き込んでいた。

先程とは違う意味で心臓が締め付けられる。

呼吸を忘れ、俺はイリヤの瞳の神秘的な輝きに魅入られた。

深い紅の輝き。宝石の如き大粒はあまりにも美しく、見ているだけでぐらりと脳が揺さぶられるような気がした。

「シロウ」

「あ、ああ、すまない、少し自失した」

目を逸らしながら、辛うじて言葉を紡ぐ。

そんな俺の様子にイリヤは不満そうな表情を収めてからかうような笑みを浮かべた。

「ふふ、シロウったら顔が真っ赤だよ？」

「そ、それは君だって同じだ。君の肌は白いからな、余計に赤みが目立っているぞ?」

むむむ、とお互い無言の膠着。しかしそれも一瞬の事で、どちらからとも無く俺達は笑みを零した。

——ああ、本当に。

あの頃に戻ったみたいだと思った。

イリヤが俺をからかい、稀に俺の発言に対しイリヤが赤面したりして、最後は2人笑い合う。

当たり前だと思っていた日常の断片。例え夢幻だったとしても、今はその奇跡に浸っていたかった。

この固有結界<sup>セカイ</sup>は俺の魔力で編まれている。

故に、こうして居られる時間は俺の魔力が切れるまでの後残り僅かな時間だけだ。

その果てに、イリヤと終わりを迎えられるなら——それは決して、悪くない事だと思う。

「イリヤ」

「なに?」

「君に、伝えなくてはならない事があるんだ」

——けど、その前に。消えてしまう前に、俺はイリヤに伝えなくてはならない事がある。

イリヤは俺のただならぬ様子に気が付いたのか、僅かに緊張した面持ちで俺を見つめた。

「——君を失ってから、俺はずっと絶望の中に居た」

「それは死んで、人理の英霊として使役されるようになってからも変わらなかつた。

君を失つたあの夜の事が脳裏を離れない。

気付けば君の事を考えていて、無力さと空虚さに襲われていた。忘れてしまえ、と。そう考えた事もあつた。

けど、忘れられなかつた。

忘れる事なんて出来るはずが、無かつた」

「っ」

イリヤの表情が、辛そうなものへと変わる。

紅の瞳はその地獄のような道を歩んできた俺の身を案ずるかのよう  
うに、翳りを帯びていた。

「————」  
「けど、今は違う」

失つた悲しさも空虚さも、消えた訳じゃない。

消える事なんて、きつと永遠に訪れないだろう。

それでも——

「————」  
「イリヤ。君に出会えて、本当に良かった」

————この想いだけは、永劫に変わらない。

失つた悲しさも空虚さも、イリヤと出会えた奇跡の前には霞んで霧散する。

イリヤと出合い、永遠の恋に落ちた。

あの時感じた情熱を忘れる事など、どうして出来よう。

俺には出来ない。忘れてなんて、やるものか。

「俺は幸せだ。今、この瞬間。君を愛しているこの瞬間こそが、俺にとってこれ以上無いぐらいの幸せだったんだ」

イリヤの瞳が見開かれる。

かつて、『少女』は願った。

独りで死にゆこうとしている自分を見て涙を流し悲しんでいた『少年』が、幸せになりますように、と。

しかし、少女は不安に思っていた。

その不安通り、実際に少年は少女の死を一生抱え続けた。

それはお世辞にも、幸せだなんて言えるような生涯じゃ無かったはずだ。

しかし、青年となった少年は言ってくれた。

少女に想いを告げた、あの月下の誓いと同じように。

少女を守ってみせると約束してくれた、あの時のように。

——自分は幸せだった、と。

嘘偽りなんて有り得ない、少女が好きだった笑顔で。

つまり、少女の願いはもう既に叶えられていたのだ。

潰えたと思っていた少女の願いは少年の中でずっと生き続けていて、かわした『約束』を果たすという形で、こうして再び少女の元へ戻ってきた。

——幾瀬、幾年。悠久の時を、そして世界を経て、少年は少女と交わした『約束』を果たしたのだ。

「ばか・シロウの、ばか

わたしの事なんてすぐに忘れちゃえば良かったのに！

そうすれば、シロウが悲しむ事なんて無かった！

辛い想いを独りで抱える事も無かった！

今よりもっと、幸せになれたかも、しれないのに」

イリヤは嗚咽混じりの声で叫び続ける。

涙を流し大きく背中を震わせて、自分の心の内に秘めた想いを曝け出す。

「わたし、言った。好きな人を悲しませたくないって、好きな人には自分の死を背負って欲しくないって！」

わたし、シロウの悲しむ所なんて見たくなかった！

大好きなんでもん。大好きだから、シロウを独りきりになんてしたくなかった！

だから忘れて、欲しかった。欲しかった、のに。」

イリヤは崩れ落ちるように膝をついた。

嗚咽を我慢するみたいに、口元を両手で押さえている。

けど、そうじゃない。

イリヤが口を押さえている理由は、この先の言葉は口にしてはならないと分かっているからだ。

しかし、一度堰を切って溢れ出した感情は止められない。

今にも掻き消えそうな声で、イリヤは言葉の続きを紡ぎ続ける。

「嬉しい、の。いけないって、分かっているのに。忘れて貰わなきゃ、いけないのに。胸が張り裂けそうぐらい嬉しくて、辛い、よ。」

「っ」

もう、限界だった。俺はイリヤの元へと駆け寄って、その華奢な身体を抱き締める。

冷たい。

抱き締めた時の感触は雪のように冷たくて、今にも溶けて消えてしまっそうだった。

イリヤは俺の胸の中で、嗚咽を零して泣きじゃくる。

降り注ぐ雪から守るように、俺はより一層深くイリヤの身体を胸に抱き締めた。

無限に引き伸ばされた、刹那の時間。

純白の世界で俺達は重なり合う。

鼓動が遠い。重なり合い触れ合った冷たい身体からは、心臓の鼓動を感じる事が出来なかった。

まるで、雲を掴もうと手を伸ばしているかのよう。

見えているのに届かない。届いているのに触れられない。

——に近いのに、こんなにも遠い。

その事実にも、今にも叫び出したくなかった。

喉を枯らし我を忘れ何もかも投げ出し身体を構成している細胞の全てが潰れるまで。

だが、イリヤを不安がらせる訳にはいかなかった。

——どれだけの時間が、経過しただろう。

一瞬だったかもしれないし、永遠だったのかもしれない。

「暖かい。懐かしい、シロウの匂いだ」

「」

「ありがとう、シロウ」

「俺の胸ぐらい何時だって幾らでも貸してやる。

何度でも何度でも。イリヤの、気の済むまで、さ」

「うん。けど、大丈夫。わたしにもやるべき事が、しなくちゃいけない事が出来ちゃったから」

そう言うと、イリヤは俺の身体を離れて立ち上がった。

もう目尻に涙は残っていない。

紅の瞳に強い輝きを宿して、俺を真っ直ぐ見据えている。

「——シロウ。わたしも、シロウに伝えたい事があるの」

「ああ、どんな？」

激情を押し留め、出来るだけいつも通りに装ってイリヤの言葉を受け止めようとする。

イリヤは深呼吸をしてから、しつかりとした口調で言葉を紡ぎ始めた。

「わたし、シロウの事が好き。」

シロウと離れたくない。ずっと、一緒に居たい。

シロウの魔力が切れたら二人共消えちゃうのだとしても、それでもずっと、シロウの傍に居たい。」

イリヤの言葉を受け止めて、俺は笑みを浮かべた。

嬉しかった。俺とイリヤの心が通じていて、嬉しかった。

イリヤが口にした、俺の魔力が消えれば俺とイリヤ、二人共消えてしまうというのは真実だ。

元々、この世界はとうの昔に滅んでいる。

その上に固有結界を重ねただけの世界だ。

衛宮士郎の生死は不明だが、奴の固有結界が既に瓦解している以上、この世界が消えたら俺とイリヤは消滅してしまう。

要は前述の通り、タイムリミットは俺の魔力が切れるまでという訳だ。

そして、その時は刻一刻と迫っている。

俺の固有結界の至る所に、細かい亀裂が走っていた。

亀裂は放射線状に広がっており、パラパラと剥離した欠片が雪に混じって落ちる。

魔力が切れ始めているのだ。

「っ」

ぐらりと身体が地面に倒れ込む。

見ると、両手の指先が薄く透けていた。

手のひらをかざすと指先を通してでも向こうの景色が見える。

魔力切れ。世界の崩壊と同時にこの身も消滅するだろう。

——だが、悪くない幕引きだ。

イリヤと共にこの旅を終えられる。

それは俺にとって、最高の終わりに違いないのだから。

「シロウ」

「大丈夫。少し、立ちくらみがしただけだ。

それより、私から離れるなよ。上から落ちてくる破片に当たると怪我をするかもしれないからな」

地面に座り込んだまま、俺はイリヤに腕を広げた。

怪我をするからなんていうのは口実で、本当の所はイリヤを抱き締めたかっただけだ。

もう最後になるだろうから、それぐらいのわがままは許されて然るべきだ、と。

しかし

「っ、!？」

イリヤは俺の元まで歩いてくると、俺の頬に両手を添えて自身の唇を俺の唇に触れさせた。

突然の行為に目を丸くしたのも束の間、

「これ、は」

身体が、燦然と輝く黄金の光に包まれる。

地面には魔法陣が走るように展開されていた。

呆然と魔法陣を見ている俺にイリヤは、

!!?

「お別れだね、シロウ」

穏やかな、しかし寂しげな表情でそう言った。

「待て、お別れってどういう事だイリヤ」

「本当は、シロウと一緒に居たかった。でも、やっぱりそのわがままにシロウを巻き込む訳にはいかないもの。」

わたしにシロウを助ける力が残っているなら、やっぱり守ってあげなくちゃ」

そう言っ、イリヤは俺から遠ざかっていく。

物理的な距離じゃない。存在として、遠ざかっていく。

止めなくてはならない。イリヤを独り残して、俺だけ助かるだなんて出来るわけが無い。

そう思い、立ち上がるとうとした俺をイリヤは制した。

首を横に振り、華のような笑顔を浮かべて。

「シロウ、言ったよね。」

わたしに胸を張って誇れるような自分になるって。

シロウには、まだ果たさなきゃいけない『約束』があるでしょ？レデイとの約束を疎かにする男の子は、わたしゲンメツしちゃうんだからね」

イリヤは楽しそうにクスクスと笑う。

それでも、止めたかった。

例え幻滅されてもいい。

俺はイリヤを独りになんて、したくなかった。

今までずっと独りだったイリヤをどうしてまた独りきりにする事

が出来る？

俺には出来ない。

イリヤを独りこの世界に残すぐらいなら、俺はこのままイリヤと共に消えてしまった方が良い――

「ううん、もうわたしは独りなんかじゃないよ。

だって、知ってるもん。わたしが託したものがシロウの中に残ってるって。今の時間は二度とない『奇跡』で成り立っているものだから、わたしとシロウはもう会えないけど、それでもシロウの中でわたしは生き続ける。

――シロウの中で、夢を見続けていられる。

それはね、きつと幸せな事だと思うんだ」

「ッ」

止めたかった。

止めたかった。

止めたかった。

――けど、止められなかった。その表情があまりにも幸せそうだったから、止められなかった。

俺は俯き、込み上げてくる激情に歯を食いしばる。

そんな俺を慰めるように、イリヤは俺に向かって手を伸ばし、先程俺がやってみたみたいに抱きしめる。

ただそれだけの行為だというのに、妙に心が落ち着いた。傍から見たら恋人というよりは姉弟に見えただろう。

お姉さんに慰められる弟。

その関係だけは、やはりいつまで経っても覆せないみたいだ。

「――時間、か」

イリヤ達を見送った時と同じ光の帯が天蓋を貫いている。

漏れ出した光芒が純白の世界を照らしあげ、落ちてくる雪を星屑のように輝かせていた。

「イリヤ」

「なに、シロウ」

イリヤの唇に、俺は自分の唇を重ね合わせる。

イリヤがしたような軽く触れるようなキスでは無い。

深く。熱く。溶かすような口付け。

交錯は10秒にも及んだ。

ややあつて、唇を離す。微かに息を乱し、頬を朱に染めるイリヤに俺は悪戯っぽく笑いかけた。

「先程のお返しだ。君にやられてばかりでは兄として、恋人として示しがつかないだろう？」

「むく弟のクセに生意気」

膨れつらを作るイリヤを、再び抱きしめる。

イリヤは嬉しそう喉を鳴らして、

「ね、シロウ」

「なんだ？」

「これでわたし達はお別れ。わたしが人であり貴方が英霊である以上、もう会う事は無いかもしれない。

けど、絶対にわたしは諦めない。いつか必ず、シロウを迎えに行くんだから。その時は――」

「ああ。また、恋をしよう。

今まで一緒に居られなかった分、永遠の恋をしよう。だから忘れない。俺は君の事を、絶対に忘れない。忘れてなんか、やるものか。」

——イリヤの姿が光に溶けていく。

光で何も見えない。

声は届かずにきこえない。

俺の声は、きちんと届いていただろうか。

それを確かめる術はもうない。

しかし、俺は咲き誇る光の中で確かに聞いた。

——うん！約束だからね、シロウ！

遠い日の約束。

俺達はその約束があったから、再び巡り逢えた。

——だからきつと、次に逢う時も。

今交わした約束が標しるしとなって俺達は再び出逢い、永遠の愛を謳うのだ。

それは、俺達を繋ぐローレライ。

独りきりで寂しいから歌うんじゃない。

また逢いたいと願うから、共に2人、同じ夢を歌うのだ。

意識は光へと落ちていく。

胸に残った約束の重みを感じながら、俺は静かに目を閉じた。

G e w a l t i g e M e l o d e i .  
 D a s h a t e i n e m e i n e L i e d a b e i ;  
 U n d s i n g t e i n L i e d a b e i ;  
 e , S i e k m m t e s m i t g o l d , n e m K a m m  
 S i e k m m t i h r g o l d , n e s H a a r .  
 t , I h r g o l d , n e s G e s c h m e i d e b l i t z e  
 D o r t o b e n w u n d e r b a r  
 D i e s c h n s t e J u n g f r a u s i t z e t  
 I m A b e n d s o n n e n s c h e i n .  
 D e r G i p f e l d e s B e r g e s f u n k e l t  
 U n d r u h i g f l i e t d e r R h e i n ;  
 e l t ,  
 D i e L u f t i s t k h l u n d e s d u n k  
 i n n .  
 D a s k o m m t m i r n i c h t a u s d e m S  
 E i n M h r c h e n a u s a l t e n Z e i t e n ,  
 D a i c h s o t r a u r i g b i n ;  
 e s b e d e u t e n ,  
 | I c h w e i n i c h t , w a s s o l l

◇ ?

D i e	U n d	A m	i n	I	h	▪	E	f	E	E	f	D
L o r e	d a s	E n d e	n g e n	g l a u b e	,	h	r	,	r	r	e	e n
L e y	h a t	S c h i f f e r		d i e		'	s c h a u t		s c h a u t	s c h i f f e r		S c h i f f e r
g e t h a n	m i t	u n d		W e l l e n			n u r		n i c h t	i m		i m
	i h r e m	K a h n		v e r s c h l			h i n a u f		d i e	k l e i n e n		k l e i n e n
	S i n g e n	;					i n		F e l s e n r i f	W e h		S c h i f
							d i e			;		
							H					

## エピソード

「

インターフォンの、無機質な電子音が部屋に響く。

イリヤは閉じていた瞳をうつすらと開けて視線を投げた。

枕は濡れていた。どうやら、また泣いていたらしい。

フラフラと頼りない足取りで扉へと向かう。

ロックを解除すると、微かな駆動音を伴って扉が独りでに開いた。

扉の先に立っていたのはミュとクロだった。

「イリヤ」

「

心配そうな2人の視線に、イリヤは力無く笑みを浮かべて「大丈夫」と答えた。

「ご飯、だよ。うん。すぐに行くから、先に行つて」

「イリヤ、けど」

「ミュ」

ミュの言葉をクロが遮った。

どうして、という表情をするミュに、クロはゆっくりと首を横に振った。

それが彼女なりの気遣いだと気づき、イリヤは先程よりは自然な笑顔を浮かべて部屋へと戻る。

あれから、一週間。

彼が姿を消してから、それだけの時間が経過していた。

「イリヤさん、こちらで一緒に食べませんか？」

食堂へ入るや否や、マシユが声を掛けてきた。

イリヤを気遣つての事なのか、表情には出していないが心配して声を掛けてきてくれたのだろう。

イリヤはその提案を受け、マシユについていく。

——皆に心配される程、イリヤは憔悴しきっていた。

ショックを受けたのは全員同じだが、その中でもイリヤは部屋に閉じこもってしまうぐらい精神状態が酷かった。

イリヤを励まそうとミュやマシユ、言葉こそ発しないもののクロが部屋に訪れる事も多々あったが、それでもイリヤの心が晴れる事はついで無かった。

当然、今も同じ。後悔と悔恨が身を焼いて、心に大きな影を落としていた。

「お、全員揃ったか？」

案内されたのは大テーブル。

マスターの他にもクロとミュも着席していて、イリヤはできる限りいつも通りの表情を保ちながら席に着いた。

その時だった。横から、粗野な声が聞こえたのは。

「って、クー・フリーン？何してるのさそんな格好で」

「何って、見りや分かんたら。ウェイターだよウェイター」

「うえ、ウェイターですか？ 白色のシャツに黒いベスト、そして黒ネクタイにスラックス。確かにウェイターらしい格好ですが、どうしていきなり？」

「ん、まあ色々とな。それより注文は？」

「注文って」

困惑した様子で謎の青髪ウェイターを見上げていたマスターとマシユだったが、流石の順応さを見せて次々に料理名を上げていく。

2人からオーダーを取り終えたウェイターは次にイリヤ達に視線を向けて、

「次は嬢ちゃん達だ。何か食いたいもんあるか？」

「何でも良いんですか？」

「ああ、構わないぜ。ミユ、とか言ったか？ 何が食いたい？」

「え、えっと」

いきなり何が食いたいか、と聞かれても普通の人は困る。

カルデアの食堂のシステムってそんな感じだったつけど首を傾げていると、不意に――

「肉じゃが」

気付けば。イリヤは、不意に脳裏に浮かび上がってきた料理の名を口にしていた。

クロとミユがハツとした表情をする。

イリヤもしまつたと慌てて口を噤むが、もう遅かった。  
青髪のウェイターはニヤリと口角を上げると、

「ご注文承った。さて、他はどうする？」

青髪のウェイターは既にメモ帳にペンを走らせていて、クロとミュに注文を聞いていた。

料理が運ばれてきたのは、それから程なくしてからだだった。

ミュもクロもイリヤと同じものにしたらしい。

ウェイター（ルビー曰くランサーのクラスカードの元になった英霊らしい）がお盆に乗せた料理を配膳する。

ケルトの大英雄と聞いていたが、大英雄はウェイターの仕事をもこなしてしまうらしい。

妙に手馴れた調子で配膳を終えると、ウェイターは意味ありげな視線をマスターに向けて、「ごゆっくり」という言葉を残して去っていった。

「美味しそう」

眼下に広がるのは何の変哲もない、ありふれた品達。

注文通りである肉じゃがを中心に白米、味噌汁、卵焼きと続き、素朴ながらも食欲をそそる匂いが立ち込める。

くう、とお腹がなるのを自覚した。

その情けない音で、昨日の夜から今まで何も胃に入れていなかった事を思い出した。

「見てるだけじゃ意味無いわよ。早く食べましょ」

「う、うん 頂きます」

クロの言葉に促され、頂きますの音頭と共に箸を取る。そして恐る恐る口へと運び――

「あ」

衝撃は、イリヤの脳天から足先までを貫いていった。

――覚えていて。

イリヤは、この味を覚えている。

忘れるはずがない。

1週間と少し前、毎日口にしていた味だからだ。

クロもミュもその事に気付いたのか。

目を大きく見開いて、穴が空くのでは無いかと思うぐらい肉じゃがの盛られた皿を凝視している。

真っ先に硬直から回復したのはイリヤだった。

「マスターさんっ!!」

「――うん、きつとアイツも待つてるだろうから。行ってらっしゃい」

笑顔で、マスターはイリヤを送り出す。

じつとしては居られなかった。イリヤはガタツ！と大きな音を鳴らして、勢いよく立ち上がる。

そして、止まる事なく駆け出した。

目的地は食堂に隣接する厨房。

食堂を縦断し、目の前に現れた厨房へと繋がるドアを勢いよく開け放った。

そこには――

「おい、ウェイターの仕事もマトモに出来ないのか貴様は。その図体で厨房に居座られると迷惑極まりない。

さっさとオーダーを取りに行け」

「うるせえな。こちとらテメエの罰則に付き合っつてやつてる身分なんだ、少しは許容しやがれ」

「文句ならマスターに言ってくれ。」

罰則として今日の晩飯の用意を私一人でこなせ、というならまだ分かるが、何が悲しくて貴様と共に働かねばならないのか」

「ハッ、それも含めて罰ゲームだつて事だろうよ。」

全くとんだ災難だぜ。何だつて俺は、何かした訳でもねえのにこんな格好で給仕の真似事なんかむ？」

色々な食べ物の匂いが渦巻く厨房の中。

どこからか持ち込んだらしい丸椅子に腰を下ろしていたウェイターが、厨房の扉を開けたイリヤに気付いたようだ。

しかし、イリヤはその事にすら気が付いていなかった。何故なら、イリヤの視線はたった一箇所に注がれているからである。

厨房の奥で忙しそうに、しかし一切無駄のない挙動で右手に握った包丁を踊らせる後ろ姿に。

イリヤは動けなかった。一切の身動きも許されず、その背中に視線を固定され、縛られていた。

「仕方ねえ。おい、オーダー取ってくるのは構わねえけどよ。自分の尻拭いぐらい、自分でしっかりしやがれつてんだ」

「だから今こうして罰則を受けているだろう。」

それより円卓系王様軍団に伝えておけ。

.....  
これ以上は私の腕がもたん。そろそろおかわりを制限するように、  
と

「チツ わあつたよ。」

んじや、これより後にここで起きる出来事は全てテメエに任せる  
ぜ」

青髪のウェイターはメモ帳とペンを乱暴に柵からひったくり、扉が  
あるこちらへと歩んでくる。

そしてすれ違う間際、『頑張れよ』、と。

視線だけで、エールをおくられた。

扉が閉まる。静寂に包まれる厨房の中、聞こえてくるのは包丁がま  
な板を叩く音と鍋の中でお湯が煮立つ音。

——踏み出す。

イリヤ達はその背中に向かって勢いよく駆け出した。

何か考えがあつた訳では無い。

ただ胸から湧き上がってきた激情をそのままに、イリヤは『彼』の  
背中に向かって叫んでいた。

「——お兄さん!!」

ピクリ、と『彼』の動きが止まる。彼は一瞬固まってから、やがて  
ゆっくりこちらに振り向いた。

——胸が苦しい。

形容し難い感情の波が、身体の中で渦巻いている。

いざとなつたら、何も話せない。

話したい事や言いたい事が沢山あつたはずなのに、彼が振り向き  
こつちを見ただけであらゆる思考が霧散する。

——言葉の代わりに零れたのは涙だった。

言葉に出来ない、ごちやごちやになつた感情を止まること無く瞳か  
ら零し続ける。

「あ　うう、ああああああああ」

くずおれるように厨房の床へ膝を着いた。

堰を切つて溢れ出した涙がパタパタと床に斑点を作る。

——幻なんかじゃない。

あの時。あの世界でイリヤ達から離れていった彼は、確かな質量をもつてそこに居た。

マトモに声なんか掛けられる訳が無い。

胸中に渦巻く感情は、嬉しいだなんていう陳腐な表現を遥かに超越している。

だから、泣くしか無かった。

イリヤにはその感情を上手く言葉に出来なかつたから。

だからみつともなく、涙を零すしか無かつたのだ。

彼はエプロンを外しイリヤに向かって歩いてくる。

反射的に俯き、床に視線を落とした。

どんな顔をして彼と向き合えば良いか分からなかつたのだ。

落とした視線の先で、彼の靴がイリヤの前で止まる。

彼は俯き涙を流すイリヤの頭にポン、と頭を置いて、

「——少し遅くなつてしまつたが、ただいま。あれから大事な  
さそうで何よりだ」

覚えている。この声も。この手も。陽だまりのように暖かい、その  
穏やかな笑顔も。

彼の表情は稀に見るもので、嬉しそうではあるものの微かな寂寥を  
感じさせる笑顔だつた。

大きな手のひらがイリヤの髪を梳る。

その懐かしく、包み込まれるような暖かさが教えてくれた。

——彼が、本当にイリヤ達の元へ帰ってきたのだと。

「お、お兄さん!？」

「あの世界に取り残されたはずじゃ」

クロとミュが勢いよく扉を開けて厨房に入ってくるや否や、素っ頓狂な声を上げて驚愕を顕にする。

彼は突然の闖入者に目を丸くしてから、2人との再会を喜ぶように口許に笑みを刻んだ。

その笑みには安堵の感が含まれていて、彼もイリヤ達の事を心配してくれていたのだと分かる。

「皆無事、だったか」

「それはこっちのセリフだってば！ダ・ヴィンチは残念だけど、もう彼を助ける事は出来ないし生存も望めないって言ってたわよ!？」

「ああ、その通りだ。私1人では、奇跡でも起きない限りあのままあの世界で野垂れ死んでいただろう」

「で、でも、お兄さんは確かにここに居ます。どうやってあの世界からカルデアまで戻って来れたんですか?？」

ミュは、目尻に涙を浮かべながら彼に疑問を投げる。

ミュの疑問は最もだった。

クロの前述の通り、ダ・ヴィンチは彼がカルデアに戻ってこれる可能性は皆無であると判断を下した。

その判断が間違っていたのだろうか？

しかし、彼はさつきダ・ヴィンチの言葉を肯定した。

奇跡でも起きない限り、野垂れ死ぬはずだったと。

つまるところ、ダ・ヴィンチの判断は正しかったのだ。

だがそうになると、尚更どうして助かったのかという疑問が浮上して

くる。

ミュの言葉に彼は少し笑って、

「『約束』が、あつたからな。」

大切な人達と交わした約束が。それを破ってしまったら、私は彼女に叱られてしまう」

「そう言う彼の瞳は、どこか遠くを見ているような気がした。

約束。それは、イリヤ達に料理を教えるというもの。

「けど彼の言う約束には、それ以外の約束も含まれているような口振りだった。」

「誰との約束かは分からないけれど。」

「きつと、それは彼にとって大切なものなのだろう。」

「はあ。あんなに悲しんでたわたしが、まるでバカみたいじゃない」

「なんだ、悲しんでいてくれたのか？」

「そ、そんなの当たり前で。ああもう、なんでもないっ！」

「日頃からかう側であるクロが、珍しく彼にからかわれていた。バカみたい、と言うがあればクロの照れ隠しだろう。」

「彼もそれに気付いたからこそ、からかったのだ。」

「ま、何はともあれ皆無事で帰ってこれたんだし、悪くないハッピーエンドよね」

「うん。けど今思えば、いつ誰かが欠けてもすごく危ない橋を渡っていたような」

「《ミュ様の言う通りです。ですがこのカルデアに居る以上、そういつ

た危険も避けられないでしょう」

《ですわねえ。わたし達も様々な出来事を潜り抜けてここに居るわけですが、まだまだ他のサーヴァントの人達に比べると力及ばない事も多いですし。しかし！まだまだ悲嘆するような段階ではございません！力不足だと言うのなら、強くなれば良いだけなのですから！幸い皆さんは成長期ですから、すぐに強くなれます！》

「成長期って」

しかし、ルビーの言っている事は間違っていない。

成長期云々の話では勿論なく、力不足だという点についてだ。今回の戦いを切り抜けたのは、彼が居たから。

イリヤ達だけではすぐに全滅していただろう。

だが、いつまでも彼の背中に守られているような存在では居たくないというのがイリヤの本音だ。

今度こそ、彼を守るような存在になりたい。

それはきつとクロもミュも同じだろう。

「うん。頑張らなきゃね」

《その意気ですよ、イリヤさん！》

どこからとも無く取り出した旗を振り、フレー！フレー！とエールを送るルビーに苦笑をこぼす。

そんなイリヤ達を彼は優しげな視線で見つめていた。

胸が暖かくなるような、安心する笑顔。

するとその時、くう、という間の抜けた音がイリヤの下腹部辺りから生じた。

かあ、と顔全体が熱くなる。

昨日の夜から何も口にしていなかった事と、まだ食事の途中だった

事を思い出した。

彼は一瞬キョトンとした表情を浮かべたが、すぐさまそれは笑みを堪えているかのような表情に変わる。

笑うとイリヤに失礼だと思った結果だろう。

だがその気遣いが、一層羞恥の念を増加させていた。

「さて、君達は食事の途中だったのだろうか？」

早く席に戻って食事の続きをすると良い」

「うう」

先程とは違う意味で泣きそうになるイリヤだった。

彼の言葉通りイリヤ達は食堂へと移動しようとする。

入ってくる時とは違い、全員が笑顔だった。

——— そういえば、まだ言っていない事が一つ。

イリヤが足を止めると、それに乗るかのようにクロとミュが足を止めた。

3人とも考えている事は同じらしい。

全員同時に彼に向かって振り返りながら、せーのっ、と声を合わせ

て

「「お兄さん、おかえりなさい!!!」」

それは、何の変哲もない挨拶。

しかし無事に帰ってきた事を喜ぶには、きっと最上級の言葉だったに違いなかった。

——— こうして、1つの物語が終わりを告げる。

それは人類史を守る戦いにおいて『幕間』でしかない物語。

本筋から離れた、微塵も歴史には残らず埋没していくだけの断片に過ぎない。

しかしそれが『物語』である以上、話を紡ぎ走り続ける者達が確か

に居るのだ。

これは後に『夢幻虚構結界：冬木』と呼ばれる世界で起こった、青年と少女達の邂逅の歴史。

だがそれは、最初の一步を踏み出したに過ぎない。

ここからだ。本当の物語は、これから始まる。

——さあ、進もう。

各々が進むべき道を、時には速度を弛めたり寄り道したり立ち止まったりしながら、しかし最後の一瞬まで。

◇？

かつて、イリヤに問われた事がある。

あれは確か『あの事件』から1ヶ月経った後。

イリヤ達と『約束』していた通り3人に料理を教え（美遊に関して俺が教える必要なんて無かったぐらいの腕前だったが）、4人で作った弁当を持ってちよつとしたピクニックへ出かけた時の事だった。

——あの人は、衛宮士郎はどうなってしまったのか、と。

俺はその時、イリヤに向かって「分からない」と答えた。

真実、俺はあの後彼らがどうなったのか分からない。

しかし確信している事が一つだけある。

——きつと幸せにやっているだろう、と。

なんせ、あの子が傍に居てくれるのだ。

それが衛宮士郎にとって、幸せじゃないはずが無い。

そう確信して俺は遠く、果てのない空を見上げた。

——どこまでも果てのない、蒼い空を。

◇？

——燈火のように揺れる夢を見ている。

そこは、胸を梳くような草原だった。

どこまでも広がる蒼い空に、海を航海する純白の船の如き雲が螺旋を描いている。

吹き抜ける風は草原を駆ける獅子の如く。

色鮮やかな緑を揺らし、ざあ、と葉擦れの音を奏でていた。

雲間から覗く陽の光が草木に生命を注ぎ、世界を紡ぐ。

風に乗って運ばれてくるのは花の香りだろう。

中央に聳える巨大な木の下。その巨木を囲むように、色彩豊かな

花々が顔を覗かせているのだ。

こんなにも生命の色に溢れているというのに、動物という意味での生物の気配は皆無だった。

聞こえてくるのは風と葉擦れの音色だけ。

ここには循環する生命というものが無い。

当然だ。ここは失うものも無ければ増えるものも無い。

この世界に与えられた属性は永遠の『不変』。

変わらない、という事は静止しているという事だ。

生命を循環させるための営みは行われず、植物の色彩いのちでさえ享受されたものに過ぎない。

そういう意味では、この植物達も生きているとは言えないのかもしれない。

変わりゆく環境に生命が適応せんとしたのではなく、与えられた環境で生命が維持される矛盾。

——そこは永久に終わる事の無い楽園。

宇宙や世界といった枠組みから剥離し隔絶された、何者にも観測出来ない『理想郷』である。

『長い旅だったな』

『うん。ここまで辿り着くのに随分かかっちゃった』

それは、少年と少女の声だった。

人なんて1人足りとも存在しないというのに、その声は風に乗って運ばれてくる。

『アイツ・アーチャーには感謝しないとな。』

今、俺がイリヤとこうして居られるのは、アイツが俺を斬ってくれたおかげだ』

『ええ、だからあの子にも奇跡を届けてあげないと。』

わたし達だけ幸せな終わり方をするなんて、そんなの彼があまりにも報われないもの』

『ん。そうだな。アイツにも奇跡が必要だ。生憎祈る事しか出来ないけど、その想いはきつと届くだろうから』

2人は暫し目を閉じて、祈りを投げる。

もう、彼のために出来る事は2人には無かった。

後はアーチャーが自分自身で結論を出し、本当の意味での決着をつけなくてはならない。

その結末を知りたいとは、あまり思わなかった。

誰だって、あの時あしていればという後悔はするものだが、実際に己が歩んだ道とは異なる道を歩んだ者の結末など聞きたくはあるまい。

『よし、それじゃあ俺達もそろそろ休もう。』

ここまで歩いて疲れただろう、イリヤ』

『うーん、少しだけね。けど、辛くなんかなかったよ。だって、シロウがずっと傍に居てくれたんだもん。辛いだなんてある訳ないでしょ？』

華のような笑顔を浮かべて、少女は少年に向かってそう言った。少年は少女の手を握る。

もう、離さない。そんな意志を込めた手で。

『——ああ、俺も同じ気持ちだ。』

旅はもうここで終わっちゃうけどさ。

ずっと、イリヤの傍に居るよ。約束だ』

どれだけの時が経とうとも、少年が少女を好きだという気持ちだけは変わらない。

『永遠』なんて欲しくは無いけれど。

その気持ちだけは、永遠に絶える事は無いと断言出来た。

2人は手を繋ぎ、大きな木の下に腰を下ろす。

少年の言葉通り、2人は長い永い旅路を終えた。

だから、少し一休み。

少女は少年の肩に自身の頭を寄せ、頬を撫でる微風の気持ちよさそうに目を細める。

——途端、一際強い風が吹いた。

その風に溶けてしまったかのように、2人の声が消えた。

世界は再び無音へと戻る。

ひっそりと、眠るような穏やかさで。

少年と少女は、静かに目を閉じたのだ。

——丘の上の巨大な木の下。

そこには、2輪の小さな白い花が咲いていた。

白い花はあたかも肩を寄り添い合うように風に揺れている。  
声はなく物言わぬ花々。

しかし、白い花は高らかに永遠を謳う。

その想いは決して枯れず、故に雪のように白い花弁達が散る事は絶  
対に有り得無い。

悠久に続いた旅路を往くのはとても疲れてしまったから、これは暫  
しの休息だ。

そしてこの休息が終わったら、また2人は歩き出す。

それが何年、何十年、何万年後かは分からないけれど。

その想いが永遠だと言うのなら、瑣末な事だと思ふ。

だって、それは再び出逢うための空白なのだ。

目が覚めた時。また、変わらぬ恋が出来ますように、と。

そんな願いが込められた、未だ白紙の1ページ。

いつかはそんな空白に何かを刻む事が出来る時が来る。

だからそれまで、待つとしよう。

少年と少女の長い長い物語はここで終わる。

しかし、だからと言って何もかもが潰える訳では無い。

語り部は消え演奏が止まったのだとしても。

少年と少女が紡ぎ繋いできた『約束』が途絶える事は、決して無い  
のだから――

True END.

## 番外編

### 第?節 『冬n?残r?b?』

冬の厳しい寒さが遠のき、春の到来を予期させる時節の頃である。

俺——衛宮士郎はいつも通りキッチンで朝食を作っていた。いつもなら一緒に朝食を作る間桐桜だが、今日の午前中は忙しいらしく不在。よって、

「シロウ、卵焼き出来たわ。そっちはどう?」

先程まで卵焼きを作っていた少女が、一度フライパンの火を止めて振り向きがちにそんな確認をしてきた。

少女の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

銀色の髪と紅の瞳が特徴的な美しい少女だ。体格は華奢で小柄。夜空の下に降り積もる銀雪を思わせる容姿は、その体格と相まってある種の儂さを見る者に感じさせる。

何処からどう見ても年端もいかない少女であるが、実年齢は18歳と俺よりも年上だ。

イリヤは格好こそいつものレースが付いた高級そうな服だが、その上に花柄の可愛いらしいエプロンを重ねていて、家庭的で柔らかい雰囲気醸し出していた。イリヤが動く度に左右にエプロンの紐が小さく左右に揺れている。その様子がなんだか可愛らしくて、俺は思わず笑みを零すのだった。

春の木漏れ日にも似た団欒風景。傍から見れば年の離れた兄妹が仲良く料理を作っている風景に見えただろうが実際は——

「もう、シロウ聞いてる?」

イリヤが怒ったように頬を膨らませる。これ以上は本気で怒られるな、と思った俺は焼き魚をひっくり返ししながらイリヤに声をかけた。

「ん。順調だぞ。焼き魚も良い感じに焼けてるし、鶏と大根の照り煮も良い仕上がりだ。後は盛り付けるだけだな」

「そう。じゃあ後はわたしに任せて座ってて」

「む……そういう訳にはいかない。せつかくここまで一緒に作ったんだから、最後までやるよ」

「はあ。シロウったら頑固なんだから。それぐらい任せてくれたって良いじゃない。そんなに私の事が心配？」

「そんなの、当たり前だ。イリヤは華奢で小柄だからな。重い物を落とさずに持てるか俺はいつも心配で心配で——」

「……そんなに心配するなら、昨日あんなに激しくシなくても良かったじゃない」

恨めがましそうな瞳を俺に向けて、イリヤはボソリとそんな事を口にした。

「なっ……う……」

その言葉で、俺は昨夜の情事を思い出す。

何を隠そう——俺とイリヤは恋人同士だ。事の発端は2ヶ月近く前。俺は願いを叶える願望器、聖杯を巡る七人の魔術師と七騎の英<sup>サヴァント</sup>霊同士の戦い、聖杯戦争に巻き込まれた。召喚した英霊はセイバー。本来ならとても勝ち抜けるような戦いでは無かったが、イリヤや遠坂凜と結んだ同盟関係のおかげで幾度の死闘を制し、無事にとまではないかないものの聖杯を手にする事が出来た。

しかし——実際に手に入れた聖杯で願いを叶える事はせず、セイバーの宝具で1片も残さず破壊してしまった。

それによって聖杯戦争は終結し、今の平和な時間に至るという訳である。

「もう、シロウったら本当にエッチなんだから。こんなにも華奢で小柄な女の子を抱くのにも少しも手加減しないなんて」

「っ……!?!」

妖艶な微笑みを浮かべてイリヤは俺に近付いてくる。

そして俺の下腹部辺りに人差し指を伸ばし、くるくると触れているのか触れていないのか、酷く曖昧な強さで円を描く。

イリヤの細腕を跳ね除ける事は簡単に思えた。イリヤが自分で口にしたように、イリヤは子供のよう<sup>に</sup>に華奢で小柄なのだから。しかし、どうしても抗えない。簡単に跳ね除けられるはずの人差し指を前

に、俺は身体を硬直させて小さく息を零す事しか出来ない。

これ以上はまずい。昨日出し尽くしたとは言え、そこは若い男の身体の事だ。イリヤの細指に眠っていた情欲を煽られる。視界が狭窄し、イリヤ以外の存在にフォーカスが合わなくなる。

熱い、溶けた飴細工に沈んでいくかのような感覚に全身を蝕まれながら、俺はイリヤに向かって手を伸ばした。跳ね除けるためでは無い。イリヤの身体を胸に引き寄せ、抱き締めるために。

しかし――

「はい、お終い」

くるりと、踊るようなワンステップを踏んでイリヤは俺が伸ばした腕をすり抜ける。

「くす、シロウったらいつけないんだー。こんな朝早くから女の子に欲情してしまうだなんて」

「お、おいイリヤ……」

「そんな物欲しそうな顔してもだーめ。ほら、後もう少しで朝ごはん出来上がるんだから早く席に着きなさい」

トン、と間拔けな背中を押されて俺はあっさりと調理場から叩き出される。抗議の声を上げようかと思っただが諦めた。イリヤがそこまです言うのなら無駄に意地を張って調理場に立ち続ける理由は無いらしい、何より詳しい事は割愛するが下半身が大変な事になっているのだ。

一度イリヤから離れて、心と身体のとある一部分を落ち着かせなくてはならない。俺は言われた通り大人しく席に着こうとして――

「その、おはようございますシロウ」

「うわ！ せ、セイバー!?!」

いつから居たのだろう。畳に敷かれた座布団の上で、どこか気まずそうに金髪の小柄な少女が正座していた。

彼女はセイバー――真名、アルトリア・ペンドラゴン。俺が召喚した英霊であり、この家に暮らす住人の一人だ。本来、聖杯を破壊したセイバーは消滅する運命にある。しかし消滅する寸前、遠坂と俺が何とかセイバーを現世に繋ぎ止め、こうして今まで消滅する事なく現界し続けているという訳だ。

現界に必要な魔力は俺と遠坂の2人で補っている。つまりセイバーのマスターは俺と遠坂の2人という事になるのだが、遠坂はその事を口実にして時折セイバーを自宅に呼び出し、魔術研究の手伝いをさせている。昨日も同じで、てつきりセイバーは遠坂邸に居るものだと思っていたのだが――

「驚かせてしまい申し訳ありません。何やら2人がその、とてもじゃないですが邪魔出来ない雰囲気になりましたので声をかけられず……」

「そ、そうだったのか。ごめんな、セイバー。変に気を遣わせてしまつて」

「いえ、仲睦まじいのは良い事です。お2人はその、恋人同士なのですから」

僅かに頬を赤く染めたセイバーがそんな事を口にする。そう恥ずかしがられるとこちらも何だか恥ずかしい。

「し、しかしですねシロウ!!」

「は、はいっ!」

「こんなにも朝早くからあいつた行為をしようとするのはあまり感心しません! 貴方は私のマスターなのですから、その辺りはしっかりと自覚し節度を持った生活を……」

「聞き捨てならないわね、セイバー。セイバーのマスターである前にシロウはわたしの恋人<sup>もの</sup>よ。いち居候である貴方に節度うんぬんを正される筋合いはこれっぽっちも無いんだから。ね、シロウ」

そう言つて、イリヤは俺の首に腕を回して背中に抱き着いてくる。そのささやかな重みに、再び心臓が跳ねた。

「む、イリヤスフィール!」

「セイバー、朝ごはんを相伴に預かりたいなら早く運ぶの手伝つて。その為にこんな朝早くからトオサカ邸から戻つて来たんでしよう? リンは朝弱いし元々朝ごはん食べない派だから、待つても朝ごはん出てこないもの」

「くっ……流石ですねイリヤスフィール。貴方ほどの魔術師<sup>メイガス</sup>ともなると、私の思惑なんて全てお見通しという訳ですか」

「いや、多分これは魔術の腕とか関係ない……というか、セイバーが来るから3人分作ってたのか。今日は桜が居ないのにどうしてだろうと不思議に思ってたけど、納得した」

「この前リンの家から戻って来た時、もの凄い切なそうな顔で帰ってきたもの。そのせいで作った昼ごはんが瞬時に消えちゃったの覚えてない？ ついこの間の事だけ」

「……ああ。そんな事も、あった……かな」

記憶の人を手で手繰り寄せ、ようやくその記憶に思い至る。いつもはどんなにお腹が空いていても行儀よく食べるセイバーが、まるで生肉を前にした飢餓状態のライオンのように昼飯にがっついていた覚えがある。

即座に思い出せなかったのは、春の陽気に当てられてぼうっとしていたからだろうか。

ともかく、セイバーに餌やりを忘れると大変な事になるらしい。是非とも忘れずに記憶に留めておいた方が良さだろう。

「……今、何か失礼な事を考えませんでしたかシロウ」

「っ!? さ、さあ早く朝飯にしよう。お腹空いてるだろ、セイバー?」

「……イマイチ釈然としませんが、良いでしょう。シロウは座って下さい。イリヤスフィールの言う通り私は居候の身。朝食の配膳程度は手伝わして下さい」

「あ、ああ。それじゃあお言葉に甘えて」

イリヤを首にぶら下げたまま立ち上がろうとした俺だったが、セイバーの言葉に従って腰を下ろす。セイバーには聖杯戦争の最中、何度も命を救ってもらったので居候だとか全く気にしなくても良いのだが、頑固なセイバーの事だ。俺がそう言ってもきくと聞きはしないだろう。

数分とかからず配膳が完了する。イリヤは俺の首からようやく腕を離すと、俺のすぐ隣に腰を下ろした。いつもの定位置だった。

「それじゃあ、頂きます」

「頂きますー!」

「頂きます」

三者三様の頂きますを終え、箸を手にとって各々朝食を食べ始める。

「お、美味い……イリヤも料理の腕を上げたな」

「シロウに同意です。初めはパンをトースターなる機械で焼くのもままなりませんでしたが、この2ヶ月の間で格段に進歩しましたね」

「ふふん、凄いでしょ」

「ああ。黒くてガリガリのトーストを作っていたあの時が遠い昔の事みたいだ。凄いぞ、イリヤ」

そうイリヤを褒めながら俺はイリヤの頭を撫でる。しかし褒められた当人は少し複雑そうな顔をして、

「恥ずかしいからあまりトースターの話を持ち出さないで欲しいんだけど……えへへ、シロウに頭を撫でて貰えるなら何でも良いかな」

そう言つてイリヤは相好を崩すと、俺の胸に食事そっちのけで猫みたいに擦り寄ってきた。本来なら行儀が悪いと窘める場面なのだろうが、イリヤにはとことん甘いと藤ねえ、遠坂、桜から評判の俺の事だ。ついつい頭を撫でるのを継続してしまう。

「でも、本当に上達が早いな。イリヤが料理を本格的にするようになってから、まだ1ヶ月も経ってないだろ？俺が教えられてない部分ももう出来てるようになってるし……」

「そっか、シロウにはまだ伝えてなかったっけ。わたし、最近たまにアインツベルンのお城に帰ってるでしょう？その時セラにお料理を教えて貰ってるの」

「そうだったのか？」

「ええ。セラったら料理の事になると厳しくて。『ほほう、エミヤ様に振る舞う料理を、ですか。お嬢様のような気高い存在がエミヤ様のよくな低俗極まる凡人に手ずから料理を振る舞うなど私としては是非とも止めたい所ではあります……他でもないお嬢様の命令ならば仕方ありません。しかしお嬢様。エミヤ様に振る舞うおつもりでしたら、手は抜きません。幾らお嬢様と言えど厳しくいきますので覚悟して下さいまし』、なーんて言つて本当にこれ以上ないぐらい厳しく教えるんだから。教えてもらうならやっぱりシロウの方が良いわ。

シロウの教え方優しいもの」

「低俗極まる凡人、か。余程セラから嫌われてるんだな俺。けど、それぐらい厳しい方が上達が早いんじゃないか？ 現にこの短期間でかなり料理の腕が上達してるだろ？」

「料理の腕はね。その理由は『私がお嬢様に料理を教えて、もしお嬢様が振舞った料理に味が伴わなかったらまるで私の料理が負けたみたいでは無いですか!! こうしては居られません。お嬢様、今すぐかのエミヤシロウを超える料理人へと進化するべく修行を再開致しましょう!! さあ、早く!!』という極めて私怨が混ざったものだけだ」  
「……遂に様が消えたか。でも、そんなに厳しくされても逃げ出さなかつたのは偉い。良くやったな、イリヤ」

「あ……………う、うん……………えへへ」

イリヤの頭をそつと撫でてやると、より一層俺の胸に顔を埋めて甘えた声を鳴らした。そんな時だった。コトリ、と食器を置く音が妙に大きく室内に響く。音のした方を見ると、お箸とお茶碗を持ったら敵襲が無い限り離さない（遠坂談）と噂のセイバーがまだご飯が半分程残っているにも関わらずお茶碗を置いている所だった。

「シロウ。少しイリヤスフィールの事を甘やかし過ぎでは？ 勿論褒めるべき所は褒めるべきですが、それ以外でも最近のシロウはやけにイリヤスフィールを甘やかしているように思えます。イリヤスフィールが何をしても『全く、しょうが無いなイリヤは』と言って頭を撫でているようではただでさえ自儘なイリヤスフィールがもっと調子に乗ります。この辺りで少し厳しく接するべきではないでしょうか」

厳しい瞳を掲げてセイバーがそんな事を口にした。語気は強く、凜と佇むその姿は見ているだけで気圧される。

——口元に付いたご飯粒が無ければの話だが。

「む。何よセイバー。もしかして嫉妬？ シロウが私にばかり構ってるからひっがんでるんだー」

「ち、違います!! そんな理由では断じてありません!! イリヤスフィール、貴方とは一度本格的かつ徹底的に話し合う必要があるよう

「ですね……！」

「上等じゃない!! 大飯食らいの胃袋バーサーカーになんて私は負けないもん!!」

「バーサー……つつ!? これ以上無い恥辱です! 私の胃袋のどこがバーサーカーだというのですか!!」

「……」

顔を真っ赤にして吠えるセイバーから、俺はそつと視線を外した。セイバーは知る由もあるまい。衛宮家の食費の内、実に6割近くをセイバーが消費している等と。胃袋バーサーカー。言い得て妙なかもしれない。

とはいえ、このままではセイバーが言い負かされてそんなセイバーを慰める為に更に食費がかさむという負の連鎖に陥ってしまう気がする。イリヤは遠坂に勝る程口喧嘩には強いのだ。という事で、俺は喧嘩の仲裁役を買って出る事にした。

「ま、まあまあ2人共。喧嘩はその辺にして早く朝飯を——」

「シロウは黙ってて(下さい!!)」

「……はい」

撃沈だった。俺はすぐごと引き下がり部屋の隅っこで1人きりの朝食を再開する。味噌汁は少し冷めていて、心做しかいつもよりしょっぱく感じたのだった。

「——よし、こんなものかな」

朝食時の騒動から数時間後。時刻は11時を回った所だった。俺は再び厨房に立ち、料理をしていた。イリヤは自分の部屋で出かける準備を、セイバーは遠坂の手伝いをしに再び遠坂邸へと戻って行ったので今リビングに居るのは俺一人だ。

俺は調理し終えた食材達を重箱というお弁当箱に詰めていく。これで準備完了。後は皆が待つ公園へと向かうだけだ。

「ん……ちよつと張り切り過ぎたかもな」

弁当箱の中を覗き込み、俺は僅かに苦笑する。弁当箱には様々な色

彩が見目麗しく敷き詰められていた。卵焼きや唐揚げ、ミートボールや鳥の照り焼き等々定番のおかずは勿論、ポテトサラダやレタスのサラダ、そして純白が目眩しいお握りに至るまで。

その量は実に15人前は下るまい。

『参加者』を考慮するにこの量でも全く足りないのだが、他の参加者も何かしら準備してくるだろうし、これとは別に食後のデザートとして大判焼きや三色団子等を用意してあるので恐らく足りるはずだ。これで足りなければ、家から調理器具を引っ張ってきて青空ライブクッキングするしかあるまい。

「ふう……」

座布団の上に腰掛けてそつと息を吐く。テレビを付けようとリモコンを操作したが、

「あれ、壊れてる」

テレビは付きはするのだが、液晶画面にスノーノイズと呼ばれる現象が走っていた。ザー、ザー、ザー。耳の奥で異音が擦られる。チャンネルを切り替えてもスノーノイズは止まず、しかし他にやる事も無いので、俺は仕方なく秩序無き黒と白の炸裂を見つめ続けた。

スノーノイズとは不思議なものだと思う。スノーノイズとはアナログテレビ放送を受信する際に信号レベルが低下した事によって雑音が混じったり映像が乱れたりする現象の事だ。名前の由来は黒い画面に白い点々が連続で発生する様子が降り注ぐ雪のように見えるから、というもの。

スノーノイズを不思議なものだと思った理由は、隔絶されているにも関わらず見ている者に画面のなかへ引きずり込まれるような感覚に陥らせるからだ。

いや、引きずり込まれるというのは少々大仰な表現だったのかもしれない。現実とそうでない領域の境界線を掻き乱されるとでも言うべきか。白と黒の炸裂を見続けているだけで、自分の魂が異なる領域に沈んでいく感覚に襲われるのだ。自分という存在が曖昧になって薄れていく。お前の『居場所』はそこでは無いと無秩序なノイズに糾弾される。

——ガシャン、と。

遠くで何かが割れる致命的な音がした。気が付けば俺の拳がテレビの液晶部分に突き刺さっていて、破片が畳の上に飛び散っていた。耳障りなノイズが鳴り止む。世界は再び静寂に包まれた。

ズギ、と鋭い痛みが拳に走った。どうやら飛び散った破片によって拳を損傷してしまったみたいだ。赤い血が手を伝い、畳の上に零れ落ちる。赤い斑点。そこでようやく、呆然とした意識から俺は解放された。

曖昧だった世界が、忘れかけていた境界線を自覚し始める。

「何やってんだろ、俺」

破片を慎重に広い集めながら呟く。幸い、拳の怪我は大した事無かった。皮膚の表面を破片で切っただけなので数日もあればすぐに回復するだろう。

「シロウー準備出来た？」

「あ、ああ。すぐにでも出れるよ」

イリヤが襖を開けて居間へと入ってくる。いつもと変わった様子はない。かなり大きな音だったように思うのだが、先程の破碎音は聞こえなかったのだろうか。

俺はそつと怪我をした拳を背後に隠しながら、イリヤと会話を交わしていく。

「今日って結局誰が参加するの？」

「えっと、まず俺とイリヤにセイバーだろ？ 加えて遠坂、桜、慎二、ライダー、一成、藤ねえ、後は来るかどうか分からない面子がリズとセラ。そういうえば、あの二人結局どうなったんだ？」

「あはは…リズはすつこく行きたがってたんだけど、セラがね……」

「ああ……」

セラが、というだけでその時の状況が何となく浮かんできて、納得出来てしまう自分が悲しい。

「——つと」

不意にイリヤが俺の腰に抱き着いてきた。いつもの事なので俺は頭を撫でつつ、そのままイリヤの身体を受け止め続ける。

「ね、お兄ちゃん」

その呼び方は随分と久しぶりだった。イリヤと恋人になってから、お兄ちゃんと呼ばれる事が少なくなってきたように思う。以前それとなく理由を聞いてみたのだが、曖昧に笑ってはぐらかされてしまった。

「どうしたんだ？ イリヤ」

「あのね。その、イリヤのお願いを聞いてくれてありがとう」

「お願い…？」

「今日の事。皆で桜を見に行きたいっていうわたしのお願いを、お兄ちゃんが叶えてくれたから」

そう、事の発端は3月初め。朝食の席でのイリヤの一言が原因だった。

『皆でサクラを見てみたい』。

少し恥ずかしそうにそう言ったイリヤの願いを叶えてあげたくて、俺は顔馴染みに声をかけて一緒にお花見をしてくれる人を集めたのである。

「まさか、叶うなんて思ってたなかった。ずっと見たいと願っていたけど、一生叶わないと思ってた」

「おいおい、そんなに俺が信用出来なかったのか？」

「そうじゃないの。……私が初めて桜を知ったのは10年も前。まだ

……キリツグとお母様が居た頃なの」

「……」

「お母様がね。目をキラキラ輝かせてキリツグのお話を聞いてた事を良く覚えてる。日本には桜という春になると桃色の花を咲かせる美しい木があつて、満開に咲いたサクラは目を奪われる程綺麗なんだった。後、満開の姿だけじゃなくて、散っていく姿もまるで桃色の雪が舞い降りてくるみたいに綺麗なんだって。わたしもお母様も白い世界しか知らなかったから、桃色の花を咲かせるというサクラを見てみたかったんだと思う。お母様はいつか家族3人で見に行きましょうねって約束をして、それで——」

その先は言われなくとも分かる。きつと、その約束が果たされる事

はなかったのだ。その約束が果たされる前に第四次聖杯戦争が勃発し、切嗣とは離れ離れに。そしてイリヤの母親は帰らぬ人となった。

その時の光景を俺は想像する事しか出来ない。白く監獄じみた世界の中で、かつて両親と交わしたささやかな約束を想い続けながら佇む真っ白な少女。あくまで俺が作り出した光景でしかない想像だが、胸が引き裂かれるような痛みにも苛まれた。

俺は波濤のような衝動に駆られて、イリヤの身体を強く抱き締める。イリヤは俺の腕をなぞるように触れながら、静かに問いを投げた。

「シロウは、キリツグとサクラを見た事ある？」

「……ああ、ある。毎年この時期になると、今日行く公園で咲いているサクラを一緒に見に行ってたんだ。俺と親父、そして藤ねえを含む藤村組の皆でさ」

「……そう」

花見と言いつつも桜を見る事より酒を飲んで騒ぐ事に比重を置いたものであり、風情も何も無い催しだった。その有様と言ったら、最後には公園で巨大なバイクが走り回る始末である。バイクのエンジン音と排気音に混じって野卑で野太い笑い声が夜空に響き渡り、時折近所の人達が文句を言いにやってきたのを良く覚えている。

そんな様子を見て、今にも消えてしまいそうな希薄な微笑みを浮かべる切嗣の横顔も、俺は鮮明に覚えていた。喧騒の中で、桜を見詰めるその横顔はあまりにも孤独だったから。

今この場所に確かに居るはずなのに、ここでは無い何処かに心を飛ばして夢想しているらしい切嗣は、俺の言葉に対する反応も定かでは無かった。あの時は酒のせいだとも思ったが、今なら分かる。

切嗣は正しく夢想していたのだ。有りもしない夢を現実へと投影させ、それがもう決して叶わない事だと知っていたからこそ、今にも消え去ってしまいそうな横顔を浮かべていたのだ。

そして、その役割は俺へと受け継がれた。父から子へ。切嗣が果たせなかった願いを、俺が受け継いだのだ。

俺はイリヤの小さくて華奢な手を取り、笑顔を向ける。

「今日の花見は俺たちにとって良い思い出になる。藤ねえ、セイバー、遠坂、桜、一成に慎二。他にも大勢が集まって、皆が同じものを見るんだ。——かつて切嗣も見つめた桜を。それはイリヤが真に望んでいた形とは違うかもしれないけど、きつと楽しいぞ。俺が保証する。今日の花見は、今までで一番楽しい花見になるって」

どう足掻いても俺ではイリヤが望んでいた光景には届かないだろう。過去の叶わなかった思い出が霞む事は無い。それ故に、その光景への渴望も留まる事は無い。しかし、新しい思い出を作ることとは出来るだろう。俺とイリヤの生活は始まったばかりなのだから。

「……うん。楽しみにしてる、シロウと一緒にお花見をするの」

俺の言葉を聞いたイリヤは嬉しそうに、そしてほんの少しだけ寂しさを滲ませた声音でそう答えた。そして俺の手を握り返して、遊園地を前にした子供みたいに明るい笑顔を浮かべる。

「早く行く、シロウ！ 遅いとリンに文句言われちゃうわ」

「ああ、遠坂はそういうのうるさいもんな」

2人は手を繋ぎ、空いた片手に弁当箱が入った包みを持って衛宮邸を後にした。春の匂いに胸を踊らせながら、足取り軽く集合場所の公園へと駆け抜けていく。

暫く歩いていくと、やがて桃色の色彩が視界に踊るようになった。

集合場所の公園である。

「あ、やっと来た！ 土郎とイリヤ遅い!! 早くこっちに来てこの混沌極まった状況を何とかしなさい！」

公園に辿り着いた直後、遠坂にそんな怒声を浴びせられてしまった。確かに指定された集合時間を5分程過ぎている。しかし遠坂は俺達が遅刻した事を咎めているのではなかった。俺とて息を切らす遠坂の肩越しにその光景を見て、戦慄を隠せずにいた。

「何でランサーやキャスター、それにバーサーカーまでこんな所に居るんだよ……!?!」

遠坂が混沌極まると口にしたのも無理はあるまい。何せ聖杯戦争の関係者が勢揃いなのだ。遠坂とアーチャー。桜と慎二とライダー。キャスターと葛木とアサシン。リズとセラとバーサーカー。そして

セイバーとランサー。後は藤ねえを始めとした藤村組の皆、美綴綾子、その弟である美綴実典、そして陸上部の蒔寺楓、氷室鐘、三枝由紀香、そしてエトセトラエトセトラ。

総勢50人は軽く超えそうな大所帯だ。

皆この時を楽しみにしていたのだろう。

集合時間から5分程しか経っていないにも関わらず既に会場の盛り上がりはピークに達している。

この世ならざる客人が今を生きる人々と同座している光景はどこからどう見ても異常な筈なのに、妙に溶け込んでいるように見えるのが不思議だった。特にバーサーカーなんて道端で見かけたら通報されかねない外見をしていると思うのだが、酒のせいなのか藤村組の皆の気性のせいなのか、あまり気にされている様子はない。

当のバーサーカーは輪から少し離れた所で、サクラの花卉を黒鉄の身体に受けていた。仏頂面は変わらないが、あれはあれで楽しんでるのかもしれない。

「凄いね、シロウ……」

「ああ、今年は例年にも増して凄い。混沌カオスという言葉がこれ程似合う状況もなかなか無いってものだ」

「分かってくれた？ 全く、何も知らない藤村組の人達が羨ましいわ。今の状況を魔術協会の人間が見たら垂涎しながら卒倒するでしょうに。というか、今まさに私がそうなりそうなんだけど」

無理もない、と苦笑を交えて遠坂に同情する。魔術を正しく学んだ彼女からすれば今の状況は信じ難いものに映っているだろう。イリヤも同じ気持ちなのか、顔を引き攣らせながらその光景を遠巻きに見詰めている。

だが花見というのはああいった賑やかな中に自らが踏み込んでいかないとあまり意味は無い。俺は華奢な手を引いて、混沌窮まる桜色の世界へ冬の少女を誘う。

「ほら、行こうイリヤ。皆が待ってる」

「あ——」

遠坂の茶化すような言葉を無視しつつ、俺はイリヤを伴って宴会と

化した花見の席に足を踏み入れた。最初に俺達に気が付いたのは、並々とビールが注がれたジョッキを傾けていたランサーだった。アロハ柄のシャツが妙に似合っている。

「お、来たか坊主。いやあ、花を見る催しだつて言うからどんなもんかと思えば、こんなにも俺好みな催しとはねえ。今回は坊主主催なんだろう？ 遊びを知らないような面して中々やるじゃねえか、見直したぜ」

「お褒めに預かり恐悦至極。それよりランサー。何でサーヴァント達がこんな所に？」

「この前魚分けに行つた時にタイガの姉ちゃんに誘われてな。タダで酒と食い物にありつけるってんなら行かない理由はねえだろ？」

「藤ねえか……」

「何だ、来ちや悪かつたのか？」

「来るのは別に構わないよ。こういうのは思い切り賑やかな方が良いからな。……ただ面倒事はくれぐれも避けてくれよ？ ただでさえ例年犯罪すれすれの事をしてるんだから、これ以上印象を悪くしたくない」

特に乱闘とか。サーヴァント同士の乱闘など、死人が出るどころの話ではあるまい。

「何だ、そんな事か。心配要らねえよ。これでも場は弁えてるつもりだ。宴会に水を差すような無粋なマネはしない」

「なら良いけど……」

「そら、そんな事より銀髪の嬢ちゃんを楽しませてやんな。今回の催しものは、そういう事なんだろう？」

「う」

ニヤリ、とケルトの大英雄はいやらしい笑みを浮かべる。こういう所は相変わらず鋭い。俺は気恥しさを隠すように仏頂面を浮かべ、

「……そうだな。アンタとこうして話してるより、イリヤとサクラを楽しむ方が何億倍も良い」

「言うようになったじゃねえの。へっ、その意気だ」

酔いを感じさせない軽やかな挙動で立ち上がったランサーに、背中

をドンと押される。ランサーに力を込めたつもりは全くないのだろうが、一般人でしかない俺にとってはそんなものでもかなりの強さだった。俺はイリヤと一緒に転びそうになりながら、力強く送り出される。

「あつ、先輩!」

「げ、衛宮……」

俺達の姿を視認した間桐兄妹が、全く正反対の反応を返してきた。「イリヤさんもこんにちは。今日は誘って頂いてありがとうございます!」

「ご機嫌よう桜。こちらこそ半ば私のわがままだったのに、来てくれて感謝するわ」

「わがままなんてそんな……私達だつてあまりこういうイベント事には縁が無いので、誘ってくれて嬉しいです!」

「おい、達を付けるなよ。まるで僕がこの花見を楽しみにしてるみたいに聞こえるじゃないか」

「……実際そうでしょう。昨日、シンジはあまり寝付きが良くなかつたみたいですが」

そう付け加えたのはライダーだった。あの露出度高めな戦闘衣ではなく、黒いデニムに黒いセーターという至って普通の格好だ。

「ツ!? お、おいライダー! 適当な事を言つて僕をからかうのはその辺に……」

「もう、兄さんつてば素直じゃ無いんだから」

「いつもは小憎たらしいですが、案外可愛い所もあるという事なのでしょう。最もそんな側面を見せようといつもの態度でプラスマイナスゼロどころかマイナスに振り切っています」

「そうね。いつものロクでもない態度を考えればマイナスもマイナス。アナタもううちのシロウを少しは見習つたらどう?」

「誰が衛宮なんかを見習うか!! おい、このちびっ子を何とかしろよ衛宮! お前保護者だろう!」

「でも、この機会に少し改心するつても良いかもしれないぞ、慎二。桜が喜びそうだ」

「名案ですね。まあ、どれだけ足掻いてもシロウに近付く事は無理でしょうが」

「当然でしょ。私のシロウにこんなワカメなんか追いつける訳ないんだから」

「オマエらなあ……!!!」

「あはは……」

前までは不仲というか、あまり上手く行っていなかったように見えた桜と慎二だが、今ではその仲もすっかり改善されているように思える。桜が世話を焼いて、慎二がそれを鬱陶しながらも受け入れている。

遠回りと回り道を繰り返してきた二人だが、冬を乗り越えたこの春にようやく蕾を開く事が出来たのだ。まだ小さくぎこちない花卉だが、もう少し時間が経てばより大きく華麗な花を咲かせる事だろう。「ぐーてんたーく、シロウとイリヤ」

横合いから聞き覚えのある、抑揚が希薄な声で挨拶をされる。声にした方に視線を向けると、そこにはいつものメイド服を着たリズが立っていた。相変わらず感情の起伏に乏しい表情を浮かべているが、最近の付き合いでリズの事を少し分かってきた俺はリズが楽しんでいる事を感じ取った。

「ぐーてんたーく、リズ」

「リズ！ 来てくれたの？」

「うん。イリヤとシロウと、お花見、したかったから」

「けど、良くセラがここに来る事を許したな。結構キツク来る事を反対してたって聞いたけど」

俺の言葉にリズは首を横に振る。それから少し答えるか迷うような素振りを見せ、

「セラは、恥ずかしがり屋で素直じゃ無いから。本当は私よりも行きたくたはずなのに、突っぱねるような態度を取って……」

「——リーゼリットツツツ!!!」

リズの言葉がそれを上回る怒声によって遮断される。怒声を発生したのは無論、セラだ。セラは顔を真っ赤に染めてズンズンと大きな

歩幅でリズに向かってくる。

「あ、リズ」

「あ、ではありません！　いつ私がこの低俗極まりない催し物を楽しみにしていたというのです！」

「……誘われてから、今日まで」

「なあっ……」

意外な事に、どうやら本気でセラはこのどんちゃん騒ぎを楽しみにしていたらしい。俺の傍らに立っていたイリヤは呆れたように嘆息し、

「セラ、たまにはリズを見習って素直になりなさい。素直になった方が世の中上手く行く事もあるのよ？　例えば——」

そう言ったイリヤは、俺にちよいちよいと小さく手招きをする。それが少ししやがんでという意思表示であると見抜いた俺は、頭に疑問符を浮かべつつもしやがむ事にした。

「ん……」

「ツ!？」

不意に、暖かく柔らかな感触が頬に発生する。イリヤが俺の頬に唇を当てたのだと気付いた時には、もうイリヤは俺から離れて満足気な表情を浮かべていた。

「——こんな風に、ね」

妖艶さを含んだ笑みを向けられる。俺は無様に硬直するしかなく、さぞかし間抜けな表情を浮かべているに違いない。一方リズは「おー、イリヤ、大胆」等いつも通り感情の起伏に乏しい声音で零し、セラは「な、ななななな」と声と身体を震わせていた。当のイリヤは涼し気な表情で、

「ほら、早く向こうに行って座ろう。私お腹空いちやった」

なんて事を宣っている。あまりの変わり身の速さに、俺は目を白黒させるしかなかった。

「あ、ああ。それじゃあ2人共、また後で……」

俺はセラの恨みがましそうな視線を受け止めつつ、イリヤに手を引かれながら一番桜の木に近いレジャーシートへと向かっていく。そ

こが俺達の定位置のようだ。上座とでも言うのだろうか。参加者全員の顔を自然と見渡せる位置なので、その人数の規模と顔ぶれの異常さに圧倒されそうになる。

だが同時に感慨深くもあった。

本来なら決して交わる事の無い者同士がこうして一同に座しているのだ。惜しむらくは、その価値を自覚しているのは聖杯戦争に参加した者だけに限られるという事だろうか。

そんな事をぼんやりと考えていると、ぽんぽんと2回ほど肩を軽く叩かれた。遠坂だった。

「衛宮くん衛宮くん」

「ん、何だよ遠坂」

「貴方主催者でしょ？ 開始の音頭ぐらい取つたら？」

「え、それ必要か？ もう皆すつかり出来上がってるじゃないか」

「何言ってるのよ、必要に決まってるじゃない。今回のお花見は衛宮くんの尽力によって成されたものでしょう？ なら、その頑張りを皆に認めて貰わなきゃ割に合わないじゃない。ほら、いつまでその弁当を手を持つてるつもり？ さくつと開始の音頭取って早く振舞ってよ。私、朝抜いてきたからお腹空いてるのよね〜」

「朝食は毎朝抜いてるじゃないか……」

とは言え、わざわざ拒絶する程の事でもない。ここは一つ、適当に挨拶を済ませてさくつと弁当箱を広げるとしよう。

「あー、少し良いかな、皆」

かなり声を張ったつもりだったが、やはり50人以上が織り成すどんちゃん騒ぎともなると肉声で遮るのは骨が折れた。数十秒かけてようやく静かになると、人々の視線が俺へと一齐に向けられる。

背筋の方に僅かに緊張が走るが、あまり待たせるのも皆に失礼だと思いい、深呼吸を一つした後、覚束無いながらも口を開いた。

「今日は、俺達が主催したお花見に参加してくれてありがとう。今日ぐらいは仕事や面子を気にせず、常識の範囲内で存分に楽しんで欲しい。参加してるメンバーの中には喧嘩をすると文字通りの戦争になる連中が居るので、そいつらは特に無秩序な行動は慎むように。あ、

後弁当持ってきたから適当に摘んでくれ。それじゃあ遅くなったけど——乾杯!!」

『乾杯!!』と割れんばかりの唱和が響き渡る。無事に音頭を取り終えたと安堵したのも束の間、即座に俺の弁当に人が殺到してそれどころでは無くなった。

「おい衛宮、おかわりはないのか?」

「無茶を言うな美綴。軽く15人前はあったんだぞ、あの弁当」

「桜が作った分ももう無いし、これじゃあ全然量が足りないだろう。おい衛宮。お前今から何か作れないのか?」

「馬鹿な事を言うな慎二。衛宮は15人前の料理を1人で作って持ってきたのだ。少し休ませてやるといい」

「そうは言ってもさ、柳洞。これじゃあ空腹のまま昼を乗り切る事になるぜ。僕はそんなのゴメンだね」

「む……」

一成が言葉を喉に詰まる。一成だって腹いっぱい食いたいという男子高校生の欲求を抑えきれないみたいだ。

「分かった。こういう事もあろうかと予備の食材は藤ねえに用意して貰ってるし、何か作るよ。けどこの人数分を1人で作るのはちよつと……」

そう言いかけた時だった。

「——ふん、貴様の技量ではこの人数の食事を一気に用意するのは難儀だろう。力を貸してやる。料理の腕には些かの自信があるのだね」

「……アーチャー」

いつもの赤い聖骸布ではなく、黒いシャツを着た長身褐色の男はいつの間にかエプロンを装着して俺の後ろに立っていた。準備が良さぎる。こうなる事は予想済みだったのかもしれない。

「シロウとアーチャーの料理、か」

「不満かね? イリヤ……スフィール」

「……いいえ。楽しみにしているわ。だって貴方の作る料理が美味しくない筈がないもの。そうでしよう?」

「……ふん、精々期待に応えるでしょう。構わないな？ リン」

「ええ、好きにやっちゃいなさい。私もあれだけではちよつとお腹が寂しいもの。桜だつてさつきからお腹がくうくう鳴ってるみたいだし」

「もう、姉さん!!」

「私もリンに同意します。このままでは朝食を抑え目にした意味が潰えてしまう」

「セイバー、貴方ご飯を3杯もおかわりしてたじゃない」

「何を言うのですかイリヤスフィール。朝食と昼食は別腹です」

「お前はどれだけ胃袋を持っているんだセイバー……」

とは言え、空腹に喘ぐ人がこんなにも居るのだから作る事自体に異議は無い。俺もあんな量じゃ物足りないと感じているし、どうせなら参加者全員を満腹にして帰してやりたいと思っている。差し当つての問題はアーチャーと共同で料理を作る事なのだが、

「——ついて来れるか」

当人はやけにノリノリで、蔑むように、信じるように、俺の判断を待っていた。視界が燃える。身体を走る血液がクロック毎に脈打つ速度を上げていく。何故だかは知らないが、この男にこんな事を言われては引き下がれないと感じる自分が存在した。

俺は持参していたエプロンを手馴れた動作で手早く身に着け、調理器具と食材を手にしていつの間にか用意されていた調理台の上に置く。

「——ついて来れるか、じゃねえ」

準備は整った。俺は背後のアーチャーを睨みながら、

「てめえの方こそ、ついて来やがれ——!!」

挑戦状を叩き付ける。アーチャーは不敵な笑みを浮かべると、言葉は返さず調理を始める。俺とアーチャーの間にそれ以降の言葉はなかった。まな板を包丁が叩く音と爆ぜる油の音だけが、俺達の間を走る音だった。

アーチャーの料理の腕前は見るだけでプロ級の凄まじいものだど理解出来る。

手際の良さが尋常ではなく、あくまで日常的に料理をこなす程度の腕前しかない俺は自然と追従する形になってしまっただが、アーチャーがペースメーカーとなっていていつもより早い速度で作っているため次々と料理が出来上がっていった。

「おぉー!! 衛宮の野郎もレッドの兄ちゃんもスゲー!!」

「ふむ、噂通りどうやら衛宮が料理をするというのは本当らしいな。それよりあの御仁は何者なんだ……プロの料理人か？」

「2人共凄いなあ……私じゃ遠く及ばないや」

「そう？ ユキつちの料理もすげえ美味いと思うけど」

「そうだぞ。自分の腕に自信を持って由紀香」

「う、うん……頑張る！」

等々、ギャラリーは次々と出来上がっていく料理を前に大きな盛り上がりを見せていた。完成した料理は順次参加者に振る舞われていき、2時間程で全員が程よく満腹になったみたいだった。

そうなると俺もアーチャーも御役御免であり、お互いの定位置へと戻っていった。

「お疲れ様、シロウ。ちよつと冷めちゃったけどシロウの分取っておいたよ」

「ありがとうイリヤ。ようやく一息つけるよ」

暫しぼうつとしてから、作った料理を口にする。俺とアーチャーの味付けは極めて似たものではあるものの、やはり比べてみると向こうの方が幾ばくか味が洗練されているのに否応無く気付かされる。俺にもまだまだ研鑽が必要という事だろうか。

「むう……」

「んく……シロウが作ったやつもアーチャーが作ったやつも美味しいけど、やっぱりアーチャーの方が1枚上手ね」

イリヤは上品に口を動かし、食べていた物を嚥下してからそんな感想を口にする。

「そうだよなあ……まだまだ修行が足りないか」

「でも、いつかきつとこの領域まで辿り着けると思うわ。それまで頑張ってるね、お兄ちゃん」

気休めではない、どこか確固たる自信を感じさせる声音でイリヤはそう言った。確かに決して届かない差ではないと体感で感じている。実を結ぶまで努力を続け、いつかあの赤マントをギャフンと言わせてやるとしよう。

「ふあ……」

イリヤに取っついておいて貰った料理を全て食べ終え、俺は小さく欠伸を零した。思い返してみると、今日はずっと目まぐるしく動いている気がする。働き詰めで忘れていた疲労感が春の陽気によって首を起す。疲労感は徐々に眠気となつて、瞼にしがみついて来た。

暫し何もせず周りの喧騒に身を委ねていると、頭上にあるサクラから、桃色の花弁が実に緩慢な軌道を描きつつ目の前に落下してきた。ひらひらと空中で舞い踊るその様は、まるで雪みたいだ。イリヤの母親——確か名をアイリスフィールと言ったか。アイリスフィールが桃色の雪が落ちてくるみたいだと言ったのも今なら頷ける。

アインツベルンの環境を考えれば、その言葉にしたって恐らく何かの資料を見たり、切嗣が語ったものを引用したものに過ぎないだろう。

そして、きつと理解していたはずだ。家族でサクラを見に行く。そんな夢が決して叶う事はない事ぐらい。俺は横に座るイリヤに視線を移す。

イリヤは頭上のサクラを見上げていた。

慈しむように、懐かしむように、悲しむように。紅の瞳には幾重も of 感情が複雑に絡まっている。その表情は在りし日の切嗣が浮かべていた表情にとても良く似ていて、俺には2つの表情が重なって見えた。

浮かべる表情が同じなら、同じものを見て抱いた想いも同じなのだろう。イリヤの瞳はサクラを見詰めているはずなのに、何処か遠くを追い掛けているような気がした。

「ね、シロウ」

「ん？」

急にイリヤが俺の名前を呼ぶ。イリヤはちよいちよいとこちらに

手招きをするだけで、用件は口にしなかった。取り敢えず手招きに従って、俺はイリヤにより一層身を寄せる。

——一瞬だった。

気が付けば俺はイリヤの膝の上に頭を横たえており、華奢でありながらも柔らかい感触に包まれていた。

「イリヤ……？」

「今日のお礼。疲れたでしょう？ 少し休んで」

「別に疲れてなんか……それに、お礼なんか必要ない。これは俺がしたかった事だからな」

「むー、良いからお姉ちゃんの言う事を聞きなさい。それに膝枕だつて、私がしたいからしてるだけなんだから。それとも、私の膝じゃ不満なの？」

「そ、そんな事はない!! その、凄く気持ちいいし不満は全然ないんだけど……」

「それなら大人しくしてて。ずっと働き詰めだったんだから、これぐらの休息は許されるべきよ」

そう言つて、イリヤは優しく俺の頭を撫でる。イリヤは俺の頭を撫でるのが好きなようで、一緒に寝る時も良く俺の頭を撫でている。俺も撫でられるのは嫌いではないのだが、気恥しさはどうしても拭えない。

「……ん、ねむ……」

イリヤの膝に身体を預けていると、再び瞼に眠気が重くのしかかってきた。寝ぼけ眼で、俺は花見を楽しんでいる人々を見詰める。

セイバーも遠坂も桜も慎二もライダーも、誰もかもがサクラの下で笑顔を咲かせていた。この光景を『創れて』良かった。どんな奇跡が起ころうとも現実には起こりえない、幻のような光景を前に俺はそう思った。

静かに目を閉じる。春の陽気と花卉が落ちる気配、イリヤの膝と手の感触を感じつつ、俺は意識を底に沈ませていった。

—— お疲れ様、シロウ。もう、頑張らなくても良いんだよ。

時間切れだった。かつて冬の少女を愛し、そして『失った』少年は春の夢を剥奪され、地獄へと引きずり込まれる。

幻想はここで終わる。

春の陽気も、桜の木も、サクラの花も、笑顔を浮かべて騒いでいた皆も、そして—— 大切な人の感触も。

あらゆる感覚が消え去った。

残ったのはただ一つ。自身が起こした災いによって世界を滅ぼした、許されざる咎人。

かつて衛宮士郎だったものの成れの果て。

—— この世に『地獄』があるとするとするのなら、まさにこの場所がその名を冠するのに相応しいだろう。

空の光を遮る天蓋。それを支えるようにぐるりと広がる、光沢のある奇妙な色の岩肌。鍾乳洞と呼ばれる、自然が長い時をかけて造りあげた巨大な洞窟が、視界いっぱいに展開される。

その規模たるや凄まじく、直径3キロは下るまい。

洞窟というよりも、荒涼とした大地そのものだった。

あまりにも巨大な円蓋型ドームの大空洞は、無機質でありながらも『生』の色で溢れている。

まるで、生物の胎内。

龍洞の名を冠する通り、ここは生暖かい生氣に満ちた龍の臟はらわたその物だった。

人の願いも、生命も、苦悩も、死も、何もかもが泥のように溶け合い絡み合う地獄の釜。それが、形作られ定められた、この場所の在り

方である。

「その『地獄』の最奥に佇む者が、一人。」

「——その者は原初からして夢幻の如く。」

「いつからこうして存在しているのか。」

「どうしてここに存在しているのか。」

「自分は、どこの誰なのか。」

「分からない。分からない。分からない。」

「分かるのは、ただ止めてはならないという強迫観念にも似た衝動だ

け。」

「」

「分からないから吸い続ける。」

「分からないから求め続ける。」

「分からないから悩み続ける。」

「分からない事は怖いから、自分の存在を確立するために自身の骨子

を明確にしていく。」

「怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。」

「覚めてしまうのが怖い。」

「この『夢』を、『世界』を回し続けなければならない。」

「消えてしまえばそれで終わり。」

「既に筋道から外れ、変化してしまった『世界』だ。泡沫うたかたの如く消え

るのは道理だろう。」

「ああ、けどそれでも——」

「拒絶する。拒絶する。拒絶する。」

「その滅びを、剪定を、摂理を、『俺』は拒絶する。」

「それを自己中心的だと蔑むか？」

「構わない。元より、ここはただ一人の『男』の祈りから生まれてし

まった『世界』だ。」

「故に、終焉さいごまでこの夢セカイを回し続けるとしよう。」

「——そして、『俺』は蒐集の果てに思い出した。」

「——い、りや」

守りたかった。

守れなかった、大切な彼女の名を。

「シロウ……」

少女が少年の名前を呼ぶ。だが、少年がすぐ傍に立っている少女を認識する事は有り得ない。

少女は『願い』に過ぎない存在だ。かつてイリヤスファイルという少女が衛宮士郎の中に遺した、衛宮士郎が幸せになりますようにという願いの具現。

しかし、その願いを当の少年自身が見失っていれば認識出来ないのは道理だろう。

「このまま放置して置く訳にはいかない。私は、シロウを幸せにするって決めたんだから」

決意を込めた瞳と声音。その意思が、遺物に過ぎない彼女にある選択肢を与える。

少年はここより遠く離れた世界に存在する、人理継続保障機関フィニス・カルデアに所属している平行世界のイリヤスファイル・フォン・アインツベルンをこの世界へ引きずり込むつもりだ。

それを阻止する事は叶わない。

平行世界のイリヤスファイルは、この世界のかつて衛宮士郎だった者によって召喚される事になるだろう。

しかし、解決策が無い訳では無い。イリヤスファイルを、逆にこちらから招くのだ。

そして数に限度はあるものの、自分を触媒として幾つかの英霊を召喚する事で衛宮士郎だった者を救済する。決して簡単な道ではなく、カルデアの英霊達には迷惑をかけるが解決策はもう思い付かない。

そうと決まれば行動は素早かった。

「――告げる」

少女はイリヤスフィールの願いだ。その願いが、衛宮士郎の暴走した固有結界により具現化したモノ。衛宮士郎を救うという名分がある以上、その願いはこの歪な世界が叶えてくれるだろう。

「――っ!？」

少女がカルデアから英霊を召喚しようとした瞬間、それよりも早くカルデアのセキュリティに穴がこじ開けられた。少年が少女よりも早く、カルデアのイリヤスフィールの召喚を行ったのだ。

先を越されたという事は、カルデアに侵入を気付かれるのも早くならないという事。残り時間を考えるにカルデアから召喚出来る英霊は恐らく1騎が限界だろう。

逡巡している暇は無い。少女はすぐさま意識を召喚の儀式に集中させ――

「え――?」

ドクン、と心臓が跳ねる。召喚出来る英霊を少女が選ぶ事は出来ない。故に何処のどんな英霊が来るのかは完全にランダムだった。にも関わらず、引き寄せられた英霊は少女が良く知っている存在だった。

「……………そつか。貴方が、来てくれるんだ。うん、貴方になら安心してシロウを任せられる。だからお願い。シロウをあのだ獄から救ってあげて。シロウの心を、取り戻して!!!」

少女の願いが運命を引き寄せた。錬鉄の英雄に、自身の願いを託したのだ。彼ならこの歪んだ世界を塗り替えてくれる。地獄に囚われた少年を救って、笑顔を取り戻してくれる。

そう信じて。

――これは、ある幕間の物語の前日譚。今となっては誰にも語られる事の無くなった物語の、ほんの一欠片である。